

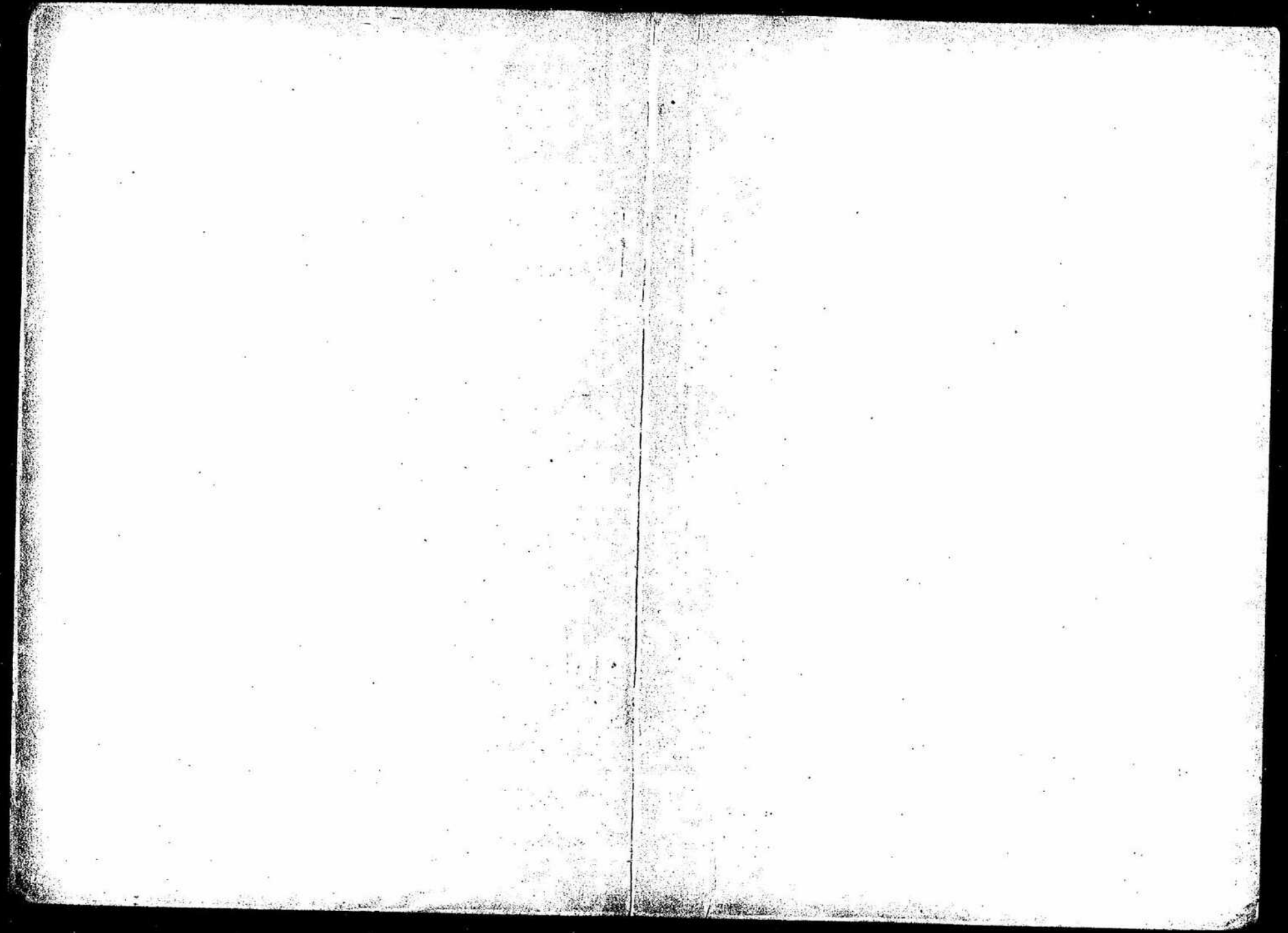
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

熱帶産業調査會叢書第六號

福州攷

臺灣總督府熱帶産業調査會

庫	文	閣	內
函		七〇一六四號	和書
架	一冊		



222
10

222.4
10

凡例

- 一、本書は元福州東瀛學校長たりし故野上英一氏の遺稿を遺族の承諾を得て編纂したるものなり。
- 一、本書は著者が大正六年六月以降昭和四年七月迄約十二年間福州に在職中蒐集したる資料に付研究し、更に實地調査を遂げて執筆したるものに係り、獨り福州郷土資料として興味あるのみならず、臺灣研究の一助ともなり、定に有益なる文献なり。
- 一、本書の記述は最近一九二八年現在に至る迄の事項に關するものなり。
- 一、著者の遺稿中には書名を附せざりしを以て、本會に於て便宜内容に恰當せる「福州放」と題せり。
- 一、本書は閱覽の便を圖り謄寫に代ふるに印刷を以てしたるに止り、敢て之を公刊せんとしたるものに非ず。

昭和十二年八月

臺灣總督府熱帶産業調査會

福州攷 目次

第一章 沿革

一 秦漢前	一頁
夏(一) 周(一) 春秋戰國(一)	
二 秦	二
閩中郡(二)	
三 漢	三
閩越王無諸(二) 東冶(三) 第一回の討伐隊(三) 第二回の討伐隊(三)	
四 後漢	四
都尉(四) 建安初年の五縣(四)	
五 三國吳	五
建安郡の十縣(五)	
六 晉	五
晋安郡の八縣(五) 晋安郡太守麴高(五) 福建省の北平(五)	

七 南朝 梁	六
八 隋	六
建安郡の四縣(六)	
九 唐	六
泉州の六縣(六)	
建寧の中國化(六)	
閩州都督府(七)	
今の泉州(七)	
福建地方の五州(七)	
福州の名(七)	
侯官縣の侯(七)	
侯官縣の南進(七)	
福建經略使(八)	
福州の領縣(八)	
十五 代	九
王審知傳(九)	
王氏七代五十二年(二)	
十一 宋	二
福州威武軍(三)	
福建路(三)	
宋代の地方官(三)	
十二 元	二
福州路の九縣二州(三)	
十三 明	三
福州府(三)	
承宣布政使司の八府一州五十七縣(三)	
十四 清	三
福建省の十府二州六十二縣(三)	
清代の地方官(四)	

十五 中華民國	四
福州の名稱(二)	
四道六十三縣(二)	
國民政府(二)	
第二章 福州 城	一六
一 治 城	一六
當時の形勢(二)	
冶山古蹟(二)	
二 子 城	一七
郭壁(七)	
福州城の核心(七)	
五虎山の脈衝(七)	
冶山の位置(二)	
三 羅 城	一八
四 南北夾城	一九
王審知の増築(二)	
五 外 城	一九
六 福州 城	二〇
鎮海樓(三)	
廢壁(三)	
修築(三)	
福州城の北邊(三)	
福州城の水路(三)	
八百年後大發(三)	
石鐘(三)	
第三章 倭寇と福州	二三



一	海賊の元祖孫恩	四
	福建海賊の由来(三)	
二	倭寇の開始と内奸	三
	内奸(三)	
	日本武士は支那海賊の先鋒(三)	
三	嘉靖の倭患	三
	戚繼光(三)	
四	設海の防備	三
	倭寇と風向(三)	
五	倭寇の衰	三
	蔡山の梅花(三)	
	彭義順(三)	
	陳倉(三)	
	赤標の倭寇(三)	
	倭寇の舌(三)	
	戚繼光傳(三)	
	光餅(三)	
第四章 福州の名勝古蹟		
一	越王山	三〇
	鎮海樓(三)	
	鎮海樓記(三)	
二	九仙山	三〇
三	白塔寺	三〇

四	烏石山	三〇
	道山觀(三)	
	進香臺(三)	
	鯨若臺記(三)	
	福建教育廳(三)	
	福建省立第一高級中學校(三)	
五	石塔寺	三〇
	崇妙保聖聖母塔(三)	
	石積のモルタル(三)	
六	冶山	三〇
七	西湖公園	三〇
	聖橋の碑(三)	
	西湖村(三)	
八	城南公園	三〇
九	大廟山	三〇
	閩越王廟(三)	
	釣龍井(三)	
	南臺(三)	
	全閩第一江山(三)	
	大廟山附近の諸小阜(三)	
十	倉前山	三〇
十一	忠懿王廟	三〇
十二	西禪寺	三〇
	西禪寺の荔枝(三)	
十三	洪山橋	三〇
	洪山橋兵工廠(三)	



十四 鼓嶺..... 三六

十五 鼓山..... 三六
湧泉寺(元) 大雄殿(元) 現在の住持(元) 登山路(四) 靈源洞(四) 喝水巖

十六 金山塔..... 四〇
(三) 國師巖(四) 龍頭泉(四) 慈雲普陀(四) 鼓山の僧(四)

十七 清眞寺..... 四〇

第五章 福州港..... 四三
一 福州港の範圍..... 四三
汽船の碇泊地(四)

二 閩江、馬江、臺江..... 四三
金剛巖(四) 羅星塔(四) 五虎山(四) 城內獅子樓の獅子(四) 馬尾(四)

三 閩江改修事業..... 四三
修濬閩江總局(四)

四 海上交通..... 四三
(一) 福州臺灣間航路..... 四三

(二) 福州上海間航路..... 四三
(三) 福州廈門間航路..... 四三

五 馬尾福州間の聯絡..... 四三
電信電話..... 四三
渡船..... 四三
神島丸及あさひ(四)

(三) 其他船舶及小蒸汽..... 四三

六 潮沙..... 四三
烏礁(五) 潮汐の時間を知る便法(五)

七 貿易港としての福州..... 四三
海關、常關(五) 貿易の大勢(五) 海關所管過去五箇年輸出入額(五) 常關所管過去五箇年
輸入額(五) 輸出入品(五) 貿易先(五) 過去三箇年間國別貿易額(五) 福州港と
他港との交換の議(五)

第六章 閩江..... 四三

一 白龍江(臺江)..... 四三
江中の洲(五)



二 萬壽橋…………… 八

天寧寺(表) 頭陀王法助(表)

三 江南橋…………… 七

何氏兄弟(表)

四 上渡、下渡…………… 天

五 閩江の水系…………… 天

上流の(大支(天) 漣(瓦) 棧(瓦) 盧(瓦) 萬壽橋の將來(表))

六 閩江の船…………… 六

槳、尾舵、閩江の船の種類(表)

七 福州上下流の交通…………… 三

水口(表) 橋下發着の小蒸汽(表) 三保發着の小蒸汽(表)

八 増水季、減水季…………… 三

第七章 福州人…………… 六

一 概説…………… 六

二 閩族…………… 六

福建の住民(表) 閩の字義(表) 閩の字義(表) 苗裔三本劍(表) 油菜園花満々金(表)

三 族…………… 七

岸使(表) 水上生活に関する傳説(表) 但(表) 曲蹄蒙と蒙古人(表) 開放後の蠻族(表)

蠻族の戀物語(表) 杖上家歴(表) 居住區域と蠻の人口(表) 桐口(表) 蠻族の姓(表)

鑿鑿水の祖(表) 天主教(表) 田螺(表) 賀年(表) 流亡の種類(表)

四 畚族…………… 五

畚(表) 畚の意義(表) 畚族に関する記載(表) 畚族の移住年代(表) 大頭國の

由来(表) 畚族の直話(表) 畚客、畚婆、客家(表) 畚族の學者(表)

五 三本劍族…………… 六

樛足と平股(表) 三本劍の形(表) 耳環如輪(表) 頭上帶劍(表) 三本劍の配偶(表)

唐帽仗(表) 諸娘仗(表) 惡口(表) 三本劍の禿頭(表)

六 衣冠族…………… 六

衣冠族の多様(表) 役人と蓄財(表) 學位標榜(表) 衣冠の八族(表) 林(表) 陳(表)

黃(表) 鄭(表) 陸(表) 邱(表) 胡(表) 何(表) 王(表) 劉(表)

李(表) 趙(表) 福州の古姓(表) 閩王の裔と土着民(表) 現代の福州人(表)

哥兒表仔(表) 史上の福州美人(表) 梅妃(表) 陳金鳳(表) 李春燕(表)

七 福州語…………… 九五

一日行程内の範圍(九五) 方言(九六) 血族關係の名稱(九六) 城內語、南臺語(九六)

八 人口…………… 九七

明洪武十四年の人口(九七) 明正徳七年の人口(九七) 明萬曆初の人口(九七) 清康熙五十五年の人口(九七) 清乾隆十六年の人口(九八) 清道光九年の人口(九八) 清光緒二十二年の人口(九八) 民國十七年の人口(九八) 民國十七年末福州市公安局の人口調査(一〇〇)

第八章 福州の習俗…………… 一〇一

一 福州人の氣質…………… 一〇一

福州人の三様(一〇一) 盜に關する考(一〇二) 面子の觀念(一〇二) お早う(一〇三) 不覺の屋賃(一〇三) 火事と邸の閉鎖(一〇三) 煙草の火(一〇四) 先生(一〇四) 防火壁(一〇四) マルコ・ポーロの福州人觀(一〇五)

二 服 飾…………… 一〇二

長衫(一〇二) 支那帽(一〇二) 女子の服飾(一〇二) 現代式運歩(一〇二) 斷髮と床屋(一〇二)

三 各年中行事…………… 一〇二

正月(一〇二) 貴花(一〇二) 休業三日(一〇二) 接神(一〇二) 上紙(一〇二) 元宵(一〇三) 窮九(一〇三) 三月三(一〇三) 清明(一〇三) 三月三(一〇三) 端午(一〇三) 競渡(一〇三)

福州競渡の始(一〇三) 系連歌(一〇三) 七夕(一〇三) 中秋(一〇三) 重陽(一〇三) 冬至(一〇三) 祭禮(一〇三) 分年(一〇三) 做暹(一〇三) 做年(一〇三)

四 神 事…………… 一〇三

神事區域(一〇三) 戸(一〇三) 社(一〇三) 塚(一〇三) 庵(一〇三) 福州の九庵十一廟(一〇三) 五帝(一〇三) 五帝の家來(一〇三) 塔骨(一〇三) 五帝に對する信仰(一〇三) 五帝廟と武廟(一〇三) 縣主等の神(一〇三) 省主等の神(一〇三) 神事區域の判明せぬ神(一〇三) 孔子廟(一〇三) 文昌廟(一〇三) 武廟(一〇三) 尚書廟(一〇三) 陳文龍傳(一〇三) 娘奶廟(一〇三) 娘奶傳(一〇三) 蘭花(一〇三) 魯班廟(一〇三)

五 迎 年…………… 一〇三

迎年と神誕(一〇三) 神像の巡遊(一〇三) 吳顏爺(一〇三) 附物の演劇(一〇三) 迎年の日取(一〇三)

六 神 誕…………… 一〇三

牛丈(一〇三) 牛丈の意味(一〇三) 福州の神誕表(一〇三)

七 出 海…………… 一〇三

五帝の出海(一〇三) 陳尚書の出海(一〇三)

八 巡遊の行列…………… 一〇三

惡魔祓の巡遊(一〇三) 木式の行列(一〇三)

九 慶 讚…………… 一〇三

義行、公會、工會(一〇三) 請酒(一〇三)

十神 蛙.....二四

十一 惡習.....二四

(一) 鬼.....二四

(二) 潮女.....二四

(三) 仁慈堂(三云) 水無情(三云) 實無二片之不濁(三云).....二五

(四) 賭.....二五

賭の種類(三云) 請酒と麻雀(三云).....二六

義女.....二七

第九章 福州料理

一 概説.....二六

大席(宴會料理)(三云) 餅菜(總菜料理)(三云) 燕菜(三云) 素食(精進料理)(三云) 福州料理の味(三云).....二六

二 材料.....二七

魚翅(三云) 魚翅の三種(三云) 燕窩(三云) 猪仔(三云) 蚌(三云) 蝦(三云) 竹筍(三云) 白鶴蛋(三云) 冬菜(三云) 菜心(三云) 鱈魚(三云) 鱸魚(三云) 鮑魚(三云) 海參(三云) 銀耳(三云) 香菇(三云) 火腿(三云) 鴨(三云) 雞(三云) 罐頭(三云) 粥の菜又は餅菜(三云).....二七

三 料理法

日本料理との比較(三云) 烘(三云) 煎(三云) 焙(三云) 焙(三云) 燒(三云) 紅燒(三云) 白燒(三云) 煨(三云) 炊(三云) 煮(三云) 燻(三云) 紅(三云) 炖(三云) 燻(三云) 炒(三云) 燻(三云) 燻(三云) 蒸(三云) 湯(三云) 清湯(三云) 芙蓉(三云) 酥(三云) 餡(三云) 羹(三云) 羹(三云) 燻(三云) 醃(三云) 糟(三云) 醉(三云) 甜(三云) 白糟(三云) 醬(三云) 鹹(三云) 絲(三云) 餃子(三云) 片(三云) 圓丸(三云) 圓片(三云) 扁(三云) 梭(三云) 寄刀(三云) 捲(三云) 塊(三云) 碎(三云) 丸(三云) 餅(三云) 糕(三云) 餅(三云) 餃(三云) 餛飩(三云) 全(三云) 一切塊(三云) 四寶(三云) 八素(三云) 十錦(三云) 牛籠素(三云) 素賣(三云) 大盤炒(三云).....二七

四 料理の數

四炒盤、二大盤、六大碗(三云) 大菜(三云) 點心(三云) 三鞭皮(三云) 魚羹(三云) 火炬(三云) 臭(三云).....二七

五 厨店と館店

館店の主なるもの(三云) 福州料理と廣字(三云) 福州人の刀(三云).....二八

六 支那酒.....二九

紹興酒(三云) 老酒(三云) 紹興陳酒(三云).....二九



一八

- 一 福建茶の地位……………一九
- 茶(一九) 積(一九)
- 二 福建茶の産地……………一九
- 西路(一九) 北路(一九) 南路(一九) 正路(一九)
- 三 福建茶の種類……………一九
- (一) 紅茶……………一九
- 工夫(一九) 工夫の意味(一九) 福建以外の工夫茶(一九) 小種(一九) 白毫(一九)
- 白毫小種(一九) 烏龍(一九) 珠蘭(一九) 烏龍の名稱と原産地(一九)
- (二) 綠茶……………一九
- 福州の點茶法(一九) 珠茶(一九) 熙春(一九) 明前(一九) 兩前(一九) 熙春の名(一九)
- 青茶(一九)
- (三) 花燻茶……………一九
- 花香(一九)
- (四)(五) 磚茶……………一九
- 雜茶……………一九
- 四 福建茶の價格……………一九

- 五 福建茶の歴史……………二〇〇
- (一) 北苑茶……………二〇一
- 宋以前の北苑茶(二〇) 蠟面茶(二〇) 宋歐陽修著新茶法(梅堯臣撰)(二〇)
- (二) 武夷茶……………二〇二
- 武夷山(二二) 茶形の推移(二三) 武夷茶は天下第一の靈芽(二三) 晉江人と武夷茶(二三)
- (三) 北苑武夷以外の茶……………二〇四
- 牛山茶(二五) 方山茶(二五)
- 六 福建茶の産額……………二〇六
- 一九二七年福建茶外國輸出數(二〇六) 一九二八年同上(二〇七)

第十四章 福州の通貨

- 一 硬貨……………二〇九
- (一) 文……………二一〇
- 制錢(二〇) 銀と文との關係(二二) 塊(二二)



- (二) 銅元(銅片)..... 三三
- 青錢買(三三) 銅元の鑄造額(三三) 福州の銅片(三三)
- (三) 角..... 三四
- 小洋(三四) 過去十年間に流通して居た小洋の各種(三五) 三十年前の小洋銅片の相場(三六)
- 福建銀(銅)元局(三六)
- (四) 銀圓(銀元)..... 三六
- 外國幣の流通(三六) 現時福州に流通して居る外國幣(三七) 自國鑄造の銀元(三七) 現在福州に行はる、自國鑄造銀元(三八) 各銀元の成分(三八) 銀元の鑄造額(三九) 福州に於ける銀元の流通高(三九)
- (五) 銀元の刻印(概)..... 三〇
- 二 貨..... 三〇
- (一) 票..... 三〇
- 錢票(三三) 番票(三三) 票伏(三三) 票伏の名稱(三三) 廣東兵士誤つて番票を燒く(三三) 大洋票(三三) 向票(三三) 銀行行情(三三) 現銀の需用(三五) 平秤、秤(三五) 現在大洋票を發行して居る錢莊(三五)
- (二) 銀行券..... 三五

- 中國銀行券(三六) 美豐銀行券(三六) 東南銀行券(三六) 順遠商業銀行券(三六) 中央銀行券(三七) 中南銀行券(三七) 臺灣銀行券(三七)
- 三 商取引と秤量制度..... 三七
- 庫平、臺新議平、日本平の比較(三八)
- 庫平..... 三八
- 新議平..... 三八
- 關平..... 三九
- 内外銀元秤量表(三九)

第十五章 福州の度量衡

- 一 度..... 三二
- 支那歴代の尺度(三二) 我邦の尺(三三) 支那尺度の起源(三三) 平尺(三三) 營造尺(三三) 公尺(三三) 廣本尺(三三) 裁縫尺(三三) 家尺(三四) 鞋毫(三四) 魯班尺(三四) 魯班(三五) 曲尺の裏目(三五) 福州曲尺の裏目(三五) 門因尺(三七) 京尺(三七) 箔尺(三八)
- 二 里 程..... 三六

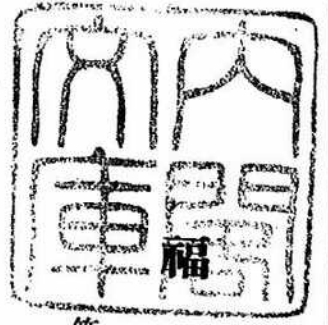


三 地 積	三三
四 景	三九
樹の種類(三九)	
五 衡	三四一
衡の種類(三四)	
撥(三四)	
白米の二撥(三四)	
希拔な衡(三四)	
六 支那税關の標準	三四三

挿 繪 目 次

一 王審知徳政の碑	一〇一二
二 冶山の古蹟	六一七
三 清代連江縣の沿海防備圖	六一元
四 倭寇 臺	六一元
五 西湖附近より見たる鎮海樓	六一三
六 洪 山 橋	六一七
七 洪山橋上流閩江機器局附近	六一七
八 海關埕鼓山麓間の福州港	六一七
九 羅 星 塔	六一七
一〇 往時雙門前の石獅	六一七
一一 螺洲より見たる五虎山(河は烏龍江)	六一七
一二 閩江修濬圖	六一七
一三 萬 壽 橋	六一七
一四 中洲と鶴飼	六一七

一五	望北蒙中腹より見たる閩江	天一五
一六	閩江の洪水	天一五
一七	海關前各種船舶	四一五
一八	畚族の女子	六一五
一九	三本劍族	六一五
二〇	學位の標榜	六一五
二一	近代福州婦人	六一五
二二	扒龍船の競渡	六一五
二三	龍船	六一五
二四	七爺八爺の面	六一五
二五	魯班廟	六一五
二六	魯班の神像	六一五
二七	魯班一家の神像	六一五
二八	禁溺女の碑	六一五
二九	龍骨車	六一五
三〇	荔枝賣り	六一五
三一	池上の廁所	六一五



福州攷

第一章 沿革

一 秦以前

書經の禹貢に「淮海は惟れ揚州なり、彭蠡既に豬す、陽鳥の居る攸なり」とあつて今の揚州、鄱陽湖の邊までは中國の漢族に知られてゐたらしいが、福建地方は問題外であつた。

周禮の職方氏には「掌天下之圖、以掌天下之地、辨其邦國都鄙、四夷、八蠻、七閩、九貉、五夜、六狄之人民、與其財用九穀、六畜之數要、周知其利害」とあり、後註に「七八は周の服する所の國數」とありて、閩の字を始めて古書に見る。山海經(周秦間の書)の海内南經に「閩は海中に居り、閩は海中に在り、其の西北に山有り、一に閩中山と曰ひ、海中に在り」とあつて、何れも淡然と閩といふ民族又は地方の所在が中國の漢族の間に分り出して來た。海中といふ所を以て見ると海からの知見で内陸からの知見ではないらしい。

春秋戰國當代には閩は越の南方に在つて中國の多事に對し格別の關係が無かつたものと見え、何等の記載が残つてゐない。

秦の始皇二十六年(紀元前二二一年)に天下を併せ皇帝と稱し三十六郡を置いたが、時に閩は其の中に入つて居らない、所謂棄て、屬せずであつた。三十三年(紀元前二二四年)秦は陸梁(嶺南)の地を略取し、桂林、象郡、南海の三郡を置いたがこの時も閩の名は見えない。史記東越列傳に「秦已に天下を併すや皆廢して君長と爲し、其の地を以て閩中郡と爲す」と見えて居り、所置年代を闕いて居る。蓋し是は眞面目に郡縣を置くだけの實狀になつてゐず、而かも廣東より近い閩を其の儘にして置く譯にも行かなかつたので、單に體裁の上から名義上の郡を與へた爲めであらう。従つて閩中郡の中心が何處に在つたのかは文献の上では明瞭でない。この意味に於て閩の中國に知られたのは沿海の他の地方に比べ最も新しいと云つて差支はない。閩と中國と交渉を有つやうになつたのは實に漢から後の事である。越王勾踐は禹の苗裔で、夏の少康其の庶子無餘を會稽に封じ、二十餘傳してから勾踐になつた。勾踐より更に六傳して無疆に至つた時楚に滅され(紀元前三三四年)其の族分れて南方に徙つて來た。嶺表の南越(廣東)も其の一であるが、閩では無疆より七傳の騎無諸が元祖になつてゐる。

秦末諸侯が秦に畔いた時無諸は越兵を率ゐる秦を滅し、又項籍を撃つて漢を佐けた功に依り漢の高帝五年(紀元前二〇

二年)閩越王となつて閩中の故地を領し東冶(史記には冶とある)に都した。此の東冶又は冶は今の何處かといふに閩都記には「冶、今の將軍山」、福州府志には漢書顏師古の註を引き「冶は地名即ち侯官縣是なり」と片付けて居り、福建通志には冶と東冶と二つ同格に列べて置いて「案するに此の東冶は即ち冶」とあつて何れも冶を本體とし、今の福州城内將軍山附近を指して居るが、冶は諸書にもある如く浙江省蕪州府附近である所から見ると東冶の方が本當であらう。蓋し甌があつて東甌があり、越があつて東越があり、冶があつて東冶があるからである。東冶の位置は顏師古の「即ち侯官縣是也」を除き他は皆福州城内の將軍山附近即ち冶城(二章の一参照)の地に當てゝ居る。尤も侯官縣も福州であると同じ事にはなる。此の閩越は中々慄悍であつたと見え、東甌(浙江省の南)や南越(廣東省)と噴嘩をして漢の云ふ事を聽かない、それで漢は二回討伐隊を閩越に寄こした。第一回は建元六年(紀元前一三五)で海陸兩路から攻めたらしい。陸路の中心は豫章といふから今の江西省であり、海路の中心は會稽といふから今の浙江省の北部である。閩越は漢兵の未だ嶺を踏えざる中に險に拒いたのだが遂に降参した。此の時の陸路は今の何處であるか分らないが、江西福建間の陸路で汝水、信江、閩江の水系に滑うた路であるのに相違はなく、閩が中國と交渉を有つた史上最初の交通路である。第二回は元鼎五年(紀元前一〇二年)から元封元年(紀元前一〇〇年)に掛けての討伐で、この時も海陸兩路から攻め立てた。陸路の中心は豫章の梅嶺で戈船下澗將軍の名が見えて居るから閩江か甌江かの水系を下つたのだらうし、海路の方は句章(東波)が中心で樓船將軍、横海將軍等の名が見えてゐるから、當時の閩としては割合に大きな船を以て海から(或は途中から登陸して)攻めたのであらう。閩越東越は遂に降伏した。是に於て漢の武帝は「東

越は狭にして阻多く、閩越は悍にして數々反復す」と詔し、其の民を徙して江淮の間（江蘇安徽の中部）に處らしめ、東越の地は（閩越とは書いてない）遂に虚しくなつたと史記東越列傳に出て居るが、如何に閩越東越の住民が少なかつても全部江淮間に徙つたとは思はれぬ。無諸の裔以外に閩と稱せらるゝ先住民も相當に残つてゐたに相違がない。故に東冶の都が全然空墟になつたのではあるまい。其の後元始二年（紀元二年、年代は閩都記に據る）山谷に逃れた閩越の遺民が出て来て自ら冶縣を立てた。此の冶縣は漢が置いたものでなく自ら竊かに立てたものであるから冶であつて東冶ではあるまい。自ら冶縣と稱するのだから他に冶縣が幾つあつても差支はない譯である。恐らく昔戀して東冶の東を省き單に冶としたのであらう。無諸の東冶、此の自立の冶、共に普通には今の福州であると云はれて居る。

四 後 漢

後漢の時從來閩の所屬が會稽郡南部都尉であつたのを改めて會稽郡侯官都尉とした。後東南二部都尉に分け南部都尉に屬せしめた。

都尉は景帝の時の更名で邊陲の隙塞を養夷にして犯す者ある時之に備ふ役人の長官である。標準にして反復常なき閩越の遺民が山谷より出て来て自ら冶縣を作つた所へ少許の兵隊を連れて都尉が来たとは思はれない。唯名義上會稽郡南部都尉に屬せしめただけであらう。

其の後、閩は漸次發展して後漢の末建安の初年（一九六年頃）には侯官縣（福州、興化、泉州、漳州四府の地）、建安縣（建寧府）、南平縣（延平府）、漢興縣（浦城縣）等五縣の名が現はれたが、一縣の名は傳はつて居らぬ。

五 三 國 吳

吳の永安三年（二六〇年）會稽南部に建安郡を置いた。領縣は十で建安、建平、吳興、東平、將樂、昭武、綏安、南平、侯官、東安である。諸書に建安は今の建寧府とあるから建安郡の中心は今の福州ではない。

六 晉

晉の太康三年（二八二年）建安郡より分けて晉安郡を置き八縣が之に屬した。原豐（閩縣）、新羅（汀州）、宛平、同安、侯官、羅江、晉安（南安）、溫麻（連江の舊名、福寧府、連江縣一帶の地）即ち是で、大分福州地方が判然として来た。晉安郡の中心は原豐で今の福州である。新太守嚴高が福州に来て見た所、閩越の故城は頗る狭小であるので、郭璞に詢り子城を造つた事は第二章の二に述べてある。なほ此の時東西兩湖を整理して田數萬畝を得、大航橋（到任橋）より漢橋に舟を通せしむるやうにし、福州を物らしくした。

福建省の北半は古の閩越で、其の當時は浙江省温州府附近には東甌國があつたから中國との接觸關係は閩江水系及江西省の水系を経て之を爲したものらしい。其の後建安（建寧）から晉安（福州）が分れたといひ、又閩越王無諸が鄞陽の令吳芮（所謂鄞君）の部下になつて秦を撃つたといひ、漢の武帝の第二回閩越討伐に白沙、武林、梅嶺の名が見え、何れも江西省鄱陽湖の東南に在ると考證され、且つ白沙、武林、梅嶺は閩越當時の京道であるとされて居る所を見ると、昔の閩越は閩分閩江の奥地までも勢力を延ばして居た事が分る。従つて其の頃の福州は名が東冶であつても冶であつても殆ど見るに至らなかつたものと考へるのが適當であらう。

七 南 朝 梁

梁の普通六年(五二五年)晋安、建安、南安(晋安より分れ、今の興化、泉州、漳州の地)の三郡を東揚州に屬せしめたが、陳永定の時(五五六年)初めて閩州を置き三郡を領せしめ、刺史を晋安郡に置き之を治めた。

八 隋

隋の開皇九年(五八九年)豐州(本の閩州)を改めて泉州(治山の一名泉山の名に因ると云)と爲し建安、南安の二郡を廢して縣としたが、大業三年(六〇七年)閩州(本の泉州)を改めて建安郡と爲し、閩、建安、南安、龍溪の四縣を領せしめ閩縣を治所とした。

九 唐

唐の武德元年(六一八年)建安郡(本の閩州)を改めて建州とし、四年建州を建安縣(建寧府)に移したが、六年復して泉州とした。領縣は四で、閩、侯官、長樂、連江である。聖曆二年(六九九年)に萬安、長安二年(七〇二年)に溫麻を増し泉州(本の閩州)は都合六縣になった。

上述の記載で今の福州が初めから福建の中心を爲して居たのではなく、唐以前は寧ろ建寧の方が先に中國化したものと見るべき事

は(六)で明らかである。尙之は福州城發展の經過を見ても諸ける所で恐らく中國との交通關係に基くのであらう。即ち當時海洋の航行は仲々容易でないのに反し、内陸の河川航行又は之に沿うた陸路の交通は遙かに容易であつたからである。廣東と中國との交渉も最初は内陸の交通に頼つたのを見て明らかなである。所が唐代になると海上交通も大分容易になつて來て、梁唐超著中國文化史の所謂「蓋唐全盛時、海外交通之發達、爲從來所未有」で福州、泉州方面が急激に發展して來た。

景雲二年(七一一年)泉州(本の閩州)を改めて閩州都督府とし、武榮州を改めて泉州とした。此の泉州は即ち今の泉州で晉江縣附近に泉州の名が附けられた最初である。此の頃福建地方には閩、泉、建、漳、潮の五州があつた。開元十三年(七二五年)又改めて福州都督府とした。此の時初めて福州の名が現はれたので以前には福州の名は無かつた。

福州の名、元和郡縣志(唐代の書)に據ると州の西北福山に因み名と爲すとあつて註に按ずるに福山は今の名靈峰山、長樂縣に屬すとある。此の靈之を信じたとしても福山は福州の西北にはない、反つて東南の方に在るのである。若し今の泉州方面から命名したものとすれば州の西北に福山がある譯で少しも可笑しくはない。福州の福に顯著な事實が附帯して居つたなら唐代まで待たずとも、夙く福州の名は現はれて來る筈である。

侯官縣の侯、施鴻保の著閩雜記に「侯官の侯の字、通鑑の註宋白の言を引けるに據れば、漢武帝都尉を立て侯官に居りて以て兩越を禦く、所謂南北一侯也と、南北一侯の侯は即ち侯字にして古省きて侯と作す、晉は下邊の切去聲なり。諸侯の侯、晉下阪の切にして平聲なると同じからず。後來侯字を作り以て之を別つ。故に侯官の侯字福建通志皆侯に作る。則ち宜しく去聲に讀むべき也。今皆平聲に讀み字亦皆侯に作る」とあるから侯官縣は侯官縣であるのが本當らしい。侯は傑である。

侯官縣の南邊、漢の會稽郡南部都尉、後漢の侯官都尉の居つた所は冶縣即ち後の浙江省寧波州府附近であり無論今の福州ではない。福州は當時海外であつた。後漢の末建安年間に五縣の名が現はれ其の一に侯官縣があるが、此の時の侯官縣は其の範圍非常に廣大で後

八
代の侯官縣のやうな小さいものではない。そして其の中心も何處であるのか分らないが、兎に角侯官縣が南進したのである。晋の時晋安郡を分置し八縣之に屬した中にも侯官があるが、之も何處であるのか分らない。閩縣(原豐の地でない事だけは明らかである。かう考へると侯官縣なる者は何と名前を附けてよいか困るやうな所へ侯官縣と附けたのではあるまいか。今日は閩侯縣なる立派な一縣があるが、其の本は閩縣と侯官縣と一緒にしたもので清末まで閩縣、侯官縣共に福州城内に在つた。故に往時の侯官縣を其の儘福州としたがるのではあるが實は怪しい話で、確實に侯官縣が置かれ其の縣治の中心が定まつたのは唐の武德六年(六三三年)である。此の年閩縣を析き侯官縣を閩江(閩江の一部)の北に置いたが貞元五年(七八九年)洪水の爲め漂没したので觀察使鄭叔則奏して州城に移入せしめた。故址の名は侯官市、福州の西北三十里、今以て存在して居る。

開元二十一年(七三三年)福州に福建經略使を置き福、泉、建、漳、湖の五州を領せしめたが、翌年汀州を増し漳、湖の二州は嶺南道に隸せしめた。天寶元年(七四二年)福州を江南東道に隸せしめたが、又改めて長樂郡とし、乾元元年(七五八年)復た福州と爲し領縣は十であつた。唐書地理志に「福州長樂郡中都督府領縣十、閩、侯官、長樂、福唐、連江、長溪、古田、梅溪、永泰、尤溪」とある。

通典に唐の縣赤畿望縣上中下の差あり。縣令各一人とあるから、閩縣は先づ中流以上の繁華さがあつたのであらう。福唐は今の福清縣、長溪縣は今の霞浦縣、梅溪縣は今の閩清縣である。

唐代福州の地方長官

都督 武德八年(六二五年) 泉州中都督府

景雲二年(七二一年) 閩州都督府

開元十三年(七二五年) 福州都督府

經略使 開元廿一年(七三三年) 福建經略使

都防禦使兼軍海軍使 乾元元年(七五八年) 福建經略使を改む。

節度使 上元元年(七六〇年) 福建都防禦使を升し福、建、泉、汀、漳、湖六州を節度す。

都團練觀察使 大曆六年(七七一年) 福建節度使を廢し福、建、泉、汀、漳五州を管す。

威武節度使 乾寧四年(八九七年) 福建都團練觀察使を升す。

唐代の福州

福州 武德六年(六三三年) 泉州

景雲二年(七二一年) 閩州

開元十三年(七二五年) 福州

天寶元年(七四二年) 長樂郡

乾元元年(七五八年) 福州

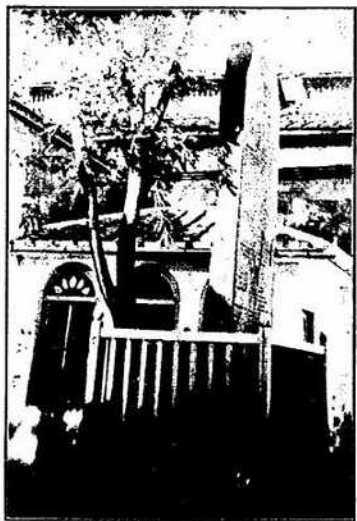
唐末の乾寧四年(八九七年)には團練觀察使を升して威武軍節度使と爲し、威武軍の中心は閩縣であつた。

十五代

五代には王審知閩を平定し、閩の地久しく王氏の所有に歸した。

王審知傳 審知字は信通、光州(河南)商始の人也、父は愨、世々農を爲す。兄の潮、審知と共に材勇を以て知られ號して三龍と曰ふ。唐末群盜起り漳州の人王緒攻めて固始を陷る。緒、潮兄弟の材勇を聞き召して軍中に置き、潮を以て軍校と爲す。是時泉州の

蔡宗補、士を募り以て兵を益さんとするに方り、乃ち緒を以て光州の刺史と爲す。潮は時に縣佐史たり。宗補其の兵を召し會して黃巢を撃たんとす。緒遲留して行かず。宗補怒り兵を發して緒を攻む。緒懼れ光壽の兵五千人を擧げ南奔し至る所襲略す。南康(江西省)より臨汀(汀州)に入り、潭浦(潭州)を陥れ衆數萬あり。緒性猜忌、部將にして才能ある者多く事に因て殺され潮頗る自ら懼る。軍南安(泉州)に次するや潮其の前鋒の將を説いて曰く「吾が屬壇臺と妻子とを棄て、盜を爲すは緒に膏かざるのみ。豈に本心ならんや。今緒猜刻にして吾が屬自ら朝夕を保せず、況んや圖つて事を成する欲するをや」と。前鋒の將大に悟り潮と共に相持して泣く。乃ち壯士數千人を選み篋竹の間伏して緒の至るを伺ひ躍出して之を擒にす。前鋒の將曰く「我を生かせる者は潮なり。請ふ以て主と爲さん」と。潮固譲して獲ず。乃ち刑牲飲血して盟を爲し、劍を前に植多祝して曰く「拜して劍三たび動く者は當に帥たるべし」と。審知に至つて劍地に躍る。審知長鬚紫衣、方口隆準、常に白馬に乗り軍中白馬三郎と稱す。是に及んで衆以て神と爲し争うて之を拜す。審知の曰く「予兄に事ふる事父の如し、豈弟にして大將たり、兄にして下に居る者有らんや」と。遂に潮を率じて其の衆の帥たらしむ。潮、緒を別館に囚ふ。緒自殺す。時に光啓元年(八八五年)八月なり。是時泉州の刺史廖彥若、人と爲り負暴にして泉人之に苦しむ。潮地を略して其の境に至り軍行整肅なるを聞き、耆老相率ひ牛酒を率じ道に遮り留む。潮即ち泉州を圍み歲餘にして之に克つ。使を遣し款を福建觀察使陳巖に送る。巖潮を表して泉州刺史と爲す。景福元年(八九二年)巖卒す。巖の妻弟范順將士に圖して已を推さしめて、留後と爲り兵を發して潮を拒む。潮從弟彦復を都統と爲し、審知を都監と爲し、兵を以て福州を攻めしむ。年を踰る范順救を咸勝軍節度使董昌に求む。昌は順の姻、即ち温、臺、發の兵五千人を發し之を救ふ。彦復、審知、潮に兵を班さん事を請ふ。潮許さず。潮報して曰く「兵と將と俱に盡く吾當に自ら往かん」と。彦復、審知懼れ乃ち親しく士卒を督し攻めて之を破る。順城を棄て、走り將士に殺さる。潮、審知を泉州刺史と爲す。建州の人徐歸範刺史を殺し州を以て潮に應ず。汀州の刺史鍾金、蔡亦結を擧げて命を聽く。潮盡く閩中五州の地を有つ。是歲唐潮を以て福建觀察使と爲す。乾寧四年(八九七年)潮卒す。審知代り立つ。唐福州を以て威武軍と爲し、審知を節度使に拜す。光化三年(九〇〇年)同中書門下平章事に拜し、天祐元年(九〇四年)鄆王に



王審知德政の碑

封ぜらる。唐亡び梁の太祖審知を中書令に加拜し閩王に封ず。福州を升して大都督府と爲す。是時楊行密かに據つて江淮にあり。審知の歲遣使海に汎び自ら登萊して梁に朝貢す。使者海に入り還潮する者常に十の三四。審知備敵に起り(府志即ち五代史には「盜賊に起る」とある)以て富貴に至れるも身を奉ずる甚だ儉、好んで下士を禮す。王濛は唐相傳の子、楊沂は唐相沙の弟、徐寅は唐時知名の進士なるが之等唐の衣冠舊族皆審知に依つて仕官す。又學四門を建て以て閩士の秀づる者に教へ、良吏を選任し、刑を省き賦を輕くし、隣封に修睦して四境安寧、民生兵革を見ざることを殆んど三十年。又海中の糧粟を招來して海上に商賈す。黃崎は風濤阻を爲す。一夕風雷雷震擊して開き以て港と爲す。閩人以て審知德政の致す所となす。號して甘棠港と爲す。審知又好んで釋教を崇奉し盛に寺觀を建つ。同光三年(九二五年)卒す。年六十四。尙書令を贈り諡して忠懿と曰ふ。(福州府志、福建通志參照)

王氏七代五十二年(1)王潮(八九三年—八九七年)審知の兄福州觀察使たり。(2)王審知(八九七年—九五五年)九〇七年後梁より閩王に封ぜらる。(3)王延翰(九二五年—九二六年)審知の長子自ら王と稱す。審知の養子建州刺史王延禀(宋姓周氏)に殺さる。(4)王鏐(九二八年—九三五年)初名延鈞審知の次子後唐より閩王に封ぜらる。長子繼勳及び皇族使李傲の益に殺さる。(5)王繼勳(九三七年—九三九年)鏐の皇子更に稱と名く。後晉より閩王に封ぜらる。審知の子延義其の從子繼業をして之を繼せしむ。(6)王延義(九四〇年—九四四年)審知の少子更に稱と名く。自ら閩國王と稱す。都將連重遇に殺さる。(7)王延政、審知の子建州の刺史、建州に國を建て殷と稱し、天德と改元し、泉漳汀の三州を得勢盛となる。福州では連重遇をの嫡姪文進を立てたが次で之を殺す。林仁翰重遇を殺し延政を迎ふ。九四四年國號を閩、福州を東都としたが、南唐李景の兵境を壓し遷る事を得ず、福州の將李仁達(宏は雲峰の僧草嚴明を立て、主とし南唐と通ず。建州の王延政九四五年南唐兵に圍まれ遂に降る。王潮が福州に入つてから五十二年にして王氏の閩は亡び、審知以後の王氏は何れも荒淫無道にして終を完うした者は無かつた。

後唐の長興四年(九三三年)閩王王鏐(延鈞)福州を長樂府とし領縣は閩、侯官、長樂、福清、連江、長溪、古田、尤溪、永泰、閩清、羅源、寧德、德化、順昌の十四であつたが、晉の開運元年(九四四年)王延政、福州を東都(亦南都にも依

る)とし領縣七であつた。

一一

十一 宋

宋の太平興國三年(九七八年)には福州(亦長樂郡ともいふ)を威武軍といつて領縣は十二で即ち閩侯官、福清、古田、永福(舊永泰縣)長溪、長樂、羅源、閩清、寧徳(王審知の時初めて置く)懷安(今の侯官縣の一部)連江であつた。雍熙二年(九八五年)には従來兩浙西南路に屬してゐたのを始めて分けて福建路とした。

福建路 福建の名は既に唐代に見え福州、建州の頭字を集めたのに相違ない。當時福建路に屬した州は六、軍は三で即ち福州、建州、泉州、南劍州(大溪)、漳州、汀州、邵武軍、興化軍であつた。

宋代は北方の異民族から壓迫された關係もあり、福建方面には特に手を入れたらしい。今日残つて居る古蹟も所代のは極めて少なく、古いのは大抵宋代である。

宋代の地方官 初め威武軍節度使を置いたが、政和七年(一一一七年)に無定員の節度觀察留後を置き、次で觀察使、宣撫使を置き、又福建路安撫使を置き、福建轉運使、提刑司等の職もあり、泉州には提舉市舶司があつた。常置の官ではないが福建制置使があつた。宋末に全閩八郡の團結を元に獻したのが制置使の王積翁である。

景炎元年(一一二六年)には福州を福安府とした事もあつた。

十二 元

元になると至元十五年(一三四九年)福建行中書省を福州、建寧、泉州、興化、邵武、延平、汀州、漳州の八路に分け、福州路は九縣(閩、侯官、懷安、古田、閩清、長樂、連江、羅源、永福)二州(福清、福寧)を領し、行省は泉州に在つたり、福州に在つたりした。

十三 明

明の洪武元年(一三六八年)には福州路を福州府と改め、所屬の州縣は本の通りであつたが、二年福清、福寧の二州を縣とした。間もなく福寧を升して州と爲し、福安、寧徳を之に屬せしめた。萬曆八年(一五八〇年)懷安縣を廢して侯官に入れなので、福州府に屬する縣は閩、侯官、古田、閩清、長樂、連江、羅源、永福、福清の九縣になつた。福建全體を總轄するのは初、福建等處行中書省といつたのを洪武九年(一三七六年)改めて承宣布政使司とし八府、一直隸州、五十七縣を之に屬せしめた。八府といふのは福州府、興化府、建寧府、延平府、汀州府、邵武府、泉州府、漳州府で直隸州は福寧州である。

十四 清

清は其の初明制に因り福建全體を總轄したが、海内藩平、府縣の改廢等があつて、雍正十二年(一七三四年)には十府(福州、興化、泉州、漳州、延平、建寧、邵武、汀州、福寧、臺灣)二直隸州(永春、龍巖)六十二縣となり、福州府に

一一

属する縣は閩、侯官、古田、屏南、閩清、長樂、連江、羅源、永福、福清の十縣であつた。

一四

清代の地方官 (1) 一番上は閩浙總督で福建浙江の二省を管轄する。本来は武官で軍務を管理する役であるが、都察院右都御史を兼ねて文官を統轄する。(2) 巡撫は本来文官であるが、陸軍部侍郎を兼ねて武官をも補助調遣するの職がある。主として浙江省に居り福建には居なかつたが、清末多事時には福建巡撫たる者も居た。(3) 司には布政使(藩察、財政)、提學使(學務、教育)、提法使(檢察、司法行政)の三司がある。此の外同格のものに福建交渉使がある。(4) 道には巡警道(警察消防)、勸業道(實業交通)、鹽法道(鹽務造船廠)、軍糧道(福州府)、興泉永道(廈門廳)、延建道(延平府)、汀漳龍道(漳州府)等の長官があり俗に藩察と稱した。

十五 中華民國

中華民國になつては福建省を閩海(舊寧福)、廈門(舊興泉永)、汀漳(舊汀漳龍)、建安(舊建延邵)の四道に分け、各縣を之に隸屬せしめた。

福州の名稱は元來州の名であり、府なる行政區域が出来て福州府となつたのだが、此の時代に府を廢してから福州なる名は無くなつて了つた。即ち福州に當る大範圍は閩海道であり、小範圍は閩侯縣である。故に福州の二字を冠するものは私立の公共機關に過ぎなかつた。それにしても郵政局の消印について最近まで「Fuzhou」福州府の刻字を用ひて居たのは不思議である。

四道六十三縣。閩海道一閩侯、古田、屏南、閩清、長樂、連江、羅源、永泰、福清、霞浦、福鼎、寧德、壽寧、福安、平潭、計十五。廈門道一廈門、仙遊、思明、晉江、南安、惠安、安溪、同安、永春、德化、大田、金門、計十二。汀漳道一長汀、寧化、上杭、武平、清流、連城、歸化、永定、雲霄、龍溪、漳浦、南靖、長泰、平和、詔安、海澄、龍巖、漳平、寧洋、東山、計二十。建安道一南平、將樂、沙、尤溪、順昌、永安、建甌、建陽、崇安、浦城、政和、松溪、邵武、光澤、泰寧、建寧、計十六。右の中、閩侯は民國

二年三月閩、侯官の併縣、舊福州府の首縣。永泰は舊永福、三年一月廣西省のと重復する故改名。霞浦は舊福寧府の首縣。莆田は舊興化府の首縣。思明は舊廈門廳、二年三月改縣。晉江縣は舊泉州府の首縣。長汀は舊汀州府の首縣。雲霄は舊雲霄廳、二年三月改縣。龍溪は舊漳州府の首縣。東山は四年九月銅山島に新設。南平は舊延平府の首縣。建甌は二年三月舊建安府附部の建安と延寧兩縣の合併。邵武は舊邵武府の首縣である。

此の時代には前清の總督に該るべき督軍、巡撫に該るべき省長が置かれ、省長の下に政務廳、財政廳があつたが、李厚基氏の如く督軍にして省長を兼ねた者もあり、薩鎮冰の如く省長だけの人もあつた。督軍の稱が廢され孫傳芳、王永泉の如く督辦と稱した事もあつた。前清末から問題になつた代議機關の省議會もあるにはあつたが開いた事は少なかつた。

福州が國民政府の治下となつたのは民國十六年からであるが、國民革命軍の先驅が入城したのは十五年十二月三日である。

第二章 福州城

一六

現在の福州都城が出来上つたのは明の洪武四年(一三七一)年であるが、抑の起原は漢高祖の五年(紀元前二〇二年)閩越王無諸の築ける冶城(?)に始まり、晋の子城、王審知の羅城、同南北夾城、宋の外城、明の福州城といふ順序に發展して来たもので、修築の重なるものだけでも前後二十四回の多きに亘つて居る。今日福州城南半の城壁は民國十七八年に亘る市區改正で取り拂はれたが、北半は依然明制其の儘に残つて居り城壁内を城内といふのである。

一 冶城

冶城を知る前に當時の地形を知つて置く必要がある。何しろ二千百數十年も前の事であるから今日の地貌とは餘程異つて居たに相違ない。舊志に「無諸の時四面皆江水」とあり、又闕諱に「三山現はれ、三山藏れ、三山看れども見えず」とあつて今の城内附近には越王、烏石、九仙の三山を始とし、十數の丘陵が所在に起伏し、其處此處には沼澤があり、臺江も今より餘程北の方を流れ、今の西湖も當時は餘程大きく、恐らく今の城内の大部分を占めて居たらうと想像される位である。それに今は湖水でなくなつたが、東湖も可なり大きい面積を占め、南門附近にも大きい湖水があつたと想像される。かゝる地形を有する地上に先づ冶城(?)が出来たのである。漢高祖の五年閩越王となり、東冶に都し治



冶山の古蹟

城を築いたのだが、東冶の所在は三山紀略に「冶山は古冶鑄の地、閩越王其の前麓に都す」とあり、福州府志に「越王山の東麓を冶山と曰ひ歐冶地あり、閩越王無諸の都せし所、冶又の名泉山、泉山又の名將軍山」とあつて、今の省黨部の西南に將軍山があり、其の後方に劍池浦、劍池後の地名があり、其の將軍山の一部分なる城隍廟の壁に「冶山古蹟」と大きく刻まれて居る。即ちあの附近は冶城があつたさうだが、規模は極めて小さかつたやうである。それは嚴高が子城を築くとき「城狭くして衆を聚むるに足らず」といつた事で想像がつくからである。

二 子 城

晉の太康三年（二八二年）建安郡より分れて晉安郡が出来た。四年晉安郡の太守嚴高は城の狭小にして且つ南面ならざるを厭ひ、郭璞に咨つて子城を築いた。郭璞字は景純當時有数の陰陽家、地理學者である。郭璞一小阜を指し嚴高に答へて曰く「方山秀拔於前、二山環峙於後、八百年後大盛」と。其の一小阜とは今の省防司令部の地であつて、爾來政廳は其處彼處に變つても此の場所は結構の上から依然福州城の核心を爲して今日に及んで居る。方山は又の名五虎山で福州城は昔から非常に五虎山に氣兼ねたものらしい。之は後の話であるが明代に雙門の前に石獅三足を置いたのも五虎山を厭制する爲であり、民國十七年市區改正の爲め之を取り拂ふ時、附近の住民が大に騒いだのも、今以て鼓樓の左門だけ通路として居るのも皆五虎山に對する氣兼ねである。何しろ五虎山は即ち五つの虎の山であるからだ。却説晉の子城の範圍は勿論故の冶城を含んだものであつたとはいへ、矢張小さかつたやうである。それは唐の中和年間（其の元年は八八

一年)の修拓を経て漸く東は今の麗文坊、南は到任橋、西は宜興橋巷、西南は楊橋に至つたので知る事が出来る。子城の子は何に因つて名附けたのか分明しないが、子恐らくは郭璞を指したのではなからうか。

冶山の位置 其の位置は假りに今の將軍山として置くが實は頗る疑問と思ふ。今此の附近に存する街名も歐冶池、冶山等の地名も後世の命名に係るもので、第一文献には無諸に關係して冶山といふ名稱は無いのである。況や劍を作つたとかいふ事は附會の説に過ぎない。東冶の後に自立した冶縣は無諸の東冶の址であるかは不明である事、侯官縣治が本と侯官市に在つた事、嚴高が子城を築く時「城の南面ならざる」事を謂つて居るが、其は將軍山の事を謂つて居るのか、それとも福州以外の冶城に就て謂つて居るのか不明である事、「四面江水」の時代將軍山は孤立小阜であるのだからどちらに向けるも自由な事等から考へて、東冶、冶縣、冶城なるものは今の福州以外の地に在つたのではあるまいか。嚴高の子城以後は開遠は無いとしても、序に其の以後の分も一緒に附隨せしめて置く方が、古くもあり體裁もよろしい。山來古典的我山引水は何處の國にでもある。

三 羅 城

唐の天復元年(九〇一年)王審知は舊子城(唐中和年間の修拓地を含む)の東南を擴張し舊子城を含めて羅城を築造した。其の範圍、南は利涉門(今の安泰橋の内側)、東南は通津門(今の津門樓)、東は海晏門(今の澳橋の内側)、東北は延遠門(今の貢院前)、北は永安門(今の懷安門の附近か)、西北は安善門(西湖の畔)、西は豐樂門(今の都倉巷)、西南は清遠門(今の清遠橋の内側)に至つて居る。當時の橋梁にして今に存するもの安泰橋、通津橋、去思橋(澳橋)、澳門橋等である。羅城の名は之も書に見えないが恐らくは羅山の羅であらう。羅山は藏れたる三山の一つであつて今の法海寺のある所である。

四 南北夾城

羅城の南に南月城、北に北月城を造り、南北兩方から舊城を夾む故に南北夾城と云ふ。梁の開平二年(九〇八年)王審知は更に此の南北夾城を増築した。其の範圍、南は寧越門(後の南門、今日無くなつたが南門兜といふ地名が残つて居る)、東南は美化門、其の内側に水部門(今の水部門)、東北は井樓門(今の井樓門)、北は嚴勝門(今無し。城外に方る)、西北は遺愛門(今の北門)、西は迎仙門(今の西門)、周圍二十六里、四千八百丈に達した。唐の黃滔の天王寺碑に據ると「北越王山を截り、南九仙、烏石の二山を包み、大城(即ち羅城)の門八、南月城の門二、北月城の門二、天設の府、神開の地也」と云つて居る。城濠の橋梁、南に九仙橋(南門外)、東南に通仙橋(水部門外)、東北に四明橋(井樓門外)、西に迎仙橋(迎仙門外)、北に池橋(遺愛門外)があつた。福州城は王審知の時に思ひ切つて廣大になつたと謂ふ可きである。南月、北月の月は黃滔萬歲寺の碑に「新城似月圓」とあつて城の形から出たものである。

五 外 城

宋の開寶七年(九七四年)刺史錢昱外城を増築した。城門凡て六、南は合沙門(寧越門の南、洗馬橋の内側)、東南は通仙門(美化門の南)、東は行春門(今の東門)、東北は湯井門(今の湯門)、船場門(今の井樓門)、西は怡山門(今の西門)是

である。即ち現在の福州城の南邊は此の外城の時から見ると聊か縮小された譯になる。舊志に據ると宋時代福州城の正門は「自南臺渡江十里合沙門、次寧越門、次利涉門、次還珠門、次虎節門、次威武門、次都督府門、麗譙凡七」とあつて七門あつた譯であるが、今存して居るのは唯威武軍門（鼓樓）の一つで、寧越門（南門）、還珠門（獅子樓又の名雙門）は民國十七年取り拂はれ、合沙門（城外）、利涉門（安泰橋の邊）、虎節門（到任橋の邊）、都督府門（鼓樓の内側）は久しい前から無くなつて了つた。

六 福州 城

即ち現在の省城は明洪武四年（一三七二年）駙馬都尉王恭命ぜられて修築した。北、越王山に接樓（又の名鎮海樓）を造り南、烏石、九仙の兩山を遶り廣袤方十里、高さ二丈一尺、厚さ一丈七尺、周三千三百四十九丈、城門七（南門、水部門、東門、湯門、井樓門、北門、西門）水關四（水部關、湯水關、北水關、西水關）即ち現在の城形である。今の城壁は清道光二十一年（一八四一年）の重修に係る。

如是福州城は治城以來増築に次ぐに増築を以てし、今日に及んだのではあるが、中には種々の事情で城を毀ち廢墟とした事もある。即ち宋の太平興國三年（九七八年）、元の至元十七年（一二八〇年）と二回あつた筈である。修築は二十回にも亘つたと上述したが、其の中見逃す事の出来ないのは唐子城と宋子城とであつて、前者は唐の中和年間觀察史鄭鑑の修拓に係り、後者は宋の熙寧二年（一〇六九年）太守程師孟の修拓に係り、南には虎節門、東南には定安門（今の衛橋

の内側）、東には康泰門（今の麗文坊の邊）、西には豐樂門（舊羅城の城門今の都倉巷の邊）があつて豐樂門の内に宜興門（康子城の城門）があり、虎節門外には還珠門があつた。

福州城の北邊に就ては子城でも羅城でも夾城でも外城でも蘇張り記事が残つて居らない。北月城以前の北邊は遙かに越王山を驪れ、今の省防司令部の裏手あたりより北に延びなかつた事は確かなやうである。して見ると今の越王山は久しい間城外に聳立して福州城の天險を爲して居たものであらう。此の處に築城工事を施さなかつたのは當時の交通路や城濠と通ぜざるものがあつたばかりではなく、「古傳云龍腰山不可擊也」といふ迷信的傳説にも關係があつたやうに思はれる。

所が此の處が福州城の弱點で督軍李厚基は此の處から許崇智の軍に一番乘をされ敗亡した。

北月城の嚴勝門が今所在を失つて居るが、恐らく越王山の支脈屏山の東方、今の城外に在つたものと想像される。今日城内に亡形に残つて居る城濠は勿論幾度にも整理されたものではあるが、特に大工事であつたと思はれるのは宋子城修築前の嘉祐二年（一〇五七年）の開河であつて、宋子城の所謂六門十二橋も此の開河を基調として居る。之等を考へると河は河、城壁は城壁といふ具合に必しも水陸一致して工事を進めたものでも無かつたらうと想像される。

八百年後大盛 郭瑛が嚴高に答へた「八百年後大盛」は又「五百年後大盛」とも傳へられて居る。將來有爲の地形であるといふ意味で、何も八百とか五百とかに拘泥すべきではあるまいが、試と勘定して見ると五百年後は唐の建中三年（七八二年）に當り、八百年後は宋の元豐五年（一〇八二年）に當り平均すると大體王審知頃に當る。

石獅 獅子を以て虎を制するのは夷を以て夷を制する譯だが、舊家の門や入口によく獅子が劍を衝み八方蹴をして居る浮彫がある。是は虎ばかりではなく一般驅除けの爲である。其の顔が唐獅子よりも寧ろ日本の鬼の顔に似て居る。石獅子は今尙多く残つて居り又作られたものもあるが、何れも新しく且つ完全なる唐獅子型であつて古拙な高麗犬風のものがない。萬壽橋石欄の獅子は先づ古拙さで白眉の中だらう。嘗て閩侯縣政府の前街を修理した時、石獅を掘出し其れを割つた處が、中に又小石獅があつたとて今以て縣政府の前の廣場に飾つて居る。これは縣長歐陽英の直話だから間違はなからう。見た所この石獅大分モダン型のやうである。

第三章 倭寇と福州

一 海賊の元祖孫恩

突如倭寇が福建各地へ襲來したのではなく、閩浙其他南海の各地では随分古くから海寇に苦しめられてゐた。古い記録では方輿紀要に「晋の隆安(三九七年—四〇一年)の間、孫恩海島に出沒し閩浙の患を爲す。島に憑り寇を爲すが如きは則ち恩に始まる」とあり、蓋し孫恩が南支海賊の元祖であらう。唐の貞元の頃壽王傳暹が越福十二州招討海賊使に任命されて居る。宋の嘉祐八年(一〇六三年)提刑司の奏によると「長溪(今の霞浦)、羅源、寧德、連江、長樂、福清の六縣皆邊海の盜賊にして船に乗り出沒す」とある。福建海賊の由來も相當に古いものと謂はねばならぬ。それで宋代の名地方官と稱せられる蔡君謨とか李綱とかは度々福建に戰艦水軍を置き防禦を疎にしてはいけなないと奏請してゐる。紹興六年(一一三六年)には延祥奏(今の侯官の西南)を置き、同八年には狄廣奏(初は永泰、後連江に移る)を置いた。是れ福建に於ける海防設備の濫觴である。

二 倭寇の開始と内奸

倭寇が始めて福建に來たのは明の洪武三年(一三七〇年)六月で、此の時は山東、浙江、福建等を寇し大した事もな

かつたやうであるが、それでも明は大に驚き浙福に命じて海舟を造り防倭の設備を嚴にせしめ、遠近に衛五十有九を築いた。倭寇は次いで同五年八月、永樂八年(一四一〇年)にも福建に入寇した。

倭寇の最も激しかつたのは明の嘉靖年代である。百、二百、多きは數千の倭寇が單列緩歩の行進状態で内陸まで横行するのであるから、如何に倭寇が「利刃を振ひ」「伏兵に妙を得」「怪術を用ひ」「長弓巨矢命中せざるなし」であつても案内者なくして出来ることではない。此の案内者即手引人を内奸と稱し潮海の匪族が之に當つて居つた。故に倭寇の半は支那人自身であり、廣い意味から見ると倭寇は支那海賊史の一挿話に過ぎないものとしてよからう。それであるから禦海策要にも「民の爲めに亂を禦くは斯民の亂に従ふ心を絶つに若くは莫し。今の海寇動もすれば數萬を計ふるも、皆言を倭奴に托し其の實は日本より出づる者數千を下らず。其の餘は則ち皆中國の赤子無賴の者入つて之に附するのみ」といつて居る。又御批歷代通鑑輯覽には「奸民悉く海島に逸れ主謀と爲る。倭悉く其の指揮を聽く。遂に之を誘うて入寇す。而して海中の巨盜皆倭服を襲ひ、旂號を飾り、艘を分け内地を掠め大利せざる無し」ともあつて、日本の武士は支那海賊の先棒に使はれたものと見ることが出来る。

内奸の主なる者に閩人李光頭、欽人許棟、其の黨王直等がある。李許罪を以て福建の獄に繋がれてゐたのであつたが、海島に逸れ亡命者を招集し、嘉靖十九年(一五四〇年)倭寇を手引して福浙の海岸を荒し廻つた。時の都御史朱執は外寇の内奸に由るを審にし、光頭等九十六人を擒へたけれども、それで内奸が盡きた譯ではない。籌海圖編に委しく表示されてある通りで、海賊顔思齋時代に倭寇の名は無くなつたが、浙、閩、粵の潮海には今日尙海賊が横行してゐるのである。

三 嘉靖の倭患

閩の倭患に遇ふことは前後二十年、省垣六たび兵を受くといはれて居るが如く盛んであつた。左に年次を逐つて嘉靖年間の倭寇を記述する。

- 嘉靖二十九年(一五五〇年)長樂縣が犯された。
- 同 三十一年(一五五二年)福清縣が掠められた。此の時は内奸王直が主謀者であつたやうである。
- 同 三十四年(一五五五年)福清縣が襲はれ、長樂の義兵往いて援けたけれども大將株が大分戦死した。
- 同 三十五年(一五五六年)正月より四月まで潮海の各縣が蹂躪され、倭寇は閩縣近くまで攻め寄せた様子である。
- 同 三十六年(一五五七年)八月、倭數千人連江縣に登陸し省會に逼り、四郊焚かれ、火城中を照す、死する者枕籍し、南臺洪塘悉く燬燼と爲る。時の巡撫阮鶚、策の施しやうなく庫藏を竭くし民間の金帛と共に倭に賂した。
- 同 三十七年(一五五八年)四月、倭寇連江縣より北嶺を踰え會城に逼つた。攻城三日にして援あり圍始めて解く。倭千餘轉じて長樂を襲ひ福清縣を陥れた。この時倭の數は漸次増して行つた趣に文献には記されて居る。
- 同 三十八年(一五五九年)四月、倭寇福寧より古嶺を越え福州を攻む。城門盡閉つ、依つて近郊を掠め永福縣を陥れ、洪塘より馬江に浮び出洋した。餘賊福清、長樂を焚掠した。

同三十九年(一五六〇年)三月、倭寇又福州に襲来し、諸村城門を塞閉し大に警戒す。巡撫劉燾騎射を善くし親ら兵を率の門を開いて出撃した。

同四十年(一五六一年)四月、倭寇長樂方面を襲ひ礮嶺を経て復福州に抵つた。

同四十一年(一五六二年)四月、倭長樂、福清を荒し更に大舉して寧徳を陥れ、城を距る十里の横嶼に據る。巡撫游震得急を浙督胡宗憲に告げたので參將戚繼光其の他、先づ横嶼の賊を撃つことになつた。繼光字は元敬、山東省濟寧の南に生る。此の時三十五歳であつた。先づ晉從肆赦の令を下し誘うて内奸倭兵を殺す。九月福清に至るや従來の官兵と異り秋毫も犯す所なきを以て民大に悦ぶ。城邑に屯し吾兵疲る。暫く休んで徐ろに謀を立てんと揚言して態と賊偵に知らせ、即夜兵を督すること三十里、倭の備なきを破り、首千餘級を斬る。萬事此の筆法で福清、興化の倭寇を殲した。それで流石の倭寇も省會を覬覦することを止めたといふ。戚少保傳には繼光の用ひた陳法が詳らかに載せてあるが、果して其の通りに戦つたかどうか不明である。兎に角従來の官兵の戦法とは違つたものがあつたに相違ない。

同四十二年(一五六三年)戚繼光總兵となり倭寇の長樂方面を荒したのを平げ、又興化城を復し、仙遊縣の圍を解いた。倭寇の殘部が古嶺から省城を窺つたのを千總胡世斌之を驅逐した。

同四十三年(一五六四年)倭寇福清附近を犯したのを繼光昇を肩して往つて平げた。

隆慶元年(一五六七年)繼光兵を南澳、崇武方面に遣し倭寇を平げ、漸く二十年來の倭患を剪艾し、福州始めて安きを得た。繼光兵を用ひてより五年其の將略殆ど天授乎」と記録に書いてある。

四 設海の防備

倭寇の犯した地方は北は高麗遼東より南廣東に至る一帯瀾海の地で、福建沿海ばかりではない。寧ろ此の地方は他に較べて猖獗であつたとはいはれぬかも知れぬ。倭寇の襲来は大抵春から夏の初で秋冬は極めて少い。これは風向の關係に因るもので、清明以後、南風を常と爲し、霜降以後、北風を常と爲すのが福建沿海の常態であり、冬季は海が非常に荒れる。それで守備側では此の風向に氣を使ったもので、戚繼光が副總兵であつた時、總兵官であつた俞大猷は長江江口の防備につき倭が正東風に遇つて來るときは必ず此の方面に行くには東北風の時であり、彼の方面に行くには遠く太平洋の外に於て過さねばいけぬ」と述べてゐる。又戚繼光も自ら風濤歌を作つた位相當に調べて居る。それから倭寇に上陸されると困つたものと見え、成るべく海で禦ぐやうに努めたらしく「倭奴の長技は陸に利し我兵の長技は水に利す」とか「諸將海に戰つて勝つ者常に十一、其の内地戰敗なる者常に十八」などと色々述べてゐる。それで沿海の要所や島嶼に屯所や烽火臺を設け、出來るだけの設備をした。明代に出來た福州府沿海だけの防備でも水寨二、衛所四、巡檢司九、烽火臺五十に及んで居る。北は遼東より南は廣東迄皆此の割合にあつたのだから蓋し壯觀であつたらうと思ふ。

五 倭寇臺

樂群樓と大東電報局との間の孤丘を俗に倭寇臺といふ。誰が名附けたのか私の知見の範圍では文献に載せられてない



松 寇 倭

赤裸の倭寇 倭寇が赤裸種一本に刀を帯し之を振り廻しながら進軍する趣は驚海圖編、武備志其の他の諸書に見えて居て格別怪し
みもせぬが、よく考へて見ると時代は明、季節は春か夏、倭寇の名に於て例の沿海の匪族が遣つて来るのだから、日本服の揃ふ筈が
ない。裸なら六尺の木綿一本で他に何も要らぬ。頭髪は一寸手入れたら直ぐ日本の鬘になる。これ程簡単な武装はない。所が官兵は
佞氣付いて居るものと見え申々區別が分らない。上の方でクル／＼刀を廻されるので下の方がお留守になりバタ／＼やられたのだと
うである。

倭寇の舌 下渡の王長年(本名は傳はらない)といふ者は、嘉靖の頃倭寇が来て露山里を掠め財寶及び男婦三十餘人を皆舟に載せて
出帆した時、一緒に其の中に居つたが、倭に媚び縛を解かせ、更に婦女に媚びさせ酒で大酔した賊を皆殺して了つた。王は殺した賊
の舌を一々切り取つて藏つて置いて其の舟で歸つて来たが、官兵は之を見て賊となし倭寇なりと誣いたので、藏つて置いた舌を出し
て倭寇に非ざらぬ證を立てた。總督大に駭服し、役人にしようとしたが辭し歸つたといふ話が下渡附近に残つて居る。此の話は湧輪小
品にも載せてあり「長年今尙在老矣、益秀其甚、獨採舟漁」と結んで居る。前述の威繼光が倭寇の密偵を利用した事といひ、今の話と
いひ、倭寇と福州附近の人達とは言葉が通じたものらしい。

威繼光傳 威家は世々山東省登州府蓬萊縣の人、繼光は嘉靖七年山東省濟寧府の南六十里の魯橋に生る。家貧なれど好んで書を讀
み、經史の大義に通じ且つ奇氣あり、嘉靖中用ひられて山東の都指揮僉事となり參將に充てらる。浙江より閩に來り倭寇を平ぐるに
功あり、生前太子太保を加へられ又少保を加へらる。萬曆十五年消渴の疾を以て郷里蓬萊縣の家にて死す。享年六十歲(威少保年譜
抄記)。

光餅 コシヤン 坊間柿の中で焼く堅パン(大さ同銀位で一孔がある)を光餅といふのは、威繼光が之を以て行軍の食に充てたので、後人繼
光の光を取り光餅と稱したのであると檉城詩話は云ふ。

第四章 福州の名勝古蹟

一 越王山

福州城の北端に在つて頭に鎮海樓のある山である。福州市街を一時に聚める事が出来、頗る形勝の地位を占めて居る。明代築城の時初めて「樸樓」を造り、上に眞武を祀り鎮海樓とも稱した。今の樓は光緒十九年（一八九三年）に再建落成したものである。

宋代には此の邊に梅があつたらしいが今は無い。清末には幾百株の桃を植ゑ、花時には盛観を呈する。樓の前に七星井と稱して北斗七星に象り、石臼の如きものを七個置いてあるのは、福州の災難除けの禁厭であるさうである。

三山、三山に就いては福州の誌に「三山現はれ、三山蔽れ、三山看れども見えず」とある。「三山現は、越王山、九仙王、烏石山であり、「三山蔽」は治山（古名泉山、城隍廟のある所）、丁成山（高山又は中山とも云ふ塔崎の邊）、閩山（烏石山の支麓）であり、「三山看不見」は、芝山（越王山の一支、開元寺の在る邊）、羅山（九仙山の一支、法海寺の在る所）、鐘山（烏石山の支阜）である。

光緒東建鎮海樓記 長樂謝章鉅撰 閩縣陳寶琛書

鎮海樓者、建北城三樓、障北山之衝、樓交感、寒幽陰、非徒飾形勢壯遊觀也。高卑廣狹、尺寸皆有規制、舊制高六丈有二尺、或曰五丈有九尺、深七丈有二尺、廣十三丈有七尺、樓以周垣、厚五尺有三寸、自明以來、迭變迭廢、皆如制。成豐十年又燬、修者恣任意



樓有鎮るた見りよ近湖西

見。較舊忽卑三尺、又不堅固牢實、日就陵遲、屢議改作、迄今乃成、按之額制、尺無所短、而且寸有所長、興工於壬辰十月、落成於癸巳九月、費白金一萬八千餘兩、自將軍希休總督深公、以下官紳皆有勞、其詳制載碑陰、財力之多艱、議論之不一、幸而得成、其可忘耶、且夫樓以鎮海名、工在樓、意實在海、嗟呼、海風叫嘯、海水飛揚、登斯樓也、其忍以中流砥柱之心哉、是爲記、

二 九 仙 山

九仙山は又于山とも稱し、福州城の東南隅に在る山で西麓に白塔が聳えて居る。閩都記に「相傳ふ漢の時何氏兄弟九人、茲山に脩煉し後九鯉湖に解化す」とあり。九仙の名はこれから出て居るといふ。山頂の九仙觀は宋の崇寧二年（一一〇三年）に創めたもの、其の後種々の廟閣が出来、土俗信仰の上から有名な山になつて居る。

三 白 塔 寺

本名を萬歲寺といふ。唐の天祐元年（九〇四年）王審知の建てたもので于山の西麓に在る。宋の嘉靖十三年（一五三四年）二月十九日雷の爲めに火事が起り、巨燭の如く城中の外數十里を照した。後又再建したが、明代倭變に際し防兵此處に屯し、屯兵の爲めに撤毀殆んど盡き、寺僧散去した。今の寺は光緒年代に出来たもの、白塔は本名定光塔、初め王審知の建てたものだが今は光緒年代に造つたもの、木骨煉瓦造で頂上まで登る事が出来る。入口に居る萬歲寺の番僧に見料數片を與へねばならぬ。

四 烏石山

福州城の西南隅に在る山で、越王、九仙の二山より廣袤も大きく名勝も多い。洋人は烏石を其の儘 Black Stone Hill と云ふ。此の山は城内の方から見て左弱右強で、左弱即東弱の方を道山と稱し、其の顛に道山觀がある。右強の顛には凌霄臺俗稱進香臺があり、重陽の日此の處に登る者が多い。摩崖の碑「警若藻記」は唐大曆七年（七七二年）李陽氷の書で福州最古の石刻であり、處州の「新羅記」、紳雲の「城隍記」、麗水の「志歸臺銘」と共に世に四絶と稱せられるものである。道山から進香臺に至るまでの間に種々なる石刻があり有名である。大抵明代頃の書である。福建教育廳は元との諸業學校の地で烏石山の南麓に在る。福建省立第一高級中學校は元との省立第一師範學校で烏石山の中腹に在る。この師範學校は創立の時範を日本に採り教習を日本から招致した。

烏石山は唐代既に闍山の名があり、古來山中の奇勝三十六と稱せられ、附近に祀廟寺塔が多い。

五 石塔寺

道山の南麓に在る、唐貞元十五年（七九九年）福州觀察使柳冕が德宗の誕節に建てたもので、石塔の名を貞元無垢淨光塔と賜はり、今も其の時の碑が残つて居る。五代晋の天福二年（九三七年）王延曦が重建して「崇妙保聖堅牢塔」と名づけたのが現在の塔である。七層の純石造で頂上には寄附者十六夫妻の名が彫られてあり、第一層には南無金輪王佛、第

二層には南無當來下生彌勒尊佛、第三層には南無无量壽佛、第四層には南無多寶佛、第五層には南無藥師琉璃光佛、第六層には南無龍自在王佛、第七層には釋迦牟尼佛の像を彫つた板石が數箇所毎に籍められて居る。明初までは屢々重修したが明の嘉靖以後、民居として占有され、今は破損し且つ傾きかけた塔と寺の一部と思はれるものが残つて居るだけである。

石積のモルタル 長短の石を巧みに使つて建て、あり、石と石を固く密着させる爲めに花崗岩の屑を赤泥を用ひて居る。此のモルタルは現在でも福州では屢瓦造に用ひて居るから、随分以前から此の利用法は知つて居たものらしい。萬壽江南の兩橋も矢張りこの赤泥をモルタルとしたものであらう。

六 冶山

福州城發祥の地で城内城隍街に在る。閩越王無諸が始めて都した所だと稱せられるが確かな事は分らぬ。丘頂の城隍廟は晋の太康中に遷城した後建てたもので、宋紹興二十七年（一一五七年）に郡守沈調堂宇を増し漸次盛となつて來たが、國民政府の治下となつてから屢々廢毀を傳へられる。塔の外面に「冶山古蹟」の四大字が彫られてある。

七 西湖公園

西門外に在る。晋太康三年（二八二年）晋安郡守嚴高民田灌溉と子城築造の爲め東西二湖を開鑿し、諸山の溪水を引き、

閩江とも湖汐を以て通ずるやうにした。東湖は夙に漂滅し所在を失つたが、西湖は依然として今日に残り、附近に諸勝多く、福州の一名所たるを失はぬ。西湖は開鑿に依つて出来た事になつて居るが、恐らく閩江の河址即ち新月湖に手入をしたのであらうと思はれる。現在の西湖は周圍一萬三千八百六十尺、公園は湖中の小島を以て充てられて居る。民國三年巡按使許世英、省紳の議に據り湖を濬へ樹を植へ西湖公園と名づけたもの。飛雲橋、澄瀾閣、開化寺、鏡湖亭、宛在堂、紫微廳等の諸營造物があり、梅花、端午菊花の時節には杖を曳く者が多い。

擊楫の碑 民國四年日支交渉で排日の聲が高まつた時、許世英は自己の人氣を好轉せんが爲め建てたのであると稱せられる。擊楫の碑が飛雲橋の近くに在る。擊楫の故事は東晉の臣祖逖から出て居り、中原を清むるを志し、江を渡り中流楫を撃ち誓つて「祖逖不能清中原而復濟者、有如大江」と云つたのに始まる。東晉孝懷帝建興元年（三二三年）の時代である。

八 城南公園

南公園とも稱し、前述の西湖公園と共に屢々共進會場其の他の催事に用ひられる場所である。元と耿精忠の別業で、此の附近を耿王庄、略して王庄といふ。後左宗棠の祀となつたが民國四年許世英改めて公園として今日に及んで居る。境内廣潤林泉の愛すべきものがあり、後隅に煉瓦造の黃花園烈士の祀がある。

九 大廟山

釣龍山とも南臺山とも稱する小阜である。漢高帝五年（西紀前二〇二年）閩越王驩無諸冊を此に受けた所と傳へて居る。依つて越王臺とも稱せられる。無諸の子餘善此で白龍を釣りにて瑞と爲し臺を築いて釣龍臺と稱した。其の後山川壇となり其の址今でも残つて居る。大江を俯瞰し展望廣く近年此の一角に望火樓を設けた。

閩越王廟 丘の西腹に在る無諸の廟で、俗に大廟と稱する所から大廟山の名も出来た。

釣龍井 大廟の内に在る。何しろ小阜の上にある井であるから非常に深い。餘善が此の井から龍を釣つたとは古志に記してない。

南臺 福州開港後南臺の名が高くなつたが、之と南臺の名は此の大廟山の異名から起り、城内に對し大廟山附近を南臺と稱したのである。

全閩第一江山 宋の米芾の石刻で、元と滬尾街にあつたものを此處に移したものらしい。

大廟山附近の諸小阜 彩氣山、南潭山、金斗山、紫雲山、保福山、吉祥山、太平山等の諸阜が散在し頂上まで寺、廟、學校、民家等になつて居る。

十 倉前山

鹽倉の前通を倉前街（今なほ石路）といひ、倉前街の山であるから倉前山といふ。又俗に鹽倉山ともいつた。宋代には天寧山と稱し「天寧山省會之第一案也」などと稱せられ、清代には天安山とも稱し、古くから相當有名であつた。今の鹽倉（古名天寧臺）崇聖庵附近一帯に天寧寺があつて、萬壽橋創設の際之と關係のある寺であつた。宋の崇寧二年（一一一〇三年）の建立、政和の初め天寧萬壽寺と改め、更に紹興の初めに光孝寺と改めた。明末この光孝寺は鹽倉となり、後

現在の所（日本總領事館下）へ廳舎は移つた。今日倉前街に小さな天安寺があるが蓋し此の天安寺の名残であらうと思はれる。それで天安（天安）山即ち倉前山の山頂は何處かといふに、英國領事館の上の税關宿舎前に削られて居る道路がなほ山頂らしく残つて居る。其處が山頂である。福州全市を一眸の中に聚め得る倭寇寮は倉前山の一支ではあるが、藤山の主峰で別な山である。藤山は「其派一起一伏、如瓜引藤、亘五六里故名」と云はれ、今の菱頂園、日本民會附近皆藤山である。この邊は明から清初に掛け梅樹萬株があり「花盛開時一望瓊瑤世界」と稱せられ南臺十景の一であつた。觀音井の少し上の明眞庵（五帝廟）附近を今以て梅場といふのはこの爲めである。

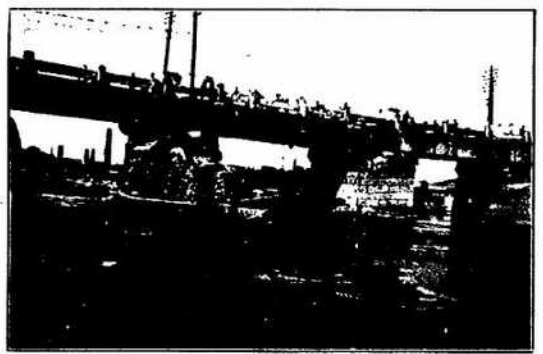
倉前山、泛船浦（番船浦）共に福州開港後開けた所であるから古蹟の見べきものが無く、到る處の累々たる塚墓は以て往時如何に塚墓の地として恰好であつたかが窺はれる。

十一 忠懿王廟

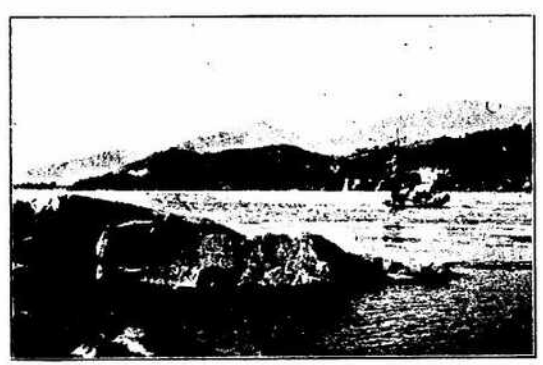
城内慶城寺の東隣に在り、閩王審知の廟を祀つてある（王審知傳參照）。廟前に在る「瑯琊王德政碑」は審知在世中の天祐三年（九〇六年）の刻で、廟と共に今なほ王氏一族に依つて大切に保管せられ、福州古石刻の一である。

十二 西禪寺

西門から洪山橋に至る街道の左側支路に在り、明代には此の邊を永欽里、清代には二都といつた。梁の頃練金術家王



洪山橋



洪山橋上流閩江機器局附近

増その子玉嗣を連れて閩に來り此處に居たといふ。唐咸通八年（八六七年）觀察使李景温、長沙嶺山の僧大安を招いて寺と爲し、後唐の長興年中（九三〇年—九三三年）王延鈞、長慶と名づけたが、兵災に罹り堂宇僅かに存するのみであった。宋の天聖年間（一〇二三—一〇三二年）營葺し、景祐五年（一〇三八年）勅して怡山長慶禪寺とした。是れ今日の西禪寺の本名である。其の後屢々重修があつたが、塔は建てなかつた。伽藍の結構は鼓山湧泉寺よりも勝れ福州一である。西禪寺の荔枝、今は有名であるが、毎年纏めて果物屋に豫賣して居るらしい。宋代に百餘株あり、法堂前後の四株は五代の時僧慧敏が手づから植えたものだといふ。

十三 洪 山 橋

福州の西十支里に在つて閩江上下の交通及び福州との陸路の衝に當つて居る重要な地點である。橋は洪江（閩江の本流）に架つて居て、南臺島の郭家里と聯絡して居る。元と石門があり、壞れたので明成化十一年（一四七五年）に重建したが、二十二年（一四八六年）に又壞れ修築したが、萬應六年（一五七八年）に重建した。其の後幾度か壞れ、幾度か修築し、現在の橋は嘉慶十三年（一八〇八年）に鹽商が捐金して重建したものであるが、大分壞れて居るやうである。萬壽橋に比べると小規模だが小綺麗に出来て居り、附近の景色と相映じて繪のやうである。

洪山橋兵工廠 此の橋より上流半哩許の左岸に在つて、臺灣洲の銅（銀）元局が廢されてから最近に至るまで小銀貨をも鑄造した。

十四 鼓 嶺

三八

鼓山、北嶺の峰積きの一鞍部で海拔二千四百尺、盛夏と雖も福州より攝氏十度乃至十五度低く、清涼超塵洋人間に避暑地として有名である。光緒十一年（一八八五年）一宣教師が此處に暑を避けてから漸次夏期の別荘を建てる者が多くなり、盛んな頃には一夏期に三百家族も廈門、汕頭、香港、臺灣方面から来た。彼等は鼓嶺共益社 Kaihsang Council 即ち村役場の如きものを作り、教會、病院、俱樂部、運動場、水泳場等の施設を爲して居る。國民政府の治下となつてから漸次鼓嶺以前の避暑地である川石島 Sharp Peak に洋人の避暑地が遷り戻つて行くやうである。

十五 鼓 山

郭璞の遷城記に「右旗左鼓」とあつて福州の左（東）に鼓山、右（西）に旗山があり、相對峙して福州盆地の兩翼を爲して居る。鼓山の鼓は「蓋し形鼓に類するを以てなり」とも「山顛に巨岩鼓の如きものあり」とも「風雨大に其の中に作り簾瀑聲あり鼓の如し故に名づく」とも謂はれるが、今其の巨石は見當らない。鼓山は閩江畔から直ちに屹立し海拔約一千二百米、其の頂上からは天氣晴朗の日臺灣の山が微かに見えると稱せられる。有名な鼓山湧泉寺は山頂に近い南面の中腹に在る。現在寺の在る所は元と潭で菴龍が居たので、唐建中四年（七八三年）從事裴胄が僧靈蟠に請うて山に入り、其の潭の傍で華嚴經を誦して貰つた。それで菴龍遂に走り寄を爲さなかつたさうである。因つて其處を華嚴菴と稱したが、會昌中

（八四一年—八四六年）廢されて繁華と爲つて了つた。

葉の開平二年（九〇八年）王審知其の潭を填め寺と爲し、僧神晏に請うて此に居らしめ、宋の眞宗の時に鼓山白雲峰湧泉禪院の額を賜ひ、明永樂五年改めて湧泉禪寺と爲し、清康熙三十八年に湧泉禪寺の御書額を勅賜された。かくて湧泉寺は漸次大きくなつて今日に及んで居る。

大雄殿 同殿は湧泉寺の本堂で結構最も壯麗である。正面には海天佛地の巨額を掲げ、中央には金色燦爛たる大佛像を安置し、僅に千人を容れ得る佛堂で、白衣黒帽の衆僧交代して此處で讀經をする。毎年陰曆四月七日の午後新僧侶の受戒があり、新僧の頭に大きな灸を据ゑるので、特に此の日福州から見物に行く者が多い。今の大雄殿は建立當時のものではなく、鼓山志に據ると開平二年（九〇八年）の建立に次ぎ宋皇祐元年（一〇四九年）僧德建（第十二代）の重建、南宋紹興二十二年（一一五二年）僧祖珍（第二十六代）の重建、嘉定二年（一二〇九年）僧行謙（第三十九代）の重修があり、明永樂六年（一四〇八年）焼けたので、宣德七年（一四三三年）僧文寧（第六十代）が復建したが、嘉靖二十一年（一五四二年）復た焼けたので、萬曆四十七年（一六一九年）郡人曹學佺重建し僧道東（第六十一代の前）に請うて住持とした。崇禎十五年（一六四二年）風で圯れたので、翌年僧元賢（第六十三代）が重修した。其の後清康熙二年（一六六二年）僧道霽（第六十五代）の重修、雍正三年（一七二五年）僧大心（第六十七代）の再修、乾隆十六年（一七五一年）僧隆興（第七十二代）の重修を経て今日に至つて居る（現在の住持は僧達本で第七十五代に當り、雪峰崇聖寺の住持をも兼ねて居る。寺の宗旨は元と臨濟であつたが今は曹洞である）。

三九

大雄殿の後方に法堂、其の左廂に鐘樓、客室、齋堂、圓王祠、伽藍殿(羅漢の塑像許多あり)、藏經堂、又右廂には經板樓、鼓樓、戒堂、禪堂、方丈、資積倉、僧房、陽房等があつて規模頗る宏壯である。近年參詣客の爲めに宿泊専用の煉瓦造三層樓を東方に造つたが、夏期通風が悪いといふ話を聽いて居る。兎に角寺内に千人以上の客が不便なく泊る事が出来る。食事は精選料理で茶心の各種料理、香の物は特に美味であるといはれて居る。宿泊料は總て布施で任意であるが、少額の喜捨も出来難いさうである。

登山路 福州から鼓山に到るには水陸の兩路がある。陸路は輜で南臺の村落を経て鼓山麓に出づるもの、水路は閩江を軸板又はモーターボートで下り、鼓山角に上陸し山麓まで戻るもの、後者の方が時間は經濟であり、優に一日の清遊を試みるに十分の餘裕がある。圓山第一の山門は登山路の第一門で、祝聖萬年山の碑から左に曲り白雲禪院に出る。圓都記に「本湧泉寺積穀處、嘉靖間湧泉寺燬、拓而葺之、殿宇壯麗有加」とある。今でも寺であり又穀物倉でもある。東際橋を渡つてからは有名な鼓山の磴路で、四周松林、中途亭があつて休憩し者を吸る事が出来る。石段の數は東際橋から仰止亭まで四百三十一、仰止亭から七佛亭まで二百六十、七佛亭から半山亭まで五百一、半山亭から道亭まで五百二十四、道亭から更衣亭まで三百七十八、更衣亭から駐錫亭まで一百八、駐錫亭から湧泉寺まで七、合計二千二百九段である。

鑿源洞 山門の前から右に曲り石磴數十級を下ると小さい石橋がある。橋下は深き三丈許の無水の洞で、朱子の鑿つた詩の字が裂壁一杯に擴がつて居る。此の洞は形洞に似て居るので、鑿源洞と名づけたのだと鼓山志に見えて居る。水雲亭の前は小さな廣場になつて居るが、周囲の石壁には宋代以後名士文人が境地の幽寂を愛し來遊した趣の石刻がある。

り、古雅揃すべきものがある。之等石刻の中最も古いのは宋の慶曆丙戌(一〇四六年)蔡君謨等が來遊した趣のものであるが、熟く見ると更に其の下に細字の石刻がある。

喝水巖 鑿源洞下に在る。五代の時、僧神晏此で誦經して居たが、水聲の喧聒なるを忌み叱つた所が、水は東澗に逆流し西澗は全く涸れたといふ。

國師巖 洞を過ぎ更に石磴を下ると西澗底の東壁に國師巖の三字が鑿られ、元と神晏常住の所であつた。圓王審知は神晏に贈るに興聖國師の尊號を以てしたので、國師巖の國師は即ち神晏を指すのである。此の豁谷中に船艦の甲板を模造した休憩所がある。風景は廣潤ではないが、また別個の景趣を有つて居る。

龍頭泉 鑿源洞の東南、湧泉亭内に在り、清泉龍口から噴出し、この水を受けて鐘を撞く奇構がある。亭内喫茶の設備がある。

慈雲普陀 崖の上にあつて佛像を安置して居る。喫茶の便もあり竹籬もある。

鼓山の僧 現在全山に僧侶三百四十六人が居り夫々役を有つて居る。役の主なものの方丈、座元、首座、西堂、後堂、堂主、都監、監院、開寺、維那、書記、藏主、知藏、淨主、知客、悅衆、衣鉢、侍者、清衆、知機、通法、二庫、都管、莊主、監造、化主、典座、飯頭、寮元、三庫、貼案、行堂、伺鐘、伺鼓、香燈、接巡、門頭、巡照、田頭、園頭、殿主、知單、巡山、看生、隨衆、知衆、打掃、伺水、行者、湯頭、雜務、夜巡。臺灣から來て居る留學僧も毎年二三人は居る。數年前居つた智閑和尚は座元をして居たといふ。

十六 金山塔

南臺島の南を流れる烏龍江の上流に在つて小島全體に寺塔が出来て居り、福州の一名所になつて居る。舊と石橋が架つて居たさうだが、水塞がり居民の害となるので、明萬曆四十三年（一六一五年）石橋を取つて了つた。滿潮の時は寺塔江心に浮び頗る壯觀を呈する。寺塔は何時頃出来たものか不明であるが、元の王翰が金山塔詩を作つて居るから相當古いものである。

十七 清真寺

城内安泰橋の近くに在つて、福州唯一の回教の寺院である。眞教寺ともいひ、明初に建て嘉靖年間重建したもの、福州の回教徒は其の數二十餘人ださうである。

第五章 福州港

一 福州港の範圍

福州港は鴉片戦争の結末である道光二十二年（一八四二年）の南京條約により廣東、厦門、寧波、上海と共に開放を宣せられたものであるが、英支の確執は容易に實際の開港に進まなかつた。最初の英國領事 *Tratascant Lay* 次いで *Rutherford Alcock* 等の盡力で咸豐十一年（一八六一）漸く開港することが出来、爾來七十年、年と共に發展し以て今日の大を致したのである。河港である所謂福州港なるものはどれだけの範圍を有するかといふに *Alcock* の福州貿易規程に關する提言に基き河口五虎門より萬壽橋まで、換言すれば萬壽橋（俗稱大橋）下流約三十五浬の閩江は全部福州港の範圍内である。

汽船の碇泊地は *Pagoda anchorage* といひ河口より溯ること二十五浬、馬尾市街の前面、羅星塔附近の閩江中河幅の最も廣い部分である。此の地點は基隆より一百二十五浬、上海より四百三十二浬、香港より四百六十四浬、厦門より二百六浬。Pagoda と稱せられるのは羅星塔がある爲で日支人は普通馬尾といつて居る。

二 閩江、馬江、臺江

閩江は福建の大河で河口より水源まで約三百五十哩もあつて、諸處其の名を異にして居る。河口から萬壽橋まででも二三の名がある。閩江といふのは馬尾以下の峽流で、馬尾附近は特に馬江といふ。それは江中に馬頭巖といふ巨石があつて、満潮の時は隠れるけれども、干潮の時は姿を現はし「形馬頭の如し」といはれるのに基く。此の巖は今尙其の根が残つて居る。馬尾といふ地名も馬江即ち馬頭巖の江から來て居る。萬壽橋附近の閩江を臺江といふのは大崩山附近をその昔流れてゐた關係からである。

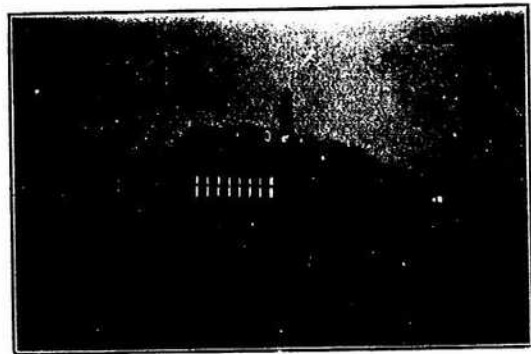
金剛巖 船閩江に入り長門、金牌の砲臺を過ぎ、奇勝を賞しつゝ、將に馬尾の外港に着かうとする頃、江の南岸に形脚に似た一大奇巖が花崗岩の岩壁から長く垂下するのを見受ける。是れ所謂金剛巖で俗に仙人脚ともいひ、洋人はGiant's Footといふ。古くから存したものだらうが、文献に現はれたのは清代からのやうである。俗傳では金剛巖の一本は萬壽橋の材料に使はれたと云つてゐる。

羅星塔 馬尾市街の東、閩江の北岸羅星山上に在り、俗に磨心塔とも呼ばれる。塔は宋の時柳七娘が造つたと傳へられる。七娘は廣東李氏の女、柳氏に嫁したが、容色が好いので里豪某謀つて之を奪ひ、其の夫を閩に讒死せしめた。七娘閩に來り其の冥福の爲め齋を請して造つたのが、此の塔であるといふ事である。或は七娘、夫と共に閩に來たともいふ。其の後歳久しく毀れたので明天啓中重建し、清代にも屢修理を加へたから原形其の儘であるかは不明である。所建の場所は全閩要害の地で、清代には羅星塔汛とし附近には數箇の砲臺を置いた。

五虎山 馬尾碇泊地點から烏龍江を隔て、遙か南方に山頂數箇の山塊より成れる連山が見える。これは五虎山を稱せられる山で、福州からの山形は其の側面を見るが故に馬尾に於ける山形とは異り長いテーパー型になつてゐる。それで方山とも卓山とも稱せられる。福州城内獅子樓前に在つた三箇の大獅子石像は、寧城の時此の五虎山を厭制する爲めに造つたものと傳へられたが、民國十七年末市區改正の爲め獅子樓、石獅共に取り拂はれ今は麓門内に残存して居る。



海關鼓山麓の間福州港



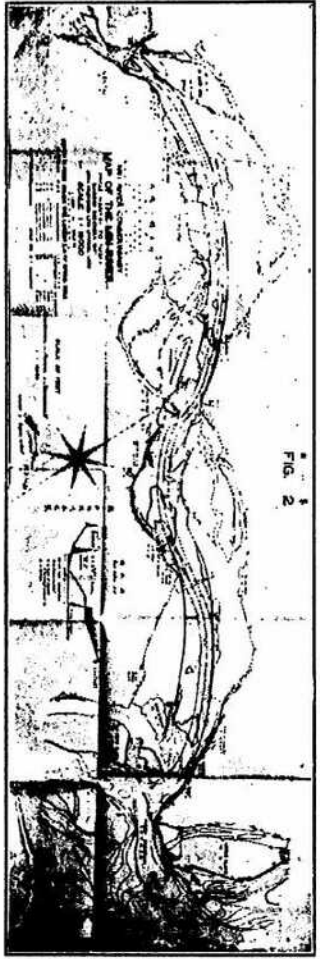
塔 星 羅



獅石の前門双時往



山虎五るた見りよ洲螺
(江 龍 島 は 河)



江 修 濬 圖

馬尾、州萬壽橋、十里の地點に在る市街で、海關出張所、郵政局、電報局、造船廠等がある。就中造船廠は前清時代支那唯一のもので、海軍學堂之に附屬し一時大に興るべきものがあつたが、其の後振はず今日では僅かに其の餘幅を保ち、船艇の小修理を爲すに過ぎない。併し現時支那有数の海軍人は大抵本學堂の出身である。市街の中央江に面した所に邦人經營の船舶待合所福壽洋行がある。撞球臺二つを備へ、船待ちに便利である。泊、第一食、第二位。

三 閩江の改修事業

抑々閩江を修濬して外洋航行の汽船が一路南臺まで直通し得らるべき設計は、既に民國五年に發議され、上海より總技師の勘察もあつて愈々民國八年に修濬閩江局 Min River Conservancy Board が設立された。其の目的とする所は福州馬尾兩地間の水路を最低干潮時少くとも水深十呎に保ち以て福州の港としての價值を増大しようとするのに在つた。設立當初は福建水利局長を局長とし、稅務司、在福州各國領事、日、英、米三商業會議所代表、福州總商會、船業組合代表等より成る一種の國際團體が事業遂行の衝に當り、輸出入稅の五分の附加稅及噸稅等を三箇年の期限總費九十萬元の財源とし、大體河幅を千呎に整理し、流勢を利用して水深を増し、吸込式淺灘機を以て其の足らざる所を補ひ、吃水十呎以下の汽船は潮汐の如何を問はず、十六呎までの船は滿潮に乗じて自由に福州に出入せしめ得んと計畫の下に、測量、圖算、流覽、工務の四科に分け、總工程師米人 Messers 竣工を急ぎつゝあつたが、民國十六年國民政府の治下となるや、事業は其の總支那側之を繼承(修濬閩江總局)して今日に及び成績を上げつゝある。洋人技師の時代八年間に

總收入百七十五萬元（内借款六十三萬元）總支出百六十萬元（内工程費九十一萬五千元、其の他の費用主として俸給三十五萬八千元、殘部は借款の利子）であつたと云ふ。

四 海上交通

(一) 福州臺灣間航路

本航路の汽船定期航行は大坂商船會社の専有に歸して居る。

(1) 大阪公司 (Osaka) 南寮舍入船

現在此の航路に充てゝ居る汽船は盛京丸 (Seikyō Maru)、福建丸 (Fukken Maru)、長沙丸 (Chosa Maru) の二千五百噸級三艘と千五百噸級の大球丸 (Daikyū Maru) 一艘である。抑福州臺灣間に汽船の定期航行を見たのは明治三十八年同社開航の淡水福州廈門淡水間の三角航路が始まりで、同四十四年に打狗上海間の開航があり、同四十五年之を打狗大連間に改め今日の高雄天津線が出来るに至つた。

高雄天津線の航路 高雄—基隆—福州—上海—青島—天津—大連—青島—上海—福州—基隆—高雄の順で、高雄を出帆し同港に歸着する迄一箇月を要する。運賃は福州基隆間一等十八弗、三等六弗。福州上海間二等三十弗、三等十二弗。福州廈門間一等十八弗、二等十二弗、三等六弗。

一時基隆福州間のみ航路があつたが、昭和三年四月基隆、福州、廈門、福州、基隆又は淡水間の基隆廈門線の俗稱

鍵の手航路に改め現在大球丸が之に當つて居る。

(2) 福州電氣公司 (F. E. Co.) 馬路新港

同公司の汽船建新は隨時基隆に往復するが、之は同會社の用向を主とし定期ではなく一般とは關係が少ない。

(二) 福州上海間航路

前記大阪公司の高雄天津線以前支那の汽船會社があつて互に競争をして居るが、例の支那海名物の海賊の難に遇ふ事があるから警戒を要する。現に昭和三年新濟號は海賊に乘込まれ乗客一同痛い目に遇つて居り、支那大官は常に日本船に乗つて居る。

(1) 三北公司 (San Peh S. N. Co.) 泛船浦

所屬の汽船に萬象 (Wan Hsiang) がある。首興 (Yung Shin) は Ningpo Shaohsing S. N. Co. 所屬であるが三北公司が代理をして居る。

(2) 招商局 (China Merchants Steam Navigation Co.) 南寮大嶺頂

所屬の汽船に新濟 (Hsin Chi)、直南 (Too Nan)、新銘 (Hsin ming)、新發 (Hsin Fung)、遇順 (Yu Shung) 海晏 (Hae An) 等がある。

(3) 常安公司 (Chang An Steam Navigation Co.) 泛船浦

所屬の汽船に華安(Hua An)がある。
 (4) 大中公司(Ta Chung Steamship Co.) 泛船浦
 所屬の汽船に唐山(Tang Shan)がある。
 前記三北以下の公司は福州上海間だけの廻漕に當り、各汽船は福州上海滞在各二日間位、航行二日間であるが、定期に近い不定期の往復として居り、汽船も前記の中の何れか當つて居り常に全部就航する譯ではない。

(三) 福州厦門間航路

初め大阪商船會社の福州香港線があつたが、大正四年同航路を廢し爾來英國ドグラス會社(Douglas Steamship Co.) 獨占となり今日に及んで居る。昭和三年基隆福州厦門間の鍵の航路が出来た事は上述した。
 義和洋行(Jardine, Matheson & Co.) ドグラス會社の代理店、泛船浦
 所屬の汽船に二千五百噸級の海澄(Hai-ching)、海寧(Hai-ning)、海陽(Hai-yang)の三艘があり毎週二回福州及香港を出航し中途厦門汕頭に寄航する。
 前記の如く大阪公司の大球丸は毎月三日に厦門へ出航し、六の日に淡水又は基隆に出航する。
 日本から福州に輸入される貨物の中には香港經由で来るものがあり、郵便物には厦門を經由して来るものがある。福州を中心としての支那沿岸の海上交通を考へると、福州香港間はドグラス會社の専有航路であり、福州臺灣間及福州大

連間は大阪商船會社の専有航路であり、支那籍汽船が福州上海間を往復するに過ぎない。即ち福州を中心として南は英國船、北は日本船に依つて専有されて居る形である。

五 馬尾福州間の聯絡

(一) 電信電話

馬尾福州間の電話は海關と海軍とにあるだけで此の他には一切ない。電報局はあるが福州の名宛に依つては配達に際がかゝる。故に兩者間の通信は郵便以外海關か海軍の電話を借りるか、小汽艇其の他の船に頼るかの外に途はない。それで馬尾に汽船が入港したかどうかは福州では直ぐ的確に分らない。大阪公司では汽船が河口に入る時川石局(Shih-ping) 海底電線と陸上電線との連結局) から入港の旨を打つて貰つてゐるのではあるが、動もすると電報なしに汽船が馬尾に入港してゐる事がある。

(二) 渡 船

福州馬尾間の往來は小蒸汽船、モーター船等に依る。
 邦船神島丸及あさひ、神島丸は大阪商船會社の小蒸汽船で基隆、厦門、上海等より馬尾に入港した旅客は、是非共更

に此の神島丸に移乗し、尙九漕一時間半程を廻航せねばならぬ。神島丸は大阪商船會社福州出張所(大阪公司)所屬の三十噸許のランチで、絶えず福州馬尾間を往復して旅客の送迎を爲し、在留邦人とは特に馴染が深い。旅客の上陸地點は泛船浦海關である。神島丸の他にモーターボート「あさひ」があるが之は日本總領事館專屬のものである。

(三) 其の他船隻及小蒸汽

右神島丸や「あさひ」と關係なく、福馬の間を往來するには船隻か小蒸汽に頼る外はない。船隻は中途轉覆の虞なしとは云ひ難いが、隨時出發し得るから便利である。片道一弗五十仙、往復二弗、一日備切二弗位であるが、搭乗の始談判して置かぬと法外に吹掛けられたりして頗るうるさい。小蒸汽即ち邦人の稱する一錢蒸汽は土俗車輪仔チヤルンギヤンと云ひ、馬尾及馬尾以下の各地を往來し往復共に馬尾に寄る。

六 潮 汐

福州は河口から三十五哩も奥に在る河港であるが、潮汐の影響を受けることが夥しい。場處や雨乾の季に依り満干の差は二様ではないが、馬尾で約一丈位の差があり、三千噸内外の汽船、軍艦は先づ外洋に假泊し、満潮に乗じて馬尾に入港するのである。従つて福馬聯絡の汽船會社所屬の小汽艇も潮汐の具合で來着の時間は區々である。潮汐の早さは河口の烏礁(Bow Road)と馬尾碇泊地との間が二時間、馬尾と大橋との間が一時間であるから、河口が満潮になり三時間

後に大橋附近が満潮となるわけで干潮の時も同様である。年々 Foochow Printing Press から Tide Table が出版され、右三箇所の満干時間を明細に表はして居るのであるが、東北風が強い時は満潮時間が早く、西南風が強い時は干潮の時間が早いから、いつも表示の時間通りになるわけのものでもない。

潮汐の時間を知る便法 潮汐は連続的に毎二晝夜二回の満潮と干潮とがあり、午前午後の満干潮は大約時間を等しうする。そして潮と望とは大橋下の満潮は大抵正午と正子であり、潮から一日毎に約一時間宛遅れ、望になると再び正午と正子に復する。故に○・八を朝より望に至る陰曆の算へ日又は望より潮に至る同算へ日より十五を引きたるものに垂する時は、大橋下の満潮時を略算出する事が出来る。例へば一九二九年十二月二十五日は陰曆の十一月二十五日であるから、二十五日より十五を引き残り一〇・八を掛けるると八十が出る。即ち當日大橋下の満潮は午前及午後の八時前後であることが分る。すると馬尾の満潮は午前及午後の七時前後、河口烏礁附近では午前及午後の五時前後であることも分る譯である。干潮時は満潮時より大抵七時間遅れる。故に當日大橋下の干潮時は午前及午後の三時前後である筈である。以上は大體の見當で固より精確なものではないが一才便利である。

七 貿易港としての福州

福州の税關には閩海關(Foochow Maritime Customs)と閩常關(Foochow Native Customs)の二つがある。海關は咸豐九年(一八五八年)開設せられたるもので、汽船及外國籍帆船に依つて輸出入される貨物に對し徵稅を掌る所、南臺の泛船浦に在る。常關は明代の鈔關に起因する支那在來の税關で、支那籍帆船に依つて輸出入される貨物及び船籍船型の如何を問はず、福州港の上游に往復する荷物に對し徵稅を掌る所、中洲に在つて分關は倉後、洲頭、新港、閩安、瑯頭、

東岱、海山、烏龍江、旺岐に在る。

貿易の大勢は一箇年の外國貿易額即輸出輸入合計銀五千萬兩に近く、輸入された物資の再輸出額を入れると五千萬兩を幾らか越す状態で、常に輸出額が輸入額を超過して居る。

最近五箇年間海關所管貿易總額 (單位關平兩)

年 別	總貿易額 (再輸出を含む)	總貿易額
一九二四年	五九,六四九.五	五九,六四九.五
一九二五年	五七,四三三.一	五九,五〇〇.〇
一九二六年	五七,五九〇.五	五九,三〇〇.〇
一九二七年	四一,〇〇〇.〇	五九,〇〇〇.〇
一九二八年	五七,六九五.〇	五九,〇〇〇.〇

海關所管過去五箇年輸出入額

年 次	輸 入 額		輸 出 額	貿 易 平 兩
	洋 貨	土 貨		
一九二四年(民國十三年)	九〇,六四三.〇	六七,一五三.〇	一九八,六八六.〇	五九,〇七〇.〇

一九二五年(民國十四年)	七五,一〇三.六	六〇,七五九.九	一九〇,四四六.六	五九,〇七〇.〇
一九二六年(民國十五年)	二〇,六五三.三	六〇,五五五.五	一七五,四四九.九	五九,〇七〇.〇
一九二七年(民國十六年)	二〇,三七八.九	五九,六六〇.〇	一八三,三七八.九	五九,〇七〇.〇
一九二八年(民國十七年)	九四,三七九.〇	一一〇,三七〇.〇	二〇八,八〇九.〇	五九,〇七〇.〇

之に反し常關所管の支那籍帆船に依る國內輸出入貿易は常に輸入額が輸出額を超過して居る。是は主として上海方面の國內工業が漸次隆盛になつて行く證左であると思はれる。

常關所管過去五箇年輸出入額

年 次	輸 入 額		輸 出 額	貿 易 平 兩
	外國(主として臺灣)輸入	支那港より輸入		
一九二四年	三三,〇〇〇.〇	八,六五三.〇	三三,〇〇〇.〇	七五,〇七〇.〇
一九二五年	一四,六三三.〇	八,三三三.〇	三三,〇〇〇.〇	七三,三三三.〇
一九二六年	二四,八〇〇.〇	七,六六六.六	三二,四六六.六	七三,三三三.〇
一九二七年	二九,六三三.〇	七,三三三.〇	三六,九六六.六	七三,三三三.〇
一九二八年	二七,四三三.〇	八,三三三.〇	三五,七六六.六	七三,三三三.〇

輸出品では茶、木材、紙、糖、傘等、移出品では杉丸太、紙、筭乾等が大宗であり、輸入品では綿絲、綿布、海産

物、砂糖、麥粉、石炭、石油等、移入品では麥粉、綿絲、綿布が大宗である。貿易先は次表の示す通りで輸入では香港、輸出では日本が第一位であり、前者は必しも逐年の増加を示さぬのに後者は漸次地歩を鞏固にして行く様子が観取される。露國、漳州、南米等輸入額の見るべきものが無いにも拘はらず、相當の輸出額を有つて居るのは全く茶の爲めである。

過去三箇年間別貿易額

貿易先	一九二五(民國十四)年		一九二六(民國十五年)		一九二七(民國十六)年	
	輸入額	輸出額	輸入額	輸出額	輸入額	輸出額
日本(朝鮮、臺灣を含む)	1,274,833	4,612,766	1,554,466	4,755,000	1,844,336	6,626,822
香港	1,111,000	1,476,511	5,623,266	3,448,896	5,500,796	2,528,896
英本國	3,344,866	1,222,299	3,855,999	5,867,577	2,273,333	5,015,522
露(太平洋岸)	—	4,773,333	—	4,644,000	—	4,644,000
和蘭	2,770,000	—	—	4,644,000	—	4,644,000
米(布哇を含む)	1,012,555	5,955,555	9,555,555	7,499,999	3,555,555	7,577,777
獨逸	4,773,333	1,222,299	1,111,111	2,666,666	1,555,555	3,555,555
英領印度	77,777	5,988,888	77,777	2,666,666	1,999,999	7,777,777
佛領印度	99,999	1,777,777	2,666,666	1,999,999	1,999,999	7,777,777
佛領印度支那	1,111,111	1,666,666	2,666,666	1,999,999	1,999,999	7,777,777

貿易先	一九二五(民國十四)年	一九二六(民國十五年)	一九二七(民國十六)年
漳州	—	—	—
南米	—	—	—
比律賓	—	—	—
加奈陀	2,666,666	5,555,555	1,999,999
新加坡	2,666,666	5,555,555	1,999,999

福州港と他港との交換の議 一八四六年福州の土民蜂起して廣東人を襲撃したが、其の際外人住宅も侵入掠奪を受け引繼ぎ個人的迫害もあつたので、洋人間には漸次不平の聲が高まつて来た。それで福州と漳州と交換すべしとの提議もあつたが、一八五〇年英國委員 Hodge は東渡及福州を以て杭州、蘇州、鎮江と交換せんと申込んだ事もあつた。福州開港間際にかく福州の評判の良くなかつたのは主として長髮賊の亂の爲め茶の輸出が出来なかつたからである。一八五三年に貿易規模が擴張され且つ往來陸路、上海、廣東に茶を輸送したのを米國商館が海路に依つて直接紐育に送り成功したので爾來茶の輸出が再び盛になつた。一八六六年には長髮賊も平定され福州港は漸次隆盛になつて今日に及んで居る。長髮賊は福州には來なかつたが延平まで暴威を振つた。

第六章 閩江

一 白龍江(臺江)

萬壽橋附近の閩江を特に白龍江と稱するのは、昔東越王餘善が今の大廟山に於て閩江から白龍を釣上げたといふ傳説がある爲である。大廟山は元、釣龍臺、越王臺、南臺とも稱され、今の地方名南臺、白龍江の別稱臺江等の名は皆大廟山に基いて居る。して見ると單に傳説の上からだけでも、昔の臺江は今より北に偏し大廟山下を流れて居たものと考ふる事が出来又大廟山以南の地幫洲、蒼霞洲、鴨嘴洲等は江中の洲が進化したものと見る事が出来る。現に江中の洲島として中洲、三縣があり、泛船浦の近くに三郷流がある。中洲は既に股賑な街となり、三縣には民家の部落田圃が出来、三郷洲には製材所や田がある。

二 萬壽橋

俗に大橋と稱し中洲と北岸大橋頭との間に跨つてゐる石橋である。宋の元祐年間(一〇八六年—一〇九三年)郡守王祖道(閩人)舟橋を造り田十一頃七十二畝を以て修橋の費とし崇寧二年(一一〇三年)橋南に天寧寺を建て主僧に番をさせた。元の大徳七年(一二〇三年)頭陀王法助、旨を奉じて石橋を造る。大姓は其の財を割き小姓は其の力を奉し、墩二十

八、醒水二十九道、上翼には石欄、長百七十丈餘、中途法助死し至治二年(一三三二年)其の徒之を完成した。年を閉する實に二十年、今を去る六百餘年の昔である。爾來小修理は度々あつたが、大體に於て本の通りで幾度かの洪水に出遇ひ壊れさうで中々壊れず殿として今日に及んで居る。

三 江南橋

小橋、中洲橋、倉前橋なども稱し、中洲と倉前との間に架つてゐる石橋である。倉前から南臺に至るには江南橋、中洲、萬壽橋を通る道一つしか無く、従つて二橋を往來するも日夜肩摩踵踏、非常な熱鬧を來してゐる。萬壽橋に就いては諸志之を詳に載せてゐるが、江南橋に就いては未詳の部分が多い。宋の頃には浮橋であり、其の後萬壽橋とは別に此の橋を築いたものがあつたのであらう。閩都記には單に「萬壽橋と接し其の長さ萬壽の半を減す」とあるのみで委しい事が記してない。其の後清の乾隆十六年(一七五一年)七月の大雨で橋が壊れ、已むなく渡舟に依つたが不便でもあり且つ病む者が多いので、誰か出でて重修して呉れる者はないかと仰望して居た折柄、邑人何兄弟現はれ舊橋の面目を一新した。何氏兄は陸述弟は陸選、費を官に仰かず、力を民に煩はさず、獨力銀一萬一千五百餘(單位不明)を糜し、從來橋下に堅實なる石梁なきを改め、石五木四の橋梁を全部石に易め、乾隆十六年十月起工、翌十七年十一月落成した。橋の長さ四百四十尺、趾の廣さは三十八尺、上は其の半、架橋の手法は萬壽橋と同じやうであるが、短いだけにこの方が堅牢である。萬壽橋と江南橋とは架設年代四百三十年ばかり違ふのであるが、現在江南橋欄に一對、萬壽橋欄に三對

半残つて居る石獅を比べて見ると、容姿及び古さの相違がよく分らうと思ふ。

五八

四 上 渡 下 渡

萬壽橋を中心として南藻島の上手に上渡街があり、下手に下渡街がある。下渡街は今では大分内陸になつて居るが、まだ萬壽江南の二橋が出来なかつた時には、此の二個所が渡舟地點であつたといふ。陳姓の一族夙く上渡に住し江南の陳と稱して居たが、一説には何兄弟重修前の江南橋は此の江南陳の一族が元末に捐を募り造つたものだといふ。或はさうではあるまいかと思はれる節もある。

五 閩 江 の 水 系

古來閩江の水系は四府一州三十縣に跨り二十七城市を連ぬと稱せられるだけあつて、其の區域頗る廣大、福建全省の大半を包括する。閩江の上流は三大支に分れ何れも可航の溪流である。第一支は江西省界に近い崇安を過ぎる崇溪と浙江省界に近い浦城を通る浦溪と松溪、政和の附近を流れる東溪の四つを合せた建溪で、三支中最も長大且つ水源近くまで航し得る溪河である。第二支は江西省界に近い尤溪、下つて邵武を通る富屯溪で順昌に於て汀州の北界を發する金溪を合せて洋口を過ぎ延平に至るもの、金溪は舟行に適しない。第三支は延平の上、沙溪口に於て富岐溪に合する沙溪で、其の源を汀洲に發し永安沙縣を通り永安まで舟行し得られる。以上の三大支は延平(南平)附近に於て併合し愈々閩江の



萬 壽 橋



中洲と船



江國をた見り上腹中案北望



水 洪 の 江 関

本流となつて約東南に流れ以て海に朝する。延平附近の河幅は一千二百呎を超え、福州を去る約百哩、福州より高きと四百呎乃至六百呎である。延平からは樟湖板、谷口を經水口に至つて高溪を併せ、水量頗る増加し險灘も少くなり、冬期の減水季に於ても福州より小蒸汽を通ずることが出来る。閩清、竹崎を過ぎ桐口、洪塘の邊に至つて烏龍江を分ち、以て南臺島を作り兩者馬尾に於て再會し、閩安鎮を過ぎ五虎島で河口を兩分して大洋に注ぐ。福州附近を臺江、馬尾附近を馬江、馬尾以下を閩江と特稱することは、既に述べた通りである。閩江の全長は河口より建溪の上源まで約三百五十哩ある。閩江の河口は北支の方が南支より深いので、出入の汽船は専ら北支に由つて居るが、唯北支の中央に凹洲があつて最低干潮時七呎に過ぎぬ爲め、滿潮になるのを待ち合せ航行を始める不便がある。

灘 閩江の舟行難所を灘と云ひ、王介眉の閩江考には八百四十二灘あるといふが普通全部で三十六灘あると稱せられ、就中二十二灘が有名である。(1)洪山橋水口間、新溪口、(2)水口延平間、高潭下、(3)門仔灘口、(4)江灘、(5)廣引港、(6)秤鈎灘(特に有名)、(7)蛇腹(特に有名)、(8)大腹、(9)摺紙、(10)月溪、(11)蛇頭、(12)延平乃至建寧(建寧府)、(13)政和、(14)浦城崇安間、(15)深裡、(16)牛頭、(17)大米、(18)小米、(19)七里、(20)老鼠灘(特に有名)、(21)鴨蛋灘(特に有名)、(22)延平乃至沙縣、永安、將樂、邵武、光澤間、(23)屏山(特に有名)、(24)火渡灘(特に有名)。

棧 民船の泊場所を洪山橋より延平までに水口、灘口、尤溪口、(1)路口、(2)榮埠、(3)月溪、(4)下道等がある。
墟 上流地方の定期市場の事で、東溪方面は五日間に一回、西溪方面は三六九の日に之を開く。長髮賊が上游を襲つた時通過地方の人民が多く殺害され、各郷村の人々が減少したので定期の墟を設け賑鬧するやうになつたのだといふ。

萬壽橋の將來 福州は日下盛に市區改正中で、城内南門獅子樓附近及南臺中亭街大嶺頂觀音井附近は既に出来上つた所もあり、又計畫中の所もある。道路の幅は從來の約三倍になつたから、萬壽橋及江南橋が木の儘(橋を木體とした橋)であり得る筈はなし、早晚何とかなる運命を有つて居る。萬壽橋から中亭街を通り一路南門に直通する街路は、昔時からの福州城の正路で今後如何に新道路が

出来、従来の道路が擴張改設される事はあつても、この正路は廢するべきものではあるまい。従つて第二の萬壽橋は此の街路に恰好よく接続すべき事が大切な點であらう。現在の萬壽橋は一種の流沙止となつて、福州港を保護して居るのだから新橋の位置に依つては福州港特に戎船碇泊地に影響を與へる事になる。又萬壽橋を取り拂つて其の址に大きい新橋を架設すれば他に影響は無いとして、六百年からも敷存して福州の代表となつて居る由緒ある橋を取拂ふのは忍び得ぬ事である。何といつても福州は古い落着いた南支の都である事が唯一の取柄なのであるから、市區改正に當る者も何とか考へて居る事だらうと思ふ。

六 閩江の船

福州附近の閩江に浮んでゐる大小各種の船は汽船、汽艇、軍艦、柴機(材木の筏)、竹棚(竹の筏)、鶯梨棚(鶯梨の筏)、西洋型帆船、モーターボート等を除く時は、一言に之を民船と云つて略ぼ同型に見受けるのであるが、仔細に檢すると其の様式頗る多岐である。帆を用ふるものあり、用ひざるものあり、帆にも總して風篷と稱するが布製のものあり、竹製のものあり、櫂も槳といつて二段櫂の長いのを前に押し舟を進めるものがあり、扒といつて團扇の柄を長くしたやうなのを用ふるものがあり、中には日本の櫂と違はぬのを用ふるものもある。舵も普通型の櫂を用ふるものと尾舵と稱して彎曲した恐しく長い舵を用ふるものもある。又住居として家族が常住してゐる舟もあれば、さうでないものもあり、種々雑多である。閩江の船の種類を擧げると大體次のやうなものである。

名稱	地方	大		形	航路	乗込人員	運搬貨物	常住	備	考
		長	幅							

山東船	福州	一五〇	二六五	屋形	外海	三〇餘	材木雜貨	常住		
烏龍船	福州	一〇〇	二〇〇	屋形	沿海	二〇餘	材木雜貨	常住		
猫覆船	福州	八〇	二〇〇	屋形	沿海	二〇餘	魚、雜貨	常住		以上三つ俗稱山東船、洋名 Catamaran
甲板船	福州	七五	二〇〇	屋形	上江	二〇餘	人、荷物	常住		夏時節遊にも用ひられる
洋轉	福州	七五	二〇〇	屋形	福州	二〇餘	人、荷物	常住		洋名 Long Boat
茶轉	福州	八〇	二〇〇	屋形	福州	二〇餘	茶	常住		
鹽轉	福州	八〇	二〇〇	屋形	福州	二〇餘	鹽	常住		
雙槳	福州	二五〇	五五	屋形	福州	二〇餘	人、荷物	常住		俗稱 雙槳船、仔家族常住
家法船	福州	二五〇	五五	屋形	福州	二〇餘	人、荷物	常住		船板の上等夏時節遊用
渡船	福州	二五〇	五五	屋形	福州	二〇餘	人、荷物	常住		家族代用、兩者共に群居してゐる時は尾大等を用ひない
花船	福州	二五〇	五五	屋形	福州	二〇餘	人、荷物	常住		



海關前關の各種船舶

勝赤建	船名	先	料金(弗)人
太壁清			
鳥關	船名	先	料金(弗)人
龍江			
帶清	船名	先	料金(弗)人
新華太			
發通平	船名	先	料金(弗)人
延			
平	船名	先	料金(弗)人
州化			

三保發着の小蒸汽

飛龍	萬興	江甲	萬安	勝安	永寶	江安	遠寶	萬茂	飛鳳	船名
長長	長長	長長	長長	瑠瑠	瑠瑠	瑠瑠	馬馬	馬馬	馬馬	行
繁繁	繁繁	繁繁	繁繁	頭頭	頭頭	頭頭	尾尾	尾尾	尾尾	先
珠坑	後潭	關島	劉營	湖田	部頭	樂嶺	猪頭	崎前	崎前	料金(弗)人
〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	船名
安福	福鎮	海江	建福	江福	江福	江福	江福	江福	江福	
海星	興波	錦門	陶順	丁興	龍	龍	龍	龍	龍	行
泉興	沙	三	尚	長	長	長	長	長	長	先
			都							料金(弗)人
州化	堤	澳	幹	門	尾	門	門	門	門	
〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	

建	平	三	建	寶	建
保					
泰	安	九	泰	龍	源
水	永	水	水	水	水
				口	口
				下	下
				源	源
上	福	口	口	口	口
二 三〇	一 三〇	〇 八〇	〇 八〇	〇 八〇	〇 八〇
新	沙	長	建	飛	福
廣	安	安	興	鯨	新
沙	建	洋	延		
縣 區 口 平					
一 〇〇〇	一 〇〇〇	一 〇〇〇	一 〇〇〇	一 〇〇〇	一 〇〇〇

八 増水季減水季

閩江は福建の氣候特に上游の雨乾季と關聯して増水減水の兩季がある。春末より初夏にかけ上流地方は盛に降雨があるので、下流方面は遅かに水量を増し福州附近は屢々洪水に襲はれる。此の頃の増水は一年中の最高で歲に依り一定して居らぬが、減水季より三十尺以上になり、甚しき時は埤尾附近の馬路、倉前山の跑馬場を浸し萬壽橋の石桁まで江水面がすれへになることがある。かゝる時は所謂濁水滔々で舳板其の他の舟行は止り、各種の小舟は皆附近の支流に避難する。減水季は秋の乾季に次ぐもので冬を最とする。この頃は河水も清澄となり河底も見えんばかりになる。此の時期に福州を訪れた旅客は何れも支那にこんな澄んだ河があるのかと吃驚する。増水減水共に潮汐の影響を受け其の最も甚しいのは洪水季の満潮である。

第七章 福州人

六六

一 概 説

福州土着の支那人を一言に福州人と云ふけれども、仔細に觀察して見ると仲々複雑で單純なものではない。夙くから北方より來た衣冠族の裔もあり、三本劍と稱する田舎土着の者もあり、前清時代に羽振を利かした滿洲人もあり、賤視されて居た種族もあり、家柄を自慢して特異の風を存する山間の畚族もあり、此の頃になつて移住し來た他省他縣の者もあり、固より一樣ではない。之等が現在及び將來、漸次渾然融合せんとしつゝある。以下項を分け之が検討を試みよう。

二 閩 族

往古閩と稱せらるゝ種族が住んで居た福建省の北半が、始めて中國の漢民族と接觸したのは漢代であつて、今から二千百年の昔である。爾來福州又は建州を中心として南北に幾多の關係を持続して今日に及んで居るのであるから、單純なる種族に依つて占據されたものでない事は明瞭である。文献に據ると明初には閩縣、侯官縣の二つを併せ人口僅かに八萬人しか無かつたといふ。福州の人を熟く見ると體格に於て長大なる者と倭小なる者があり、肥滿の者と瘦細の者が

ある。容貌に於て目の切目の長い者と短い者があり、臉に一度と二度とあり、鼻の高い者と低くて鼻翼の張つた者があり、「上髭」「鬚鬚」はあるが「頬鬚」のある者は少なく、其の「上髭」も人中の切れて居る者と續いて居る者がある。皮膚も白いのと阿列布色のとあつて數多の型の錯綜して居る事を思はせられる。

福建の住民 何故に福建の住民は此の如く瘦細なる手足や阿列布色の皮膚其の他非モンゴリアンの形貌を有つて居るか。此の答は固より推考ではあるが、西はマダガスカル、北は福建まで擴がつてみる所謂マレーポリネシア人が漢族と交配して産つた者であるとするに在る。舊書に見える福建人の航海辭や海賊的名聲は此の説に或る色彩を與へる。Richard (Comprehensive Geography of the Chinese Empire 即ち支那名中國坤輿詳誌の著者) は夷家 Hsia は暹羅米であるといつて居る (一九二五年版 "Fujian" 中 Rodenick Post の執筆)。

現在福州には今尙水上生活をして居て餘儀なく雜婚することの出來ない蠻族や、山中に自負して孤獨な生活を餘儀なくして居る畚族や、一種特有なる三本劍の遺習等が残存して居て歴然と種族の交錯を證據立てゝ居る。

閩の字彙 閩字が書に現はれたのは周禮に八蠻七閩とあるが最初である。閩の音は亡巾の反、音は文、武巾の切、鬚鬚の切音根に从ふ、無分の切、音は長、瞋官の切、音は瞞、服虔の音は瞞に近し、迷實の切、音は環など、辭書其の他にあつて時代に依り幾分の變化はある。現在官話音では *mi*、福州贛語音では *mi*、閩門音では *mi* である。説文に「閩、東南越、它種、虫に从ふ、門の聲」とある。一體中國の漢族が南方の種族を稱する時には虫字を附ける事が多いから、虫には大した意味がなく寧ろ音の本である門に意味があるのであらう。

北方の種族を呼ぶ名に犬偏の附いたものが多いのと同じやうに、南方の民族をいふ名に蟲の字を有するものが少くない。支那の東南部の海岸に據つた種族を古は閩と稱へた。説文によると閩東南越、它種从蟲」とあるから閩といふのは元來蛇の一種である。又周

六七

の時代に只今の重慶府の附近にゐた部落を巴と稱へた。説文によると「巴、蛇也、或象食蛇」とあるから巴も亦蛇の一種である。また其の時代に只今の成都にゐた種族を蜀といひ、説文によると「蜀、葵中實也从蟲」とあつて之も亦蟲の一種である。而して周の時代から之等の種族を凡て蠻と呼ぶことがある。それでまた説文を引いて見ると「蠻、南蠻、它種从蟲」とあるからこれも亦蛇の類である。先づ斯やうに漢人は上代から南方の人民を表はすに蛇や蟲に縁故のある文字を選んだ風習のあつたことからの之を察すると、蠻といふ名稱は決して四方の夷類を呼ぶ總名でなく、元は専ら南方の民族を指したものである。然らば何が故に漢人は南方の民を蠻類に擬したのであらうか。詩經の小雅の中に「蠻貊蠻荆、大邦爲隣」といふ言があつて、よく此の疑問に答辭を與へると思ふ。想ふに南方の民は風俗が野鄙でその容貌が醜陋として無知なること、蟲の如しといふ處から其の名に蟲を附けて之に輕侮の意を表したものであらう。それは宛も北方の民は性質が悍猛で殺伐の風があるので其の名に犬偏をつけて之に憎惡の念を寓したのと同じ心理作用から發したものである。然し前にも述べた如く北狄の名に、犬偏のつく字の多いのは、其の住地に良犬を産するといふ事實にも基くかと考へられるが、其と同じやうに南蠻の名に蟲字のつくものが多いのはその土地が暑熱で蟲蛇の類が多いといふ事情にも多少因るのではあるまいか（東洋學報十四の二、白鳥庫吉博士）。

又説文に「閩は犬蛇也、今其の人多蛇種なり」とは之殆んど妄説なり。王充の論衡に「蠻蠻閩蠻皆食之」とあり、閩は即ち蚊、字音異書に近し。説文の説の如くんば則ち閩人又將に改種とならざるや、豈に笑ふ可からざらんや。竊かに謂ふ、天地間の物大都四生あり、楞嚴經云ふ所の胎生、卵生、濕生、化生なり。管子之を五蟲と謂ふ、保蟲は人なり、毛蟲は獸なり、羽蟲は禽なり、鱗蟲は龍魚の類なり、介蟲は龜蛤の類なり、惟だ蟲四生を兼有す、故に統て之を蟲と謂ふ。閩は泰以前に在りては未だ中國と通ぜず、其の人の自ら始まる所を知らず。故に蟲名を以て之に名づく。蓋し亦猶ほ南方を蠻と曰ふの義なるが如きのみ（閩雅記）。

閩の字は門に从ひ蟲に从ふて居るが、蟲は蠻族を單に意味を表はしたものであらう。これは漢人が異民族を稱する時に犬偏を附けたり龜偏を附けたり蠶沈とか蠶繭とかいふ筆法と同じことである。鳥居博士の苗族調查報告に據れば苗族では人を *yo*、又は *me* と稱し彼等自らを稱するにも同じ語を以てすることである。原人の社會には自らを尊びて人とし、他を鄙視する風習の存するを見ると、蠻又は閩も同じく人の意味を有する語でそれが遂に種族の名稱になつたのかも知れぬ（東洋學報八の一、市村博士）。蠻の字義、蠻字は説文に「蠻、南蠻也種、蟲に从ふ蟲の聲段玉貌の説文解字の註に「蠻閩皆人也」とあつて種族の名稱であり、閩を地名としたのは後の話である。蠻の音は聲書に「莫邊の切、韻邊の切、音は獲、模韻の切、現在の官語音は *me*、福州語音は *me*、厦門音は閩と同様 *me*」であるから、自分を *yo*、又は *me* などと稱した種族が福建から江西に掛けて住んで居つたのであらう。兎に角閩族は福建の先住民族で先學は之に苗族との關係を暗示し、現在の福建人に *Malayan* の血統を存する事を推考して居る。此の閩族が現在尙福建に残存して居るかといふに固より明確な語ではないが、恐らく其の後漢族と融合して渾一されて今日に至つて居るものではあるまいか。文獻の上では紀元前一世紀頃「其の民を徙して江淮の間に處らしめた」と知られて居る外、文獻に於ては以後大なる屠殺もなく、又閩族或は其の他の種族を追ひ出したともない所を見ると、先づ在來の住地に雜婚して落着いものと思はれる。特に無諸の率ゐて來た部下も中國の漢族ではないのだから閩族との融合も意外に早かつたのであらう。

苗裔三本編、右の説を極言すると三本編が閩、無諸族混合の苗裔であるといふ事になる。何しろ二千百年も経つた今日であり、加ふるに往時は人口が稀薄で勢力が不足であつたから、他地方からも移入したのも多い。従つて固より單純なものではない。更に閩族には原メラネシアの血脈があるやうに思はれる。

油菜開花滿々金、閩語に「油菜開花滿々金、狀元歸思好看燈、看見我師生的好、油開起帖葉讀親」といふのがある。「油菜が金色に滿々と開花し、土神狀元郎は馬に跨つて元宵の燈を見たが、其の時我が師の佳麗なのを見て立どころに起帖即ち申込んで婚を讀した」の意である。俗傳では無諸の時狀の化身自ら狀元郎と稱する者が無諸の女の美なるを見、自ら結婚を申込んだが、無諸は怒つて之を

叱つた所、突として「風雲變色、日月全晦、飛砂走石、天地震動」し、無語は吃驚して己むなく之を許した。女は妖術を以て褒められるのを残念に思ひ、此の童謡を想起して弟に油菜の種子一包を途中待て行く事を話し狀元郎と共に出掛けた。翌年になると油菜が開花し弟之を傳はつて迎り着いて見ると、其處は高蓋山の北麓であつた。姉弟協力して妖の醉に乘じ之を殺した所が虎であつたといふ。本来の意味は「上元の頃には油菜が咲き満々金と稱する火花があつたり、狀元騎馬の燈があつたり、兎に角元宵は賑やかである。其の元宵の一夜情人相過ひ一見直ちに婚を成す」といふのではあるまいかとの事であるが（閩報所載閩童謡集解）無語や妖の話の別にして父老間の俗傳で種族の交錯せる事は疑はれ得ると思ふ。

三 登 族

閩江に水上生活して居る一族で土俗「曲蹄」又は蔑視して「曲蹄仔」と云ふ。無論之は陸上の人が云ふ事であつて、彼等自身は決して曲蹄とは云はない。昔から登（又は登）として知られて居た漢族に近い蠻の一種で、現在廣東の珠江、福建の閩江等に住んで居るものである。M. Schall 中國坤輿詳誌には「Folke 洞家となるが登が本當であらう。

岸使「ヤンサイ」曲蹄の言語は完全なる福州語で何等特異の言語を有たない。又特異の文化もないから自稱の特別語はない。それは丁度陸上の人と同様で大分時代の經つて居る事を證明する。岸仔といふのは陸上の者が彼等を曲蹄と稱するに對し彼等が陸上の者を稱する語で今は餘り用ひて居らぬ。

彼等の水上生活に就いては彼等自身は先祖代々の生活であるので氣にも留めない様子であるが、陸上の者の間には種々傳説らしく傳へて居るものがある。

曲蹄といふのは生涯小舟内に蹠蹠し椅子を用ひないので兩脚彎曲し膝が附けられない爲め陸上の者から稱せられる蔑稱である。

曲蹄の本稱據に就いては既に一七六一年に死んだ宋の陳師道の後山叢談に「二廣山谷の間に居り州縣に隸せざるもの之を番人と謂ひ、舟居するもの之を蠻人と謂ひ、島上のもの之を黎人と謂ふ」とあつて、廣東の蛮民について書いて居り、更に漢の淮南王劉安（五三九年死）の撰、淮南子の説林訓に「但をして竿を吹かしめ、氏をして簾を懸さしめば節に中ると雖も而かも聴く可からず」とある。其の但は即登であるといふ説もあつて、本當とすれば随分古い話で元明どころの話ではないのである。

但は倡氏は工の課だらうとの説もあるが又但は古、吹を知らざる人とも註されて居る。現在曲蹄は音樂を奏さない。若い者の一年間の娛樂は端午の節句にする扒龍船にあるらしい。

曲蹄と蒙古人 福州には蛋戸と稱する種族あり、傳説に依れば其の祖先は蒙古種族にして、元の成吉思汗が天下を併吞するや蒙古人を各省に分駐せしめたるが、明の太祖興つて之を亡すや蒙古人を屠殺し、黄河以北の元人は悉く内外蒙古に逃避し、黄河以南の蒙古人は多くは殺害され、一部分は水上に驅逐され、爾來蒙古人は漢族と通婚往來するを禁ぜられたるを以て、専ら水上に在りて操舟漁獵に従事するに至りたる由にて、此の種の種族を曲蹄と稱し、多くは水上に生活して船頭となり、元と時々上陸して乞食をなすもの多かりしが、近年生計稍々豊となり、乞食をなすを屑とせざるに至りたるも、毎年舊正月三日間は尙人家を訪ひ臘曲を奏して食を乞ふの遺風あり。此の種族は男女洗足にして、女子は脂粉を用ひず纏形の髻を結び、一種特別の風をなせり。女子は比較的美貌なるを以て近來漢族と通婚するものありと云ふ。曲蹄の出處明らかならざるも、福州の蒙古人は固と郭、倪の二姓のもの多かりし故漢

人之を郭倪と呼び、遂に曲蹄又は料題に轉化しんるものならんと云ふ(打田庄六著福建事情)

蟻は唐以來戸を計り、明の時には里長を立てたり、清の雍正間には甲戸に列せられたが、依然賤民としての取扱を受け、福州に於ては前清時代居を陸上に構ふる事が出来ず、科擧に應ずる事が出来ず、婚を陸上の者と通ずる事が出来ず、彼等仲間の聘金は一律二十元の定めであつた。民國の初開放されてから漸次 (1)舟中に暮す者 (2)晝は舟で働き夜は陸に寝る者 (3)陸上に居を構へ足を洗つた者と大體三段に分れるやうになつたが、依然舟を居とする者が最も多し。

蟻族の愚類語 蟻の話をよく聴いて見ると矢張陸上に住みたい様子である。成程若い連中は陸に住んでも舟中に住んでもよいやうな事を云つて居るが、漸次歳を取つて孫が出来ると水上生活は年寄や子供にとり誠に危険であるから陸に棲めるなら之に越した事はない。唯水い間水上生活をして居るから陸上の生業とは無關係で之が大に困るといふやうな事を云ふ。して見ると彼等の水上生活は好んでなつたのでは無く己むを得ずなつたのであると思はれる。何やら流亡の民らしく感ぜられる節もあり、又現在の彼等の造つた棧上家屋即ち侯官縣郷土志の所謂厝が福州にも洪山橋附近にもあるのを見ると、遠い昔の湖上生活 Lacustrine habitation を目のあたりに髣髴せしめられる。

彼等の住宅は即ち舟であるから浮家泛宅何處に居つても差支ないやうなもの、矢張居住に區域がある。最も多く群を爲して居る所は洪山橋、福州、馬尾であるが、更に細かく分けると福州の中でも小區域が深山ある。民國十八年水上公安局の調査に據ると左表の如くである。

場	所	戸	數	男	女	合	計
臺	江橋	三	三	三	三	六	六
新	新街	二	二	二	二	四	四
大	大橋	二	二	二	二	四	四
新	新街	二	二	二	二	四	四
若	若浦	二	二	二	二	四	四
泛	泛浦	二	二	二	二	四	四
都	都洲	二	二	二	二	四	四
後	後洲	二	二	二	二	四	四
關	關洲	二	二	二	二	四	四
中	中洲	二	二	二	二	四	四
媽	媽頭	二	二	二	二	四	四
鴨	鴨頭	二	二	二	二	四	四
港	港頭	二	二	二	二	四	四
水	水院	二	二	二	二	四	四
洪	洪山	二	二	二	二	四	四
潭	潭街	二	二	二	二	四	四
酒	酒洲	二	二	二	二	四	四
西	西河	二	二	二	二	四	四
龍	龍角	二	二	二	二	四	四

之等の人口は人口の項に述べる民國十七年調査の數には包含されて居ない。蠻族の言に據ると馬尾の蠻は福州より分れたるもの、福州のは洪山橋より分れたものといふ。今では福州蠻族の墓地は福州附近然るべき所へ定めるが、以前の墓地は洪山橋附近の桐口に在つた。かゝる點から考へると蠻族は海から入つて來た者でなく、上海から漸次下つて來たものであるらしい。

蠻族の姓には洪山橋附近に歐、下、池等、福州、三保、帮洲、三縣一帶に唐、頼、江、詹等、萬壽橋下一帯に毛、連、丁、官、蘇、羅等、其の他鄭、陳、林、王、黃、李等がある。漢族の墓銘には必ず姓名の上に其の家の出身地を冠する。例へば九牧林とか虎邱黃とかの類であるが蠻族には此の事が無い。右の内、歐は鷓鴣の義、翁は漁翁の翁、池、江、浦等は居住の場に因んで附けたものさうであり、郭、倪の二姓はないやうである。

藤橋水の祖 海軍上將元編建省長藤橋水は福州名門の出で、(福州の古姓參照) 郷黨に非常な信望のある人である。藤氏は元朝の薩拉布哈の後裔で、現に私が直接同氏から私の先祖は蒙古人であると聽いて居るのだから間違はない。名門薩氏が陸上に存して居るのに元臣郭、倪の二姓だけ江に逃げて容されたとは受取れない話である。

彼等の生業は上は材木の賣買運搬、小汽艇モーターボートの運轉手、火夫、下は魚漁である。又寧波人の所有である山東船に手下として乗組んで居る者もある。冠婚葬祭の儀式は陸上のものと異つて居り、男女共に跣足、男子は陸上の下層のものとの區別が付かないが、女子は頭髮衣服に異つて居る所がある。老婆は并半髻、若いのは田螺髻に結んで居り、舊曆正月元日より三日間箒を下げて群を爲し、賀年歌を唱つて陸上の者より「糖モチ」を貰ふ習慣がある。

天主教 蠻族には天主教を信するものが多く熱心な者は毎日羅廷船浦新街の天主堂に行く。聖書は主として漢譯の聖教日課といふのを用ひて居る。冠婚葬祭の儀式を異にするといふのも、は天主教信者であるにも起因する。彼等が進んで天主教を奉じたのは往時彼等に保護の背景が無かつた爲めであらう。

田螺髻 形田螺に以て居るので名づけたのであらう。三本髻を用ひない。玉製の扇柄を横たへ髪端に田螺髻を附ける。近頃蠻の婦人にして三本髻を用ふるものがある。所謂曲踏のハイカラなるものだが未だ最新流行の斷髪はない。

賀年 正月になると陸上の相當な家を訪ひ賀年歌なるものを唱つて贈り買ふ習慣があつて仲々嚴重に守られて居り、相當財のある者でも矢張り辭に交り形式的にでも一緒に歩いて居る。彼等に云はせると此の賀年に出ないと其の年悪い事ばかりあるといふのだから即ち彼等の一種の魔除けである。賀年に出る者は皆婦人で歌の文句は兼起の佳いものばかり、節には格別古雅な所がない。歌も四十五歳前後の者はよく知つて居るやうだが、二十歳後の者には知らない者が多いやうである。福州講談師の話に據ると曲踏が陸から江に追はれたが、年に一度は陸上の舊友を訪ひ贈り買ふ習慣になつた。昔は種々の代りに錢を入れたものさうである。

此の曲踏に就いては閩縣又は侯官縣の郷土志の外に福州の諸書にも記載がないのは賤民視して居たからであらうが又洋書にもない、閩縣郷土志に據ると「其の人(即ち曲踏)皆蛇種、説文に聞は蛇種なりと謂ふ、實は専ら蠻民一族に屬するのみ」とあつて曲踏を蛇種即ち閩族として居るが、世に蛇種の人間のあらう筈がない。説文の蛇種に拘泥して云つた事で、恐らく江西の方面から一方は福建に一方は廣東に流亡した族であつて昔の閩とは關係があるまい。

四 蠻 族

蛮族は土俗ではのB「B」(山雞か)、翁婆、翁姑、犬頭などと稱せられる種族で、現在羅源縣、連江縣等の山地に住み

平地の人と異つた生活をして居る。翁婆又は翁姑と特に女性に取扱はれて居るのは、此の種族の男子は福州山翁の者と變りはないが、女子は特異な風姿と装飾とを以て時々福州に現はれるからである。Richardの中國坤輿詳誌には *the Halls or Shikias* 徐客 (*Shikias*) とあるが何れも福州では云はぬ語である。

洋人の記載には客家 *Hakkas* 又は山種 *Shanhs* の語を用ひ翁の字を用ひない、所が福州では客家といふ語はないのである。

Shanhs 此の語は自他共通の語であるが、恐らく平地の人のいふ *Shanhs* は山種の意味であらうが、翁はまた之を三宅の意に取

り三姓あるからであらうと信じて怪す、彼我共に用ひて居るのであらう。翁には本来侮蔑の意はないが翁婆、翁姑は彼等の極めて忌む語である。

翁の意義 翁は翁と違ふ翁は以諸の切、或は飲泉の切で翁は余、三歳又は三歳の陸田を稱するのだが、翁は余の昔より来て時耶の切。昔は蛇で種族の名である。古くは無かつたものと見え、普通の辭書や活字には無い。福州の木版の諸書には正しく翁と書いてあるが、活版の書には定まつて翁と書いてある。翁では *翁* 又は *翁* の音の出る管がない。翁族は耕作地を *翁* といふので翁の字が出来て種族の名に稱へられるやうになつたのであらう。永福、古田の者は自分のことを *翁* (下か) といふから翁も或は自分の事を指すのではないかと考へて居たが、彼等は *翁* (我) といつて *翁* とは云はぬ。昔は云つたのかも知れぬが、今では一寸調べられぬ。

福州讀書の標準辭書である *Alphabetic Dictionary of the Chinese Language in the Pootoo Dialect* (一九〇八年版) には翁と書いて *翁* と讀むが又 *Shanhs* とも讀むとしてあつて翁の字のある事知らなかつた。翁族に關する文献に就いては餘り古いものは無いやうであるが下記註脚に引用する如きものがある。

吾が閩の山中に一種の翁人あり、相傳ふ翁族の種なりと。翁族等三姓あり、巾せり履せり自ら相匹配す。福州、閩清、永福山中最も多し(五雜俎、明代の書)。

連江深山中異種の者あり翁民と曰ふ、五溪黎族の後也。近くは羅源、古田の間多く此の種あり。其の民短衫跣足、婦人は高髻にして布を蒙り飾を加へ腰結狀の如し。亦跣にして雜作し、其の遠近を以て伍と爲す。性多くは高樸亦民田を受けて以て耕し、平民を謂つて百姓と曰ふ(連江縣志)。

翁民の祖は黎に出づ、即ち獠人也、隋の時大功あり封せられて王となる。三子一女を生む。長の賜姓は盤、名は自能、貳騎侯に封せらる。次の賜姓は藍、名は光輝、護國侯に封せらる。次の賜姓は雷、名は巨斬、立國侯に封せらる。女の賢鍾は姓、名は志深なる者、官は三品、世々會稽七賢洞に居る。後子孫衆多、分行して自ら其の力にて食ふ。庶民と交婚せず、庶民の田地を佔むる無し。盤姓今聞く無く、只藍雷鍾の三姓各處に蔓延し羅源に在る者甚だ多し。幼少なりと雖も能く弓を關き矢に業し猛獸を捕れず。蓋し其の性也(羅源縣志)。

潮州府に翁族あり、一説に關に翁黎あり潮州に流入すとあるも翁民に非ず、後人誤つて合せて一と爲す(廣東通志)。

翁の種(翁亦獠に作る)は其の何を祖とする所なるを知らず。或は黎族の後と爲す也。(閩粵雜考述 隆次雲南雜考翁之を載す)。崖を深山に結び族を聚めて處り黎雷藍の三姓あり(羅源志を按ずるに隋時翁民大功あり王に封せらる云々自ら相配偶し平民と婚姻を通せず、其の男子は則ち短衫跣足、其の婦人は則ち高髻垂纒俗に大頭公主と呼ぶ)執業甚だ微なり(多くは麻藥を縛して掃帚と爲し挑いて城郭の各處に往き販賣す)雜作を務するに耐へ商賈を事とせず、禮俗不同、言語不通、久しく已に化外として之を視つ矣。近く數十年來漸く土人と同化す。雷藍二氏間に或は省城に僑居し且つ鄉會試に捷ち科第に登れる者あり。然かも其の種界顯然として族類迥かに異なる。大抵兩粵の獠、滇黔の苗と同一、血統烏んぞ異せずして之を別つを得ん(侯官縣志)。

翁客は主として東北部に住し、一部は浙江省の南部に分布せり。言語風俗體質等稍々漢人と異り、自ら稱して黎族の裔と稱す。蓋

し猶族の一種なるべし(福建省の條)。本省の南部に畝客族あり。もと廣東省より移住し來れる猶族なるが如く、風俗習慣言語は勿論體質容貌等に於ても漢人と相異れり。彼等は自ら稱して盤嶺の裔なりといふ。この族は一種の臭氣を帯び地方人は俗に之を畝客臭といへり。婦人出産すればその子女を以て良人に委し、婦人は自ら勞働し男子をして家を出でざらしむる奇俗ありといふ。其の數は約三萬人あり、主として廣州府の南部に處り、一部は福建省に住せり(浙江省の條)。(浙江山築久最新支那大地理)。

福建には夫自身の原住民族が有る。縱ひ廣東、江西、浙江、臺灣及び海峽殖民地の仲間入はしても、此の原住民族は *Hiang* (客家) である。福建に於ける客家は地方的に *Sip'it* (山麓) と呼ばれ福寧、寧德、羅源及び北嶺の四地方に住み食之で腫病ではあるが、彼等自身は自負して居る。支那人には百姓があるのに彼等には四姓だけしか無い。即ち *Tai* (雷) *Huang* (黃) *Tang* (唐) *Chang* (鍾) であるが、盤は今福建には無い。彼等の傳説では皇子の直裔であり、皇子は大頭の人であつたといふが、之はヘロドトスの所謂大頭人 *Crotophaga* と同じ事である。現在でも客家婦人は其の特異なる頭飾に銀製の犬頭の髻を使つて居る。客家とは何者か、七閩とは何者か、之は福建の學徒に對する土俗學の問題であるが、検討を省き三つの考へ方がある事を述べる。(1) 彼等客家は原住民族例へば七閩の如きもの裔であるとして引合に出されるが、彼等は原住民族らしい風貌がなく、習慣には異なる所があつても、平地の農民と同じやうである。(2) *Kelint* は彼等客家は漢族の兵士と原住民族の夷家 *Kelint* 婦人との雜婚の裔である。客家の語は客家族或は借地人の意味であるといつて居る。(3) 第三説は客家は下客又は遠來の移入者の意であると假定し、彼等の言語の中に純粹の漢語のある事を本として考へるのだが、彼等は後に福建の地に來り政府を樹立した征服者より稍々早く來て壓迫と迫害に依つて驅逐された漢族の先驅の子孫である。若し彼等が原住民族であるならば龜の名が附く筈である。客家の中から時々名を成す者の出づるのは此の説に力あるを裏書する。廣東の知事陳炯明は客家出身である (*Kelint*)。

Hiang は支那人種の特異にして勇悍なる血統で多く廣東、廣西、江西及び福建の山地に居る。彼等は其の地の言語と異なる方言を用ひ且つ特別の習俗を有し躡足をしない。彼等は總算千五百萬人位ある。彼等は元何處に居たのか不明であるが、多分河南から



子女の族畝

四世紀及び九世紀に移住したもので、或者は浙江、福建に或る者は廣西に行つたものらしい。彼等の文化は移住先のものとななる相違はなく今日では兩者混同し南方支那族と區別が付かなくなつた。他の福建の山地に移住したものは依然河南の言語と習俗とを保存して居るのが現在の *Hakkas* である。宋元朝に彼等の多くは廣東省の嘉應 *Kasung* に移住し祖先まで今から二十代を遡り得る。此等は多數關領東印度、ボルネオ、海峽殖民地及びビルマに移住した。又臺灣に五十萬人、海南島に多數居ると云はれて居る。(Coulings: *Encyclopedia Sinitica*, Notes on China and Japan vol. I, Chinese Recorder vol. 23.)

「客家は漢人兵士と夷家婦女との間に出来たる雜種なるが如く、風俗習慣等の點に於て通常漢人と大差なしと雖も、多くは下層の勞働者及び農夫にして、貧窮の民に屬し廣東人中に混在せり。勇悍にして企業心に富めりといふ。夷家とは諸種の蠻夷に附したる名稱にして、必しも同一の種族にあらず。その主なるものは *Yao* 種 *Chiang* 種 *Ning* 土人 *Tai* 種、獠等にして、中にも獠、獠は最も多し。何れも蠻貊たる蠻人にして多くは山洞に住し、漢人と伍せず、言語、衣服、習慣等頗る邊鄙人に類する所ありといふ。之等の蠻人は古來屢々漢人と衝突し往々出でて寇掠を行ひたることあり。大藤峽の如きは明の時王陽明之を擊破せしは史上著名にして、その後に至るも官兵之を剿討せしこと一再ならず。之等蠻民は今尚ほその人口頗る多數にして本省(廣西省)住民の三分の二は夷家にかゝるといふ(最新支那大地理)。

彼等蠻族は明らかに福建の原住民ではない、他から移住し來つた者の子孫で其の時代もさして古くはなく、唐宋元各朝のどれかの時代である。現に彼等は福建生拔の者ではなく且つ平地に住んだ事もないと云つて居る。根源地に就いては北方から來て廣東へは途中から分れたのであるともいふし、又廣東より來たともいふが、何れにしても第一の根源地は北方に在るらしい。彼等が平民と同様吉凶の際用ふる大提燈には姓の上に昔から汝南の二字を冠して居る。汝南郡は後の河南省汝寧府である。彼等は汝南は遼東(柳東)と同じであるといふが、或は汝南の中に遼東があるか、遼東の中に

汝南があるか、遼東半島の遼東ではないらしい。彼等の間には洋人の興味を惹く犬に關する傳説を有つて居り、馬琴の南總里見八犬傳の發端の着想と間接に關係があるらしい。彼等が浙江の事を云はずに廣東の事ばかり云ふのは、廣東が大きく且つ有名になつたから云ふのかも知れぬ。廣東語に似て居る語が多く、彼等の言語中にあるのは事實だが、其の廣東語なるものは同根の語であるかも知れぬ。

犬頭國の由来「福州 Child school」の一教師に依つて記されたのを自分の友 F. F. Wee が譯したものを掲げて先住民族が山間に殘存して固く雜婚を拒んでゐる様を述べて見る。King (國) 王朝の時、國王を King (無事語) と稱し King (中國) に屬してゐた。此の時代に King Hwang Huang (一五二二年—一五六七年) (高辛皇帝、本文の脚註、北京音にて高靖といふは此の皇帝の年號である) と稱する皇帝が居て四方の King (首領) 國より挑撥され如何ともする事が出来なかつたので、皇帝大に怒り「誰でもよい、西方の國を打ち懲らす者があつたら朕の娘を與へる」と懸賞の掲示をした。丁度此の時無諸國の一將軍が愛犬(高さ二呎長さ二呎半、白で脾猛)を撫しながら此の懸賞を見たのであるが、心の中に「よし明日皇帝に謁し自分が一つ西方の國と戰つて見る事を申上げて見よう」と決心した。すると愛犬は身邊に走り來り盛んに吠えるので、將軍はお前は私の爲めに行つて戦ふ事が出来るのか」と聞いた。犬は頭を動かして頷いた。それで將軍は皇帝に謁し此の事を申上げた所が皇帝は大に喜ばれ懸賞の件を保證された。將軍は犬に其の保證狀を與へたら犬は之を口に受取り直ぐに西方の國に向け泳ぎ去つた。西方の皇帝は犬を見て非常に喜び「中國では打ち敗かされたので犬まで朕の國に逃げて來た」と云つて、犬を宮中に伺ひ之を愛撫した。所が犬は「善く愛しては呉れるが自分には復讐の仕事があるのだから永く厄介になつて居る譯には行かぬ」と決心し、十日間の最後の夜、皇帝の寢を待ち噛みついて其の首を故國に齧したので、將軍は早速之を皇帝に捧げた所、皇帝は一方では喜んだが一方では悲しんだ。どうして犬に自分の愛撫を與へられよう、仕方が無いので將軍に此の犬を人間にする事が出来るだらうかと聞いたので、將軍はまた犬にお前は人間になる事が出来るかと聞いた。

いたら、犬は首を下げて頷いた。其の夜將軍は「私を一編物差して打つて下さい、そして四十日の七倍即ち二百八十日待つて居つて下さい。私は人間になります」と犬の云ふのを夢に見たので、之を皇帝に奏した所、皇帝は大に喜び將軍に犬を宮中に持参するやうに命じ、犬を木籠に載せ、頭に物差を置き、更に之を大籠に入れて高所に懸け、四十日の七倍の日が終る事を待つ事にした。所定の日に達しない儘か四十五日目に大雨雷鳴があつたので、皇后は大に怖れ、且つ犬が今日まで何も食べないから死んだのであらうと考へ、籠を開き犬の生死を見届けた。犬は生きて居た、身體は人間になつたが頭だけはまだ犬であつた。最早何とも致方が無いので、高辛皇帝は其の愛撫を籠中の犬頭人に妻として與へねばならなくなつた。所で犬頭人は容姿が變なもので布を以て頭を覆す事にした。今日でも北嶺の婦人(即ち倉婆)は籠の前方に其の布の拂である所の總を垂らして居る。此の髪飾を變へる事は即ち夫を犬にする事になるから彼等の髪飾は永久不變のものである。現在彼等は中國の新年に犬の圖を掛けて之を崇め、往時西方國皇帝に勝つた犬の子孫であるから中國の役人も彼等を征服する事が出来ないのであると云つて居る。之等山間の住民は茶や薯蕷を植ゑるを作つて居る。世上の諸姓中雷、鐘、盤の四姓は皆此の犬の子孫である。彼等は彼等独自の言語を有し未だ開明の域に至らず、中國の土語を讀み書きはするが、福州人と結婚せず、月々節句の日は福州人と同様である(Moon Festival)。不幸にして此の繪の如き傳説は僅かに四百年前の話で吾人(著者 F. F. Wee)に大して價値を與へぬ(一九二二年版 W. E. Geil 著 English Captives of China)。

右の傳説で四姓の中三姓即ち雷、鐘、盤の起源が述べられて居る。所が鐘と盤、鐘と盤とは違ふ。又雷は福州音で鱗(貝の一種)と音は同じだが雷に貝の意味はない。鐘と鐘も違ふ。

福建の King (山嶽) 四千五百年前 King (高辛) と稱する王があつて、其の娘の耳から何か遺ひ出したものがあつた。始め貝の中に入れて大きくしたが、次で鐘に移し最後に盤に移し成長せしめたら犬になつた。王は絶えず敵と戰つて居たのだが、之を仆す事が出来ず、遂に敵に勝ち王國を安泰ならしむる者があつたら王の娘と結婚せよと宣言した。所が其の犬は之を聞き賞を得べく敵營に入り込み、巧に取り入つて遂に兵士の氣に入り者となり、兵士と共に戦ふ事を許されるやうになつた。或夜兵士達が飲酒の後

深い眠に就いたのに、窺かに起きて兵士連の首を噛み切り之を齧して王の前に一つ／＼列べた。王は約束があるので大に悲しみ「お前は犬であるから余の娘を興へて結婚させる事は出来ない」と犬に云つた。すると犬は「私は人になる事が出来ます」と答へた。それで王は犬に大きな鐘を被せて「若し四十九日後男になれるなら余の娘を貰ふ事が出来る」と云つた。王妃は此の事に氣を痛め毎日鐘の中で何事があるかと俯つた。遂に好奇心を抑へる事が出来ず四十八日に鐘を上げて見たら犬は頭を脱して人間になつて居た。王は前約もあるので犬頭人でも娘を興へる事にし、婚儀も盛大に且つ無慮に行ひ、花嫁の頭には赤い絹や銀製の装飾を飾り立てたから何人も變だとは感じなかつた。此の奇妙なる夫婦の子孫は元中部支那に住んで居たのだが、後に南方に移住し始め遂に南部に落着いた。以上の話は福建省の山隴族の起原に就き彼等自身から聞いたものである。彼等は東南支那の海岸から三三十哩内陸の山地に占據し、其の地方の住民とは甚だ異なつて居る。之等山民には四姓があつて前述の傳説と面白く合つて居る。四姓とは雷 (Shan)、龍 (Lan)、藍 (Lan)、鐘 (Chang) であつて、余は嘗て藍姓は多く廣東附近に住み福建には居ないと聞いて居る。彼等は百姓を有する支那人から見下されて居るが、又彼等も百姓の支那人を見下げて居る。彼等は山から下りて町に來り、薪炭を賣る爲め福州語を解する者もあるが、大抵特殊の言語を用ひ、其の中には福州語、廣東語と同じものが幾らかあり、他は殆んど純粹の官話 (Mandarin) である。彼等は結婚の時には高辛王の子孫であるといふので、黄金を用ひて居る。彼等の服装は繪のやうで異種族のと非常に遠つて居る。(余の執筆の水影畫は羅源地方の婦人の姿を寫したもので勞働せぬ時着けて居る絹のゴロが無いのである。福州北部の山地及び羅源地方に行はるゝ彼等の特異なる頭飾には銀製の巾挿しに犬の頭を彫つて居る事である。帽の後方に懸る布片は恰も犬の尾に似て居る。此の頭髪と起原の傳説との爲めに普通平地の人から犬頭人と呼ばれて居る。余は最近の旅行で數多く彼等を見た。婦人が白布片を髪に着けて居るのがあつたが、老祖父が死んだ爲めであつたとの事である。此の特異なる種族につき調べる事は多々ある。彼等は外部の人には極めて差かしがりで友達とする事は出来難い。彼等の文化は大體支那人のと酷く似て居る。廣東省では彼等は「新客」の意味の Hakkas で知られて居りも北方から流れて來たものと云はれる (Chen-feng A. Wood-The San Tak

of Peking-China Journal of Science & Arts (中國科學美術雜誌) [Jan. 1925].

私が畜族の藍福哥、妻雷氏與妹、子藍大翁、彼等の友人藍某其の他に就いて調べた所に據ると、犬は龍狗と稱するもので名は無。始め王后劉氏の耳から出た蟲で藍藍の順序で大きくなつたもの、雷は福州語では貝の意味があるが、彼等の言語には貝の意味は無い。鐘の中に四十九日置く事と四十八日雷鳴の時に開けた事は前兩者の記載と半分づゝ合つて居る。龍王の首を獲つた事は何處での話か分らぬが、犬が泳いで行つた河は長江(大河の意)で閩江ではない。龍狗の墓は廣東の鳳凰山に在つたが今は無い。女子の髪飾は鳳凰の飛翔の姿に象つたもので龍狗に象つたものではない。王の名は高辛で時代は數萬年前の事である。鐘は女婿の姓で直系ではない故に鐘にも居るが附近の田舎にも澤山居る。船で遼東(或は柳東?)から來たもので、雷藍二姓は羅源附近の海岸に着いたが、藍姓の船は廣東に着いた。羅源を中心に永福、古田にも同族が廣まつた。何故福州平野に住まなかつたかと聞けば、多分洪水が、恐ろしかつたのであらうとの答であつた。

上述の傳説は末節に於て異なる所はあるが大體同じやうで、最初のは支那人教員が彼等に就き調べたものを福州の老實教師 Wang が英譯、更に之を其の友の M. が著書の中に採つたもの、次のは靈光百學校長 Woods が自ら調べたものを自筆の水影畫と共に雜誌に投稿したもの、終のは私が聞いたもの、三者幾らか違ふのは話手馳手の相違に因るのであらう。何れにせよ余が高辛の子孫であるといふ事には皆一致して居る。高辛氏は支那の傳説的人物で事實居つたかどうかは不明である。

「南蠻と北狄に關しては東夷と西戎とに於けるやうに五行説を附屬した明瞭な記事を見出さないが、尙その痕跡はおぼろげにも認められる。例へば後漢書に南蠻傳に南蠻は高辛氏の女が繁強といふ犬と結婚して出來た子供の子孫だとあるが如き、又史記の匈奴傳に匈奴は夏后氏の苗裔だとあるが如きは即ちそれであると思ふ。古來傳説を以て有名な支那人が自國の聖人を龍狗の祖先と見立て、毫も恥ぢないの一寸解し難いやうなれど、彼等の所謂夏夷の別は専ら文教の差等にあつて人種の同異にはないのである。由來天下の君主を以て自ら許す漢人の立場から見れば四海は一家で人類は兄弟である。上代の支那人がローマ人を秦人の苗裔だといひ、印度の

驪迎を老子の化身だといひ、又倭人を呉の太伯の後だといふなどの事實は彼等が人種に差別を立てない強い證據ではないか。して見れば南蠻が高辛氏の子孫で、北狄が夏后氏の子孫だといふ傳説が彼等の間から起つたとてまた何等怪しむべきことはない。たゞ問題は數の多い上代の聖人の中から特に北狄の祖先に夏后氏、南蠻の祖先に高辛氏を選んだのは果して何故か。或は偶然の思付か、或は其の間に何等か理由があつたことか、彼の高辛氏は如何なる人物かといふに呂氏春秋卷四に見えたる祝融の註に「祝融即氏後老童之子吳回也、爲高辛氏火正、死爲火官之神」とあるから、此の人は元來火徳の王と信ぜられたのである。五行説によると南は火の方向に屬するが故に南蠻の祖先が高辛氏から出たといふ傳説は全く此の學說に淵源したのである（『東洋學報』十四卷二號白鳥庫吉博士）。彼等は元と河南附近に居つたものが唐宋元各朝の何れかの時代に動き出し、現在浙江省に居る者は會稽、福建に居る者は會溪又は會姑、廣東に居る者は客家と稱せられて居て皆同系に屬する者らしい。福建の會が平地の民を稱して胡老と稱する所は臺灣の廣東族の稱ふると同一で、又間接に會は臺灣の廣東族とも關係があるらしい。會は漸次平地の民と通婚同化し男子は早く平地化したのが、婦人は尙特有の髮飾を保有して今日に及んで居る事猶三本劍の如きものであらう。會族の中よりも學者を出し清代に於て藍香祺は進士、雷銘勳は舉人になり、藍香祺の子藍炳星は現に城内河東街に住んで居るといふ事であるが、姓が藍であるので同族の者と考へて居るのかも知れぬ。

五 三 本 劍

三本劍族は頗る適切な語であるが實は邦人の稱へる語で福州語ではない。主として特異なる土着婦人の髮飾をいふのであるが又共に其の人物を稱するのである。福州語では其の髮飾を三條髻さんじょうといひ、其の人物を平股嫂へいこといふ。蓋し清代

までは漢風の婦人は何れも纏足をしたのに、之等三本劍は歴代纏足などはせず天然の足即ち平股であるのでかく呼ぶのである。だから福州では纏足の者は三本劍ではないが三本劍は皆平股であり、平股の者は皆三本劍であると云ひ得る。

今日では婦人間に纏足の風は無くなり、何れも天然足即ち平股になつたが、依然として三本劍を挿す者と挿さない者があり、又本來三本劍であるのに三本劍を取去つた者がある。此の者を何といふのか今の所名稱は無いやうである。強いて云へば前清の謂纏邊裝ちんぺんそうに當るのであらう。前清には女子に平股、纏邊裝、纏邊の三種があつた。

此の三本劍は幅に長さ六七寸或は尺許劍形の簪（銀製を普通とするが銀鍍金も中々多い、又往々中挿一本が金製であるのを見受ける）を三本挿し込んで居る髮飾で頗る偉觀である。此の風は福州近郊の婦人即ち元の侯官縣を主とし、閩縣一部の農家の婦人が之を爲して居るが、市内の農家でない者にも見受ける。昔は此の風城内にも存し、後には三本劍と非三本劍とが交雜して居つたものと想像されるが、今は漸次廢れて川舍及び市との接觸地に殘つて居るやうになつた。此の三本劍族は皆に三本劍を挿し込んで簪とするのみならず、更に耳墜環と稱する直徑一尺許の大耳環（普通金鍍金）を兩耳朶に垂らすのであるから、單に偉觀であるばかりでなく亦頗る奇抜なのである。然れども流行に此の大耳環は日常生活に不便である見え、民國三年頃から殆んど無くなり何れも小さな耳環になつた。

「耳環如輪 婦女耳環を施し闊端皆然り、而して闊端著くる所の耳環は最も偉大にして驚く可し。環は銀を以て之を製し、形袖の輪の如し。頭上劍を帯び耳朶亦此の物を施す、其の任や重し矣（閩風雜記）。

「頭上帶劍 清國婦女の頭飾、大抵一定の様式あり。獨り此の地の婦女銀製の簪を挿す、簪の長さ尺許彼々劍輪の如く交文して之を飾る、宛然鐘將軍の儀の如し、奇も亦甚し矣（閩風雜記）。

三本劍が寝る時には袴も大耳環も皆外して寝るのださうである。かゝる不便なものを喜んで用ひて居る所を見ると、此の髪飾に一種の自負が伴つて居らねばならぬ。かゝる風を突然流行させようとしても到底行はれるものではない。必ずや必要と満足とが伴つて居る古来の習俗なりと見做して差支はない。三本劍は葦垣の娘になると飾り始める。唯既婚と未婚は髷の結び方に違ふ所があるのみである。福州土着の使傭人の大部分は此の三本劍で、邦人や洋人の使つて居る雇傭は大抵之を取去つて居るが、支那人の使つて居る下女には取らない者が多い。(悪口の項参照)

三本劍の配偶は何かといふと即ち福州の郷下人で、農を主とし福州市内の小商賈、街上の擔夫、官衙學校の使丁、園丁等は大概三本劍の御亭主である。中には偉くなつた者も少くないに相違ない。轎班車夫は福州人もあるが連江、羅源、長樂、福清の方面から出稼に来て居る者が多いので其等の細君は三本劍ではないのだが、實は獨身で來て獨身で暮す事を餘儀なくされて居る者が大部分である。

三本劍が農家に多く雇傭其の他の使傭人も農家出身である所から考へて、三本劍の風は大地に立脚し農を營む福州土着の者の標識であるとする事が出来ると共に、此の風は先づ最初都城に起り漸次田舎に及んで、今日尙持續されて居るものと見る事が出来る。故に此の風は其の始め都風俗であつたに相違ない。現在残つて居る奴婢の制と此の三本劍とは何やら關係がありさうにも思はれるが確證はない。又本物と寸分違はぬ銀製の劍を笄として頭髮に挿し以て夜道を歩いたり、野良仕事に出たりするといふ事は或は貞操保護の威嚇器又は用具であつたものかも知れぬ。或田舎出身の青年が相當の教育を受け妻を娶つた所が三本劍の娘であつたので問題を起し、三本劍を取去つたら治まつたと實話がある。田舎田の青年の母は大抵三本劍である。婿家の使傭人即ち依層(中には女將や金主も居る)の殆ど全部は三本劍で、妙齡な者には却つて僱者よりも別嬪なのが居る事がある。

福州には又贅婆(福州人は之を郷下嬭を云ふ)と稱する種族があり、其の祖先は福州婦人と同じく贅族の一種で、男子は性悍愚



三本劍族

且つ意情なるも、女子は勤勉労働に従事すること男子も尚及ざるものがある。秦の始皇帝六國を併呑し、天下を分つて三十六郡とし、福州は之を閩郡と稱したが、當時此の種族は尙王化に浴せず、唐代に至つて亂を作すや唐は之を盡戮して男子をして遺棄せしめ、強いて唐人に配はしめ、女は妻は出で労働に従事し、日歸家に歸るを常としたので、今に至る迄福州婦人は其の夫を、唐婦人と呼び、女は之を諸娘人と呼ぶと云ふ。此の種の女子は頭髮に劍形の長髻三本を挿し、耳朶に大なる金屬の耳環を拵め洗足を常とす。懷孕臨月に至るも尙野外の労働に従事し頗る勤勉なのに反し男子は優柔不斷家内に在り厨房を掌るを常とする(福建事情)

三本劍の夫婦關係に就いては上述して置いたので明らかであらうと思ふ。福建事情は餘り三本劍が異様なので種族として残存して居るのではあるまいかと考へて、三本劍の配偶をも矢張り種族と見做して憎感にして優柔不斷、家に在りて厨房を掌るとしたのだが、胡ぞ如らん三本劍の夫は即ち福州人、福州の田舎の人で吾人が日常見て居る人達なのである。

唐婦人 a male, a man 唐婦 a male, a husband, 唐婦仔 a male child, a boy, a son 唐人 a Chinese (Foodon's Dialect Dictionary) 唐は何も唐朝の唐を確然と指したのではなく、中國又は北方の文化地方の意味であらう。哺は午後又は夜の意味で、唐哺が夫の意味であるからには土着の婦人即ち三本劍と北方中國より來れる男性との通婚關係が表がされて居ると見て差支なからう(血族關係の奇稱參照)。

諸娘人 a woman, a female 又は諸娘 a woman, 諸娘仔 a daughter, a miss 諸娘仔 a miss, 諸娘仔 a daughter, a miss (Dictionar) 閩小紀に「福州婦人を呼んで珠娘と曰ふ、其の來るや舊し矣。按するに任昉述異に云ふ、越俗珠を以て上寶と爲し、女は生めば之を珠娘と謂ふ」とあつて、諸娘人は珠娘人の訛ではないかと思ふが、現在珠の土音は tso^2 で tso^1 ではない。或は諸娘は無諸娘の略かとも思ふが、それは何だか餘りに穿ち過ぎて居るやうにも思ふ。

惡口 街上の三本劍又は擔夫の類は一寸した事で直ぐ惡口の言ひ合ひをする。知らぬが佛なら其の儘だが、分つて見ると吃驚する。

男の方は大抵、細爾奶サトウ、或はも少し丁寧サトウに「細爾奶巴サトウ」といふ。細は犯すの意、奶は母の意である。この意味の悪口は大抵支那民族共通である。三本剣の方は流石にこの文句は使はず、多く「半路死ハシロシ」といふ。特に初老の三本剣は中々悍辯にして往々男の方が凹垂れる事があった。閩俗は手に負へない事を「毛藤葛モトウカ」と云ふのは、此の三姓の三本剣が中々強悍なるを以てかく云ふのであるとの話もある。所が此の悪口を一言も發せず柔順に路を避けながら通り過ぎる者がある。それは人養運びと豚の糞拾ひである。市内では大抵の女子は養運を寢室内に置き之にする風があるので、人養運びは即ち、面便所掃除であるのだが、郊外のは之等を一括した完全なる人養運搬である。妙師の娘が三本剣を動かさうな體に多少の嬌態を加へて廣やかな田園の間を進んで行く様は唯かに一幅の繪であり、背景に城壁でもあれば所謂負郭の田で特に妙である。豚の糞拾ひは大抵男子であるが、豚の糞は除糞有效な肥料と見える。外人の轆車は掛塵刃ましく威張るので、よく悪口の相手から豚の糞拾ひでもしろと云はれ街上活劇を演ずる事がある。

三本剣の禿頭 若い時から粗悪な油と巨大な背とで頭髪を虐待する爲めであらう、初老の三本剣に禿頭が多い。此の位の年輩の三本剣が一番毛藤葛である。

六 衣冠族

衣冠族の語は夙くからあつた支那語で出来合の語ではない。今では福州の人は誰もが衣冠族也と思つて居るから衣冠族なる語は用ひられない。古の衣冠族必しも今日の衣冠族ならず、今日の衣冠族必しも古の衣冠族なりとは思はれぬが、本項の云ふ衣冠族は福州文化創立の際北方中原から直接又は間接に遷り來つた漢族で、福州の文化、統治、習俗と大なる關係を有する者の苗裔の事である。福州に遷り來つた事情に就いては無論一様ではない。或は中原の戰亂を畏れ安住の地を福州に求めに來た者もあり、或は役人として中原から派遣されて來た者が落着いたり、或は福州の舊知を頼



榜標の位學

つて来た者もあり、或は王審知の如く匪軍を随へ福州の天下を掌握した者もあり、上は王公より下は小役人又は兵士に至るまで多種多様で、時代も漢代から或は現代に及んで居るといつてもよいのであるから、固より單純一樣なものではない事は明らかであるが、概して財力と知力とを有し、其の初期には士流の人達と文物に於て格段なる相違があつたものらしい。

學位標榜 支那では昔から役人に爲るといふ事は最も上品にして且つ最も安全なる蓄財方法である。役人に爲るには學問が必要で、學問、文化、財力の三者は互に相俟つて居る。故に科擧の制のあつた時代進士に及第し、而かも狀元になつたといへば家門の名稱之に過ぐる者はない。福州の舊家の門楹によく此の種の扁額が所謂標榜されて居るのを見受ける。

學位ある者扁額を門楹に掲げ金を以て之を置く。曰く翰林、曰く進士、曰く文魁、曰く武魁、之を問ふに曰く武魁は武擧人を稱し、文魁は文學人を稱し、會魁は文學人の優勝なる者、進士翰林は其の上班にして衆を京都に試みたるものとす。古人句あり、久旱逢甘雨、他鄉遇故知、洞房華燭夜、金榜掛名時と。夫れ學位は天爵の事、之を標榜する事慶節に似たり、然かも亦以て朝廷の勸學の隆なるを見るべし矣（閩風雜記）。福州府志擧擧の項に曰く「昌黎（韓退之）云ふ、閩人の進士に擧げられたるは歐陽詹より始まると、然かも詹は貞元八年（七九二年）の進士にして長溪（今の霞浦縣）の薛令の擧げられたるは神龍二年（七〇六年）なり、進士は唐に始らず矣」。

福州府志流寓の項に據れば、晋代（第三世紀の末より第四世紀）に入關した衣冠の八族即ち林、陳、黃、鄭、詹、邱、何、胡の八姓がある。福州に落着いた衣冠族としては最も古い方であるが、同姓でも夫々出身地や時代を異にし一樣ではない。

林は福州の大姓中華頭に掲げられる者で、(1)晋の永嘉年代、第四世紀の初葉に林森が晋安郡守となつて落着いた。(2)東晋の董門侍郎林頌は西河から来た。(3)唐の諫議大夫林希且は濟南から来た。(4)唐の林穆は光啓年間王氏に隨つて固始から来た。(5)宋の林文茂は廣東の惠州に役人をして居たが閩に遷つた。(6)林誠は河南の人、其の後二十餘世になる。(7)明の林聰は江西の贛州の守であつたが閩に來た。(8)清の林少泉は福州から移つて來た、今に十餘世になる。(9)林在素も福州から移つて來て八九世になる。此の外新しく移居せる林姓もあらうから單に林姓と云つても實は複雑である。近郊では南臺島蓋山の東麓に城門の林、林浦の林の大姓が居る。

陳は(1)晋代に陳熙が晋安の守となり閩に落着いた。八世紀頃侯官侯として鳴らした陳實應はこの裔である。(2)唐の陳政は將軍として漳州を開いて居つたが、孫の詠は漳州に留守をして居た後は王氏に從つて閩に來た。(3)陳邁は莆田の人、閩に居るやうになつた。(4)陳齡は建州の人、福州觀察使となり閩に落着いた。(5)陳守約は固始の人、五代晋天福の間閩に來て南唐に任べた。其の子孫は上渡に蟠居し大姓を爲し、江南の陳と稱して居る。(6)陳籍は黃巢の亂の時同安に逃げたが、其の子孫復た歸つて來て十餘世になる。(7)宋末に陳古鑑の後人が古城から鳳岡に移つて來て二十餘世になる。南臺上渡から下渡に掛け陳姓は中々多いが、慶元の陳あり、古鑑の陳あり、江南の陳あり種々である。(8)南臺島蓋山の南麓贛州方面にも大姓の陳が居る。此の陳姓は明洪武の間陳廣が新寧(湖南)から徙つて來たもので、今に二十餘世になる陳實理氏は此の陳姓の出である。

黃は(1)黃允は固始の人、晋の南渡に隨ひ轉じて閩に來て侯官に居つた。(2)唐の黃瓌及び弟黃滔は莆田に徙つたが、元の時黃安なる者復た福州に回つた。後長樂、永福に分居した黃もあり多く貴顯を出したといふ。今南臺島義序郷に黃の大姓が居る。

鄭は(1)三國時代鄭胄吳に仕へ建安郡の太守となり閩に留る。(2)宋代莆田の人鄭仲昇第五人諸邑に分遷したが、仲は閩邑城門山に落着いた。其の後鄭天與城山より灌川に遷り二十餘世になる。(3)元明の頃歙縣の人鄭滑閩に役人として來り瓜山に居を下した。(4)元泰定の頃鄭本福州路軍民總管府の役人だつたが下渡に落着き爾來二十世になる。(5)清初福州の鄭曾遷り來つてから八九世になる。(6)連江の鄭尊玉遷り來つて四五世になる。

唐は(1)漢末に唐儼が吳の將黃齊と戰つて死し族姓閩に留つた。(2)唐會昌の間布衣唐雄詩に巧みであつた。(3)唐光啓の間婺源の人唐必勝王審知に從つて福州を攻め陣歿し子孫閩に居る。(4)同時代唐敦仁も王氏に隨つて來閩後王祖に任へず、仙遊に隠れ其の子孫元末に閩に來り二十餘世になる。

邱は(1)六朝の頃邱祥なる者宋の昌國郡守阮瞻之に隨つて閩に來り落着いた。(2)明の邱鳳永河南より長樂に遷り、清になつて天鏡長樂より閩に遷居した。

胡は(1)三國の頃固始の人胡紇、吳に仕へ閩に遷つた。(2)東晋の時胡純なる者閩に官し、族人晋安郡守胡方生と共に義熙の亂の時崇安より福州に徙り、其の子孫清初閩に遷る。江南橋を重修した何兄弟は此の何氏である。

何は(1)漢末何雄なる者孫策を拒んで戰死し、子孫閩に留る。(2)宋の隆興の初進士何萬閩に遷り三十餘世になる。(3)少卿何昌宋の時崇安より福州に徙り、其の子孫清初閩に遷る。江南橋を重修した何兄弟は此の何氏である。

上述衣冠族八姓の外著名な大姓に王、劉、張、李、趙、楊、吳、郭、范、蔣、蔡、周、高、曾、孟、端木、徐、柯、方、葉、陳、蒲、游、馬、沈、薛等がある。

王姓は姬姓の王、媯姓の王、子姓の王、外國の王といふ具合に多種多様である。(1)東晋の王導の從弟彬建安の守であつた。遂に那邨より閩に遷る。諡を肅侯といひ子姓衆多である。(2)齊の王僧は中原から江を渡り閩に來た。(3)唐末に王潮其の子姓を率ゐて閩に來た。開闢の王氏は此の嫡派である。王審知の後には晉江長樂に居つたが、明代に王君朝なる者晉江から閩の壽山に遷つた。王官隲なる者は宋に仕へ提舉幹辦であつたが、長樂より後嶼に遷り來つた。王審邦の後には長樂に居つたが、明初王朝元なる者長樂より省垣に遷り、二十餘世になる。元來福州に居つた開闢の王氏は王氏内親の階層られて了つたと謂に見えて居るから、宋以後地方より遷り來つたものに相違ない。(4)清康熙の間王子裕なる者福州から鳳岡に移つて來た今に八世になる。

劉姓には唯の劉と賜姓の劉とある。(1)晋代に魏昌の人劉琨なる者、高の次に晋安の太守となり、閩の山水を愛して留つた。(2)唐末に劉存なる者王氏に隨つて罔始より來り閩に落着いた。劉宅の八賢は皆此の裔である。(3)宋の時劉翽その弟劉翽と共に仕へるを源とせず京兆から閩に避けた。劉は漢の國姓である。

李姓にも唯の李と賜姓の李とある。(1)晋代興寧の間李崇晋安の守となり閩に落着いた。(2)唐の宗子に尙芬なる者あり、閩に居たが天寶の亂の時宗室を募つて賊を討ち功があつた。(3)宋の少師李綱の後人は邵武より長樂に遷り、明初李鑑なる者長樂から侯官縣の鳳岡の葛嶼に遷り、傳になる。(4)明の嘉靖の末李齊周倭寇を避け福清から省垣に遷つた。李は唐の國姓である。

趙姓にも唯の趙と賜姓の趙とあるが漢唐よりも少い。(1)東漢の時趙昕東陽より閩に來り、徐登に就いて巫療を習ひ、龍溪(福寧府)に居つたが後人省に遷つて來た。(2)宋代に宗賢の僑閩する者が多く、趙祖の後あり、太宗の後あり、秦王の後あり、之等宗室の後は今に三十世位になる。趙祖の後は鳳岡の天前輩に居て繁盛であつたが今は衰微した。嶺後に居る趙姓は今以て勢力がある。趙は宋の國姓で福州の關係のあつた大姓である。

之等大姓には福州から地方に出た者あり、地方から遷り來つた者あり區々であるが、福州附近で古くから徒居なしに續いて居ると思はれる。大姓は大抵南宋以後である。五代の時王潮に従つて入閩した大小の各姓も落着いたのは宋代からであらう。宋以前の唐隋晋漢時代から連綿として續續して居る姓は先づ無いと見てよろしい。

福州の古姓と思はれるのは南宋からの城内趙氏三十餘世、城内何氏三十餘世、井關外西園鄉吳氏二十餘世、宋末からの城内林氏二十餘世、鳳岡陳氏二十餘世、元からの下渡鄭氏三十世、城内陳氏二十餘世、元末からの城内唐氏二十餘世、明初からの縣陳氏二十餘世、城内王氏二十餘世等である。そして衣冠の各姓は河南と關係して居る者が多い。

閩王の裔と土著民 閩王は南唐に降つたので其の宗族は多く土著民と互に婚嫁したが土著民は尙王氏の爲に遺禍あるを慮れ之を娶

る者は董間式を擧げなかつたといふ事が閩語で窺はれる。「月照古城宮、京鼓製假粧、肉丸包饅頭、韭菜炒肉湯、扛轎紫扛扛、扛教儂厝大廳當、大伯間奴首儂困、奴基主兩語娘孫。月は閩王宗族が聚居して居る古城を照らし結婚式の假裝は速く行けと催促をする。肉丸が饅頭の上に在つたり、韭菜とか炒肉湯とか中々御馳走がある。花轎轎に入り扛々と昇つて婿の家(儂厝)は人の家即百姓の家)に至れば夫の兄は何處の娘かと聴いたので、私はもとの閩王家の姫ですと答へたの意(閩報所載閩語彙解)。

上述の諸種族が互に錯綜して現代の福州人となり、文物及風俗の大部は之を衣冠族より、生活の資料及習俗の一部は之を三本劍族より受けたものと思はれる。従つて文字もなく、難解と稱せらる福州語も其の基礎は衣冠族に、活用は三本劍族に依つて爲されたもので、福州語の中には古い語が多く残つて居り、相當文字に當て籍まり得ると思ふ。

哥兒表仔 福州人は自ら都風を以て任じて居り、地方人を輕蔑する自尊他蔑の支那民族通有性は失はぬ。従つて蔑他語も多いが、夫々使ひ方があつて出處目には使はない。福州人に對しては福清哥、永福人に對しては永福表、古田人に對しては古田表又は嶺表、興化人下南(泉源州)人に對しては興化兄、下南兄、外國人には總稱が番仔で、細別して日本仔、英國仔、臺灣仔、廣東仔、北仔等と云ふ。哥は呼兒曰哥、稱父亦哥一兄は兄、表は「外類曰表」、仔は「閩人呼兒曰仔、語如粉糝切」とあつて何れも本來侮蔑の意はないが、福清哥或は興化兄といふと何とも云ひ得ない内容を有つて居る。連江人を連江鷄、閩清人を閩清猪といふのは鷄猪の産地であるからであらう。長樂人を長樂我といふのは長樂人は自稱我の發音が「我」ではなくて「我」と云ふからであらう。

史上の福州美人 福州には中々美人が多いからその昔相當に擧出した事と思ふ。一二有名な美人を列記する。梅妃 福州の近くの興化府莆田縣の出身で寵を極貴妃と争つた。莆田縣志人物志烈女傳に「唐、江梅妃、東華(莆田の村)の人年九歲能く二南(詩經)を誦す。父仲遜之を奇とし名づけて采蘋と曰ふ。開元中高力士閩勢に使し、妃の少麗なるを見選み歸す。明皇(玄宗)に侍し大に寵幸せらる。能く文を屬し自ら謝女謝安の妹道韞に比す。嘗て淡粧雅服して姿態明秀なり。性梅を喜び居る所の圃

経悉く數樹を植ふ傍して梅亭と曰ふ。上殿れに名づけて梅妃と曰ふ。蕭蘭、梨花、梅花、鳳笛、玻璃盃、前刀、綺窓の七賦あり。上兄弟間に日に間燕(宴)に従ひ妃必ず側侍す。後上妃と茶を調はす。諸王を顧み殿れに曰く、此の梅精白玉の笛を吹き、鶯鶯の舞を作し一一光輝あり。爾茶今又我に勝つ矣。妃離に應じて曰く、草木の戲談で陛下に勝つ。設使、四海を調和し鼎鼐を蒸饗するが如きは萬葉自ら憲法あり。驍騎何ぞ能く勝負を較べん。上大に悦ぶ。會々太眞(楊貴妃)入侍し顔る之を思む。遂に上を關東宮に遷す。後上妃を憐ひ夜小黃門を遣はし獨を滅し密かに鐵馬を以て召す。妃翠華西閣に至り舊愛を叙す。繼て太眞至る。妃東宮に歸り自ら樓車賦を作り以て意を寓す。太眞之を聞き上に訴へ妃を以て怨を宣言し罪み頗くば死を賜へと。上默然たり。他日上花臺樓に在り珍珠二斛を封し、密かに妃に賜はらしむ。妃受けず詩を以て使者に付して曰く、柳葉雙眉不久掃、殘粧和淚汗紅綃、長門自是無梳洗、何必明珠鬢裏簪。上詩を覽て悵然たり。樂府をして渡つて新都を爲し一斛の珠を致せしむ。安祿山闖を犯すに及び妃節を守り屈せずして死す。尸を温泉地東の梅株の傍に裹む。明皇歸りて夢に感じ、詔を命じて復して視、大に慟し自ら文を製し之を誄し、妃の禮を以て諱る。實者の妃の眞體を進むるあり。上詩を上に題して曰く、憶昔嬌妃在紫宸、鉛華不御得天眞、霜縉難似當時態、爭奈鴛波不顧人、之を讀んで泣下る。本文は多分唐の曹鄴の梅妃傳を其の傳記せられたるものであらう。

陳金鳳 元と王審知の婢であつたが、次子延鈞(嗣)を嬖し國王となるや金鳳を立て、后とした。嗣は金鳳の爲めに長春宮を築き長夜の宴を開き極楽羅漢を以て樂とした。金鳳は美人であるのみならず、又才女であつたらしく習俗の部載する處の樂舞歌も自ら作つたと稱せられて居る。茲に小吏歸守明なる者があつたが、弱冠にして美質玉の如く延鈞之を愛し歸郎と呼んで日に禁中に侍せしめた。百丁院使李可殷性機智巧あり。守明金鳳と昵み縷金五彩の九龍帳を造り、帳には九龍を織出し、延鈞を二龍として之を延鈞に進めた。延鈞は非常に喜んだが、間もなく風疾を得た。金鳳は守明と私し、屢は内に留宿して出ない事があつたので、國人誰となく「誰謂九龍帳、惟貯一歸郎」と歌つたさうである。今閩語に「歸郎室、窈窕體、九龍帳裡出新郎、郎單是應是龍王、應是龍王應是狂、龍王狂狂問鳳凰、鳳凰急、日萍試、鳳凰不如我、又又光榮際」といふのがあつて、新郎は歸守明即ち龍、龍王は王延鈞、鳳凰は金鳳を指して居る。我は金鳳の寵を奪つた李春燕の事を指して居るのであらう。「砂糖に蜜を和せたやうに中々仲がよい、九龍帳には新郎が居るが新郎は龍で龍王ではない、龍王は怒つて鳳凰に聴くと鳳凰は困つて涙を拭いた、其の鳳凰は我に敵はず元の李阿彌になつて了つた」の意。王延鈞が道士の説を信じたり、彩舫を泛べたり、長春宮や寶皇宮を造つたり、金鳳や春燕を嬖したり、歸守明を愛したり、何れも終を全うしなかつた所は小説の材料に恰好である(福州府志其他抄記)。

李春燕 皇城使李傲の妹である。傲嘗つて金鳳に怨あり。之が寵を奪はんとし盛に妹春燕を飾り立て延鈞に進めた。春燕宮に入つた時年十五、婉媚絶代、春燕の爲めに華麗な東華宮を造り、復た九龍帳に御せずといふ。延鈞の子繼嗣之を蒸す。(上を犯すの意)延鈞既に病み纏綿金鳳に因り以て春燕を求め、延鈞快々として之を與ふ。後繼嗣父を殺して自ら立ち春燕を立て、淑妃(福運通志には賢妃に作る)と爲し、後立て、皇后とした(福州府志其他抄記)。

七 福州語

福州語は福州人の常用する土俗語で、其の使用區域は一日行程内だと稱せられる程狭小なものであるが、Pictard は約五百萬人が使用して居るといひ、福州附近に於ては日常の取引は勿論萬般總て本土俗語を用ひて居る。數年來努めて標準語(官話)の普及を圖つて居るが、中々容易では無いやうに見受けられる。福州語は官話とは勿論近くの興化語、泉州語とも違つて居る。讀書音と口語音との別があつて口語音には適當な漢字の無いものが多いといはれて居る。稍鼻に掛り濁音音便が多くて聊かならず、川含臭いけれども語調が穩やかで亦捨て難き情調がある。

方言 福州語は中央から見れば方言で、中には奇妙な語がある見え、福州府志には特に方言の項を設け解説をして居る。以下面白さうなものを摘記して見る。(1)相謂つて僕と曰ふ(自ら稱して僕と曰ひ、何人と問ふに那僕と曰ふ、連江では人を稱して亦僕と曰ふ)。現在では自稱にのみ用ひ單に僕といはずに僕家といふ。奴は自己の卑稱、我は尊大の自稱である。我は衣冠族、僕は士農人の語であらう。(2)無を謂つて毛と曰ふ(顏師古曰く俗に無を謂つて毛と爲す。孟康曰く耗の音毛)。(3)父を謂つて郎體と曰ひ、子を謂つて曰ふ。(唐蘭況の詩郎體別因、吾解生汝、田別郎體、心摧血下、宋陸游の詩阿因略知郎體老、五難祖閩人父を呼んで郎體と爲す、既に子あり諸事已むべきを謂ふ也)。(4)母を謂つて嬭(奶)と曰ふ(通雅李賀母を阿嬭と稱す)。(5)慈ならざるを獸と曰ふ。(唐韻小獸大痴事を解せざる者、今は馬鹿の事を獸仔といふ)。(6)來を謂つて來と爲す(來の音來)。

血族關係の奇稱 閩人夫妻相稱して則ち「伊」(イ)と曰ふ。究むるに其の據る所を知らず、妻を稱して則ち「娘子」と曰ひ、母を稱して「娘」と曰ふ、或は妻を稱して「老媽」と曰ひ、祖母を稱して「媽」と曰ふ。盜し其の妻の雌威に懼れて此の稱呼を作れる也。妻夫を稱して則ち「官人」と曰ふ、則ち夫を稱して官と爲すなり矣。「長鋪」を以て其の夫を稱する者あるは或は烟花土俗白面脂、邦語女郎屋の「長鋪」「短鋪」(鋪は樓臺の義)を以て夜度費を計算するの語あれば、其の夫を稱して長鋪と爲すは永久の長鋪相離れざるの意を示す歟。(市聲日報民國十八年二月二日)。

城内語南音語 齊しく福州語ではあるが幾らか違ふものがある。城内の方は官話に近く、南音語は出音異い。以下面白さうなもの一二を摘記する。(1)一生買切りの下女を城は婆女、婆は下頭仔といふ。(2)青い豆を城は青豆、婆は豆青。(3)立派な住宅を城は城厝、厝は大厝といふ。(4)若い女を城は少奶、婆は奶といふ。城内で親といふと見解になる。(5)熱湯を城は開水、婆は滾湯といふ。(6)被れた事を城は辛苦、婆は酸といふ。

八 人 口

明代以後福州の人口増加の趨勢を左に表示する。

時 代	地 方 別	戸 數	人 口
明、洪 武 十 四 年 (一三八二年)	閩縣 侯官縣	合計 一八、〇〇〇	八、〇〇〇
明、正 德 七 年 (一五二二年)	閩縣 侯官縣	合計 一〇、〇〇〇	三、七〇〇
明、萬 曆 の 初	閩縣 侯官縣	合計 三、七〇〇	一、二〇〇
清、康 熙 五 十 五 年 (一七二六年)	閩縣 侯官縣 營前縣丞分轄	合計 三、七〇〇	一、二〇〇

清 乾 隆 十 六 年 (一七五一年)		清 道 光 九 年 (一八二九年)		清 光 緒 三 十 二 年 (一九〇六年)	
大湖縣丞分縣		閩縣		閩縣	
營前縣丞分縣		侯官縣		閩縣	
侯官縣		大湖縣丞分縣		閩縣	
合計	5,813	合計	5,446	合計	10,713
男	3,110	男	2,910	男	5,800
女	2,703	女	2,536	女	4,913
合計	5,813	合計	5,446	合計	10,713
男	3,110	男	2,910	男	5,800
女	2,703	女	2,536	女	4,913

民 國 十 七 年 (一九二八年)	
侯官縣	
福州市	
南 臺	3,280
東門外南門外各鄉村	3,280
城 內	2,280
鄉 墩	5,280
轄 屬	2,280
合 計	12,400
男	6,200
女	6,200
合計	12,400
男	6,200
女	6,200



第八章 福州の習俗

一 福州人の氣質

吾人が日常接して居る福州人なる者は上述の如く各種族に分れ、之を一括して考へて見ても上下の懸隔甚しく、彼等の間でも略しな者があるやうな有様であるから、無論一言に其の氣質を云ひ盡す事は出来ぬ。現代の福州人は大體之を三様に分け得る。(1)は名門(昔の衣冠族)の出身や、田舎に多くの財産を有する所謂土豪が福州に出て来て居る者等で、福州の上層を爲して居る。教養もあり禮儀に富み、儀禮に巧で如何にも支那といふ國は古い國だと思はせる感をも與へる。數は三種の中最も少い。(2)は工商に於ては屋號を有し、農に在りては自耕の田地を有し、服装に於ては多く長衫シヤンを着用して居る者で、兩極端には非常な差があるが、概して三本劍族の半は之に屬する。(3)は三本劍族の過半と地方から出稼に來た各種労働者が之に屬し其の數は最も多い。所謂月給取る者又は近代式教育を受けて居る者は(1)(2)の出身で、(3)には文盲の者多く、教養に縁の遠い者が多い。邦人が支那人を目して上品とするも下品とするも實に其の對象物に依るのであつて、之を一概に論斷して了ふのは危険である。之を要するに福州の地は新しいやうでも二千年の歴史を有し、由來兵燹虐殺等の凶事が少なく、交通の不便と四周の明媚なる風光との感化を受け、且つ儒風の影響もあつて氣風頗る温雅質樸であり、一面に迷信が強い。福州開港場の苦力達が精悍であつても到底他の開港地の惡慥れして居

るのとは比較にならない。

盜に関する考 (3)の連中が街上懸口の言ひ合をする位事は尋常茶飯事であり、盜に関する考も衣冠族とは違ふやうである。民國十三年の末國民革命軍が入閩せんとした時、之に先だち北軍の殿たる張毅の軍が福州に逃げ込まつた。福州の治安を維持して居た支那海軍陸隊は之を以て南軍に降れるものとなし、入城を拒んで南軍島に防ぎ、南軍共多少の死傷者を出したが、其の初は五角であつた。或日倉前山眞人廟に屯して居た陸隊の一部隊が出て行つたのを見た附近の(3)連中は以て退軍と爲し、我勝てりと廟内に闖入し、殘米、蒲團、靴、面盆等も品物である以上一物をも剩さず奇麗に持去つて了つた。後から歸營(廟)した兵隊が見て愕然之を久うすると共に、怒心頭に發し近所合壁は勿論、通行人の懐まで検査して賠償に餘あるものを捲上げ、其の儘擧げた實例がある。由來彼等の解釋に依ると、拾は盜ではない、持主に發見されるれば其の品を返せばそれで本々であつて、何等苦情の云はるべき筋合はない、盜は相手が明瞭に否定しても尙且拾ふのが盜である。故に監視が無かつたり、有つても鈍かつたりすれば當然拾はれるのである。此の極端なものが沿海部族の行爲で、日本汽船錦江丸、支那汽船新濟の事件も此の行爲の發現である。衣冠族其他上流の住宅が二重にも三重にも門があり、高く土壁又は煉瓦を以て圍まれて居るのも古くからの自衛方法の一である。

面子の觀念 此の觀念は特に強いが、其の面子も (1)(2)で異なるやうである。(1)には(1)の面子があり(3)には(3)の面子がある。懸口の中に頗る通達な語があるのは本來相手の面子を打倒するのになつて、相手を喜ばせる爲めではない。一針直に敵の急所を刺す語であるのだから、相手を黄口兒視するは勿論家族道徳、聘金、貞操と關係がある。私はまだ聘金の風のない衣冠族がかかる卑語を發したのを聴いた事がない。冠婚葬祭が極端に虚禮化したのも矢張り面子の爲めであると解して差支はあるまい。

お早う 日本で朝「お早う」と挨拶するのは「貴方は健康で中々早起である御健康を祝します」といふ意味であらう。西洋の Good morning は「貴方の爲によい朝である事を祈ります」或は「神は貴方によい朝であらしめ給ふであらう」の意であらう。福州では此の意味の挨拶がない。「食勢否」即ち「朝飯を食べましたか」の意である。朝の訪問客が何遍もかう云ふ所を見ると「お早う」とも違

ふやうであるが、兎に角「お早う」に當る挨拶語はこれだけで外にはない。この語は泉州語系でもさうである。如何にも食人生を表現して餘蘊なしである。尤も途中で遇ふとかうは云はぬ。「去佐那」と云ふ「何方へ」の意味である。この時、最初顔を上げ二度續け様に軽く唇に動かさぬと妙味が現れぬ。

不變の屋賃 苟も一度腰を据え付け滞りなく屋賃を拂ふ以上屋賃は決して上らぬ。何時まで経つても元の儘である。是れ家主と借家人との信用取引の成立であつて他國では見る事が出来ない。給料も亦借主と借人との信用關係が成立つた以上何時までも元の給料である。如何に物價が騰貴しようが不關係である。尤も端午、仲秋、数年の三期又は借人の冠婚葬祭の時の前貸は別である。故に給料は不變であるから尻毛を切つたり下駄を履いたり、勘定の單位を運へて差額を歸けたりする事は當り前で、借主は格別咎め立をしない。屋賃も借主が變ると一足飛に五十弗が百弗になつたりする。

火事と邸の閉鎖 日本では近火があると正門に高壁を上げ形式ではあるが「々々見舞客を應待する。所が支那ではかかる場合には堅く門を鎖し決して他人を入れない従つて見舞客も來ぬ。日本流にすると火事泥が續々入來するからである。萬一自分の家が焼ける時でも矢張り門を鎖し決して他人を入れない。火事が済んでも其の儘である。家族が多くて手が足りる關係もあるが、主として火事泥を防ぐ爲である。實際支那の家庭は上層になると主人は一人だが夫人數人、親族の一部、一生買切の下婢、輔班、下男、厨夫、給仕、執事、護兵及び其等の家族で、一つの邸で一部落の頭數がある。

煙草の火 日本では高格の人に煙草を燃やして煙草に火を付け平氣で居るが、支那では士君子の忌むべき事になつて居る。尤も家來なら別物である。この習俗の因つて起つた所以は恐らく長煙管の爲めであらう。此は長さ二三尺もあつて、二人掛りでないと喫へぬ。であるから附添の家來は即ち煙管係になるのである。同格の士を煙管係にするのは成程失禮であらう。

先生 旅の人には招待状に〇〇先生と先生の號稱を附けられて大に恐縮する人があつたが、先生にはそんなに角張つた意味はなく單に〇〇様位の所である。英語の *Miss* に當る語である。英語の名刺には夫と妻とを區別する爲めに *Mr.* や *Mrs.* を姓の前に付ける

が、外國で勉強して來た福州の婦人からよく一郎の郎、俊男の男は *Mr.* の事かと聽かれる事がある。

防火壁 民衆節比の街坊では表から見ると何でもないやうだが、内部には縦横に防火壁が築らされてある。故に火事が起つても一局だけで済み類焼するやうな事はない。地震が少い關係と永い間の經驗から出た消極的の消火方法である。此の防火壁が往來を横きる所には必ず鐵扉の門がある。火事の時はこの扉を鎖し、扉下は辛うじて人が這つて出入し得られるやうになつて居る。

マルコ・ポーロの福州人觀 ポーロは其の紀行文に於て特に福州人を精細に觀察した譯ではないが、「住民は偶像崇拜者である」といふ事の特記して居る。佛教に關する事か、現時の神事のやうな事にか、兎に角元時代特に旅行家に目に著く程偶像を崇拜したものと見える。尙後は上游都寧府附近の山地に人肉を食ふ蠻族の住んで居る事を記して居る。

二 服 飾

男子の中流以上は洋服の者もあるが大抵「長衫」を着て居る。平常短衫を着て働いて居る者でも改まつた場合には必ず長衫を着用する。長衫を持たぬものは全部下層の人間であるとして間違ない。又柄にもなく長衫を着て居る者を聞かば「金著纏」といふ。長衫には單衣、袴、縮入、毛皮裏とあつて冬期は専ら毛皮裏を用ふるのだが、貧乏な者は單衣の長衫を六七枚も重着する。形は前清からのものだが今は袖も小さく且つ短くなつて輕便になつた。色柄は一定不變のやうに見えても矢張流行がある。

以前は長衫の上に「馬褂」を着たのだが今は廢れて袖の無い「背心」(俗稱「甲仔」)を用ひ、大抵黒色で鈕は包み鈕である。紳士は此のポケットに細い金鎖を下げ、頭に支那型の帽を戴くのを通とする。

支那帽は人の前でも室内でも脱がないのだから昔の冠に當る譯だが、寒い中だけ用ひて少し暑くなると使はない。故に一種の防寒具と見做してよい。夏はどんなに暑くとも帽子類は一切被らず裸頭の者が多く、大抵團扇を翳して歩いて居る。

女子の服飾は流石に男子と違つて流行が激しい。色合柄合ばかりでは無く、形其のものが變化する。以前は「衫」(上衣で曲蹄の衫は長い)と「褲」(ツボン直接着用する)であつたが、今の若い婦人は殆んど全部「鮮衣」(男の長衫と同じ形で長さは膝位迄)を着「長襪」(跳舞襪ともいふ長い靴下)を穿つやうになり、加ふるに髪は斷髮(俗稱剪髮)になつた。

現代式運歩 李督軍時代に婦女子の種が漸々短くなつて行くので、布告を出して短くするのを禁じた事があつたが、遂に元とやうに長くはならなかつた。國民政府の治下となつて上海から此の風が移入され、僅かに一年に足らずして福州婦女子の風を變した。髪飾、耳環、腕環を用ひざる鮮衣長襪の風は即ち婦人の開放を意味するのださうだが、廣い意味から考へて往時の纏足と同じく本來は男子の欲求に基いて居るのであると思はれる。鮮衣長襪の婦人へ今では未婚か既婚かは不明になつたが踵の小さい靴を穿き、楚楚として運歩を進める姿は随かに男意を動かし且つ現代的である。帽子を被る婦人は極めて少い。鮮衣には長衫と同様單衣、袴、綿入、毛皮裏とあるが、毛皮裏を除き大抵五十弗も掛けると立派な一揃が出来る。絹地には綢緞類其の他種々種類があるが大抵人絹が雜さつて居るさうである。

斷髮と床屋 斷髮は髪飾もなく安上りの様に思はれるが實はどうして理髮代に中々かゝるのである。理髮代は男子のより高く之に髪を乾かし代や練代を入れると相當の額に上り而かも月二回はせねばならぬ。婦女子が斷髮をし始めてから福州の床屋は急に立派になつて来た。



近 代 福 州 婦 人

三 年中行事

福州各家庭一年間の習俗行事を列記して見る。括弧内の月日は無論陰曆である。

正月 元旦の行事で又新正とも云ふ。前夜の徹夜の騒ぎで未明から爆竹を鳴らし、満潮時に神を拜する。「五鼓の後嚴かに應字を潔め酒果を陳ね楮幣を焚く」といふ風は漸次城内の方から廢れて行く様子である。

貴花 除夜から瓶に飯を盛り之に貴花や箸を立て金銀箔紙を列べて置く。貴花には日本の所謂「ツギ」(常盤木の名)を用ふるが本来の意義は日本の門松、西洋のクリスマスツリーと同じ事である。

休業三日 元旦から三日間業を休み賭博の他の遊をするのが普通で、用が無い時は寝て居る者もある。以前は特に闖行されて元日の如き入一人通らぬ事があったが今は元日でも辻事があり、店も半開の態で商賣する者もある。元日は掃除をせず二日になつて掃除をする。人に遇へば南無では「發財」といふが、城内では「恭禧」「拜年」といふ。

接神(正月四日) 竈の神は十二月二十四日に天に往つたが、此の日に復た歸つて来る。それで竈の神其の他の家神を迎へる。祭の形式は元日のと大差がない。

上紙(普通正月十一日) 公婆(祖先)に鶏、猪、米粉等を供へ、何れも其の場で食べられるやうに料理して置く。妻の實家から燈を贈つて来る。燈は灯即ち丁(人)で燈多ければ即ち人が殖える事となり縁起がよいとしてある。

元宵(上元とも云ふ正月十五日) 娘奶(臨水陳太后)の誕生日で、夜寢室内で祭をする。娘奶は産の女神である。兒童

が燈の行列をする。

初九(正月二十九日) 朝糰粥を神に供へてから家族一同之を食べる。親戚の者(明九は九歳、十九歳、二十九歳等、暗九は十八歳、二十七歳、三十六歳等)に糰粥と太平(鴨蛋)とを贈る。

二月二(二月二日) 糰粥を食べる、燈を焼いて了ふ、書房の授業が始まる。

清明(二十四節氣の一) 祖先の墓を祭り紙(シツシツ)をする。門口に、挿柳をする。

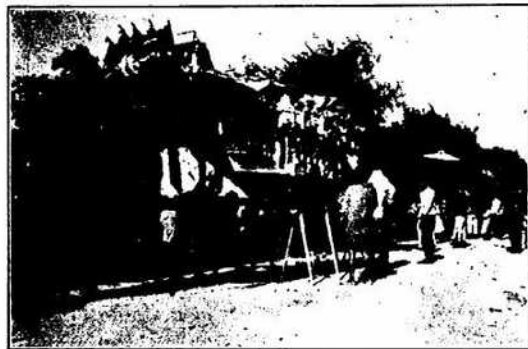
三月三(三月三日、昔の上巳とは一致せず) 門口に齊(土俗字に齊)を挿す。

端午(五月五日) 門口に菖蒲(元との菖蒲で日本の菖蒲より形は小さく、石菖の大きいやうなもの)と艾とを挿す。粽を食へ、雄黄酒を飲み、黄烟を放つ。一日から此の日まで、閩江西湖等で扒龍船(競渡といひ曲蹄及び田舎の者が漕ぐ)をする。

競渡 所謂扒龍船(パシロウセン)を龍船といふ。五月一日から五日まで之を爲すのであるが、大抵一日はせずに二日から始まる。五月に開がある年は同様の事を二回する。龍船は長さ三丈餘、幅五尺位五色を以て龍の様に塗り、舵は長大な「尾舵」である。船首に旗を懸け、漕手二十八人又は三十二人、打鼓一人、打鑼一人、舵を執る者二人、船首に旗を持つ者二人合計三十四人乃至三十八人、掛聲勇ましく扒を以て漕ぐ。船首の旗持は大抵廟の幹事、漕手は船夫労働者で別に賃金は貰はず、酒肴を饗せられるだけであるが、舵取二人は必ず船夫で賃金を貰ふさうである。費用全部は廟から出す。臨江の廟には大抵此の龍船を備へ、目下三十餘艘あり。臺江と西湖で競渡を行ふ、一は南寨の人が見物し、一は城内の人が見物する。決勝點は一定せず随時決めるらしく旗持が萬事を指揮する。今の所最も強い龍船は臺江では三縣郷の壽勝魁五帝廟の船、西湖では鴨嘴洲の白馬王廟の船ださうで、前者は乗組が全部船夫、後者は船夫工である。競渡は屈原の故事から起り、唐朝年中行事の一になったが、今以て減りず毎年中之盛に之を行ふ。



扒龍船の競渡



龍船

福州渡の始は國王王延鈞(僞)(九二八年—九三五年)の時からだといふ。延鈞は端午の日、練鵞萬を西湖に浮べ、每船官女二三人を載せ、自分は大龍舟に乗つて之を觀たさうである。此の時龍船陳鳳樂遊曲を作り宮女に合唱せしめたといふのが、今尚采蓮歌となつて残つて居る。謠の文詞は古雅で、一方言をも交へない。即ち「龍舟搖曳東復東、采蓮湖上紅更紅、波瀾瀾、水潏潏、奴隔荷花路不通。西湖雨湖湖綠舟、青浦紫蘆滿中洲、波潏潏、水悠悠、長春君王萬歲遊」と歌ふ。延鈞は各郷にも令して端午には龍舟を出さしめた爲め、民間では此の曲を唱して各家より金錢を醸出せしめ之を采蓮と云つた。今の所謂采蓮は乞食の一種で唱ふ歌も違ふやうである。

七夕(七月七日) 田舎では乞巧と云つて庭に鍼や絲を並らべ仕事をしながら星を眺めるが、市中にはない。唯蠶豆を食べるのが一致するだけである。

中秋(八月十五日) 元宵は娘奶の生れた日。中秋は死んだ日。故に娘奶廟では祭をする。月餅を親戚に贈り果物を神に供へ宴を開く。兒童は瓦片を拾つて塔を造り又は泥土を以て築山を造る。財あり了ある者は、排塔を爲す。

重陽(九月九日) 山(大抵大廟山又は烏石山)に登り紙鶴(タコ)を揚げる。

冬至(二十四節氣の一) 清明と同じく重大な節日で、前夜俗に「糝丸」といつて團子を公婆に供へ、泥人形を傍に飾るのだが、家族集つて「丸」を作る事が儀式の本體である。糝丸の時主婦は盛装して縁喜の佳い事を云ふ。團子は冬至の朝之を食べる。近來丸は亡に通ずるが故に「糝糝」といふやうになつた。糝は丸の周圍に「キナコ」を附けたものである。

祭 禮(十二月二十四日) 一家の主宰たる司命眞君(俗稱灶君)は夕刻上天して玉皇上帝に其の家一年間の善惡を報告

するが故に、未だ出發せざる中に甕前で之を祭り、成るべく好い話をして貰ふ。俗に之を「醉司命」又は「上天講好話」といふ。

分年(十二月二十七日) 下界爺即ち冥土の鬼の頭分に糝を供へる。此の時は大抵門口に脚のない机を置く事になつて居る。糝は正月になつてから曲踏に與へるが、自分達が食べるのを本體とする。

做晦(十二月末日) 公婆に糝糶其の他の御馳走を供へ家族集つて之を食ふ。庭で火炮(薪の細いものを井樓形に積む)を焚く。

做年 十二月十六日から十二月末日までを云ふ。借金のある人は做晦には隠れ御馳走も効かに食べる。掛取りは元日の朝になつても提燈を持つて居れば差支ない習慣である。

四 神 事

共同して行ふ神事區域は行政區域とも異り又實際に錯綜して居ることもあつて的確に云ふ事は出来ぬが、大體、戸、社、境、庵の順序に大きくなつて行く。之を行政區域の戸、郷村、區、縣、省に當て籍めて見ると郷村が境、區が庵に當る。之等神事區域には夫々主宰の神があつて其の神の祭事は夫々の區域が負擔施行する。

戸の主宰の神は甕の神即ち司命眞君俗稱灶君と其の夫人俗稱灶媽の二位であるが、別に福德正神(土地公)、舍人(娘奶の子又鹽通三舍人ともいふ)、娘奶等の何れかを祀り、福德正神は主に商人、娘奶舍人は普通の家、娼家は老郎(馬元

帥の弟)、泉州人は大概郭聖公を祀つて居る。灶君は職名が司命眞君で、神其の者は年に更迭するのださうである。

社は即ち分境で廟はあつたり無かつたりだが、小區域の地名に何々社と用ひて居る所が多い。社は行政の區域ではな

い。境は大抵郷村に該當し必ず廟がある。祭神は娘奶か大王(姓には李、何、陳等あり、前者は女神、後者は男神、兩者の間には何の關係もない)を普通とするが、又漢國越王を祀つて居る所もある。何れも瘟疫の神ではないから傳染病とは關係がない。

庵は廟の名で濶ともいひ區域の名ではない。庵に祀つて居る神は五帝(張、鍾、劉、史、趙の五姓)で福州には九庵十

- 一 濶がある。
- 九庵十一濶 復初庵(海防前)、白龍庵(倉邊前)、九福庵(六柱橋)、萬壽庵(鳩尾)、崇聖庵(倉前)、一眞庵(吉祥山下)、廣慶庵(蔡洲)、明眞庵(梅塢)、龍津庵(下渡)。
- 東濶(東門)、西濶(西門)、南濶(南門)、北濶(北門)、湯濶(臨門)、水濶(水部前)、井濶(井樓前)、芝濶(開元堤)、嵩山濶(東嶽)、大細濶(橫山)、玉山濶(衣錦坊)。

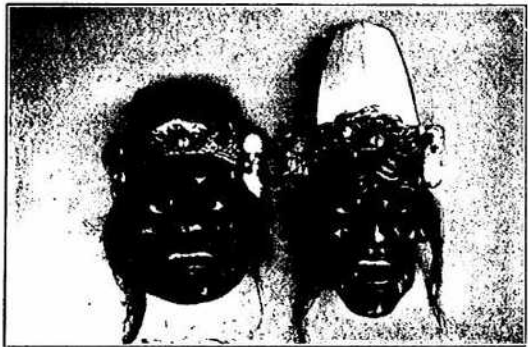
五帝は瘟疫主宰の神である。福州は亞熱帯の地であり且つ醫術衛生が發達せぬ爲めに一般が非常に信仰して居る神である。毎年傳染病が始まる頃になると行列を作つて出遊する。普通長大矮小の二人形が少許の供を連れて街路を濶歩するが、あれは五帝の家來で五帝其の者ではない。

五帝の家来 非常に多くあつて大抵薩摩の者が考へ出した者のやうであるが、萬更出鱈目でもないやうである。願掛の係には良風司、生死の係に陰陽司、刑罰の係に掌接司、食糧の係に水菜司、橋出海の時の舟の焼場の係に巡場司、財政の係に掌庫司等があり、一庵に悉く之等の司が揃つて居る譯でもない。或庵は水菜司で有名、或庵は良風司で有名といふ具合である。五帝の護衛兵格のものに俗稱七爺八爺と稱する者があり、一班が范謝、二班が史周、三班が高李何れも前者は長大、後者は矮小で、よく巡遊の際姿を現はすけれども其の他位は低い。此の他に柳鎖といふのがある。犯人の看守で姿は長大である。之等家来の總監督は總管と稱するもので、此の姿も長大である。良風司は土製で輿に昇れて巡遊するが、陰陽司以下柳鎖に至るまで五帝の家来は全部塔骨として街路に現はれる。故に臺灣や日本内地で有名な范將軍、謝將軍は即ち塔骨の一種、本場の福州では此の他に塔骨が數多くある譯である。

塔骨 骨組みを竹で造り之に着物(明代の衣服あり、又清代の衣服もある)を着せ、手、頭は木偶で、膊の邊に穴があり、こゝから中に入つて歩く者が覗くやうになつて居る。元と此の風はなく何れも土製で神輿に乗つたものであつたさうだが、それでは面白くないといふので此の塔骨が出来たのであらうと思ふ。塔骨の顔は夫々異つて居るが、近來は漸次緩和な相に變りつゝあるさうである。

五帝に對する信仰 前清林枝春が閩人の習俗を論じて居る中に「其の尤も尊くして貴き者を五帝と曰ふ。官廳するも信せず、必ずや之を帝に質して後始服す」とあるに依つても想像が附く。五帝の行列には夫々擔ぎ物がある。其れを擔ぐ者は大抵希望者で日飾を取つてするのではない。豚の血を入れてある福桶の如きは願掛けの者より抽籤で選抜する事になつて居るが、大抵の庵では五六百人位あるさうである。日頃面識のある相當の紳士が行列中の何者の中に交つて鹿爪らしく線香を持つて居るのに出遇ふ事がある。今の處尤も信仰されて居るのが五帝と娘坊で、大王の方は稍廢れ氣味のやうに思はれる。田舎の鄉村には行政の力が及んで居らず、鄉村は萬事自治で始末をして居り、之を統するものが遠慮である。國民政府の治下となつてから自治所(役場)を設けた所もあるが、まだまだ前途は遠慮である。

五帝廟と武廟 武廟は關聖帝君即ち關羽を祀つて居る廟で、本來五帝とは何等關係がないのに今五帝廟と一緒に居る所が多



七爺八爺の面

い。それは前清時代に五帝は迷信であるから廢さうとした事があつた。其の時各庵の氏子は吃驚して武廟に改めた事がある。爾來五帝の廟と武廟とは混同して居る。

縣主宰の神は城隍で一縣一神であるが、灶君と同様毎年更代する。故に城隍の神は一位であつても神其の者は年々代るのである。次年にどの神が城隍の神になるかは拍傾(巫)が扶乩の方法で決定する。之等の神は生前皆福州の大官であつたさうである。

省主宰の神は泰山で出遊の際は天子の行列に準ずる。福州では東門外にその廟がある。

神事區域の判明せぬ神 上述した所は全般的に見た神事區域と祭神とに就いて述べたのであるが、上述以外各種の職業關係者や一般信者を基礎とし神事區域を有たない廟がある。故に盛んな神になると此の方が遙かに神事區域より廣大な範圍を占める事がある。

孔子廟 文廟とも云ひ孔子を祀つてあつて福州には閩縣前、侯官縣前、學院前の三個所に在る。孔聖誕日は陰曆八月二十七日で元は盛大な祭典を行つたが、國民政府治下となつて衰へた。陰曆朔と望及び孔聖誕日には開廟する。

文昌祠 文學の神文昌帝君一名梓潼君(北天の星)を祀つてある祠で文昌宮とも云ふ。科擧の制廢されてから衰へたが、書房の先生は崇信して居る。東街にあるのが有名である。

武廟 關羽を祀つてある廟で今五帝廟と混同して居るが、茶亭、宮巷、龍嶺頂等に在る。

尚書廟 興化の人宋末の忠臣陳文龍を祀つてあり惡魔抜ひの神である。福州では水部(城内)、萬壽(大橋頭)、竹林

(三保)、龍潭(四保)、新亭(鳳岡)、陽岐(南臺島の西端)等に在り、神事區域を有たないが巡遊の區域は定まつて居る。

陳文龍傳 興化の人初名于龍、咸淳四年(一二六八年)廷對第一、度宗其名を易へ文龍と爲す。茶中凡そ建白有れば皆先づ稿を賈似道に呈せるに文龍獨り之を爲さず。襄陽久しく元兵に圍まるも似道日に浮梁を恣にし竟に襄陽を失ふ。文龍上疏して其の失を極言し范文虎、趙澤、黃萬石を罷めん事を請ふ。似道大に怒り鞏固をして之を効罷せしむ。未だ幾もなく元兵東下し文虎先づ降り似道の兵潰え、潰遁る。帝文龍の言を用ひざるを悔ひ起て左司諫と爲し累遷參知政事に至る。張世傑、文天祥の帥俱に敗れ、元兵已に杭北關に至る。德祐二年益王御を稱し福州に即位す。復た文龍を參知政事と爲す。漳州昨くや文龍固廣宣撫使となり之を平げ、興化石手(石擲け)の軍叛するや知軍として之を平く。元兵福州に至り益王廣州に趨く。かくて建寧泉福皆元以降る。文龍民兵を發して自ら守り元兵の爲めに執へらる。降を勧められ答へて曰く、宋失徳無し。我家世々國恩を受く。萬々降る理無しと。遂に械送されて杭州に至る。途食せず、杭に至つて餓死す。西湖の智果寺に葬る。文龍の母福州の尼寺に繋がる。曰く、吾、吾が兒と同じく死す。又何ぞ恨まんやと、亦死す。詔して忠肅と謚し廟號昭忠を賜ふ(莆田縣志抄記)。

娘奶廟 同廟は各村に祀られて居る。夫々神事區域を有つて居り、村内協同して祭典を行ふが、又一般婦人から特に信仰され神事區域を超越して居る廟もある。現時「請花」の顯應善しいと稱せられて居るのは塔亭の娘奶廟である。

娘奶の傳 閩語母を娘奶といふ。此の神が一般から娘奶と稱せられるのは産の神であるからである。其の傳に就いては區々である。(1)順澤宮、又の名龍潭廟、縣(古田)東十里臨水洞に在り。神姓陳氏、閩の下渡陳昌の女、名は靖姑、劉祀に祭し卒す。年二十四。臨水に洞あり巨蛇を産し時に氣を吐き控擲を爲す。一日朱衣の人あり、劍を執り白蛇を索めて之を斬る。乃ち其の神たるを知る。郷人爲めに廟を立て洞に祀る。控擲樓あり、宋淳祐の間、順澤と賜稱し、元末重修學士張以寧祀を爲る。明徐勝龍潭廟詩に「臨江遺廟祀神廟、少女宣靈五代年、蟬斗縱橫堪下出、妖蛇降伏井中眠、春秋野老更細細、伏魔村童送紙錢、苦滿古碑行客吊、粧樓無主鎖寒烟」

(閩都記)。(2)臨水夫人の廟は東南坊に在り、今移して東安坊山仔尾に在り。乾隆五十一年里人葉厚榮を鳩めて建つ、神名進姑。福州の人陳昌の女、唐大歷二年(七六七)生る。乘雲通幻、劉祀に祭し孕みて數月、大旱に會ひ胎を脱して雨を祈る、尋て卒す。年僅かに二十有四。訣に云ふ、吾死後必ず神と爲り人の疾難を救はん。建寧陳清受の婦懷孕し十七箇月産せず、神形に見れ之を療す。蛇數年を産し其の婦安きを獲たり。古田縣臨水鄉に白蛇洞あり、巨蛇氣を吐き控擲を爲す。一日郷人朱衣の人の劍を仗し蛇を索めて之を斬るを見る。其の姓名を語れば曰く、我は江南下渡の陳昌の女也と、遂に見えず。乃ち廟を洞上に立つ。凡そ禁懸却殿、祝慶祈禱、禱あれば必ず應ず。宋淳祐の間、崇福昭惠慈濟夫人に封せられ順澤と賜稱せらる。復た天仙聖母黃慶普化碧霞元君に加封せらる(寧德縣志卷五)。(3)夫人の名は靖姑、古田縣臨水鄉の人、閩王滿の時夫人の兄守元、左過にて山中に隱居するあり。夫人常に之を簡し遂に秘傳符箓を受け鬼神を役使す。曾て永福に至り白蛇の怪を誅す。禱封して順懿夫人と爲す。後逃れて海上に處り其の終る處を知らず。(林退庵隨筆)(4)姓は陳、名は靖姑、父を陳昌といひ福州下渡の人、年四十に近く家貧富厚郷中稱して長者と爲す。母は葛氏男女無し。天祐二年(九〇五年)正月十五夜靖姑を生む。八歳の時教讀、十三歳に至つて詩詞歌賦皆通す。自後香閣に在りて織針を運ぶ。靖姑年得花の如く又玉に似たり。十六歳の時古田縣離城五里積庄村の教諭劉通の子劉祀と婚約成る。祀時に靖姑と同年才學あり。靖姑既に佛を奉じ嫁するを肯せず。祀後に羅源巡檢に選まれ單身赴任す。靖姑は閩山(所在不明福州の中に在りといふ道教の正道)の法王善真君の門に入り法を學ぶ事三年、師別るゝに臨みまだ教誨の術を授けず。暫く住めて之を教へんと云ひしも靖姑遂に歸郷す。祀古田に於て難に遇ふ、靖姑之を助け次で同復し、祀に従つて羅源に復任し、任滿ちて古田に歸る。

永和二年(九三六年)閩中大旱あり、田苗盡く枯れ五穀收むるなし。閩王之を愛へ寶皇宮の法師陳守元(靖姑の從兄)に命じ雨を乞はせるも效なし。閩王怒り七日以内不甘霖の下降を見んば守元を燒死の刑に處すと云ふ。守元大に驚き古田に赴きて靖姑の來閩を請ふ。時恰かも靖姑誕誕中なりしが從兄の死を坐視するに忍びず、乃ち下渡に歸り胎を墜して房中に置き、自ら白龍江(今の鴨欄洲の邊と稱す)に赴き、髮を散らし劍を舞ひ閩山の正法を施す。間もなく狂風大雨す。身體披靡し古田に至り卒す。生前救濟の術

を學ばざりしを悔ひ、死後専ら救済に力を致さんと云へりと、神史たる省誌臨水傳の抄記。此の説は一般福州人に信ぜられて居るが年代に合はぬ所があり、永和二年に福州が大旱であつたと正史に見えず、且つ總てを餘り道教化して居る。靖姑の生れたといふ屋敷址は今紅橋といつて下渡に在る。周圍に塔だけ懸らし中は空地で丁寮に取扱はれて居る。建寧府志には宋の時浦城縣の徐清叟の縁が難産で苦しんだが幻形が出て救つたので、其の姓里を問へば但だ古田の人陳姓であるとのみ答へて委しく分らなかつた。後保清叟が福州の知事になつてから人を古田に派して調べさせて見ると、廟中に像があつたので始めて臨水夫人が現はれたのであると悟り、廟に請うて封號を加封したとある。

按ずるに娘廟は古田縣臨水郷が最初で、それから烏石山、塔亭と出来たものであらう。宋初まで福州には北支那の娘廟即ち子授けの神廟に該當するものが無かつたので、當時の人心が自ら陳靖姑を産の神とし、更に進んで子授けの神といふ風に道教化したものであらう。諸説區々たる陳夫人傳にも難産を救ふ神驗は後になつて流布された事であり、況して子授けの神徳に至つては一も述べられて居らないのに、現時は子授けの神として非常に信仰されて居る事は以て此間の消息を證明し得ると思ふ。

諸花 娘廟に參詣する婦女子の祈願は専ら諸花に在る。彼等が一般に信じて居る處に據ると、婦女子の産兒に關する運命は各自夫々白花橋(所在不明)に花換(花の樹の意)を有つて居り、男を産む者は白花、女子を産む者は紅花、子なき者は鐵換(無花の樹)と決定して居る。之を知る者は唯だ神媽(女巫)のみであるが、娘廟に祈願すると鐵換にも白花を着ける事があり、紅花も白花に變る事が出来る。此の祈願を諸花と云ひ正月及び八月の十五日の宵には娘廟は之等婦人の參詣者で充滿する。娘廟の神案を助ける者に干姉妹あり、部下に三十六婆がある。舍人廟の神たる舍人は娘廟が墜した胎兒であるが、娘廟之を育て、冥鬼との聯絡を執らせる事にした。眞人廟の神たる張沙、柳源の二眞人は許眞君の弟子で娘廟と同門である。閩俗母又は女に頼つて衣食する徒眾を「娘廟祝」



廟班魯



像神の家--班魯



像神の班魯

(娘初廟守)といふ。

魯班廟 大工の神魯班を祀つて居る廟で、一に魯賢祠ともいふ。現時此の廟は世の尊信を失ひ大工も亦信仰しないやうである。洋中亭の魯班廟は相當に廣大だが荒廢し、梅塲明眞庵の隣の魯賢祠は何時の間にか米屋に占有され、民國十七八年の市區改正に廟の前面を失つて了つた。

五 迎 年

正月中郷村が行ふ神事を迎年といひ、正月以前に行ふのを神誕又は半丈といふ。迎年の日取は村に依つて異なるが、神像を昇き出し行列を作つて巡遊し、演劇を催し、爆竹を鳴らし親戚を招待する。巡遊の區域は神に依つて一定せぬ。最も遠くまで巡遊するのは陳尙書公で南臺一帯を巡遊する。回廟の最も後れるのは龍臺護國公で二三箇月後に回廟する。最も奇抜な巡遊は吳顔翁で其の神輿は十數歩進んでは數歩退き恰も醉歩蹣跚の狀を示し、輿を昇ぐもの何れも大眞面目で之を爲し、區域内を一巡するのに徹夜して尙餘地ある有様である。吳と顔とは王審知の部下であつたが、酒豪で屢失策をするので酒を禁ぜられ、唯元宵にのみ之を許されたと傳へられる。迎年及び半丈の風は漸次城内から廢れて行くやうに思はれる。何しろ一軒の醸金が少くも數回を要するのであるから、如何に面子に拘泥しても實際は遣り切れない様子である。神事の祭典には必ず演劇が附物になつて居るが、是は人間が好きなのであつて神が好きかどうかは分らぬ。多くの五帝廟は巡警の屯所として用ひられ久しく祭事しなかつた處、巡警中病人が出て仕様がなといふので此の頃祭

典や演劇を復活した。迎年の日取は次の通りである。

期日	神
正月十夜	陳娘奶
正月十一夜	守王大王爺
正月十二夜	吳太平爺
正月十三夜	陳尙書公
正月十四夜	鄭娘奶
正月十五夜	泰山爺
正月十六夜	白馬王
正月十七夜	孝九王
正月十八夜	護國公
正月十九夜	
正月二十夜	
正月廿一夜	
正月廿二夜	
正月廿九夜	
正月三十夜	

六神誕

神の誕生日に祝をするといふ意味で神誕と稱するのであるが、土俗では半丈といふ。即ち各郷村の鎮守祭であつて演劇が催され、區域内の各家では饗宴を張り爆竹を鳴らし、總て迎年と同様であるが、神輿の巡遊はない。又神事區域を有たぬ神も夫々其の廟に神誕があつて年中殆んど間断なく福州の何處かに祭典があると見て大差はない。

半丈の意味 何故に半丈といふのか不明であるが、半丈は五尺で官話の有吃と同じ音である。半丈には饗宴があるので即ち有食であるから半丈といふのだと解する者もある。

福州の神誕表

陰曆月日	名稱	日別の區別	祭神	所屬	廟の所在	祭の方法	参加者	備考
正八	嘉濟誕		嘉濟鬼王	佛	各寺	食齋	參詣者	饑鬼の王
正九	玉皇誕		玉皇大帝	道	城內于山	齋	各家庭	道教最高の主裁者
正三	關帝誕		關聖帝君	神	南臺龍旗頂	供饗演劇	神區內	關聖帝君即ち關羽たり、正義の神
正五	媽祖誕		臨水陳太后	神	南臺塔亭街	供饗	各家庭	兒提け安産の神
正三	帝君誕		文昌帝君	儒	各文昌祠	供物	各書塾	文學の神、文昌星をいふ
正二	土地誕		福德正神	佛	南臺河墘街	演劇	大商店	半丈なり、商賈の神
正九	觀音誕		白衣大士	佛	鼓山湧泉寺	食齋巡遊	各家小兒庭	巡遊は十年一回

二二	元帥	馬元帥	南臺下渡	演劇	參詣者	老武神、泰山の部下 半丈なり
二一	廣澤尊王	郭聖公	南臺保福山	演劇	泉州人	
二〇	玄帝	玄天上帝	南臺北臺	演劇	北天の神	
一九	天師	張道陵	東門外東嶽	演劇	所謂閻魔大王なり、死亡者の裁判官 道教の開祖	
一八	大天	張姓の大王	江内南臺	演劇	各神區内	半丈なり、田舎に多し
一七	玄壇	正趙天君	南臺舖前頂	演劇	各神區内	玄帝の部下、王天君と同格
一六	媽祖	天上聖母	南臺舖前頂	演劇	航海の神	
一五	仁聖	仁聖皇帝	東門外東嶽	演劇	各神區内	嶽帝廟、泰山なり
一四	城隍	城隍爺	城隍廟頂	演劇	各家庭	嶽帝廟、一名地方神
一三	如來	釋迦佛	城隍廟頂	演劇	各家庭	漚佛會なり
一二	仙祖	福德正仙	城隍廟頂	演劇	各商店	福德正神とは異なる、半丈なり
一一	諸仙	二十四位	城隍廟頂	演劇	各商店	呂洞賓、純陽八仙の一
一〇	公爺	五帝爺	各寺	演劇	各商店	元と豚の屠殺者、後主祀となり、最 後に改心す
〇九	關帝	關帝爺	南臺龍窟頂	演劇	各神區内	所謂五帝神姓張、鍾、劉、史、趙の五 半丈なり
〇八	公爺	關帝爺	南臺龍窟頂	演劇	各神區内	普通丁字路に祀られて居る
〇七	公爺	關帝爺	南臺龍窟頂	演劇	各神區内	長壽の神
〇六	公爺	關帝爺	南臺龍窟頂	演劇	各神區内	願懸ける者名、拜香の對象

一九	觀音	白衣大士	披山、于山	演劇	各小兒	小兒保護の神
一八	將軍	協惠將軍	西門外西山	演劇	小兒	唱の神
一七	老郎	元帥	披山、于山	演劇	小兒	半丈なり、羅漢管は紙商羅某で南 星にして小兒保護の神
一六	總管	斗母	南臺山邊街	演劇	小兒	施餓鬼なり、諸多きは巡遊す福州 人の普度は期日不定大抵秋冬の頃
一五	善度	普度公	同	演劇	泉州人	陳娘奶と同門
一四	斗母	斗母	同	演劇	泉州人	孫悟空なり
一三	聖王	張真人	聖王下抗街	演劇	各神區内	日蓮なり、地獄に繋がる、母を救ひ し孝子
一二	聖王	張真人	聖王下抗街	演劇	各神區内	陳娘奶と同門
一一	聖王	張真人	聖王下抗街	演劇	各神區内	孫悟空なり
一〇	地蔵	地蔵王	城隍廟頂	演劇	各家庭	日蓮なり、地獄に繋がる、母を救ひ し孝子
〇九	地蔵	地蔵王	城隍廟頂	演劇	各家庭	日蓮なり、地獄に繋がる、母を救ひ し孝子
〇八	地蔵	地蔵王	城隍廟頂	演劇	各家庭	日蓮なり、地獄に繋がる、母を救ひ し孝子
〇七	地蔵	地蔵王	城隍廟頂	演劇	各家庭	日蓮なり、地獄に繋がる、母を救ひ し孝子
〇六	地蔵	地蔵王	城隍廟頂	演劇	各家庭	日蓮なり、地獄に繋がる、母を救ひ し孝子
〇五	地蔵	地蔵王	城隍廟頂	演劇	各家庭	日蓮なり、地獄に繋がる、母を救ひ し孝子
〇四	地蔵	地蔵王	城隍廟頂	演劇	各家庭	日蓮なり、地獄に繋がる、母を救ひ し孝子
〇三	地蔵	地蔵王	城隍廟頂	演劇	各家庭	日蓮なり、地獄に繋がる、母を救ひ し孝子
〇二	地蔵	地蔵王	城隍廟頂	演劇	各家庭	日蓮なり、地獄に繋がる、母を救ひ し孝子
〇一	地蔵	地蔵王	城隍廟頂	演劇	各家庭	日蓮なり、地獄に繋がる、母を救ひ し孝子



一〇	二	城隍	神	城内城隍頂	巡遊供養	各家庭	必ずこの日行列巡廻す即ち城隍節
一一	七	普庵	佛	城内南臺	演	齋	普庵菩薩に當る
一二	五	尚書	神	南臺橋仔頭	演	齋	
一三		尚書	神	南臺橋仔頭	演	齋	
一四		尚書	神	南臺橋仔頭	演	齋	
一五		尚書	神	南臺橋仔頭	演	齋	

七 出 海

五帝と陳尙書だけは巡遊の後海に出て行く、之を出海と云ふ。五帝は瘟疫の神で傳染病を驅逐する爲め先づ區域内を巡遊し最後に出海をする。此の出海には特別に造つた龍舟(薄板と紙で造り一庵二艘位)に惡魔を入れ之を閩江の河岸で焚燒する。陳尙書の出海は本來興化に歸省するの意であらうが、神事として丁寧に取扱ひ、隔年一回龍舟へ立派なものになると本當の舟を造り一艘四百弗も掛ける事がある)を造り之を閩江から海へ流し出す。中途之を拾つた村では更に之を廟に安置し祭典を施行する。尙書の龍舟は田舎では狀元船ともいふ。下渡と閩江との間に在る浦下村には潮汐の關係で屢狀元船が到着する。故に此村は年中祭典をして居るといふ。

八 巡遊の行列

惡魔抜ひの巡遊は簡單で普通(1)高照(提燈)(2)大班(シルクハット様のものを戴き竹や鞭等を曳く先驅者)(3)鼓板(簡單なる音楽)(4)塔骨(七爺八爺とも云ひ長大矮小の二人形)であるが、他庵の出海を送迎する時又は神着任の挨拶等本

式の行列には多種多様であるが大體(1)高照(提燈)二名(2)大班八名(3)黃旗幟二名(4)鼓班(チャルメラ)八名(5)鮮花擔(造花)不定(6)叶數前堂(打樂器)五名、後堂(管絃樂)七名、組不定(7)塔骨(長大矮小の二人形、神の家來にして種々あり)(8)彩亭、第一例香干、如意、包、太平、第二例樟桶、香爐、燭斗、第三例、龍椅、門楣彩、何れも不定(9)幕閣、不定(10)陸地行船、不定(11)馬上、不定(12)鸞駕十八名又は三十六名(13)看馬(14)伺香十人以上會員なり(15)看轎四人(16)家將八名(17)大猊神(18)掌扇二名(19)涼傘一名のやうな順序で街路を練り歩く、誠に以て盛觀である。

九 慶 讚

各種の職業者は夫々同業相聚つて公會を作つて居る。此の公會に入つて居らなければ同業者から同業者としての取扱を受けられない。公會は元との議行で國民政府治下となつてから工會と改名し、従前は同業者の親睦を圖るを主としたものを更に勞資の關係をも含ましめる事にした。外國人に使傭されて居るボーイの如きも年に一回然るべき廟で慶讚を爲し演劇を觀、饗宴を張る事になつて居る。各種の者は夫々特定の廟があつて、其處でする事になつて居り、自ら廟を造つて居る者もあり、廟を借りてする者もある。

請酒チンシユといふのは本來は仲間入りをしたり、他人を利用せんとする時酒宴を設けて他を招待する事を云ふのであるが、實際には色々に利用されて居る。自己の愛妓に金を遣らうとする場合に此の請酒をして友達を招ひ集め、持來の金から喫煙費を引き殘剩の差額を與へる場合があり、又公然收賄も出来兼ねるので、此の請酒で多額の金を集め、莫大の差額を自己の懐に入れる場合もある。



十 神 蛙

洪水時に上游から流れて来る雨蛙に種々なる背文の蛙がある。緑色の青蟬將軍、眞黒のを鐵將軍、金色のを金甲將軍、金線のあるものを金線將軍、金線の多いのを全金線將軍と稱し、之等の雨蛙の着いた家では縁起が善いとして或は廟或は自宅で盛んな祭を施行し演劇を催し、饗宴を張る。蛙は之を硝子の蓋物に容れ高粱酒を供へ禮拜する。神蛙には許、何、鄧、呂等の姓があるといふ。

十一 惡 習

我々が見た所の惡習ではなく、支那人自身が見た所の惡習なるものが宋代より教民十六事、論俗文、風氣書、禁淫祠文、風水示誡、禁淫祠邪術示、禁溺女等の文獻となつて相當多く殘つて居るから、之等禁示の誡を爲政者から發したものは何れも惡習であるのに間違はない。以下二三説明して見る。

(一) 鬼

閩人の鬼を尙ぶ事は非常なものである。「越人の鬼、楚人の禍、古より己に然り」と云はれ、今に始まつた事ではない。又鬼を喜び鬼を談ずる者は蒲松齡の聊齋志異がある位であるから、何も閩人に限つた譯ではないが、「閩人鬼を好み習俗相沿ひ淫祠民を惑はし王法必ず禁ず」と朱珪が云つたやうに、度が過ぎて居るやうである。彼等の所謂鬼は日本の鬼

とは無論異り幽靈とも違ひ、怨靈にも當らない。鬼は矢張鬼である。

死後は鬼 人が死ぬと必ず鬼になり泰山に集つて居るのが本體であるが、動もすると人家に出て来る事がある。如何なる形であるか不明であるが、或は等身の上身だけだと云ふ者もあり、或は人魂のやうにフワ／＼飛ぶ者だともいふし、或は黒小の丸いものだといふ者もあるが、誰も見た者はない。同じ鬼の中でも十惡鬼といつて無頭(刑死)、吊(絞死)、餓、跳井、跳江、産、天癆(肺病)、吐瀉(コレラ)、生核(ペスト)、鴉片の鬼は最も恐ろしい者とされて居る。病氣は大抵鬼の仕業である。故に鬼を抜ひ出せば病氣は癒るものとされて居る。上等の鬼と下等の神とは境がないが、大體神には姓名があり廟があるが鬼にはない。

鬼に頼つて衣食する者に巫があり、男を師公といひ女を神媽といふ。往時は「恫疑虛喝、神威を假り妖語を造る」といはれたが、現時は左程の事もないやうである。淫祠として禁ぜられたものに胡田寶(男色の神)蝴蝶母(女色の神)牛頭惡(鐵頭和尚とも牛頭神ともいふ)があつたが今はない。牛頭惡は怨を晴らす願掛けの初で、今でも廟に依つてはある所があるさうである。

(二) 溺 女

各城門の入口又は倉前山の郊外に嚴禁溺女と彫られてある前清時代の碑が立つて居る。之は女嬰兒を水殺するを嚴禁するの意である。「土風豐於嫁女」と夙くから謂はれるだけあつて、福州では女兒を養ふ事が苦しかったらしい。此の風

は現今田舎にだけ残つて居り、市中には無いやうである。

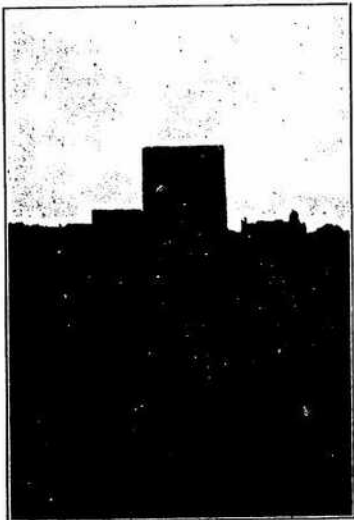
仁齋堂 民國十六年一月十六日に起つた仁齋堂事件の仁齋堂は大主教が南門外に立てた育兒院で、専ら此の溺せらるべき嬰兒を收容したのであつたが、今は支那側から貧兒救養院と稱して經營をして居る。

水無情 光緒丁酉（一八九七年）の序文ある作者不明の閩中新築府に「孰道水無情、無情能作斷腸聲、孰道水有情、有情偏沒出胎嬰、女兒原是賄錢貨、安知不做門欄賣、濟上胞衣血向股、眼前咫尺鬼門關、阿爺心計要繼米、苦無家業貽兄弟、再費錢財製嫁衣、諸男娶婦當何時、阿娘別有鑽房事、乳汁湖湖苦累伊、床上纏纏纏、鏡上梳頭髮、還要將來再教錢、何如下手此時先、一條銀獨酸風裂、一袂清水澄心潔、此水何曾洗兒兒、七分白沫三分血、此際誰娘心始安、從今不肅一些難、所恨兒無口、魂兒不向娘親割、娘亦當年女子身、青娘長大伊何人、若論衣食妨兄弟、但乞生全類食貧、豈知雙雙無頭腦、一心只道生男好、殺女留男計自佳、也須御首看蒼英」とある。

實無二戸之不溺 「昨蒙詢、溺女一事、最爲此邑惡習、土風驟族嫁女、凡大戶均以養女爲憚、下戶則又苦無以爲養、比戶而計、實無二戸之不溺、當地媿之際、母氏強半昏聩、且思試水、男人又不入房、所有袖裡姑婢、凡屬女流惟怯者、亦丁有八九、惟穩婆左右其別業以習漸成自然、又於所乳者、無絲毫血屬之情、故其心甚忍、而其手甚毒、凡胞胎初下、率舉以兩手審視女也、則以一手覆而置於盆、問存否曰不存、即坐索水、曳兒首倒入之、兒有健而啼且啼者、即力捺其首、兒輒轉其間甚苦、母氏或茫然、淚下有頃、兒無聲、擦之不動始置、起整衣索酒食財貨、携揚而去、嚴禁溺女、而不嚴禁穩婆、非則本搜根之法也（鄭光策與福清令夏葵承書）。

(三) 賭

賭は實に盛であつて上流より下流まで之を爲さざる者はない。邦人が想像するが如く唯娯樂として物を賭せずして爲



禁溺女の碑

すのではなく、必ず金錢を賭する場合が多い。麻雀を筆頭に風江（主として老人）、四色（主として婦人）、牌九、傘曹操、三脚吊、升官符、狀元壽、天中、花會、撲克、牽骰、十二雜、鏡攤、三張牌、雜錢、飛錢、天地人和、投三覆、老鼠猪等の種類があり、仕方に至つては多種多様である。國民政府の治下となつて之等の賭特に麻雀を禁止したのであるが、恐らく絶對には出来まい。

請酒と麻雀 時間繁きに必ず麻雀とする事になつて居る。之をせぬと宴會らしくないと支那人はいふて居る。少し大きな請酒になると麻雀の棹が澤山列べられ、各自己の抽出に標識や現金を入れ、血眼になつて輪贏で決して居る。併し今は公安局が八釜しいので一般には爲さぬ風を裝つて居るが恐らく社會から麻雀を取り去る事は出来まい。

嫖、烟共の他の惡習もあるが今は之を省く。

(四) 義 女

城内の語で南臺では下頭仔といふ。幼少の時金錢を以て買ひ取つた下女で、臺灣の姪妹嫻に當るものである。大抵四五歳より十二歳位までに賣られるもので時價四五歳百弗、十一二歳二百弗位である。元は籃に入れて賣りに来たものだが、國民政府の治下となつてから賣買禁止されたので、内密に連れて来る様子である。賣買の際は養女の名なる事、嫁に遣る事、金額の事、以後絶對に無關係なる事等を證書に作成し、歲頃になると聘金を取つて嫁に出すが、中には妾にするものもあり、子の嫁にする者もある。義女には三本劍もあり然らざる者もある。

第九章 福州料理

一 概 説

一一八

食器、料理法、攝食法等大體支那料理は同じやうであるが、地方や氣候の相違で材料、調味の方法等を異にして居るものがある。一般に支那料理を北京、南京、福州、廣東、四川の五つに分け夫々特色があると稱して居る。福州料理は材料に魚貝を多く用ひ、味も淡白で頗る邦人の口に適する。何處の料理でも宴會料理と常食料理とある如く福州料理にも之がある。宴會料理を大席トクシといひ夕刻催すのを普通とする。常食料理即ち總菜料理を餅菜ピンサイといひ晝夕何れでもよい。朝食は一般に簡單に粥カウで済ますやうである。酒や鳥獸魚貝を用ふる料理を葷菜フンサイといふに對し精進料理を素食ソクシと稱するが、一日三度精進料理ばかり食べる人は餘程特殊な人で一般には通らぬ。大席は一棹十三弗から五十弗位迄料理屋又は専門の職人にさせるのを普通とし、一棹十二人迄坐る事が出来る。餅菜は日々各家庭でも之を作つて居るが、料理屋にさせると三弗から五六弗位迄で、前者と料理法は同じでも材料を異にする。故に上等の餅菜に酒を用ふれば夫れ相等の宴會料理になる。如何に支那料理の本場は支那だからといつて毎日邦人の考へて居るやうな料理ばかりを食べるのではなく、貧民階級になると本當の粗糲粗菜ソコソコで随分酷いものを食べて居る。而かも數に於ては此の方が遙かに多く、毎日上等料理を食べて居る者は極めて少數である。

支那料理は味ふ料理であつて見る料理ではない。行儀良く始めても所謂杯盤狼藉に終らぬと御馳走らしく感じない料理である。古の上層階級から端を發し、其の厨房を掌る者は多く下層の天才家(男)から輩出したので、遺憾なく民族性を發揮し、殆んど捨てるものが無い迄に材料を利用する料理である。近來西洋料理の影響する所頗る大きい、新材料が出ぬ限り先づ之以上發達する事はあるまいと思はれる。御馳走の分量が一棹の人数に比し多量であり、毎食餘るので頗る不經濟のやうに思はれるが、實は其の殘者は總て其の使傭人の御馳走となるので、始めから支那料理は其様に拵へてあるのである。宴會の途中冷えた酒を集めて廻る人間が出て來るが、あれは使傭人の餘徳になる酒である、尤も中には燗をし直して再び席に出す主人もあるだらうが、粥は大席の終りに食べる事もあり、素食は馬路の専門料理屋素食社又は鼓山に詣ると食べることが出来る。

福州(支那)料理の味が何故旨いかといふ事を考へて見ると (1)暖いものを直ぐ食べる、八人前乃至十二人前の料理がたゞ一回配るとすむ、(2)豚の骨や雞、家鴨を煮出して得たソツプを以て味を附ける、近來は味の素を多用する。(3)全と片、熟煮と輕煮の別を得て居る。(4)乾物には乾物特有の味があり之を遺憾なく發揮して居る。(5)辛香料を巧に用ひて居る。(6)鹹甘の順序がよい等であらうが、調味料が一律であるので、どれもこれも同じ味のするのは大なる缺點である。であるから支那料理は今日迄色々と違つた味を出すのに苦心せずして、同じ味で異なる材料を如何に旨く食べさせるかといふ迄を研究したものと思はれる。饗宴の主人となる者は先づ如何にして客の腹を空かすべきかに注意し、麻雀其の他の賭に腐心せしめ、愈々食卓に就いても第一品を速く持つて來させない。正午の開宴が四時になつたり、六時の開宴

一一九

が九時になつたりする事は普通に近く、其の間に於ける主人の儀禮は料理の味に影響する。

臺灣料理 臺灣に於ける支那料理は福州から傳はつたもので、「菜刀」の類したものがある。今では邦人の趣味其の爲めに大分變化して本場の福州とは違ふやうになつて来た。福州では今尙四炒六火と云つて料理の眞先に用ゐる四皿の炒盤は嚴格に守られて居るのだが臺灣では自由である。

二 材 料

上等の大席に用ふる材料は他省や外國から来るものが主で、土産のものは季節外れの稀品又はあつても高價なものを
用ふる。

魚翅「フカノヒレ」沙魚「サメ」或は「フカ」の鰭や尾で主として日本から来る。岩手縣一縣だけでも年額二十萬圓に上り、海岸地方の物干菜につるされ乾されて居るのが原産地の魚翅である。

福州では魚翅の上を白鮑、中を鮑、下を鮑と云ひ、各種とも背(胸)が第一で、背(背)に次ぎ、尾は最下である。一言に鮑といつても世界に産する鮑の種類は百數十種を算し、日本の近海に産するものだけでも五十八種に達して居るから、どの鮑がどの魚翅に當るかは不明であるが、大鮑魚翅としてよい鮑は蒼海鮑「ヨシキリ」、雙髻鮑「シヌモクサメ」青鮑「アサメ」等であるといふ。

到底「整」の底まで魚翅で雜ぜもの、無いのを到底と稱し最も高價である。普通は底に魚類、蝦又は肉片を置き、到底

の眞似に魚翅の皮又は鯊皮を置く事もある。鴛鴦と云ふのは左右對の魚翅を列べるので上等の鮑を用ひぬと出来ぬ。以上は紅燒魚翅であるが外に清湯もあり、芙蓉もあり、鶏肉を細かく刻んで汁に交ぜた雞絨魚翅もある。白鮑の鴛鴦で到底で紅燒の大鮑は魚翅中の最高品で現時一盤八弗位である。

燕窩 雨燕科の燕の巢で南洋から来る、寒天製の模造品もあり、一寸區別が出来兼ねるが、本物は模造品ほど綺麗でなく、時に燕の羽が微かに存して居る事がある。料理には鹽味と甘味と二種あつて何れも清湯であり、本物は一碗最高六弗位である。

狗仔「コブタ」生後間もない豚を丸焼にし皮、肉、鼻、耳、尾、鬚、味噌と三段に分けて出て来る、料理は燒猪と稱し福州料理最上のものである、最高一匹十弗位。

蚌 蚌、九節及海蝦を用ふる冬季味は尤も佳しい。

竹筴 四川省より来る、乾物で擔子菌類の「キヌガサタケ」である、清湯として賞美する。

白鴿蛋 「イヘバト」の卵で紅燒又は芙蓉にする、天然痘の妙藥であると信ぜらる。流行の頃には一箇五十仙まで騰貴した事があつた。

夏季の芥菜、菜頭 季節外れとして珍重する。

冬蔬 冬の筍であるが福州では格別珍らしくもない。

菜心 種々あるが「ハシリ」を珍重する。前者と共に料理の配ひとして必要なもので、白菜心は菜心中の白眉であり之だけの單獨料理もある。

鱒魚 夏至前を珍重する

鰻魚 他産で臨時供給し得る、前者に次ぎ賞美される。

鮑魚 「ホシアハビ」は罐詰物より愛用される。

海參 「ホシナマコ」も賞美されるが値段は高くない。

銀耳 即白木耳は値段高く珍味として取扱はれる。

香蔬 即椎茸は小さいのが愛用される、上海産の乾物で日本のものより傘が薄い。

火腿 「ハム」味出しに用ひられ、毎料理之が入つて居らぬ事はない位である。兔即水鴨「カモ」雉雞「キジ」等もある

が、鴨「アヒル」、雞「ニハトリ」を多用する。

鴨 普通の鴨と肥鴨とあり、甜鴨は暗所に置き滋養物を無暗に詰め込んで肥らせたもの、數も少く値も高い、

此の燒鴨は燒猪と匹敵する料理である。

雞 嫩肉の若雞を愛用するが去勢した雄雞もあつて珍重される。

罐頭 「カンヅメ」類の珍重されるのは、洋蘆「シヤンピニオン(佛)ムッシュルーム(英)」、「蘆筍」アスパラガス、龍蝦「イセエビ」、香梨、龍眼、杏、櫻桃等である。

上述の諸品を主體として巧みに調理するのが上等の大席であるが、蚌を除いたら殆んど各地共通の材料で、先づ乾物料理であり格別福州料理として材料上の特色は無い譯である。

餅菜は土産の野菜海草魚貝は勿論鳥獸の内臟物、脚の皮まで活用し材料の上に地方色を放つて居る。

粥の菜又は餅菜の賞美されるものに醬瓜、四川榨菜、肉絲、珠蚶、酥螺、臘肝、酥雞、酥鱈等があり、下級品として海鱸「シホマス」、熟魚、黃澤「シホニン」、土螺、鱔等がある。

三 料 理 法

日本料理には夙くから流儀があつて夫々古實もあり、見た目を美しく庖丁の冴の見せ配ひや食器を吟味するから生食も平氣であるが、支那料理は味覺本位で箸に長短があつても、盃が少し缺けて居らうがそんな事は平氣である。あらゆる材料を如何に利用すべきか、如何に味を出すべきかを研究し、多く熟煮して乾物を生の如くに還元するのが特色である。珍味と稱せられるものは大抵ヌラリクラーリで何となく變な感がせぬでもない。油膩の濃淡の如きは同じ支那料理でも地方に依つて異なるが、元來油脂を以て味出しの素にする以上、日本料理に比べて濃厚なのは已むを得ぬ事であらう。焗、炭火の上で直接炙る事、多く鐵叉を用ひ鐵網は用ひない、従つて鐵網は料理の用具として見る事は出来ない。煎、少量の油を以て鍋の上で煎る、鹽麴の如きは烘にせず煎にして食ふ。焙、油を用ひずに煎するのである。

焼 料理の名では烘したものを焼といふ、例へば焼猪、焼雞の如し、料理法では焼は火の中に入れる事であるから實際には極めて少ない。

紅焼 醬油、醋、粉、蕃椒、蒜等と共に煮込むのであり、無論混ぜる品は加減して差支ない。

白焼 初め燻して粉、醋、蛋白を掛けるのである。

燻 初め味を附け瓶で蒸すのである。

炊 味を附けずに瓶で蒸すのである。

煮 水で煮るのである。

燴 鹽辛い汁で煮詰めるのである。

紅 乾鮑、鰯のやうなものを柔くする爲めに煮るのである。

炖 食品を容器に入れ、更に之を鍋の上に載せ、鍋の蓋を爲し鍋の湯と熱氣とで長時間煮るのである。

燻 最初水の分量を考慮し動かさずして煮えた時水が無くなる仕方である。

炒 煎に似て居るが擷ひ上げたり攪き廻はす所が違ふ、煎は動かしても裏返したするに過ぎない。

燻 炒して更に蓋をして置くのである。

燻 油の中で揚げるので日本の天麩羅に當る。

燻 肉を刻み燕即皮に包んで煮たものである。

湯 汁物である。

清湯 澄し汁である。

芙蓉 卵を和して蒸すので日本の茶碗蒸の仕方に當る。

酥 味を附けて骨まで食べられるやうにするので、酥餅は日本の甘露煮に當る、又糖を用ひ固める事も酥と云ふ。

餡 穀の中に入れるもので、糖、落花生、小豆餡、豚脂、肉、野菜何でも宜しい。

羹 汁物であるが湯より味が濃い。

燻 薫製福州語では「ブル」といふ。

燻 一般の漬物である。

鹹 鹽辛いものである。

糟 酒精に漬けたもので普通紅い。

醉 酒に漬けたものである。

甜 砂糖に漬けたものである。

白糟 白い酒精に漬けたものである。

醬 醬油に漬けたものである。

絨 デンプ、肉絨あり蝦絨あり。

絲 細長く切つたものである。
 散子 サイの目である。
 片 主として短冊形である。
 圓、丸、球 圓子の様に丸めたもので大小色々ある。
 圓片 輪切りである。
 扇 輪切りの縁を取つたものである。
 梭 切目を入れたものである。
 寄刀 花形の切方である。
 捲 卷かせる爲めに縦横に切目を入れたものである。
 塊、碎、醬 肉の切方の大小に依つて分たれるのである。
 片 二つ切である。
 珠 輪切の小さいものである。
 糕 羊羹のやうなものでへな／＼と弱い。
 餅 固い菓子である。
 餃 餡があり、醬鹽二方の味がある、大抵一方が開いて居る、鹽味のを焼賣と云ふ。

鮓 日本のお饅頭で色々ある餡のないのを饅頭といふ。
 全 丸のまゝである。
 切塊 切り身、坎ともいふ。
 四寶、八素、十錦 四種八種十種の材料、品物は値段に因り異なる。
 半葷素 半分精進である。
 素會 數を問はず葷素を論ぜず、ごちや／＼にした汁物である。
 大盤炒 前者の汁のないもので、日本の擦身、半片、蒲鉾等に當るものは丸、餃、合等の語を以て主として形を云ひ料理法には當る語がない。

四 料理の數

食卓の上には既に四碟、四眞果が用意され、紅白取り／＼の花が四周を飾つて居る。四碟は大抵醬菜二種、冷葷二種が普通である。料理の皿數は四炒盤、二大盤、六大碗、が普通で、好みに依つては四大盤、四大碗にする事も出来るが、四炒盤は動かぬやうである。魚翅の出る料理を魚翅席といひ、上等料理である。魚翅は必ず四炒盤の次に出る事になつて居り、大菜と稱し列坐の客は勝手に箸を附ける事は出来ない、主人の勧めを俟つて箸を附ける、爆竹を鳴らすのも此時である。若し夫れ食卓に頬杖をつき主人の勤の無いうちに勝手に箸を附けるに至つては、食卓儀禮上沙汰の

限である。

點心といふのは本来開食の意味であるが、料理の終の頃に腹を拵へる爲めに點心が出る。餅、餃、糕、麩が用ひられ、其の附屬の汁として甜の時には杏仁茶、鹹の時には三絲湯が出る。點心は暖くないと旨くないので、多くは三籠餃にして蒸す。普通此の三籠餃には赤飯粒を附けた雪花丸、桃を象つた桃麩、黄色の蒸カステラである黄米糕、魚を象つた甘い鯉魚餃、一方が開いて鹽味のある燒賣等が愛すされる。酒精を點して魚片や野菜を煮て食べる。魚羹鍋、又は鍋に烟突の炭火を以てするがあり。火炬は普通六大碗の中に入れてある。

早フイは俗に豈に作り北方では餛といふ曹達の事であるが、福州料理では乾鮑、鰻等を煮る時之を用ふる。初め水に浸し煮る時にこの早を入れると現物以上に柔かになり、乾鮑の如き度を過すとペロ／＼になつて了ふ。饅頭を服ます素にも此の種のものを用ふるが等しく早と云つても煮物の時用ふるのとは異なる。

五 厨店と館店

客席を有し客が来て食べる料理店を館と云ひ、又茶館とも云ふ洋食屋なら洋菜館といふ。支那料理と洋食とを兼ねる料理屋なら漢洋菜館といふ。現時の茶館は大抵兩者を兼ねて居る。厨店といふのは客席がなく、需めに應じ材料を持たせ専門の職人を派して料理する店をいひ、茶館に比し相當数も中々多い。茶館で餘菜の希望を爲し得ぬ事もないが厨店なら魚翅席、平席、餘菜、何れでも隨意である。

館店の主なものに泰春園(城内雙門前開業以來三十餘年)、南軒(城内南街)、別有天(城内妙巷)、廣裕樓(南臺泰霞洲元の廣裕樓)、廣宜樓(南臺福新街)〔以上純支那料理店〕廣陞樓(南臺田橋街)、嘉賓(同)、漢英(同)西葉齋(南臺眞人廟)〔以上洋菜館兼業〕法大(南臺福新街)沂春亭(南街福新街)、樂天泉(南臺玉庄)〔以上天然溫泉屋兼洋漢菜館〕

福州料理と廣字 福州の料理屋の名に廣の字の附くのが多い、元の廣復樓、廣春樓、今の廣裕樓、廣宜樓、廣陞樓等多くあるが、此の項出来る料理屋は廣の字に拘泥しない。かゝる所を見ると往時は廣東系を標榜せぬと客の受けが悪かつたに相違ない。近時出来た料理屋に廣の字の無いのは廣東系から脱した積りであるのだらう。臺北で鳴らして居る料理屋江山樓は福州の江山樓と關係があるのでは無いかと思つたが、何等關係が無いさうである。江山といふ名稱は福州に於てこそ最もふさはしい。

福州人の三刀 福州から臺灣に渡り一稼ぎする者には無論色々の人があるが、就中有名なのが三刀である。三刀といふのは剃刀、剪刀、菜刀の三を云ひ、剃刀は「カミソリ」即ち床屋、剪刀は「ハサミ」即ち洋服屋、菜刀は「ハッチャウ」即ち料理屋の事である。現在臺灣に於ける此の種菜に従事する者は大抵福州人であると見て間違はない。

六 支那酒

浙江省紹興地方から移入する紹興酒即ち下り酒と福州の酒屋で造る老酒即ち地酒とある。前者は口當り佳く酔うても二日酔をせぬ、後者の品質は遙かに劣つて居る。何れも米から造り防腐劑を混入しない。

紹興酒の種類と値段

名	稱	價	一樽(重さ平秤四兩)
花影	青葉	五・〇〇	〇・〇六四
狀元	紅	四・八〇	〇・〇六四
復生	生	四・四〇	〇・〇五六
蘭生	生	四・二〇	〇・〇五六
紹興	牌	三・〇〇—四・〇〇	〇・〇四八

雜牌といふのは本場の紹興でないもので主に之を紹興酒といひ、奇香居、德源、美益、志能、萬源、萬潤、萬合、誠錦等の名稱がある。

一樽は九十味であるから平秤三百六十兩即三十二斤八兩に當る。
老酒の種類と値段

名	稱	價	一樽(重さ平秤十兩)
青福	九	三・〇〇	〇・〇五六
參	老	二・八〇	〇・〇八〇
寶	老	三・一〇	〇・〇八八
綠	老	三・四〇	〇・〇八八
大	紅	三・四〇	〇・〇九六
鷄	老	三・七〇	〇・一〇四

一樽は三十六味であるから平秤三百六十兩即紹興酒と同様である。

名	稱	價	一樽(重さ平秤十兩)
青福	九	三・〇〇	〇・〇五六
參	老	二・八〇	〇・〇八〇
寶	老	三・一〇	〇・〇八八
綠	老	三・四〇	〇・〇八八
大	紅	三・四〇	〇・〇九六
鷄	老	三・七〇	〇・一〇四

紹興酒 光緒三十年(一九〇四年版)佐倉達山の國風雜記に「清人飲む所の酒、浙江紹興府より出づる者色麥酒の如く、淡酒腸に適す。酒の蔵瓶は竹葉を以て之を包み、土圍を以て之を覆ふ。愈久しければ愈美なり。最陳の者は三十年を経、清人の酒量甚大、會宴の時杯を擧げて衆に示し呼んで曰く、乾杯以て獻酬の禮に代ふ。乾杯又乾杯終れば則ち陶然醉に就く、而して清人毫も醒前の狀なく我邦の醴醉淋漓の態なし。酒に禮ある者と謂ふ可し矣」とある。

七 餘 録

日本ではベロ／＼の酔漢が街上狭しと躑躅する事は多々あるが支那では決してない。どんなに酔うても端然として威儀を正して進んで行く。此の點大に日本の酒呑みの學ぶべき所である。支那では賭博の上では失敬したといふ事はあつても、酒の上で失禮したといふ事は決してない。

起立乾杯 卓を同じうして宴に與る場合先方が起立して乾杯と出たら此方も起立して之を受けねばならぬ。日本人はよく座したまふ、乾杯をやるは非禮である。其の辭日本式宴会だと直ぐ飛出して「お流れ頂戴」と来る。

藝者の手鼻 宴席のお酌や興を助ける爲に知合の連中が單を發して藝者を聘ふ、直ぐ遣つて来る。先づ席を與へて大に敬意を表する。すると一流の姐さん達盛に手鼻をする。流行に卓や椅子に擦り付けはせぬ。懐から絹製のハンケチを出し嬌態を作つて指先を拭く、そして直にお酌と来る。喜ぶお客もあれば變な顔をするお客もある。藝者は福州の支那藝者で日本の藝者では無い。

白面 支那藝者乃至公娼の類で南菜の名物である。種類は相當複雑であるが大略次のやうになる、(1)大主白面(直道) (2)清唱 往時は賣唱不賣身と稱して一流以上であつたが今は一流に準ずるやうになつた。唱二曲三曲、朝聲には五曲、一泊も出来るさうである。大主白面は定客二三の專屬で一節句(正月乃至端午、端午乃至中秋、中秋乃至做年)に三百弗位を一人から貰ふ。兩者共に月八元乃至十元の税を納め田堵街附近に十四五軒散在して居る。貴賓堂、金福堂、賽月堂、寶秀堂は清唱側で、新紫雲、舊紫雲、太記、新玉記、舊玉記、杏花天、德太、宜春樓、新花亭、舊花亭は大主白面側である。(3)小主白面(半開門、横道)は二流で以下順次下落し(4)馬路白面(水上白面(船頭頭)) (5)低級の半開門等に分れる。城内には此の種の者は無く全部密費であるさうである。概して福州は下級男子の結婚難に伴ひ此の種の者が相當發達をして居る。

第十章 福州の基督教

一 羅馬舊教 (Roman Catholic)

現在福建省に於ける舊教は Dominican 派唯一つである。明の崇禎四年(一六三二年) Friar Cochi (伊太利人) が比律賓から臺灣を経て福州に到着し、福州、福安等に布教したのが福建に於ける同派の發端である。

萬曆三年(一五七五年) Augustian 派の僧 Martin 及び Maria が福州に來り三箇月程滞在したといふが委しい事は分らぬ。Dominican 派が傳來する前福州には Jesuit 派があつたと云ふが之も委しい事は分らぬ。

水曆二年(一六四八年) Beato Francisco Capillas が福安で殺されたりして相當苦辛をしたが、現在では福建省を福州、廈門、福寧(安)、汀州の四地方に分け、汀州以外の三地方に同教 Beato を置いて居る。全省の信者約一萬八千人。福州には等中街、西門街、達道(下渡)、泛船浦、倉前の五個所に天主堂があり、信者は約四千五百人程で下層の者に多し。

仁慈堂 等中街の天主堂で光緒十九年(一八九三年)の創立に係り、福州現在の天主堂では最も古いのであるが、例の仁慈堂事件に關し支那當局と係争中だといふ。福安は福州よりも布教が古く、元は福州、福安は同派であつたが、一九二六年より分割した。福建省に於ける天主堂所在地 福州、馬尾、沙墩、長樂、連江、羅源、平潭、龍田、高山市、江陰、福清、閩清六郡、古田、永泰、延平、洋口、將樂、建甌、永安、建陽、邵武、光澤、霞浦、福安、溪東、留洋、穆洋、康厝、惠洋、溪厝、西陰、羅家巷、藤頭、下

邇、寧德、林口、廈門、鼓浪嶼、泉州、千金廟、安溪、惠安、平海、南日、澄岐、瀟江、仙遊、楓亭、永春、德化、大田、漳平、永福、山城、林下、漳州、後坡、港口、石碼、海澄、白水營、港尾、白石、晉霖、詔安、東山、汀州、上杭、武平、永定 (The Mission (China et du Japon))

烈教教師と佛領事 福州のドミニカン派洋人教師は殆んど全部西班牙人であるが、駐閩佛國領事の保護を受けつゝある。佛支條約に據ると、支那に駐在する羅馬正教の教師は佛、伊、西、葡其の何れの國籍に屬するを問はず悉く佛國公使の保護を受けべき條項がある。

福州の舊教と比律賓 福建の舊教は比律賓から廣まつて来たものでマニラにドミニカン派の本部があり、今でも費用の大部分は比律賓から来る。

福州の舊教と臺灣 臺灣の舊教もドミニカン派で福州の舊教と同派に屬する。臺北市の私立靜修女學校も此の派の設立に係るものである。

二 新 教 (Protestantism)

南京條約の締結された道光二十二年(一八四二年)、未だ該條約の調印もされぬ中に公理會の David Abeal (艾博士) 及び歸正教會の William J. Bone (文博士) が廈門に來た。二年を経て倫敦會の A. 及び J. Stenoch (史) 等が來た。道光二十七年(一八四七年) 美以美會の D. Collins (柯) Moses C. White (魏) が福州に來り、同年に公理會の代表 Stephen Johnson (章) Mr. & Mrs. L. B. Peet (勞) も福州に來た。道光三十年(一八五〇年) 聖公會の代表 D. Jackson

(雅) W. Wilson (章) の二教師も福州に來て布教に従事した。民國三年(一九一四年) に基督復臨安息日會の C. C. Morris (毛) が福州に來て學校を建て布教を始めた。故に最も早く福建の布教に従事したのは米國系の新教であり、又最も晩く布教に來たのも米國系新教である。而して最初から教師個人の才能に依り他派の代表になつたり、布教區域の讓渡を行つたりした。

福州に於ける基督新教各派を表示すると次の通りである。

- (1) 美國公理會(美部傳道公會)
- (2) 美國美以美會(美以美教會)
 - イ 美以美會
 - ロ 美以美女會
- (3) 中華聖公會(大英教會安立甘)
 - イ 大英教會安立甘
- ア Church of England Zenana Missionary Society
- イ Dublin University Mission
- (4) 基督復臨安息日會
- (5) 基督教青年會

(イ) 基督教青年會

□ 基督教婦女青年會

(1) 美國公理會(美部會、美部傳道公會) A. B. C. F. M. (American Board of Commissioners for Foreign Missions) [本部米國ボストン、支那開教一八三〇年、福州開教一八四七年] China Mission Year Book 1917に據ると一八四二年 David Abel が廈門の鼓浪嶼に来て落着いたけれども、福建に於ける公理會實際の布教事業は Stephen Johnson が一八四七年一月二日に福州に来てからであるといふ。すると福州の方が廈門より布教開始が早い事になる。同年に弼 [Peel] 夫妻も來閩した。

普通 Mrs. T. B. Peel の名だけを擧げて居るが、中國歸主 (Christian Occupation of China) には「弼君 Peel 及其夫人」とあるから夫君も來閩したのである。

一八四七年に中洲の江南橋畔に教會堂を造つて居住したが、翌年外國商人に賣却して南臺保福山に移つた。一八四七年以來六年間に十人の同僚が來たり、其の中には Doolittle も居り、咸豐三年(一八五三年)に男子の Boarding school を造つた。是れ格致書院 (Fochow College) の前身であり、福州最古の外國人施設の學校である。一八五四年には保福山に女子の學校を建てた。是れ文山女子學校の前身である。一八五六年に一人の支那人に洗禮を施し一八五八年に教會堂が出來た。

現在の美部會は福州美部會、福州城内、文山、魁岐、馬尾、長樂、永泰等に洋人宣教師約三十家族が居る、邵武美部會(邵武、建寧

等に約六家族が居る)の二つに分けて居る。

(2) 美國美以美會 M. E. M. S. (Methodist Episcopal Missionary Society) (本部紐育、支那開教一八四七年、福州開教一八四七年) 一八四七年九月四日 Collins 及び White の二人福州に來り學校及び醫療事業を起し、一八五六年に南門外に眞神堂を建て、一八五八年に孤兒院を建てた。一八八一年に英華書院を創立し、一八八九年に古田、一八九五年に海壇、一八九六年に閩清、一九一四年に福清といふ其合に布教區域を廣めた。福州の新教中最も勢力する教會である。

現在の美以美會は福州美以美會(福州城内、福州南臺、魁岐、古田、平潭、閩清、福清等に約六十家族の洋人宣教師が居る)、興化美以美會(興化、黃石、仙遊、涵江等に約二十家族の洋人宣教師が居る)、延平美以美會(延平に約六家族の洋人宣教師が居る)、永春美以美會(永春に洋人宣教師三家族が居る)の四つに分けて居る。

美以美女會 Women's Foreign Missionary of the Methodist Episcopal Church (本部紐育、支那開教一八七一年、福州開教一八七一年)に屬する婦人宣教師は多數あるが、美以美會に包含され獨立して居らない。

(3) イ 中華聖公會 C. M. S. (Church Missionary Society for Africa and the East) (本部倫敦、支那開教一八四四年、福州開教一八五〇年) 一八五〇年 W. Wilson 及び H. O. Jackson が福州に來り、烏石山の廟に居て布教に従事したが、非常に難儀して十一年目に辛うじて一人を改宗せしめた。一八六一年に J. R. Wolfe が來り、一八八二年福寧、一八八七年古田に廣めた。

現在の中華聖公會は地方を分けずに福州城内、福州南臺、魁岐、連江、福清、興化、古田、福寧、福安、寧德、建寧、崇安等に約四十五家族の洋人宣教師が居る。魁岐は協和大學の所在地で、この婦人教師は何れかの教派に屬して居る人達である。

(2) 中華聖公會女會 C. E. Z. M. S. (Church of Engl and Zenana Missionary Society) 本部倫敦、支那開教一八八四年、福州開教一八八四年、一八八四年 Miss Gough が来たのが始で、大英教會に附屬し婦人の教化に従事して居る。一八八九年古田、一八九三年羅源、一九〇二年建寧、屏南、一九〇八年浦城と廣めて行つた。

現在の聖公會女會に屬する宣教師は福州南臺、羅源、古田、棠口、建寧、浦城等に約二十人のどが居る。

(4) 基督復臨安息日會 S. D. A. (Seventh Day adventist Mission) 本部米國華盛頓、支那開教一八四七年、福州開教一九一四年、此の教派は一九一四年に C. C. Morris が福州に來たのが傳道の始で、現在は城内に洋人宣教師二家族居住して居る。

(5) 基督教青年會 Y. M. C. A. (Young Men's Christian Association) 本部紐育、福州に事業着手一九〇七年、一九〇四年(光緒三十年)米國に於ける基督教青年會の主唱で L. E. Malachin (麥樂慈) 來閩し極力宣傳の結果、一九〇七年倉前山觀音井現美豐銀行(以前は協和大學校會)の家に會員百餘人を集めて福州基督教青年會を設立した。其の後會員が増加し狹隘となつたので福州人より四萬五千元、米國より五萬弗を集めて蒼霞洲(萬壽橋畔)現在の地を求め、一九一六年新館落成し此處に移轉した。同年城内に支部を設け、一九一七年には基督教女子青年會を設けたが、民國十六年の反基督教運動の際亂暴され、現在は南臺のみを經營して居る。米人は總幹事 (Secretary General) として在任して居るが、以前より數が非常に減り二三名で經營して居るやうである。青年會最近の事業は一九二八年の會計報告で大體を知ることが出来る。

自民國十七年三月一日至十八年二月二十八日一箇年の會計報告表

總務部		收入		支出	
總務部	八四四六元	會費部	一六四四元	會費部	一六四四元
會費部	一六四四元	宗教部	二四三六元	宗教部	二四三六元
宗教部	二四三六元	交際部	二五三七元	交際部	二五三七元
交際部	二五三七元	智育部	二六三三元	智育部	二六三三元
智育部	二六三三元	體育部	八四三三元	體育部	一七六八元
體育部	八四三三元	學校部	一五五七元	學校部	五五五元
學校部	一五五七元	學生部	八〇〇一元	學生部	九七九元七
學生部	八〇〇一元	會計部	一、一〇九元	會計部	一、一〇九元
會計部	一、一〇九元	不計	四九六元七	不計	五三三三三
不計	四九六元七	不足	二六六元	不足	(屋根修繕費)
不足	二六六元				

三 國民政府と基督教

國民革命軍が福州に入城したのは民國十五年(一九二六年)十二月三日であるが、既に同年十月十八日、廣東に於て「私立學校規程」、「私立學校校董會設立規程」、「學校立案規程」が公布されて、之等の規程は單に基督教學校を対象としたものではなく、廣く支那側の私立學校をも率すべきものである筈だが、最も痛切に響いたのは基督教學校であつた。

私立學校規程 第八條、私立學校不得以外國人爲校長、如有特別情形者、得另聘外國人爲顧問。第十條、私立學校一律不得以宗教科目爲必修科、亦不得在課內作宗教宣傳。第十一條、私立學校如有宗教儀式、不得強迫學生參加。

私立學校董會議程 第十三條、外國人不得爲校董、但有特別情形者、得酌量充任、惟本國人董事名額須佔多數、外國人不得爲董事長、或董事主席。

民國十六年四月十六日、公然福建省政府から福州各教會學校へ福建政務委員會訓令第一千三百三十七號を以て、私立學校規程、私立學校董會議程、學校立案規程、黨化教育實施辦法、紀念週條例、學校委員制實施辦法等が傳達された。之等傳達された命令其の他を綜合して要點を摘記して見ると左の七點である。

外國人が支那に於て設立せる學校に對しては政府は完全なる保護を加ふべし。

教會學校は一律私立學校とす。而して學校名に私立の二字を冠すべし。

每週保總理の記念週禮拜を舉行すべし。

聖經は之を課外自由科とし學生に研究を強ゆるべからず。

各種の課程は教育廳の檢訂を経るを要す。

外國人校長制は改めて中國人委員制とし、中國人委員會を組織し、委員長は即ち校長となり校務を管理し、外國人は之を教員及び顧問に充つ。

(七) 外國人は董事長又は董事主席となることを得ず。

先是、福州では反基督教教育運動が種々なる形式で現はれたが、實際を見聞せる我々から見ると必然的に裏心から起

つたものではなく、支那流の軍人が先鋒になつたり、各校の不良不平の分子が煽動したりしたやうであるが、兎に角反基督教教育、反文化侵略の示威運動が各處に行はれ、穩健なる分子も已むを得ざる事となつた。民國十六年一月十日から十六日に亘る仁慈堂(舊教ドミニカン派天主堂)事件の爲め洋人宣教師は第二の教案問題かと驚駭して臺灣、香港其の他の地に避難した者が多かつた。支那に於て反基督教教育運動が具體的に擡頭したのは民國十一年北京大學に於て開催した非宗教大同盟を以て始とするが、福州では國民革命軍入城以來盛になつて來た。四月十六日の福建政務委員會訓令第一三三七號を見ると「據福州教會學校教職員學生收回教育權運動大同盟呈請、對教會學校速申明令、嚴格取締禁止註冊一案、經本會議決」と書いてある。支那に於ける各派教會も早晩何等かの事があるのだらうと豫期して居たらしく、屢々諸種の會合を催し、一九二二年には China Educational Commission of 1921-1922 の報告として「Christian Education in China」を出版し「相當の時期が來れば教會學校を擧げて支那基督教徒に提供する」といふ事を明言して居り、同年 The China Continuation Committee は「The Chris tian Occupation of China」の漢譯(第二乃至第七の六編)「中華歸主」を出版し支那に於ける基督教の立場を釋明した。兎に角案外に速く其の時期が到達した譯である。

さて福州各教會當時の意見はどうであつたかといふに何れも極度に神経を尖らせて居た事は事實で、二月一日青年會に於て會合し意見の交換をした。

(1) 安立甘 學校は教堂の附屬で本來傳教の爲めに設けたものである。如是學潮が澎湃して居る時、進んで新生を募集する必要はない、信者の保證する者だけを入學せしめたらよい。(此の派では三二學校を經營して居る)。

晝夜の氣温の差は冬季には相當にあるが、夏季には大した差がない。冬季の曉は最も寒くなる時であるが室内最低三乃至五度、外界が一乃至三度といふ所、霜を見る事は一年の中でも多くはない。況んや波水が凍つたとか、平野に雪が積つたとかに至つては明萬曆十三年(一五八五年)二月初旬に六七寸積つたといふ事が五雜俎に見えて居るだけである。鼓山北嶺の峰々に雪が降る事は時にあるらしく、民國十四年二月に一回あつて數十年來の奇現象であると稱せられた。各月別晴雨の日數を前掲百三十七箇月の平均で表示して見ると次のやうになる。

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計
晴	三三	二二	二七	一九	三〇	三三	二七	二五	二四	三三	三三	三三	二五
曇	三	一〇	一〇	六	五	三	三	三	四	二	三	三	三
雨	三	七	七	四	五	六	六	三	三	三	三	三	三

右の表で見ると福州といふ所は大體晴天の多い所で、民國十三年及び同十六年の七月には晴天二十九日に及び、同十五年七八兩月は全然晴天であつた。

雨季は毎年五、六月、乾季は十、十一月頃であり、春末初夏の交に閩江の漲溢するのは福州の降雨に因るのではなく、上游地方の降雨に因るのである。秋末及冬季は一年中最も佳い氣候で、落葉もし紅葉もし枯木立の趣も現はれる。

初秋には福州に Typhoon がある。之を風颶とふ、割合に戻し風が激しいと見え、閩諺に「風颶倒細、回南倒大」といふ事がある。然し福州は三十五哩の内陸に在り、山で四方を圍まれて居る關係上風颶は概して強大でない。

二 米

米に粳(俗に粒)、糯(俗に秈)、占の三種があり、粳を除く外皆二期作である。

粳は「ウルチ」で一期作なるを以て價最も貴く、閩人は粘氣が多いので飯にしては食べない、病人が食べるか餅に搗いて白糶として食べるかである。福州附近では北嶺、北門附近に産する。在留邦人は日本米と少しも異なる所がないので高價なことは知つて居るが日々喜んで食べて居る。

糯は「モチ」で酒を造つたり粉にして年末の糰子、端午の粽、冬至の湯丸等種々の餅を作るに用ふる。

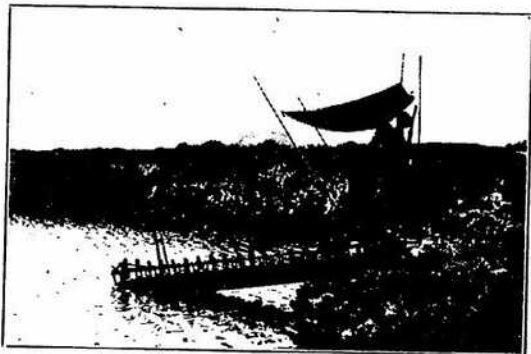
占は閩人の常食する米の種類で粘氣が少く、煮て粥とし煨炊して飯とする。湘山野錄に「宋の眞宗、福建の田多く高仰なるを以て占城稻の早に耐ゆるを聞き、使を遣し其の種二十石を得以て其の民に遺して之を蒔かしむ」とあつて、今より九百餘年前、安南の南方から種子を取り寄せたものが占城稻である。此の占には紅白の二種あり、又早熟、晩熟の別がある。閩清圖經には「早稻の種六あり、曰く、早占城、烏洋、赤城、聖林、清甜、半冬にして烏洋最も佳し。晩稻の種十あり、曰く晚占城、白菱、金黍、冷水香、掃倉、奈肥、黃倭、銀城、黃香、銀朱にして白菱、冷水香最も甘香、奈肥獨り卑濕最賦の地に宜し。糯米の種十あり、曰く金城、白秈、臘脂秈、黃秈、魁秈、黃蔴秈、馬尾秈、寸秈、蠟秈、牛頭秈にして寸秈の顆粒最も長し」とあるが、糯以外は皆占の小種と見るべきで、場所や時代に依つて小種の名稱を異にすること日本のと變りはない。早種は陰曆六月熟し粥を作るによい。晩種は陰曆十月熟し蒸して飯とするによい。晩

占の良質のものを黄占と稱し、占種中最高に位する。米價は不定のものであるが、梗一石一四、五〇弗なら糯は二二、六〇弗、黄占は一、二〇弗、紅米は九、五〇弗位で普通の米は黄占と紅米の間に在る。

福建は山嶽重疊し可耕面積は頗る狭隘であるにも拘はらず、人口は中々稠密である。福州附近に於ては土産の米だけでは以て其の住民を養ふことが出来ぬので、年々多額の米を上游地方又外省より仰ぐのを常とする。而して香港、印度支那等より輸入する外米は年を逐ふて甚しく、今の歳年約四十萬擔、一千八百萬兩を算する。土産の米は本洋米又は本洋占と稱し福州、長樂及尚幹附近に産し、閩侯縣苦嶼郷は黄占の本場である。上游より來るものには崇安、拿口、洋塘、建寧、興寧、邵武等の溪米、浦城の紅米等があり、漳州方面より來るものは太州占と稱せられる。糯は長樂及上游地方より來る。如是他地方より來る米が割合に多い爲め、洪水で福州附近の水田が浸水され、閩江の舟行が停止された時は、福州の米價日に昂り、百物亦之に伴うて騰貴し、細民の窮乏益々甚しくなる。閩人の所謂「米眞貴」は即ち物價騰貴の意味である。

上述の三種以外に籼稻「ヲカボ」がある、福州附近では晏稔といひ、漳州では香稻といひ、汀州では香禾といふが、俗に籼稻といふ。籼民の植ふる稻の謂である。水無き山地に作り二三年にして處を易へ「芒は紅く米は香し」とのことである。晏稔といふのは閩産録異に據ると「其の晏收にして邵陵に種うべきに因る」とあり、陵が稔になつて晏稔となつたのださうである。

水田の耕作は苗代を作り田植を爲し、一期作が成熟せぬ中に其の間に二期の苗を植ふる。春より秋にかけて二期の米を



龍骨車

穫る外、田によつては冬季蔬菜を作り都合三毛作をする所もある。水田の灌漑には例の龍骨車を以て揚水するが、近來は石油發動機又は電気モーターを以て揚水し好成績を挙げつゝある所もある。故に園田の將來は水の不足に非ずして洪水に其の虞を存する。二期作であつても多く自然に任せる爲め同面積の日本の水田に比し收量は少い様子である。

三 菽

豆類の總稱である。園産の豆類には黄、白、緑、黒、赤等各色の別があり、莢性のものあり、莢性のものあり、莢と共に食べるのがあり、實の熟せぬ中に食べるのがあり、熟して用ふるものがあり種々雑多である。

黄豆「ダイツ」本草綱目の黄大豆で滋養に富み、白豆と共に醬(味噌)、醤油(醬油)、豆腐等の原料に用ひられる。

白豆 黄大豆の屬、二者共に未熟の時莢豆として賞美される。

烏豆「クロマメ」大豆の黒いもの本草の黒大豆で、豆鼓、鼓油の原料に使はれる。

赤豆「アヅキ」本草の赤小豆、日本のやうに赤飯に用ふることはなく多く薬用に用ふる。本草に「水腫を下し瘰癧膜血を排す」とあり、園産録異に「青黄即ち收め常に服すれば人をして肌を瘦せしむ」とあつて脚氣に賞用される。

緑豆「ヤヘナリ」豆類小、麴の一種、豆粉を作り又「モヤシ」の豆芽菜を作る。園産に「下渡三奇、無女有婿、無鴨有雛、無園有菜」といふ事があつて、下渡に此の豆芽菜を作る者が多い。古田の緑豆は粒大、官緑豆と稱せらる。

この他町産「ササゲ」刀豆「ナクマメ」蠶豆「ソラマメ」豌豆「エンドウ」俗に金豆、菜豆「インゲンマメ」俗に兵豆、

菘豆「フヂマメ」又冬豆、寒江豆、滑籬豆、蛾眉豆、鵲豆等の名があり。多く福寧に産する。豌豆、菜豆は又莢のまま賞味され、「インゲンマメ」の名に因つて隠元禪師の日本に將來したものは兵豆であらうと想像される。落花生豆は豆でも地下に實る、搾つた油を花生油といふ。

四、蔬 菜

氣候温暖なるを以て四時絶える事は無いが、酷暑には一時産出が激減する。

葱「ネギ」山葱、胡葱、長生葱、香葱の數種があることであるが、坊間販ぐ所のもの皆一樣で、日本の品種の如く判然たる區別はない。皆原始的のものであるが、生食すると香味共に卓越、事實正式の料理には葱は香辛料としての生

の儘用ひられる。

洋葱「タマネギ」土産はなく皆上海方面より来る。

韭「ニラ」莖葉の他、未開の花を賞味する。韭の「モヤシ」を黄芽韭といひ之亦賞味される。

葱「ヒル」形葱又は「ホウ」に似て莖葉を食する。本草綱目には蒜、山蒜、胡（大蒜）の三つに分け、福建通志には「大なる者を胡といひ、瓣なき者を獨脚蒜といふ」とあるが、胡、獨脚蒜共に胡であり、大蒜であり、土俗の蒜頭「ニンニク」である。

蕪「ラッキョウ」土俗蕪蓼といひ、興化では了蕪といふ。「醃醋を用ひて浸し味頗る口に適す」といはれ、坊間販ぐも

のは總て醃醋に漬けたもので、生のものは直接田舎の農家より購ふ他はない。

芋「サトイモ」秋冬の産、「閩中出づる者形長大、小なる者大魁の旁に卵生するが如し。俗に芋蛋といふ。之を食ふに尤も美なり」と稱せられ、又閩諺に「鼓嶺番薯戰坡芋」とも稱せられ、北門外戰坡附近を名産地とする。

番薯「サツマイモ」番は蕃即ち外國種の意味である。

番薯の傳來 明の萬曆二十二年（一五九四年）福州は凶作であつたので、巡撫金學昌設法するや民に教へて番薯を植ゑしめ以て荒災に備へた。閩人之を薯とし番薯を金薯と稱して本を忘れず、金巡撫を烏石山上に祀り先薯祠といつた。金巡撫に薯を種を荒を救ふことを請ふた者は長樂の處士陳振龍で、烏石山志及長樂縣志に據ると陳振龍が薯種を外番に得たことになつてゐる。薯種を何處から得たのか明の何處迄の番薯順序では呂宋から將來したものらしい。「閩人多く呂宋に買ふ薯。其の國未嘗有り野を披ひ、山を連ね種植するを待たず夷人みな取つて之を食ふ、（中略）夷人墓生にして薯薯せずと雖も然も然として中國人に與へず。中國人其の薯薯許を載り取り小籃中に挟み以て来る。是に於て吾國に入る十餘年矣。其の薯薯ふと雖も剪つて之を下地に挿種すれば數日にして即ち榮ゆ。挿んで来るべし。其の初吾國に入る時吾が閩の饑に値ふ、是を得て人一歳を足たす」とあるに依つて略番薯の傳來を想像することが出来る。番薯は日本では「サツマイモ」、「リッキョウイモ」、「カライモ」、「タウイモ」などと稱され、琉球では「ウツ」といふ。元祿の始即ち一六九〇年の頃琉球の儀間親雲上、福州より番薯を持ち歸り之を琉球に傳ふ。寶永二年（一七〇五年）薩摩山川の巖川利右衛門、更に琉球より薩摩に蘭し之を培養して享保十七年（一七三二年）の大飢饉を免れることが出来た。幕府の御官青木昆陽は享保十九年（一七三四年）幕府に稟請して薯を薩摩より取り寄せ全國に傳播せしめた、故に日本の薩摩芋の祖先是福州の番薯である。番薯に紫白の二種あり、又早晚の別がある。皮の紫なるものは肉紅く甘きこと蜜の如く尤も口に適する。薯を輪切にして乾したものは薯乾といひ米の代用をする。閩諺に「福清寄食番薯乾」といふことがあり福清縣では盛に之を食べる。

縦に細く切つたものを薯米といひ、矢張米の代用を爲し又は米と共に煮て食べる。鼓山に行つた者は本堂前といはず所狭きまでにこの薯米を乾してゐるのを見受けるであらう。之等は皆鼓山の僧侶達の食料である。この他粉にした薯粉があり酒にした薯焼がある。近時酒精の原料として多用され遠方へは薯錢、薯米として送られる。

薯蕷「ヤマノイモ」「ジネンジャウ」一名山藥俗稱茹で山藥といふのは宋の英宗の諱を避け改めて山藥としたさうである。山間自生のものを最良とするが多く田圃に作られて居る。搗つてトロロ汁とし味頗る佳である。

洋薯「ジャガイモ」新しく傳來したものである。

蕪姑「クワキ」福州にも産するが多産しない。

地瓜、尾梨 よく街頭で販がれて居る。生食する者が多い。

筍「タケノコ」又笋ともいひ種類が多く四時絶えることがない。特に冬季の冬筍は北支で珍重する。

菜頭「ダイコン」菜服のことであるが、一般に菜頭といふ。日本のやうに品種は多くない。

蘿蔔「ニンジン」胡蘿蔔の胡を省き單に蘿蔔と云ふ。人參といへば朝鮮人參のことになる。

蘿蔔「カブラ」蕪菁のこと土俗大菜頭といふ。閩人は餘り之を食べないが外省の人は喜んで食べる。醬園では醬を用ひ之を醃成して賣出す。

蕪蕪「ハウレンサウ」昔頗後國から種子を持って來たので頗後といつたのだが、何時の間にか草冠を附し蕪蕪となつたので、其の義を失つたことである。北方に生ずる者を竹蕪蕪と稱し莖長くして爽なり、閩中に生ずる者を石蕪蕪

と爲し莖短くして甘し」といはれる。福州や福寧では蕪蕪の葉が青く根が紅いので正月一日には必ず余根を湯に沃し、神に供し名づけて紅蕪蕪と曰ふ」と閩産録異に出て居るが、詞は亡び仕方尚續いて行はれてゐる。

蕪「ミカハジマナ」古く閩に傳はり且つ味もよいので諸書の蔬菜の部には筆頭に掲げられてゐる。蕪では閩人に通らない。土俗は油白菜又は白菜仔といふ。「張九齡(唐代の人) 兩京より携へ歸り、曲江(廣東省の北部)に種う。閩中呼んで張相松、又は相公松といふ」と。

白菜「ハクサイ」日本の所謂結球白菜である。「本北地に出で今は南中にも亦之有り」といはれ比較的新しい蔬菜である。永福産のもの最も香美にして有名で、永福白又は福菜と稱せられ最良種である。

芥菜「カラシナ」種子を粉にして芥子を採り菜心や葉は食用に供する。李時珍は芥に數種あるをいひ、福州府志には青紫白の三種ありとあるが、福州の芥菜は一種のやうにしか思はれぬ。

油菜「アブラナ」菜蕪といふのが本當の名であらう。種子から菜油を搾り、嫩葉、菜心は食用に供する。

高苣「チシャ」蔬菜中低溫(攝氏一五度位)でも生育するので従つて初春に市場に出る故に土俗春菜といふ。又菜倭、倭笋ともいふ。冬倭、春倭の二種がある。

蒔蕪「シユンギク」福州興化では艾菜といふ。

蕪菜「ヨウサイ」性濕地を好み霜雪を畏る。莖性白花莖中虚なり。

蕪菜の意味 蕪蕪開覽に「本東夷に生ず。人麴を用ひ其の種を載せて歸る。故に以て名とす」とあつて蕪菜が本當であつたのを後人

改めて蕪菜とした。蓋言誤也といはれるが李時珍は「蕪は蕪と同じ此の英惟蕪を以て成る、故に之を蕪菜と謂ふ。蕪菜は今金陵及江夏の人多く之を嗜く。(中略)三月四月取出し類するに蕪土を以てす。即ち節々芽を生じ一本一畦を成すべき也。(中略)南方の苜蓿也」といひ既に本草綱目に蕪菜と出でたる。

又、「氣味甘平無毒、養汁酒に和し一服せば産難を治す」ともある。何れ南方熱帯地方の原産であらう。福州では蕪菜のハシリは高いが多く出る時期になると非常に安い。

著述「タウチサ」「フダンサウ」本草の所謂蕪菜で流石の李時珍も著述の義未詳といつてゐる。三山志に「葦灰淋汁、衣を洗ふに白くして玉色の如し」とあり、夙から葦に炭酸加里の多いことを知つて居たらしい。葦根共に紅紫色のものを火燻菜土俗紅菜頭といひ食品の裝飾にする、著述或は猪菜、厚末ともいふ。

芥藍「キャベツ」土俗耶菜といひ甘藍 *Colaba* である。在來種は「葉藍の如くにして厚く青紫色。菜の美なる者菜心尤も佳し」とあつて菜心を賞美する。新種は即ち洋種で「洋芥藍味尤勝る」とあつて結球全體を賞美する。

蕪菜「イヌガラシ」「アゼダイコン」柔梗細葉味極辛辣、細く刻み生煮にして食用に供する。
苜、番苜「ヒユ」嫩葉を食用にする。 *Amarantus* の屬である。

芥「セリ」新の略、水田の畦、沼澤に自生し根の白いのを荻薈、赤いのを赤薈、生地に依つて水芹、旱芹の別が有り、古人既に芹の食すべきをいひ可作菹と料理法まで教へて居るのに、今の閩人は餘り之を食べない、勿論田圃にも之を作らない。坊間芥菜といふのは *Colaba* である。葉に毒があるといふので之を電つて賣つて居る。

洋芹「parley」洋菜館で用ふる。

花菜「花耶菜」極めて新しく傳來されたものらしい。

莢菜 葉が莢に以て居るのでいふ。この他苣菜、肥婆菜等がある。

蕪「ワラビ」福州附近にもあるが、其の嫩葉を食用にするのを見たことがない。上游地方には根から採る糞粉を多産する。

苣の意味 閩雜記に「苣は菜の名なり、德化の山山下澤ある處を以て苣と爲す。故に羊欄苣、白牛等苣の名あり。俱に志に見ゆ。何の義なるを知らず」とある。

茄「ナス」土俗紫菜といふが海草の一種にも紫菜があるので兩者混同する處がある。侯官縣志には落蘇の名を以て茄を述べて居る。紫、青、白、水の各種があるといふが、福州附近のは皆一様で中國種の長茄である。

蕪「マコモ」土俗假箱といひ禾本科菰屬の新芽で箱状を爲してゐるもの淺水中に生ずる。閩俗「キノコ」即蕪又は菰を蕪といふが故に間違ひ易い。

蕪「レンコン」品質頗優、良閩人は寧ろ之を果實の仲間に入れ、蜜を掛けて生食する。實は即ち俗稱蓮心で亦良質である。

菱「ヒシ」俗稱蓮角、福州附近には沼澤が多いので産出も可なりある。葉實俱に大形、秋市場に現はれる。
蕪「シャウガ」肥大で良質、連江から多く出る。

番椒「タウガラシ」 數種あり盆栽に植ゑることもある。閩人よりも北方の人がよく食べる。
番茄「トマト」 番柿ともいふ。

紫蘇 往々農家で作つて居るが採實と薬用にするとし、嫩葉は料理に用ひない。

園芸「コエンドロ」 古くからあるもので、胡荽と稱する所は外國種である事を證し、又香荽、蘆荽などと稱され、葉を香辛料に用ふる。福州料理では不思議な程度に之を使ふ。所謂支那臭いといふ臭の素には無論非、蒜が主要な立場を占めてゐるが、此の園芸も亦相當の立場を占める。之が食べられなくては福州料理の通とはいはれぬ。

福州にない作野菜は牛蒡、蒔、ミツバ、土當歸、藥荷等で何れも作れば立派に出来るもので、然かも福州料理にも極恰好のものばかりである。食べ慣れないといふことは色々の意味で實に不思議である。

生葱 食卓に前以て生葱と味噌が出て居ると御馳走に豚か家鴨の丸焼が出ると思定して差支はない。本當の食べ方は葱に味噌を附け焼いた皮と共に薄餅に包んで食べるのだが、大抵は之を待たず前に食べて了ふ人が多い。味噌は黒褐色の濃味噌で料理屋特有のもの、坊間では賣つて居らない。福州の葱は生食に限る。味噌も料理屋の味噌より日本の赤味噌に味の素と砂糖少々を入れて擦つたのが一番らしい。

五 瓜

越瓜「シロウリ」 青白二色あり生噉するに足る。

菜瓜「キウリ」 胡瓜又は黃瓜のことであるが、土俗菜瓜といふ。

冬瓜「トウモロコシ」 一名地芝で随分大きいのが有る。

香瓜「タウナス」 即ち南瓜、俗稱金瓜、食用にも供するが、菓盤に載せて神に供へる。形扁圓、黃、綠、紅、各色がある。形瓢箪のやうに長い番南瓜「カボチャ」は見かけない。

芋蕪 越瓜に似て長く少し苦い、多く煮食する。

苦瓜「ツルレイシ」 皮、荔枝の殻に似てゐる。若い中に食うが又熟して内の紅縷を賞味する。

絲瓜「ヘチマ」 土俗蕪又は粉の字を當てる。若い内に煮食する。李時珍に據ると「唐宋以前聞くなし、今南北皆之有り」とあるから、何れ南方より傳來したものであらう。昔絲瓜のことを處刺とも云つたさうであるから、刺が圓に残つて刺となつたのかも知れぬ。

木瓜 福州に在ることはあるが湿度が足らなくて物にならない。

西瓜「スキクワ」 青くて聞く肉に紅と黃がある。品種も少く質も上等とはいひ難い。

六 園藝花卉

閩人は日本の生花、盛花のやうなことはせぬが花を愛する。従つて郊外に花戸が多い。併し何れも農事の片手間に之を作り溜床の設などは無く、一に氣候の溫暖なるに頼り年中間斷なく花を供給する。特に菊の如きは四時絶える事がな

い様子である。臘梅、梅、桃、李、薔薇、木芙蓉、夾竹桃等の木性のものより金盞花、雛菊、水仙、金魚草、金蓮花、百合、夜來香、マルガレット、孔雀草、矢車草、唐菖蒲、虞美人草、ニホヒアラセイトウ、シネラリア、菊、鶏頭等の草性のものに至るまで普通の種類は豊富であるが、園藝花卉としては先づ原種に近い。但し個人が道樂で栽培するのは此の限りでは無い。それで強いて特徴のあるものを挙げれば所謂蟹水仙であるが、福州の特産とは云ひ難い。

季節代表の花 曲踏の賀年歌に「正月水仙花、排練前、二月桃花、出伏前、三月茶花、夏結仔、四月石榴、紅又紅、五月蓮花、香噴噴、六月首菊、夜來香、七月走響、鷓鴣頂、紅、八月蘭花、好值錢、九月菊花、出好世、十月長春花、好命人、十一月行時、水蓬、菊、十二月梅花、換新年」

七 蘭

農産の中に蘭を入れるのは妥當でないやうだが園藝花卉の續として述べることにする。福建は東洋蘭即ち蘭科 *Cymbidium* 屬の産地として夙く有名である。

古の蘭 抑蘭の名が古書に見えたのは恐らく周易の繫辭傳に「同心の言は其の臭蘭の如し」とあるが始であらう。説文には「蘭香艸也、艸に从ふ蘭の聲」とあるがどんな草かは不明である。爾雅の釋草に「蘭」といふのがあるが「葦五葉生之を蘭」とは白汁あり、嗅ふ可し」と注され今の蘭とは大分異なるやうである。本草綱目草の部には蘭草、澤蘭、馬蘭と三つ載せて居るが蘭はない。一八九五年版 *Botanical Synonym* には蘭草、澤蘭草の二つがあつて蘭は無い。馬蘭は「コンギク」一名紫蘭で李時珍は「其の葉蘭に似て大、其の花菊に似て紫、故に名づく。俗に物の大なるを稱して馬と爲す也」といつて居るから今の蘭とは關係がない。蘭草と澤蘭とに就いて

は李時珍が「蘭草、澤蘭は二類二種也、中略、但し葉開く節長くして葉光り岐ある者を以て蘭草と爲し、葉微かに方節短くして葉に毛ある者を澤蘭と爲す。(中略)雷敷地矣論謂ふ所の大澤蘭は即ち蘭草也。小澤蘭は即ち澤蘭也」と云つて居り兩者共に菊科蘭草屬の二種 *デバカマ* であるから今の蘭とは關係が無い。蘭草の古名は蘭で詩經鄘國の詩に「蒹葭と布と方に渙々たり。士と女と方に蘭を秉る。女の曰く云々」とある其の間である。國譯漢文大成の句釋に據ると「蘭は朱子の説に従へば蘭なりと、又一説に蘭にはあらず澤蘭なりと、蘭の説は信じ難し、植物學者の考證を待つ」とあつて蘭説を採つて居る。辭源には古語蘭の蘭は皆此れ(通稱蘭草一名蘭)を指す也とあつて何れにしても今の蘭とは別なものである。今の所謂蘭が始めて書に現はれたのは爾雅釋草宋代の書ではあるまいか。同書に「幹一花にして香餘有る者は蘭、一葉數花にして香足らざる者は蕙」とある。大分現代の蘭に近い來たが事實と符合せぬ所がある。

閩産録異(清代の書)の著者侯官縣人郭柏蒼は「蘭、其の類三種あり。一莖一花二花、莖花皆綠色、花葉底に藏れ春花を開く者を蘭と名づく。亦春蘭と名づけ其の香遠く聞ゆ。一莖五花七花十一花に至り莖花皆白色、莖は葉よりも高く秋開く者は蕙也。其の香覺え易し。黃肥偉、葉狭にして瘦長、葉旁に刺を帯び三四月花を開き深紫色を作す者は蘭也」といつて居て、蘭は何やら紫蘭一名白及即ち「シラン」のやうに思はれるが克に *Cymbidium* ではないから、結局蘭蕙の二者が蘭の二種となる譯である。

蘭と蕙 汀州府志には朱子の言を引き「古の香草必ずや花葉俱に香し、而して燥濕變ぜず。故に刈佩し得べし。今の蘭蕙但だ花香しくして葉は即ち氣無し質弱く萎れ易く刈佩すべからず。必ず古人指す所に非るや甚だ明なり。何時誤れるかを知らざる也。今蘭人植うる所一幹五七花及紫白二種皆之を蘭と謂ふ」とあつて蘭蕙につき所見を述べて居る。吳安縣志には「蕙即ち蕙なり。又の名零陵香。古の所謂蕙は今の零陵香、今の蕙は何時起れるを知らざる也」とあつて、蕙は蘭の種類ではなく蕙草即ち零陵香即ち豆科の「レイリョウカウ」であることを主張してゐる。李時珍は「古は香草を燒き以て神を降す、故に蕙と曰ふ蕙は蕙也、蕙は和也」とい

つて居る蕙の字に拘泥し蘭の一種であるとすると差障が出て来る譯である。

案ふに現代の蘭即ち *Cymbidium* 属の蘭が支那民族に知られ出したのは恐らく宋代で、宋以前にはよしあつても知られず、蘭の名稱は別な植物に附けられて居たのであらう。山蘭俗稱草蘭は多く浙東に生じ蘭の名がある所より考へ、漸次南方の風物が明らかとなるに従ひ、蘭を珍重するやうになつたと考へるのが確當であらう。して見ると現代の蘭も案外其の歴史が新しい。山蘭「シユンラン」又名春蘭、俗稱草蘭、一莖二花、花色綠黃、香氣は少い。建蘭「スルガラン」一名劍蘭、葉は立性夏終一莖に五乃至十一箇の花を着け芳香が強い。建蘭の名は建州建郡即福建の建より出たものらしく外省の名稱と見え福建の志類には特記されて居らぬ。唯「建蘭は即ち劍蘭なり」「吳越人呼んで建蘭と爲す一名水香即ち深蘭なり」とあるだけであるが、澤蘭の事に就いては既に述べた通りで何かの間違であらう。現在、長樂白梗、古川青梗等の種類がある。素心蘭「ソシンラン」は蘭中の白眉、日本では *Sinbidium Gyoakuin* var. *Soshin*, *Makino* と學名が付き玉紋蘭の變種であるとされて居るが、福建では素心が本體で玉紋は別種のやうに扱はれて居る。素心といふのは花心が全白で斑點のない謂である。であるから花心が全白でありさへすれば葉などは格別の異常ない限り總て素心である。唯産地に依つて素心を區別する。

素蘭 龍巖縣志に「高さ二三尺、葉細長にして尖、柔潤光滑、夏秋の間葉中より白色の花莖を抽く。一莖十餘花、花心玉の如し。其の葉縁心有紅點ある者を綠幹と名づく。龍巖州志に「葉柔潤光滑、葉白く、一莖十餘花、花心玉の如く點塵を染めず、香氣幽細清絶、永安産する者と相埒し。近ごろ多く價を重くして之を購ひ甚だ珍重す。多く得べからず。又獨枝素蘭あり更に佳、今見るを得べからず矣。此蘭惟州種之れ有り」、閩産録異に「蕙の素心なる者亦素心蘭と稱す。龍巖州に産する者を以て第一と爲し、俗に龍巖素と呼ぶ。(以下目注著、龍巖に在つて土人裁うる所を見るに素心蘭多くは永安より携來す。是永安産にして龍巖之を培ふなり。以下本文葉蘭として長く蕙高く花多し、葉花莖に花心皆白色と本場の永安縣志には素心蘭の項はあるが説明はなく詩が載つて居るだけである。汀州府志に「素心蘭あり。瓣朱絲なく心斑點なし色麗香清、難産を治すべし」などとあるに依つて略ぼ素心蘭の姿を寫繪せしめ得よう。

花期は建蘭より遅く容姿優美、花香高く諸蘭中尤も高價である。産地に依つて水蘭素、尤溪素、龍溪素、永安素、建寧素、龍巖素等があるが龍巖素を以て最上とする。魚紋蘭、玉枕「ギョクチン」は閩産録異に「蕙弱くして花白き者を玉枕と名づく。閩小紀郡志俱に魚紋蘭に作る。玉枕、魚紋、聲の譌也、其の韻致を以て特に之を黠するに嬌を以てす」とあつて、閩音では *Ngú Gíng* 魚紋は *Ngú Gíng* 共に酷似して居る。

玉枕 閩小紀に「葉質最も弱く力花を承けず、竟に藤懸(弱い葉)を以て葉(強い葉)と名づく、葉受服せず亦忍直せず、日して葉花を作す、一たび衰るや即ち碧葉中に横陳す。春蘭の思婦甫めて枕痕を勻(平)にし又能みて寝んと欲する者の若し。葉々斜誘、花々曲引す、他蘭の葉力の太だ盛なるを嫌ふ。此と備ふるに足らず」とあつて相當の名蘭であることが分る。百品考に「玉蘭は紫蘭と同時に唐山より來る」とあるさうで、日本の玉枕 *Cymbidium Gyoakuin*, *Makino* の元祖は蓋し此の玉枕であらう。して見ると玉枕蘭は花莖が弱々と恰も春蘭の思婦の如くあるのを本體とせねばなるまい。

宋の趙時庚の金漳蘭譜、宋の王貴學の王氏蘭譜、明の高濂の蘭譜等には紫色の陳夢良と稱するものを筆頭に、金襴邊色深秀魚紋(此白剛之奇品也)、建蘭(此南建之奇品也)等の名が見えて居り、他は皆今の名稱とは異つて居る。

草蘭(カンラン)は建蘭屬で所謂蕙の風、閩産録異に「花心紅、莖紫なる者を草蘭と名づく霜日を避けず。其の根を火

焼して之を植うれば則ち花白し。又花心紅にして花草蘭より多き者あり馬耳と名づく。龍巖州志に「莖紫にして花心紅斑あり四時俱に開く微黄色」とあり。何れも寒蘭とは稱せぬ。草蘭の名は龍巖州志、龍巖縣志に見えて居る。又山蘭を草蘭と稱することもある。報歲蘭「ハウサイラン」閩産録異に「報歲蘭、冬末春初花を開く故に名づく。其の葉光潤、常蘭と視ふるに潤を倍す。花墨紫色、苗者一莖三三葉。道光の間、林上舍文楷植うる所、又硬葉報歲蘭あり、葉短く花疎なり。此の二種蘭蕙と視べ植を難しと爲す。蟻其の根に穴す須らく防蟻立法を得べし」とあつて日本の所謂豐茂蘭 *Cymbidium sinense*, Wild は報歲蘭が本當のやうである。汀州府志に「科節蘭あり色微紫、莖首を以て開花す、一名獨占春、汀俗呼んで報春魁となす」とあるのは龍巖縣志の所謂報春蘭、福州府志、福建通志の所謂獨占蘭で「香色蘭と同じ、春一莖二花を開く又の名獨占春」立春前開花、葉長くして細し一莖二花、多く庭に植う、山谷に自生する者あり、其の花紅紫藍諸色あり移す時多く萎ぶ」とあるのと同じで、山蘭の一種であらう。報歲に興化報歲、龍巖縣報歲等がある。上述の外風蘭は「深山の樹幹上に寄生し、葉蘭に似て短し。夏小白花を開く。一二瓣あり曲りて下垂し土生すべきなし。俗名倒吊蘭」「香聞くべきなし、觀に適するのみ」賽蘭は「一名寒蘭、特に靉烈之を髮髻に戴くに香十歩に開ゆ。佛經の伊蘭即ち此花也」「莖生其の香皆蘭と峙し。一名碎米蘭」、斑葉蘭は「多年生草本、莖の高さ三四寸葉互生、卵狀橢圓形葉面白斑紋を滿布し甚美麗也。夏秋の間莖頭數花穂を成せるを開く花帯紅白色」、家蘭、吉祥蘭、珠蘭、紅蘭、長泰縣の土名林都馬、十八學士、頭陀、鶴蘭、珠砂蘭、機絲蘭等の名稱が各志に見えて居る、中には無論重出して居るのがある事であらう。

蘭の培養法に就いては古來「春出す勿れ、秋入る、勿れ、豆乾かす勿れ、冬濕す勿れ」などと稱されて居るが、蘭の本場福州の李時珍たる郭柏蒼は云ふ「蒼山に遊びて蘭を見る必ず南谷に叢生す。蓋し蘭は風を以て命と爲す。南谷は夏風多く日無く、冬霜を避け日を得。谷氣陰にして鬱せず、泉脈走つて漬せず、盆中に移植して其の性を違ふを甚し矣。培ふ者巖上の積土を用ひ稻草を略隠して灰を篩去したるものを和し、先づ木灰を盆底に置き、後巖土を入れ、緊把して之を植ふ、空曠に安放す。多風無日の所乾の時天水或は清泉を以て之を澆す(蘭根肥なり多澆すべからず)。根土面に出づれば則ち新葉愈開花愈多し。根能く裂るゝに至り九月に盆し其の舊盆を破りて分種す、其の根下の鬱結雜草の如き者は仍ち緊把して之を分種す。養するに麻油渣を以てする者あり、観水を以てする者あり、皆法略を得ず。黄豆を搗き天水或は清泉に澆して瓦礫中に封じ愈久ければ愈妙、草筋前或は開花後に於て豆水を取出し調するに清水を以てし、根に向つて之を澆す(葉を染むべからず)。凡そ葉黒癭を生じ白醜を發する者は皆溼熱不和、無風の病なり。翠芳譜蘭賦に「春出さず、夏日せず、秋乾さず、冬溼さず」と曰ふは南谷の義を得るに庶からん乎。」

四君子 是れ南畫の静物の手捌きであるが、竹の外は皆一種で別段國産品らしいものもなく梅は野梅、菊は稍園藝的の菊、蘭は瓶頭蘭「シユンラン」であつて素心蘭を畫いたのを見た事がない。何れ南畫の手法が説明された頃素心は發見されず、珍重されたのは春蘭一種だけであつた爲であるかも知れない。

八 果 物

何しろ温暖の地であるので種々の果樹がある。又果物は棒上の裝飾として且つ料理後に必ず食べるものとして缺くべからざるものであるから、土産のものゝ外年々多量の果物を外界に仰ぐ。

荔枝 古來果の牡丹と稱せられ福州は其の産地として夙くより有名である。樹の高さ二三丈、龍眼と酷く似て居る。

性高寒を畏れるが故に省の西北境には何處でも植ゑることが出来ない。園小紀に「關西關(水口)以上には荔なく、延建人は終身未だ荔を啖はざるものあり」とある。閩産の荔枝は南海巴蜀の産に比し殊に尤も良しと稱するが、所謂「粵人誇粵園人誇閩」の類で、其の邊は保證が出来ぬが、荔枝の北界として北支に名聲を有つて居つた事は事實である。夏期熟し大果あり、小果あり、外皮の緑あり、紅なるあり、斑なるあり、大核あり、小核あり一様ではない。宋の蔡襄(君謨)の荔枝譜には紅家綠以下十六種を挙げ、明の謝杰の荔枝名記には狀元紅以下三十四種を挙げて居るが、過半は樹名又は場所の名に係るもの、様である。現時は小核を元紅、大核を梗、大果を桂林、小果を金鐘と稱し産樹に依つて其の價を異にする。

荔枝の落實と鹽 宋の大中祥符二年(一〇〇九年)歲貢となり乾荔枝六萬顆、煎荔枝百三十瓶、丁香荔枝煎三十瓶を納めたが始まりで宣和(一一二〇年)頃には結實の小株を瓦器に容れて奉り帝の嘉賞を得たさうである。前清時代には結實の小株を歲貢の常例としたが途中の落實を防ぐ爲めに青鹽を用ひたが、それをよい事にして、貢船は私鹽を満載し州縣の鹽商の脅威となつた。それで道光元年(一八二二年)に貢を罷めたさうである。

貯藏の方法に乾果、紅鹽、蜜煎、罐詰等色々あるが、何といつても冷生食が第一である。外皮を剥けば白脂玉潤恰も美人の肌の如く、之を口にすれば甘酸宜しきを得且つ一種の香味がある。乾果で満足せず、結實の小株を賣せしめたのも尤の事と踏ける。明清時代には良種を出さんことを努め、苗木の選擇、接木の方法等相當に研究され、且つ長年月を要したのであるが、現時はその様な氣色は見えない。即ち培養の方法が退歩したといつて差支ない。現時尙名木が諸處



り 賣 枝 荔

に残つて居るが、漸次少くなつて行くやうである。臺灣には乾隆の間（一七三六年—一七九五年）移種したさうであるが「近亦不亞」でそれなりになつて了つたらしい。植ゑれば無論立派なものが出来るに相違はない。荔枝は毎年豊作といふことはない。早に熟し、雨に敷で、荔枝や楊梅の豊作の時には五穀の出来が悪いさうで、閩諺に「山中紅田裏空不知」といふことがある。

龍眼 レンゲツ 俗に回眼ともいひ樹は荔枝に似て居る。其の味其の條皆荔枝に次ぐが故に荔枝ともいふ。惠安志に「大なる者を龍眼と名づけ、次を人眼と名づけ、小なる者を鬼眼と名づく」とあるが、大小の標準が分らない。

福興泉漳地方の龍眼には榛核の二種があつて、鳥核大實の者を榛といひ、三度接木したものを頂回といつて愈接愈大愈接愈回である。桂といふのは肉の無いもので核土に入り十四五年にして始めて實る之を桂といふ。未だ接木をせぬものである。

龍眼は荔枝と共に中國の原産で樹は酷似して居るが、果は大分違ふ外皮も異り、核も異り、肉は共に白くして甘美多量であるが味が違ふ。荔枝は花落ちずして能く實が落ちる。龍眼は實が落ちなくて能く花が落ちる。それで閩諺に「荔枝愛花不愛子、龍眼愛子不愛花」といふことがある。龍眼は荔枝に比し栽培容易と見え田舎に多い。街路樹のやうな具合に植ゑ共同して管理してゐる所もある。福州名物の布袋人形の用材は大部分此の龍眼を使つてゐる。

橄欖 カワナ 中國原産の喬木で閩廣に最も多い。木種は歐洲の橄欖即ち阿列布 Oliva とは科屬を異にし全く別種のものである。又膽八樹「ホルトノキ」とも異つて居る。樹は無患子「ムクロジ」に似て高さ三四丈、山麓又は沙洲に植ゑ風觸潮汐の

及ばざる所は種あられぬさうである。種類一樣でなく檀香、丁香は皮肉皆淡黄、丁香の特に小さいのを蜜果といひ檀香よりは大きく緑皮白肉で味清脆、又碧玉ともいふ。

遊園と接木 遊園紀聞に「家中客で園中の樹木を小圃に移植し、其の萌蘖を向ふに再蔵にして樹壯、霜を畏る、藪ふに屋を以てす。又三歳高二丈實れるが如し。將に其の實を探り其の皮を剥ぎ、蜜を以て之を塗らんとすれば刷ち盡く落つ。初の實は綠豆丸の如く兩月にして漸く大、地に墮ちたるものあり。之を視るに木樨子也。皮衣を洗ふべく功は皂角に譲らず、核は以て念珠を爲るべし」とあつて矢張接木をせねば良種とはならぬ。檀香、丁香、蜜香、皆長管と稱する者に接ぐさうである。

橄欖は能く酒毒を解き保健に有效であるといふので、始後甘餘り良い味がせぬけれども、閩人は喜んで之を食し、鹽麩糖煮色々に使つて居り、一箇年の移出約千擔二千兩に及ぶ。

柑橘類 邦名のミカン類であるが柑橘との區別は分つて居るやうで分らない。

柑と橘 李時珍は「夫れ橘柑柑の三者は柑類して同じからず。橘は實小にして其の瓣味微かに酸、其の皮薄くして紅、味辛にして苦、柑は橘よりも大其の瓣味甘、其の皮稍厚くして黄、味辛にして甘、柚は大小皆橙の如し、其の瓣味酸、其の皮厚くして黄、味甘にして甚辛ならず。此の如く之を分てば即ち誤らず矣」或は「柑は南方の果也、而して閩廣温寒蘇州を盛と爲す。川蜀有りと雖も之に及ばず。其の樹橘に異るなし但だ刺少きのみ。柑の皮は橘に比べて黄にして稍厚く理稍粗にして味苦からず。橘は久しく留むべからず。柑は腐敗し易し、柑樹冰雪を畏る橘樹は略可なり、此れ柑橘の異也」といつて居るが古語に「橘准を除ゆれば自ら變じて枳と爲る」といふ事もあり、又「小を橘といひ、大を柚といふ皆柑を謂ふ也」といふ事もある。商務印書館發行の植物學大辭典に橘を省き、柑だけ載つてゐる所を考へても兩者の區別は判然しないとする方が穩當であらう。

由來閩の地氣候温暖なるを以て橘類に富んで居る。閩産録異、福建通志、福州府志などに載つて居るのを綜合すると、福州附近の柑橘類は柑十種、橘十五種、橙六種、柚二種、香梅一種であるが、中には柑といつたり、橘といつたりする者も少くないから、實際の品種はもつと少くなるであらう。閩俗では皮の剥けないのを柑、皮の剥けるのを橘、實の重大なるものを抛(即ち柚)、香だけで食べられぬのを橙といひ、香梅は佛手柑のことである。柑橘類は福州では斥南洲渚の地がよいと見え、水田中に饅頭形の盛り地をして培養して居る者があり、又福州蜜柑の主産地は南臺島の東南及烏龍江對岸の低地である。栽培の品種は柑即ち Orange もあるが、單に橘と稱し Citrus Nobilis であらうが、日本往時の赤面に類するものが最も多い。此の種は形扁圓、種子多く、酸味強く、上質のものとは云ひ難いが、貯蔵久しきに及べば酸を減じ甘を増し色愈赤くなるで、支那各地に實美され福桔と稱せられ、年約二萬擔、六萬兩内外を移出する。此の品種即ち赤面の一天張で栽培されて居るのは蓋し北方各地の需要の盛なる爲だらうと思はれる。柚即ち土俗の抛又は抛は邦人の所謂ザボンで元の時粵東より傳來したものださうで、紅肉白肉の二種があるが、品質遙かに臺灣及厦門産に劣つて居り、上等品は主として厦門正彭山の銘を入れ厦門から來る。橙、香梅は盤に載せて神に供へるか、又は食卓の飾とし其の香を愛するだけで食べられぬ。北門近くの吳少鏗邸内には各種の植物特に柑橘類の各種を聚めて居る。

桃 海桃、金桃、銀桃、合桃、瓜桃、七月桃、十月桃、白蜜桃、矮桃、奈桃等の各種があるやうに記されてあるが、閩産録異には「閩桃佳き者なし、獨り邵氏産する所の水蜜桃及福州六月産する所の六月桃、差人意を強うす」とあつて之が本當である。事實福州の桃は頗る原始的である。

梅 醉梅、桃梅、李梅、杏梅、飯梅、梅等の種類があるやうに記されて居るが、見る所日本の野梅に當る者一種のやうである。實も餘り大きくはならず園俗亦梅干には作らぬ。

杏 蔭に「園中杏を積る梅と成る」とありて又園部疏に「園地最鶯花、獨杏花、絶産一異也」ともあつて全然望が無いらしい。

柿 永福、古田に多く、青果として秋期福州に現はれるが、矢張原始的のものである。

栗 山地に多く柿と共に現はれるが、山栗の類である。

この他李、巴旦杏、枇杷、棗、楊梅、黃彈子、葡萄等があるが何れも上質とは云ひ難い。それで年々多量の山楂、梨が山東より、紅圓の米國林檎が上海より移入され、芭蕉實は臺灣より輸入される。

季節代表の果物 曲蹄の貧年歌に、正月 瓜子 多伏 漢、二月 白棗 排滿 街、三月 琵琶 出好 世、四月 茶寮 紅叉、紅、五月 荔枝 圓叉 圓、六月 梅類 能通 龍、七月 番石榴 雙結 仔、八月 蓮殼 食盡 伏、九月 柿歌 甜叉、甜、十月 橄欖 滿街 排、十一月 尾梨 雙起 帶、十二月 紅柑 付造 新年」

第十二章 福州の水産

一 漁獲の方法

福州は海にも近く、閩江にも臨み、且つ附近に池沼が多いから、漁獲の種類も方法も一様ではない。海の漁を以て生計と爲す者を閩俗では討海といふ。大抵沿海の住民が之を爲して居るが、墾族中討海に出掛る者もある。大抵數年を経て歸家する。漁船に竹編網船、旋網船、竹編船、竹編船、竹編船、手搖釣船等種々あつて獲魚に依り夫々使途を異にする。發動船、トロール船の如きはまだ發達してゐない。

箱は又扇ともいひ岸に魚を集めて獲る方法で、雜木を亂積して獲るのを杆挿扇といひ、竹を簾の如く植えて魚を脱せしめないのを竹箔といふ。

網は糸絲運網、沿岸撒網、拖沙運網、方網、挿竹木繫網、網斗、打撒小網等種々あつて漁人に依り一様ではない。經は高さ二丈廣さ百餘丈の大きい網で、小船と罾とを使ふ。投網を圍といふ。この他急網(地曳網の小さいもの)、簾(黑夜に使ふ)、緝(小罾なり)、罩(竹で作る)、釣、步取(即ち捕魚)蟹梨棚(鰻飼)等漁獲の方法にも色々ある。

二 海産

馬鮫「サハラ」又名章鮫と名づく五六月産卵期であるが産卵前が美味である。
 鰯「マナガツラ」海鰯百一録に「白色にして皮細かき者は肉嫩く斗底と曰ひ、皮厚きものは肉粗きを蓮房と曰ひ、小なるものを子鰯と曰ふ」とあつて大小色々あるやうである。初夏産卵の爲め海灣に來り秋になると外洋に歸る。大なるものは長一尺餘もあるが、小なる者に至つては僅かに一寸五分位のものもある。故に日本關西の太平洋岸に現はれる眞名鯨那の産卵地は關海附近ではないかと識者間に稱せられて居る。

馬鮫 關語に「山上鰯鰯、海上馬鮫」といふ事がある。山では鰯と鰯が一番旨く、海では馬鮫と鰯が一番旨いといふ意味であるが、果して此の二者盛名を負ひ得るや頗る疑はしい。
 鰯 李時珍の曰く「昌は美也味を以て名づく。或は云ふ、魚(鰯)水に游げば群魚之に隨ひ、其の涎沫を食し鰯に類するあり故に名づく。閩人訛つて鰯魚と爲す」と。海鰯百一録では鰯魚は鰯と別であると書いてある。海鰯には鰯を鰯として居るが別なものであるさうである。

棘蟹「マダヒ」冬期に多く獲れ價も安い。棘蟹といふのは蟹が棘の如くあるからであるが、泉州方面では過臘といふ。臘に來り吞去るからである。興化では橘蟹といふ。奇蟹、吉蟹は棘蟹の異名である。

赤蟹「チダヒ」棘蟹よりも大きい。關中海鰯疏に「棘蟹は赤蟹と、味豊にして、首味豊眼に在り、葱酒之を蒸し珍味と爲す。十月此の魚時を得、正月以後は味拗にして食ふべからず」とある。鰯の眼を珍重するのは日本ばかりではない。鳥類「クログヒ」俗に海鰯といふ。黄鰯「キダヒ」棘蟹に似て小さい。福州泉漳皆之を産し土人は黄鰯と呼ぶ。

タビの鰯 閩俗では鰯類を一口に黄鰯といふが黄鰯は別の魚であるさうである。鰯の眼は「十月葱酒尤珍」と稱せられるが、之は

餘程の通人の話で、一般の人は餘り鰯を食べない。何でも頭が大きく食べる所が少いからだとも、肉が荒くて味が下品であるからだとも云はれる。兎に角、廣つても鰯といふやうな事は福州にはない。故に鰯の價は非常に廉であるが、陽曆正月にならうとする頃には急に騰貴する。是は日本人の正月には必ず鰯を用ふるといふ事を魚商が知つて居るからである。

紅「エイ」鰯魚、鰯、鰯等の名がある。黄白黒の三色があつて、黄は白に勝り、白は黒に勝る。閩人紅を誤つて鰯とするが鰯鰯で海魚ではない。

黄鰯「アカエイ」黄色の紅で諸紅中黄鰯を以て第一と爲すと稱せられるが、「紅魚の美は肝に在り」といはれ、又「市價亦賤し」ともいはれて居る。

鰯沙「ウシノシタ」貼沙、龍舌、草鞋魚、箸魚等の名稱がある。近海に棲み初夏に多く獲れる。下品な臭があつて上品な魚とは云はれぬ。

比目「ヒラメ、マガレイ」前者と同様貼臥沙底で形も似て居るので昔からよく間違ふ。福建通志に「今閩人此の魚(鰯沙)を以て比目と名づく比目又二魚たるを知らず」とある。比目の産出は鰯沙に比して少いやうである。

海鰯「ハモ」海鰯ともいふ。夏季の産卵で此の頃盛に獲れる。
 帶魚「チノウウラ」深海底に棲んで居るが、八九月頃産卵の爲め潮江に來る。此の頃多獲する、之を醃藏するに味尤も美なり」とあるが、左程でも無いやうである。
 石首「グチ」多産する、石首又の名鰯で、黄瓜、黄魚、黄花魚、横山ともいふ、「朱口厚肉極めて清爽、腥を作さず」

とある。蟬は蛾とも書き蛸よりも小さい。牝牡に分つて産し蛸よりも賤し、秋末より春仲皆之れ有り、獨り大寒節には穴に入り取り難し」と稱せられる。普通蟬肉に葱薑香油胡椒等を交せて刻み、殼に入れ油で揚げた蟬蛸といふのが賞味されるが蛸生と稱して生食もする。

蟬海といふのは海産小蟹の鹽辛である。

粗粒糯米、蠶海、空浦(澤庵遺)、蚌、蝦米、鱈、鹽醃、蟹仔(親)等は同格のもので下級の食としてある。

蚌 (俗に蚌に作る)とあつて府志通志其の他の諸書皆蚌と書いてある。

蚌と蚌 説文に蚌が無くして蚌があり「蚌は蚌の屬に从ふ半の聲とある所から考へ、蚌字は後で出来た字であらう。最近の辭源には蚌字を載せて居らぬ。玉篇には「蚌歩項切、蚌蛤也、蚌同上」とあつて蚌が正字のやうになつて居る。福州府志には蚌は「蚌也形蛤の如く殼厚くして長し」とあるが、説文には「蚌は蚌也」とあるから蚌即蚌とするのは穩かでない。Dictionary of Koochow Districtには蚌が無く「蚌 A bivalve (Uniones) a muscle like the oyster, large and thick-shelled, the Pearl oyster」とあつて現在吾人の稱する蚌とは何だか異なる所があるやうである。本来の蚌は淡水産で日本のカラスガヒ、ドブガヒ、タンガヒ、カハガヒ、マルドブガヒ、タガヒエカガヒ等に當るもので、本項の蚌の如く海産ではない。李時珍曰く「蚌は蛤と同類にして異なる、形長き者を通じて蚌と曰ひ、圓き者を通じて蛤と曰ふ。故に蚌は手に從ひ蛤は合に從ふ」とあつて、福州の蚌に蚌字を當てるべきではないと思ふ。

蚌は海産の貝類で形蛤に似て大きく殼は薄い。殼の表面は滑らかではなく、且つ無文で外殼の汚物を取ると白色で半紫色を帯びて居る。肉は非常に美味で「川蚌清湯と稱する吸物は福州料理の珍味であり、又盛宴には缺くべからざるものである。所が各書には蚌に珠ありとは書いてあるが、美味であるといふ事は一も記してない。故に或は蚌は邦人だ

旨く感じ、支那人自身には案外旨く感じないのかも知れぬが、それにしては變な話である、或は往時今の蚌を西施舌と云つたのかも知れぬ。

蚌の珠 萬曆版福州府志には「蚌頭鏡有珠胎」、海鏡自一錄には「巨蚌生剖之、間得小珠、或中有佛像跌坐、毫髮畢具」とあるが、閩産の蚌は殼に眞珠層もないやうだし、珠を獲たといふ話も聽いた事がない。恐らく淡水産の蚌の一種、河珠母が鹹水産の眞珠貝と間違つたのであらう。

蚌は閩海の特産であるとして一般に云つて居るやうだが、未だ調査した話を聽かない。福建省中外洋に接して居る處は昔の區分に從へば福州府、福州府、興化府、泉州府、漳州府の五州であるが、又は蚌に關し夫等の府志を調べて見ると(1)福州府志には「蚌生溪河」とだけしか記載してない、(2)福州府志所載の分は本項に述べてある通りである。(3)興化府志には「今按するに蚌數種あり、尖なる者あり、圓なる者あり、其の溝渠中に生る者あり、生海中に生る者あり、其の殼外は蒼黒、裏は明亮珠色の如く其の肉堅韌、人亦取つて食ふ」とあつて淡鹹産を混同して居る。(4)泉州府志には記載がない。(5)漳州府志には「蚌は戰國策の所謂蚌を相持する者也」とあつて記載が不明である。かゝる點から見れば閩海の特産であるとも云ひ得る。併し蚌が西施舌であつたら何も福州の特産にはならない。福州の蚌は主として長樂縣から來る、割合に高價なので主として料理屋が之を求め、一般の者は容易に求めないやうであるが、兎に角蚌は福州料理にとつて好ましい存在である。

西施舌 蚌が美味であるとは書いてないが、西施舌は美であると諸書に見えて居る。例之長樂縣志に「車蛤俗名西施舌」、閩中海

錯疏に「土匙」「バカガヒ」也、煮呉鮫、似蛤而長大、有舌白色、名西施舌、味佳、（補註）福建軍に「八閩惟福興泉四郡瀕海、古今所稱海錯之盛、然唯福之西施舌、泉之蠔房、海味、餘品雖似味佳、漳州府志に「似蛤利而長、其肉有舌最美、海鮫出東閩郡者、以西施舌第一、閩小紀に「書家有神品能品選品、閩中海鮮、西施舌當列神品」とある。西施舌は長樂の海に産するが産額が少いと見え、福州に來る事はなく大抵蛤類「ハマグリ」に交つて來る。魚商は之を選出し依頼者に渡すのである、實際は蛤よりも味は劣つて居る。料理屋の所謂西施舌は實は蛤である、兎に角あれ程旨い筈を諸君に一言も「味美」と云つて居らぬ所は實に不思議である。

蛤類「ハマグリ」白殼にして厚圓。蚌殼「ハマグリ」の最大なるもの、殼は微しく黄色。文蛤小さいハマグリ、殼に花文がある。蛤「アサリ」は殼の紋様に種々ある。漁獲の時季が夏であるので朝買つたら晝に食べないと腐つて了ふ。

蛤字 福州では單に蛤といふと「アサリ」の事で「ハマグリ」ではない。

蠔「カキ」未だ肉を剥かざるものを蠔房といふ。一般魚貝類は中亭街の魚商が取扱ふのだが、蠔だけは取扱はないので蠔房船が直接海から運んで來る。市中の小魚商は船から蠔房を買ひ之を剥いて賣るのである。福州の蠔は小さくて黒味が大きく上質の者ではない。沿海には黄蠔と稱して蠔の數倍もある大きいものがあるが、如何なる故か福州には來ない。螺 Spiral Shell の類 海江共に産し種類は頗る多い。海産の螺で美味なものは黄螺で「殼硬く色黄にして味美、其の黒而微しく刺ある者尤も佳」と稱せられる。料理屋で出す螺は大抵之であるが、特に香螺と稱する。黄螺の殼に花紋あれば之を花螺といふ。

蟹「アカガヒ」肉も紅く汁も紅い。殼に稜狀あり、屋上の瓦の如し。福州では縁起のよい貝として祝事には必ず之を用ふる。珠蚌は蛸より小さいが價は高く多く醬油漬にして食べる。「蚌之極小者」といはれるが種類は蚌と異なるやうである。

蟹「アゲマキ」夏季盛に現はれる、蟹田、蟹埒、蟹箔の名を以て連江福寧等で養殖をして居る。價は安い、肉は細長く丁度小兒がシルクハットを被つたやうな姿をして居る。昆布 日本から來る。身體の毒を拂ふ効があると云つて愛用されるが、何しろ値が安い程よいのであるから上等の物は輸入されない。

紫菜「アマノリ」紅藻類のもので興化、惠安、福清等より出る特に惠安小蚌のものが有名であり、日本海の海苔に似て居り其の儘乾してあるので紙狀を爲して居らない。本草の所謂紫菜である。苔菜「アヲノリ」綠藻類で光餅に夾んで食べたり料理にも用ひる。蟹形にせず其の儘乾したもので砂が多く含まれて居る。

三 江 産

閩江は潮汐の影響を受ける事甚大であるので、江産即ち淡水産とは云はれぬ場合があり又海江の間を往來する魚類もあつて一様ではない。潮汐は三十五哩を三時間で進み來り、萬壽橋下に於て満干の差約六尺以上もあるので、潮汐が江産の魚類に影響する所は大きい。鹹水が海から進んで來る場合には、比重の関係で閩江の下層を遡流し水面の淡水も之

に伴つて溯流する。従つて江産の魚類には水面の魚類と底面の魚類と種別がある譯である。鹹水が閩江の何の邊まで影響するかを調べた者は未だ無いやうであるが、昔から水にまで潮汐は影響するといひ、海鏡百一録には「八九月潮壯んの時、恆に洪山橋上百里の下岐に至る」とあつて随分遠い處まで影響して居るものらしい。

鱈魚「ヒラコノシロ」鱈科の魚類で日本では南方にのみ産する。下顎が突出して居るのが特徴である。板身、扁首燕尾、青背白鱗、大者長數尺、肥腹多鯁と稱せられる。五六月頃が産卵期で此の時に河を遡つて來る。肉は鹹かで脂があり、江産第一の魚類と稱せられ、鱗を取らずに蒸して食べるのを普通とする。

鱈鱗 鱈魚の鱗には脂が蓄いて居り食通は此の鱗を口に夾み脂だけ嘗める者がある。福州でも紳士は三箸と云はれ我勝ちの馬食は上品としてゐない。

閩俗では鱈魚は夏至に目が開くと稱し夏至前は高價であるが、夏至後は急に安くなる。

鱈「コノシロ」江口近海に棲み「鱈」の如くして小、鱗青色、俗に青鱈又の名青鱈で、多月味甘腹、春月魚首に蟲を生じ漸く瘦せ食ふに堪へず」江鱈は鱈の幼時の稱で洪塘江に多産する。

鱈「スズキ」夏季河を遡り冬季海に入り、秋冬の交河口の深處に産卵する。閩大記に「江中に産し吳松と並んで美とあり、諸書に驗にして腥からずとある。

鱈「ボラ」半鹹水中に棲み夜陰滿潮に乗じて上層に現はれる。幼魚は細流と雖も能く上遊する。カラスミ鱈は閩海では獲れない。

溪鱈、溪鱈「フナ」、溪鯉「コヒ」共に骨硬く池産の者に及ばぬといふ。

鮎 即ち鱈、俗稱滑鮎「ナマヅ」尺餘の大きなものもある。諸書三山志を引いて「方言謂之池魚」とある。池魚實は傳寫の誤で鮎魚が本當であるといふ。本草綱目にも鮎魚即ち鮎魚、口腹共に大なる者を鮎と名づけ、背青口小なる者を鮎と名づけ、口小背黄腹白なる者を鮎と名づく」とあり。又鮎は粘也ともある。日本では鮎をアユと讀むが閩江にアユは居ない。

鮎鮎「ハゲギギ」黄鮎「ギバチ」類、多く何れも曲膝鮎魚である。

鮎「ウナギ」産地に依り池鮎、湖鮎、浦鮎、溪鮎とあるが、池鮎が最上で小頭蒼綠色のものが良いとしてある。鮎は料理に用ふるが、蒲燒なる料理法を知らず且つ珍重もしない。従つて値段も日本に比して遙かに安い。故に土用丑の日前には多量の鮎を臺灣に輸出する。

鱈 鮎に似又蛇に似て居る青黄二色がある。

閩産録異に「絶大者、食之令人昏睡數日、似死未死、及能起生、規筋骨腫長、道光壬辰、臺灣武舉人楊邦瑞、與其妹因食巨鱈而斃八尺」とある。

放生と鱈 福州人は能く放生をする。特に普度(施餓鬼)の時最盛である。放生には鳥獸魚類種々あるが、魚では鱈を第一とする。

此の魚は活力が強く且つ放生しても直ちに逃げず、頭を水面に出して如何にも名種惜しさに放生主を見返る(？)ので、親類の念が厚いものとされて居る。放生の場所は廣濟橋下で同橋第五門(中洲から算へて)には鬼が居つて放生に適當の場所とされて居る。

銀魚「シラウヲ」膾炙とも王餘ともいふ。長さ三四寸全體が白色透明で唯眼のみ黒點である。格別旨くもないが上品

な魚である。近海に棲み四五月頃産卵を爲して遡上し産卵をする。閩江で獲れるのも此の頃である。鱖形は鮠にも似又鮠にも似て居る。長さ四五寸より七八寸、巨口細鱗で皮厚肉緊、味美である、溪鱖は色蒼、海鱖は色黒である。

鱖「スツボン」多産安産である。一城市巨鱖を得れば恒に江湖水深の處に之を放つ。故に福州上下江及各郡縣城外の溪中鱖の大なる者徑三四尺、圍丈餘と稱せられる。

開魚 地方に依つては錢魚、丁斑魚とも云ふ。食用の魚ではなく玩魚である。游宦紀聞に「三山溪中小魚を産す、斑文赤黒相間り、黒中兒、之を養ひ時を角し捕戯を爲す、昔は開魚あり、今は開魚あり、亦觀るべき也」とある。

開魚と金魚 開魚は大きくとも二寸位であるが、中々騰開意識の猛烈な奴で兩者相闘ふや先づ鱗尾を張り、紅緑斑の色度を増し、大に威容を示し合ふ。金魚を開魚の槽に入れると一晩の中に眼や尾の一部を噛み切られて居る。

江水各層の魚類 多年鴉飼を爲せる老人に就き閩江水各層に棲む魚類を質した所、江魚は略ぼ區域が定まつて居るさうである。(1)上層に浮び遊ぶものは白刀(色白く骨多し大きいものもある)、開魚、條仔(夏多し小魚)(2)中層に居るもの、鱖、鯉、鱒、鰱、鰻、ヒイラギ、肥蟹(ドマン)、赤壳(白鱈)、日本のサツバに近きもの、鱈魚、(3)下層即ち底に居るもの、鰻、黃甲「カウライギキ」、黃鮎「ナマツの類」、鱈沙、湖鱖「ドジョウの類」、銀魚、鯉魚「フグの一種」、潭鮎「ナマツの類」何れも大魚でないのは鵜の相手の魚であるからである。

四 池 産

福州平野には淡水の養魚池が非常に多い故に福州の魚類は什蟹(魚店、海魚)、曲蹄(魚、江魚)、池魚の名稱を以て分ける事も出来る。池魚は魚苗を江西省から取り寄せ(大抵一月頃魚苗を桶に入れ上游より来る)之を放つて大きくしたもので種類も多い。

鰻 板身鋭口縮項味肥美でより、福州料理には之を用ふる事が多い。俗に妾の魚と稱せられるは扁平な魚であるので、起きて(游いて)居る時は小さいが、寝て(皿の上)居る時は大きく且つ味頗る佳であるの意である。

鰻 一名白鰻又は鰻と名づく、口小、鱗細、身扁、腹部白色、初め小池に飼ひ次で廣池に徒すが、成長甚だ速く十餘年にして産卵するといふ。

鯉「コヒ」各書鱗屬の筆頭に掲げてある處を見ると、古來珍重したのであらうが、福州では鯉に舊惡病を盛り返す毒があるを稱して賞美しなかつたり、怖れたりする者がある。

鱖「フナ」大小各種あり價も割合に高い。之も臭いと云つて食べない者がある、冬末産卵前が最も美味である。草魚 俗稱で本名は本草綱目に鮠魚、福州府志に鮠とある。李時珍曰く「鮠又青混、郭璞は鮠に作る、其の性舒緩、故に鮠と曰ひ、鰻と曰ふ、俗に草魚と名づく、其の草を食ふに因る也、江湖魚を畜ふ者、草を以て之を飼ふ焉」と。鯉に似て長く魚苗は江西から来る。

池上の厩所 養魚池の上には必ず木村で拵へた厩所がある。露大で腰を圍ひ一寸見えないやうにしてあるのだが、全部池に直接落ちるやうになつて居り、近所の者は勿論通り掛りの者でも隨時出来るやうになつて居る。富豪の邸宅又は使傭人の少い別荘の後園に池のある所などでは、便所まで池を延ばし頗る輕便に兩用を果して居る所もある。魚類は之を直接食べるのではなく、其の生ずる魚を食べるのだといふ説もあるが、即刻湧く譯でもあるまいし、兎に角何れにしても然るべく始末され、池水は格別臭くもない。多年の経験から巧利的に良く考へてあると思ふ。

上述の如く福州は各種の水産物に富んで居るが、海産の大部分は之を長樂、福清、連江、寧徳等より仰ぎ、産地では大半を鹽魚とし、福州を経て附近の各郷及び上流地方に搬出するが、一般の需要を充たすには足らない。加ふるに鹽の高價である關係上、年々多額の鹽鱈、鹽鯨が輸入され、年額約七八萬擔、四五十萬兩に達する。此の他海參、貝柱、鰻、寒天其の他の海産物約三四萬擔、價格六七十萬兩のものを年々輸入する。



池上の厩所

第十三章 福建茶

一 福建茶の地位

支那に茶の現はれたのは何時であるか、唐氏に陸羽が茶經三篇を著した事で唐の時代に茶のあつた事は明瞭であるが唐以前に就てはよく分らぬ。E. Watson の *The Principal Articles of Chinese Commerce* に據ると「歐洲に茶が紹介されたのは第十六世紀の中葉であるが、東方民族の間には其の數千年前既に知られて居つて紀元前二七〇〇年頃生存して居た支那人の筆者に依つて立證される」と云つてあるが、何を證據に述べたのか不明である。明代楊慎の丹鉛錄には「茶は古の茶」とあるが、爾雅釋草の部には「茶は苦菜なり」とある。詩經の各所に見える茶は其の場合々々種々なる草を稱したものでなく、今の茶(灌木)とは異つたものであつたらうと思はれる。同じ爾雅の釋木の部に「檟は苦茶なり」郭樸の註に「樹小似繩子、冬生葉、可煮作羹飲、今呼早采者爲茶、晚取者爲茗一名薺、蜀人名之苦茶」とあり。茶經には「茗春采謂之苦茶」とあり、又茶は「其名有五、一茶、二檟、三薺、四茗、五薺」ともいはれる所を以て見ると、本茶は今の茶 *Tea chinensis* に當るらしい。茶樹は其の初め自生で夙くから存在して居たのであらうが、其の葉を採つて茶と爲し之を飲料に供した習俗は、晚くも晋(第四世紀)の時代には既に始まつて居た事は確實である。宋の蔡君謨の茶錄二篇は閩産の茶が茶經に載せてないので之を著はしたのであるから、福建茶は支那に現はれた茶の中では割合に

晩く出現したものであると云ひ得る。

一九二

福建茶は第九世紀の末葉に世に現はれたのであるが、漸次改良を加へられ且つ産額を増し、第十九世紀には立派な世界的商品となり、福州（一八四二年開港）、三都澳（一八九九年自開）の二港も茶の輸出の爲めに開かるゝに至つた。かくて福建全省は急激に製茶の發達を見たが、印度、臺灣等の強敵が現はれるに及び甚しく退嬰し、洋人茶商にして福州に居を構へて居た者も少なからず引上げたが、それでも福建茶は全省の自用の外、年々福州港のみを以てしてなほ約二十五萬擔（即二千五百萬斤）の茶を外國及び支那各港に輸出して居る。

二 福建茶の産地

殆んど全省に亘つて茶を産するが大別して三とする。西路と稱せられる地方は福建茶最古の産地で、閩江流域の舊延平、建寧、邵武、汀州等の各府下、就中舊建寧府下の崇安縣は武夷茶の産を以て有名である。但し武夷茶は崇安縣から出るが、崇安縣の茶悉く武夷茶ではない。北路は舊福州府下の寧徳、福安、福鼎の諸縣、舊福州府下の屏南縣等であるが、西路より後れて發達した地方である。南路は舊泉州府下の安溪縣、舊龍巖州、舊永春州等である。舊福州府下の長樂、福清の二縣は殆んど産出が無いと云つてもよいが、其の他は産額に多寡こそあれ福建全省到る處茶を産出する。而して西路、北路の茶は悉く福州に集り、大部分は福州茶商の再製、調合を経て改めて外國及び支那各港に輸出する。

正路 茶商間に正路といふ語があるが之は本場といふが如き意味で、例へば小種茶の正路は崇安縣であると云ふやうなものである。

る。

三 福建茶の種類

産地、製法、茶商等の如何に依つて其の種類頗る多様である。支那人間では福建茶を 紅茶、綠茶、青茶、雜茶（茶屑）と分けて居るが、中には白茶（銀針の如きもの）を一種と見做す者もある。福州海關では必しも此の種類に據らない。又民間では個々の茶の種名を稱へて大分類の名稱には拘泥しない。以下彼此参照して福建茶の種類を述べて見る。

（一）紅茶 (Black Tea)

紅茶は茶の種類中最も水色の濃く出るもので茶其の者も色濃厚である。乃ち Black Tea と稱せられる所以である。頭春（一番茶、一二月頃）、二春（二番茶、五月前後）、三春（三番茶、七八月頃）と年三回茶葉を採つて之を製するが三春は稀である。又他種にあつては頭春だけのものもある。頭春の茶が價最も高く、順次二春三春と廉くなる事は茶全般を通じて同様である。紅茶が綠茶と異なる所は水色よりも寧ろ其の製法に在る。紅茶は摘葉後日光に晒して萎凋せしめ苦汁を搾り出したり、醗酵させて茶葉を黒紅色に變せしめたりするが、綠茶は生葉を直ちに鍋に内れて萎凋する。後段の處置即ち揉んだり火を入れたりする所は兩茶共異つて居らない。其の種類は左記のものがある。

一九三

工夫 Oolong 値段はさして高くないが福建紅茶中産額の最も多いもので西北兩路共に之を産し、日本を除く外殆んど世界各地に販出する。

工夫の意味 工夫といふのは本と泉州語から起つたもので手間又は手際の意味であるさうであるが、一説では工夫は君誤(蔡襄の字)の訛であるとも云はれる。閩産録異に「有就者何種芽、以指頭入鍋、逐葉捲之、火候不精、則色黝而味焦、即泉漳漳人所稱工夫、薄便二兩重也、其製法則非茶師不能、日取直一兩(銀一兩)とあつて製法が難しいのみならず勞賃が前清時代には一日二兩もした。

福建以外の工夫茶 現在工夫茶は福建の産出最も多く、次いで湖南、湖北であるが、往時は湖南、湖北が有名で、Oonam、Ong、ongとして知られ、江西省新寧州から出たものは、Yngeloo、として有名であつた。

小種 Souahong 小は少で珍らしい意味だといふ。崇安郡武の小種は夙くから有名である。

白毫 Pekoe 早期の茶芽を採つて製し表面白毛を以て掩はれて居る。故に白毫と稱し、又銀針とも稱する。福建の特産で價は非常に高い。

白毫小種 Pekoe Souahong 白毫と小種とを混合したもの、工夫よりも高價な上等の紅茶である。

烏龍 Oolong 茶葉を直ちに焔に入れる事も出来ず、さればとて其の儘にして置く事も出来なかつたので、不取敢天日に干したのが本であるといふ。

珠蘭 Caper 形は小珠茶に似て居る。珠蘭は香花の名である。前二者は天日茶 Sun-dried Tea に分類する者もあり紅線間の中間のものである。

烏龍の名稱と原産地 茶の樹に黒い蛇が巻きついて居たので特別の香が生じた。依つて烏龍と命名したのだと傳へられ、諸種に其の趣が賦せられてあるが何處での話かは分らない。閩産記(咸豐八年(一八五八年)の自敘)に「近來則尚沙縣所出一種烏龍、謂在名種之上」とあるから或は沙縣(鶴延平府下)が原産地で第十九世紀の初葉に作り出されたのかも知れぬ。沙縣誌に據ると「茶、昌峰山草洋鄉者良」とあつて何れ其の附近が原産地であつたのであらう。武夷茶の奇種に烏龍と稱する茶がある。一斤六元位であるが、福州の或茶商は之を一斤三十六元で天津方面に賣つたといふ。武夷茶の烏龍は沙縣よりも後のやうに思はれる。閩産録異(光緒二年(一八八六年)の自敘)には「又有烏龍、產大湖小湖(建寧府下屬寧縣)皆能除煩去膩、眞者亦難得」となつて此の頃建寧府でも之を作り中々得易くないものであつたらしい。武夷、烏龍茶は閩江上游の原産で、一種の香味が賞美されたものであらう。現在では臺灣所産の烏龍茶に依つて烏龍の名は世界的となつた。

(一) 綠 茶 (Green Tea)

茶の鑑定標準は人に依り時代に依つて違ふのであらうが、一般に福州人間では一香一味三形四水色であるやうである。故に紅茶であつても綠茶であつても水色に就ては餘り八釜しく云はないやうである。事實福建茶は名は綠茶であつても其の水色は日本の綠茶のやうに明瞭なる眞綠色ではなく、多分に黄色を帯びて居る。

福州の點茶法 福州では廢れて來たけれども、猶ほ茶園(館)があつて茶を飲ませる。又各家では客が來れば先づ茶を出す。何も早く蹲れといふ體ではなく客を遇する一接待法である。茶の點れ方は先づ茶碗中々大きい、必ず蓋が附く(に)適宜の茶を入れ、之に湯を注ぎ蓋をして客に勧めて、之が正式のやうである。客は茶葉が開いて沈むのを待ち蓋を取り又は蓋のまま壓るのである。茶器を愛玩し急須や茶碗の小さいを用ふるのは泉漳人で、高價な茶を愛用するのも寧ろ泉漳人であるやうである。閩産記に「漳泉各屬尚功

夫茶、器具精巧、寧有小如胡蝶者、名孟公憂、杯極小者名若溼杯、茶以武夷小種爲尚、有一兩(十匁)值番錢數圓者、飲必細嚼久咀、否則相嚼「噉笑」とある。福州では酒瓶に餾製の特定のものがあるが、陶器製の太急須約二合餘も容れ得る大物を其の備酒瓶に用ひて居る料理屋も相當に多い。

珠茶 形に大小があり、小を小球茶 Gunpowder、大を大珠茶 Imperial と稱する。小は直径 1.8 乃至 1.4 吋の彈丸のやうであるので Gunpowder と稱せられる。琉球では古くから福州と交易をした關係上、此の種の茶が二百年來賞美されて今日に及んで居る。

熙春 Hsya 紅茶の小種に當るべきもので本來は安徽省の産地さうである。福州で熙春として販出するのは明前や雨前であるさうである。明前、清明節前に採る意味であり若淺とも云ふ。雨前、穀雨前の意味、製茶の時期が明前より稍遅れる。兩者共單獨のものもあるが大抵香花を入れて居る。福州人の常用する香片は明前雨前に香花を入れたものである。

熙春 Hsya の名 茶商李氏の娘の名から出て居るといふ説がある。熙春は父の茶を標むのに巧であったので竟に茶の名稱になつたといふ。何時何處での話かは分らない。熙春は或は旗槍の轉かも知れぬ。茶商の中には熙春と書かず旗槍と書く者がある。兩者共音は約似て居る。

青茶 綠茶ではあるが特に産地の名を冠し、水吉青とか、六都青とか稱する。味が渋いので他の茶に配合するやうである。

(三) 花 煙 茶 (Scented Tea)

紅綠の別を問はず茶に香氣を附ける爲め、香氣の高い花や蕾を乾して混入したものである。香料の花には茉莉、珠蘭、梔子、桂花等があるが、茉莉が最も多く用ひられ、福州の川合には茉莉如が非常に多い。之等の香花は茶の産地に於て扱はれる事は少くて、大抵福州に搬出して來た後福州の茶商が適當に配合する。一夜を経て之を取り去るものもあり、其の儘殘して置くものもある。花煙茶は福建各種の茶の中産額最も多く主として内國各港向である。一九二七年花煙茶の總輸出額九萬九千三百五十四擔の内、外國に輸出されたものは僅かに八百三十九擔、一九二八年は十萬四千三百八十二擔の内一千七百七十三擔に過ぎなかつた。

花香 Orange Pekoe Flower Pekoe 白茶を本體とした花煙茶、Scented Cape 珠蘭茶に香花を入れたもの、浙江省から來る高價な龍井(綠)雀舌(綠)にも香花を入れる。福州人の最も喜ぶ香片は前述せる如く明前、雨前の花煙茶である。

(四) 磚 茶 (Brick Tea)

茶を壓し固めて煉瓦形にしたもので、紅綠何れの茶でもよい譯だが、福州では紅茶を使つて居る。特殊のものであるから、産額も餘り多くなく直接外國に輸出する事も少い。

(五) 雜 茶

茶片 Slicing 茶末 Dust 茶梗 Salk であるが、何れも其の名の如く下級品である。

四 福建茶の價格

現在では福建省の各縣到る處之を産するが、其の價格は産地、製法、製造時期、賣買時期、需要關係、茶商等の如何に依つて固より一様ではないが、各茶の産地及一擔(百斤)の價格は大要次のやうなものである。

紅茶	白毫	紅毫	小種	工夫	烏龍	芽尖	紅珠	紅片	綠茶
	福州縣白琳 政和縣內塘	政和縣 建甌縣	崇安縣 政和縣	福安縣、福鼎縣、屏南縣、福州北嶺、政和縣、建甌縣、邵武縣	崇安縣、建甌縣 沙縣	福州茶商製造	同	同	
	四〇〇—一六〇元	一五〇—一四〇元	一五〇—七〇元	頭春 八〇元 二春 五〇元	一一〇—五五元	八〇元	六〇元	二〇元	

龍井	雞眉	蓮心	明前	雨前	珠茶	牛山	綠片	芽末	花燻茶	雀舌	珠蘭	香片	青茶	六都膏	水吉膏	
主として浙江省杭州府理安地方 福州茶商製造、旗山の白茶を混合	崇安縣、政和縣 福鼎縣、白琳	福州茶商製造	同	北路	閩侯縣北嶺 福州茶商製造	福州茶商製造	同		主として浙江省より來る、福州で花を入れる。	福州縣	福州茶商製造	同	福州縣	福州縣	建甌縣水吉	
六五〇元	一二〇元	裝箱 一一五元 裝袋 九〇元	一〇〇元	八〇元	五五元	四〇元	頭春 三〇元 二春 二〇元	二五元	一〇〇元	一〇〇元	八〇—五〇元	七〇元	七〇元	七〇元	四五元	一九九

建 福 青 建 福 縣 三 五 元
 沙 縣 青 水 背 背 以 下 三 者 を 獲 得 せ ば 三 五 元
 永 福 青 永 福 縣 三 五 元
 武 夷 茶 三 五 元

奇 種
 水 金 龜 一 斤 六 四 元
 白 鷄 冠 厦 門 に 於 て 販 賣 一 斤 六 四 元
 月 中 桂 一 斤 二 五 元
 名 種
 白 毫 猴 政 和 産 一 斤 八 元
 水 仙 建 福 地 方 一 斤 八 元
 烏 龍 特 に 巖 茶 の 烏 龍 と 云 ふ 一 斤 六 元
 鐵 觀 音 安 溪 産 一 斤 五 元
 半 鐵 一 斤 一 〇 〇 元
 片 鐵 偽 物 多 し 一 斤 三 五 元

五 福 建 茶 の 歴 史

(一) 北 苑 茶

福建茶の濫觴は建茶又は北苑茶と稱せられたものであつた。北苑は建安縣(建寧府城即ち建安縣城)の東北二十五里の鳳凰山下に在る。鳳凰山は其の對峙する龍山と共に茶の製焙に適する良水を北苑に給し、特に龍鳳二山の水と稱せられた。宋の太平興國年間(九七六年—九八三年)始めて茶を製し龍鳳に象つた團茶を朝貢した。是れ福建茶の起原である。其の後漸次發達して慶曆間(一〇四一年—一〇四八年)には「大小の龍茶は丁謂に起り蔡君謨に成る」と稱せられるやうになり、世に建州の團茶として知られた。崇安縣志其の他に據ると「宋の咸平中(九九八年—一〇〇三年)丁謂福建清監(轉運使)と爲り御茶を造つて龍鳳團を進む、慶曆中蔡端明(君謨)漕と爲り、始めて小龍團七十餅を貢す、其の時多くは建州北苑に在り」とある。

宋以前の北苑茶 閩雜記に「按ずるに北苑茶は建州鳳凰山に産し初め甚だ著れず、唐の常寔(七八〇年福州觀察使になる)始めて製して研膏を爲る、後唐の江南の李氏、又別に其の乳を取りて片を作らしめ御に供し之を京師的乳と謂ふ。李氏北苑を有り、茶を其の中に蔵す、因つて之を北苑茶と謂ふ。後武夷茶産に行はれ、北苑の名遂に混ぶ。今人或は北苑を以つて茶を産するの山と爲すは誤なり矣」とあつて、建州(建寧府)は宋以前既に茶を産した事が知られる。

建州北苑 閩雜記に「唐書地理志、建州建寧府、建寧以前未盛也、(註、據三山志、引唐書地理志、則福州唐時先有建寧府)今古山、長溪、近建寧界、亦能採造、然氣味不及(註、三山志所云、皆古製、今統入焙、古法廢矣)とある所から見ると、北苑茶以前既に福州から建寧府を産出し、朝貢までした事になるが、此の福州は唐建寧の福州ではあるまいか。程大昌宋代の人演義錄に「建

茶名蠟茶、爲其乳湯面與蠟相似、故名蠟面茶、今人多謂蠟爲蠟、取先春爲義、失其本矣」となつて建茶を煮ると蠟面が出たのであらう。

宋歐陽修嘗新茶呈聖俞、梅廷詩、建安路遠三千里、京師三月嘗新茶、人情好先務取勝、百物貴早相矜誇、年窮臘盡春欲動、蟹留未起驅龍蛇、夜間擊鼓滿山谷、千人助叫聲嗷嗷、萬木寒癭睡不醒、惟有此樹先萌芽、乃知此爲最靈物、獨得天地之精華、終朝採摘不盈掬、通犀鈔小圃復放、鄒豔霰雨槍與旗、多不足貴如刈解、建安太守急寄我、香奩包裹封題封、泉甘器潔天色好、坐中探採客亦佳、新香嫩色如始造、不似來遠從天進、停匙側讓試水路、拭目向空看乳花、可憐俗夫取金錢、猛火炙背如蝦蟇、由來眞物有眞賞、坐逐詩老頻咨嘆、須臾共起索酒飲、何異奕雅終通哇。

(二) 武夷(彝)茶

武夷茶は西洋では Pohan Tea (武夷の厦門音の轉訛)として知られて居る。閩江の上流崇安縣附近の武夷山から産出する茶を云ふのであるが、廣義では其の附近から産出する各種の茶を總稱する。

武夷山 九曲、三十六峰、九十九巖の奇勝を以つて天下に賞され、花崗岩、砂岩、片岩より出来て居るが、其の樹壤した壤土に栽培した茶を最上とし巖茶と稱する。附近の沿溪地方に産するものは洲茶と稱し品質之に垂く。

武夷山志に「巖茶には花香、清香、工夫、松蘿等の小品種あり、之を煮るに天然の眞味あり、其の色紅からず、洲茶には蓮心、白毫、紫毫、雀舌等の小品種あり、細かきを佳と爲せども味淺薄なり」とあり。之に依つて略ぼ武夷茶の如何なるものであるか分らう。

武夷茶の出現は何時頃かといふに明の徐勣の茶考に「閩中産茶、以建安北苑爲第一、壑源諸處次之、武夷之名、宋季未有聞也、然范文正公開茶歌云、『溪邊奇茗冠天下、武夷仙人從古栽』蘇東坡亦云、『武夷溪邊粟粒芽、前丁後蔡相龍嘉』則武夷之茶、在前宋亦有知之者、但未盛耳」とあつて、兎に角、北苑茶の盛な時には武夷茶は有名でなかつた。然るに元初御茶園を第四曲に設け堂宇を建造してから武夷茶の名は頗る揚つて來た。此の頃貢額は二十觔(斤)であつたが、大徳年間(一二九七年—一三〇七年)には二百五十觔、龍團五千餅に至つた。明の世となつて御茶園は廢れて民居となつたが、猶ほ喊山堂、泉亭等の故址を存し、茶戸の造つた茶に先春、探春、三春、旗槍、石乳等の諸品があり、色香共に北苑に劣らなかつた。それで明代には従來の團餅の貢を罷め毎歲茶芽九百九十觔を貢したが、嘉靖三十六年(一五五七年)に郡守錢模奏して貢を罷めるに及び、民間の製茶業が著く發達して來た。

即ち山中の土氣が製茶の焙に宜しいので、九曲の内種茶を業とする者が數百家を下らず、毎年産する所の茶數十萬觔、之を四方に響き武夷茶の名天下に著はれ、往時宋元時代に造つた團餅は眞味を失ひ、黷芽仙蕙(即ち現代式の茶)となつた。清朝になつても其の初武夷茶を以て土貢に充てたが、漸次税を徴するやうになり、咸豐頃から税目も確定した。

茶形の推移 唐代に碾とか研膏とか京籠的乳とか云つて居る所を見ると、當時の茶は現在のやうな個々粒々の固體ではなかつた。之を煮ると蠟面が出たので蠟面茶とも稱した。宋時代の團茶とか團餅とか云ふのは今の礮茶のやうに壓し固めたものであるらしい。而かも餅といふ所を見ると不恰好なものであつたに相違ない。今でも此の時代の佛である團茶が福建にも臺灣にもある。元代頃から武夷で今の形をした茶が出来、諸種の花香を之に移したり雜せたりするやうになつた。烏龍の如きは遙か後、清代になつて其の製法

が發見されたらしい。

武夷茶は天下第一の靈芽、「武夷茶」作者曰、松、本山一年所出、不過數斤、儼人皆用銀瓶、止一二錢、茶少類、可烹至六七次、一次則有「次之香、或蘭、或桂、或菊、或茉莉、香種不同、眞天下第一靈芽也」(滄海樓雜錄に在るといふ如何にも武夷茶の發見された様子が分る。

普江(泉州)人と武夷茶 閩産録異の著者郭柏蒼は侯官縣人、建寧府に居ること十年、種々茶に關する所見をものして居る。曰く「武夷の寺僧多くは普江の人にして茶坪を以て業とす、每寺泉州人を茶師と爲し、清明後穀雨前、江右茶を摘む者萬餘人、茶師粗細を分ちて之を焙す、最細を奇種とす、即ち刺天の第一、槍なり、次を名種、小種と爲し稍粗なるものを次香、梔子の花を入れたるを花香、次で種焙と爲し最粗の茶を巖片と爲す、工夫茶は泉漳寧徳人の稱する所にして茶師に非ずんば製する能はず、松際は色淺香淡、老君眉は葉長味郁、僞多し、鐵觀漢、巖柳條は皆宋樹にして陳かに一殊年亦少許なり。」

現在武夷巖茶と稱する者は茶舖に依つて其の名稱を異にして居るが、大體品種を、奇種、名種、小種、小槍、半巖、巖片の順に分け、奇種中の一等品水金龜の如きは一斤六十四元もする。中には武夷の産でないものも武夷巖茶の中に名列して居る事がある。武夷は産地の名で製茶法の名稱でないから、所謂武夷茶なるものには各種の茶が含まれて居り、傳統的に多分の過信を有つて居る。武夷は又夙くから泉州人の勢力範圍であるので、福州には本物の武夷茶の來る事が少く、各小賣茶商が武夷茶の看板を掲げて居つても、實は眞正の武夷茶を蔵する者は極めて少いさうである。武夷茶は武夷から江西省に搬出し更に揚子江から外國に出たものもあるし、又廈門福州に搬出して來たものもあつた。

(三) 北苑武夷以外の茶

北苑茶にしても武夷茶にしても本來外國に輸出するのが目的で盛になつたのではなく、國內の需要に充つるが爲めであつた。所が福州港が開港され茶の輸出が儲かる事と分つたので、「各部伐木爲茶坪、且廢畝田、種茶取利、園中自此茶游倍貴、即木料難植、亦因之而缺」やうになり全省悉く茶を植ゑざる様なき状態となつた。此の間武夷茶はどうであつたかといふに、價が高いたので英國人も手が出なかつた。從令 *Bohea Tea* として有名であつたにしても、其は大抵下級品であつたやうである。故に「武夷片石、以此獨全」と支那人は云つて居る。現在でも武夷の奇種は京津又は南洋新嘉坡等の富裕なる支那人向であつて歐米向の品ではない。北路産の茶はどうであるかといふに、清初の人周亮工の閩小紀に「大姥(福鼎縣南の山)有綠雪芽」とあり又光緒の頃には福州府下薄く茶を植ゑ、製茶を頭綠春と稱し寧徳の支提、福寧の白琳、福安の松羅が有名であつた事から考へ、北路茶は西路茶より遙かに遅れて發達したものである。其の漸次西路茶の盛に摩し、産額も激増して其の集散港たる三都澳も支那政府之を商埠地として自ら開かねばならなくなつた。

半山茶 鼓山附近から出る茶を半山茶といつて往時有名であつた。閩小紀に「鼓山半巖茶、色香風味、當爲閩中第一、不讓虎邱龍井也、兩前者、每兩僅十錢、其價甚廉」とある。現在福州の茶商が自ら製造する半山は其の遺名で非として北嶺から出る。鼓山にも茶は出來るが之は一山の僧侶の自家用に充てるもので僧侶が栽培製造一切をする。鼓山に遊んで香僧から獲される茶は即ち半山茶である。

方山茶 唐の憲宗が元和年間方山院の僧懷憚に詔して麟德院で法を説かせた。其の時茶を賜はつたが、懷憚は「此の茶方山茶の作なるに及ばず」と奏した。其の方山は茶種の「方山靈芽」の方山で、今の五虎山だといふ説もあるが怪しい話である。

六 福建省の産額

二〇六

全省の産茶額は何程であるか分らぬが、各縣の自家用を除き福州港から輸出された額は、福州海關の報告で知る事が出来る。

(一) 一九二七年(民國十六年)福建省外國輸出數量(單位擔)

輸出先	紅茶		綠茶		花燻茶	紅燻茶	雜茶			總計
	工夫	其他	珠茶	熙春			其他	茶片	茶末	
香港	11,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	11,000
印度	10,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	10,000
英國	10,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	10,000
土耳其	10,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	10,000
暹羅	10,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	10,000
日本	10,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	10,000
其他	10,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	10,000
總計	50,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	50,000

(二) 一九二八年(民國十七年)同上

輸出先	紅茶		綠茶		花燻茶	紅燻茶	雜茶			總計
	工夫	其他	小珠茶	熙春			其他	茶片	茶末	
香港	11,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	11,000
印度	10,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	10,000
英國	10,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	10,000
土耳其	10,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	10,000
暹羅	10,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	10,000
日本	10,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	10,000
其他	10,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	10,000
總計	50,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	50,000

二〇七

種別	支那各港へ輸出	外國へ輸出	新嘉坡	安南	瑞西	瑞典	南亞非利加	南洋西米	米國	加奈	日本、臺灣	露洲	露岸	伊太利	佛國	白耳	和義	獨逸
總計	3,075	3,180	3,180	3,180	3,180	3,180	3,180	3,180	3,180	3,180	3,180	3,180	3,180	3,180	3,180	3,180	3,180	3,180
支那各港へ輸出	3,075																	
外國へ輸出		3,180																
新嘉坡			3,180															
安南				3,180														
瑞西					3,180													
瑞典						3,180												
南亞非利加							3,180											
南洋西米								3,180										
米國									3,180									
加奈										3,180								
日本、臺灣											3,180							
露洲												3,180						
露岸													3,180					
伊太利														3,180				
佛國															3,180			
白耳																3,180		
和義																	3,180	
獨逸																		3,180

第十四章 福州の通貨

一 硬貨

福州の通貨は支那の他地方と同様、日本のやうに直截簡明な貨幣制度の下にないので、初めての人には閉口する事が多い。福州に用ひられて居る硬貨の種類には、制錢(大抵は偽造品)、銅片(銅元)、小洋(小銀貨)、銀元(弗、番錢)とあるが、何れも多種多様で各者間の關係が煩雜であり、加ふるに偽造品が多いから授受の際には注意を要する。

偽造品 制錢は古泉家から見ると全部私鑄の偽品である。銅片にも悪質のものや偽品があるが、多数の中の一、二枚なら平氣で授受して居る。小洋にも偽品があり、現在通用せぬ前代の小洋が雜入して居る事もある。銀元に至つては其の額が大きいから、各人共に注意して取扱つて居るが、其れでも引掛る事がある。支那では銀貨の價値鑑定は一の常識になつて居て、大抵の百科辭典類のものには必ず此の鑑定法が載せてある。驗看銀洋法は看板子、察神色、觀花紋、閱邊道、聽聲音、審重量等があり、驗看銀元法は銀色、分量、聲音、驗看手指、消極法斷法等があつて、始から銀貨には偽があるといふ事を前提にして銀貨を扱つて居る。

硬貨授受の作法 買物などをして釣錢を貰ふ時、番頭や小僧、無論支那人が音を立てるやうに投げて呉れる。支那人間では普通の事として平氣で居るが、邦人には非常な不作法な所爲として内々氣持を悪くするが、之を偽造貨と關聯して考へて見ると成程と思はれる節がある。即ち投げて音を立て、客に釣錢を渡すといふ事は、客に音を聽いたでせう偽造貨ではありませんといふ説明であり、客をして再び銀貨を叩かせて考へさせる。勢を除いた仕方であつて却つて體に適つて居る譯である。若し體に適はぬとするならば久

しき前に此の態度は改まつて居る筈であると云つても、支那では諸國に關し改まらぬ事が多いのであるから實は何とも云へぬ。又偽銀貨と知りながら平氣で濫す者もある。受取つたら其れ切りであるが、之は偽だと云ふと、引込めて別な物を出す、擡車の車夫などは小洋一角を、ものゝ十分間も叩いて見てそれから受取る。悪い奴になると自分の偽貨と擡り替へて之は偽だと来る。支那には銀貨偽造の罪はあるが、偽銀貨、偽札の行使が罪になつたのを聞いた事がない。尤も引込ませると行使にはならず又未遂罪でもないのである。邦人は偽銀貨は無い筈だといふ先入觀念がある爲め、銀貨の眞偽鑑定が誠に不得手である。

(一) 文

少額の取引には現在でもなほ「文」を單位にして勘定する、一圓二十三錢四厘(日本式の算へ方)なら一千二百三十四文といふ。但し文書には文を附けるが口語では普通「文」を云はず單に一千二百三十四といひ、十以下の時には箇に當る俗語「隻」を附け三隻、四隻といふ。

然らば其の「文」なるものがあるかといふに、あるにはあるが、其の「文」たるや、私鑄偽造の惡貨であつて、誰も之を以て、銅片一枚以上の額だけ受取る者が無い。即ち辛うじて銅片を補足し釣錢にのみ用ひられる代物である。而して其の内に市場より姿を隠すべき代物である。本來の「文」は歷朝改元毎に鑄造した制錢(穴錢)を本體としたものであるが、今時左様な本式の制錢が市場に流用して居る譯ではない。

制錢 圓形方孔の錢が支那に於て用ひられ出したのは随分古い話で、先づ西紀前三二二年の秦の半兩錢を以て其の始としてよいで

あらう。爾來歷朝の興起又は改元毎に鑄造した唯一の法貨で、必ず定制があつたから之を制錢と稱する。開元通寶(六二二年)から様式が定まり民國の初まで鑄造は繼續した。錢貨は各朝とも幾分宛の相違はあつたが、大抵銅(青銅)で、圓形の經濟上已むを得ざる時には鐵錢をも造つて、明の嘉靖通寶(一五二七年)からは價銀(黃銅)となり、鐵錢も無くなつた代りに銅錢も無くなつた。唯清の咸豐年間(一八五一年—一八六一年)のみに、造方もない大きな一百文以下の銅錢が現はれたが、一面には鐵錢や砂鐵錢も出來た。概して咸豐以外のものは眞鐵錢である。清朝の末期になると眞鐵錢の極めて小さい圓形方孔(孔の廓は方だが孔其のものは圓)の光緒通寶や、宣統通寶が現はれ、又小さい銅元とも見られる眞鐵錢の光緒一文や、圓形方孔の大清銅幣一文も現はれた。民國になつても眞鐵錢の不恰好な圓形方孔の福建通寶が出來たが、之は福建だけのもので流通の期間も僅かであつたやうである。

福州の「文」は上述のどれに當るかは明瞭でない、日常取引に於て少額の時には銅片又は小洋を以て之に充て、多額の時には銀元を以てする。

銀と文との關係 大清會典事例に據ると、每銀一兩に當るべき制錢は北京の相場では、道光十年(一八三〇年)一千二百文、同二十一年(一八四一年)一千三百文、同治七年(一八六八年)一千二百文、光緒七年(一八八一年)一千七百文であつたといふから必しも一千文が、一兩に當つて居た譯ではなかつた。

福州では元と一千文が裏伏の一員に當つて居つたが、民國十七年八月一日から裏伏を廢したので、今では大洋一元を一千文と勘定して居る、故に「文」は單に往時の遺風が、勘定の稱へ方に殘つて居るのに過ぎない。

塊 此の字は讀書音ではクワンだが、俗語ではクワンといふ、即ちクワンといふ音に、此の字を當て居るのである。福州では一千文を塊と稱し、口語では圓とも云はぬ。番錢一塊、大洋票二塊など稱する。口音の塊は、對(讀書音)口音共に同機である)と同音である所から考へ、元と制錢五百文を一串として、二串即ち五百文一對が一千文であるので、一千文を對と稱したのでは

あるまいか、塊といふ字は北方で使ふから福州でもこの字を當てたまでとあらうと思はれる。

(二) 銅元 (閩語の銅片)

制錢は唯一の法貨であつたが、單位が低いので、巨額の商取引の媒介貨幣として銀兩を併用して、制錢の不便を補つて居たが、海外諸國と通商を開始するやうになつてから、諸外國の經濟的壓力の爲め、支那の幣制に大變革を來した、そこで銅元は在來の制錢に代る爲めに鑄造された。光緒二十六年(一九〇〇年)廣東銀元局で始めて鑄造され(支那十八卷二號、神津助太郎銀兩爲替の比價)、制錢に比べると形狀品質共に優良であつたので、商民は喜んで之を利用した。清朝政府は各省に令して銅元の鑄造を爲さしめ、制錢の缺乏を補ふことにし、全國に十七銅元局の物興を見た。所が銅元開鑄當時は、銅元一枚を以て制錢十枚に換へたのであるが、本來銅元一枚は、其の純銅分制錢の三枚七分位にしかならぬので、銅元局も地方政廳も之が爲めに大に儲け、殆んど無制限に銅元を鑄造した。かくて制錢は富豪の庫中深く死蔵され、銅元も「當制錢十文」が通らなくなり、漸次値が下つて、現在の福州では二百六十三枚が大洋の一千文に當り、銅元一枚は三文八にしか當らぬやうになつた。

青錢買 歐陽戰爭で銅の値段が騰貴したので、死蔵されて居た制錢が、青錢買の手に依り漸次賣されて、山東を中心とする北支那から盛に輸出された。何でも北支那からだけでも二十萬噸にも達したさうである。福州へは青錢買の手が入らなかつたやうである。銅元の鑄造額 銅元が廣東で鑄造以來どの位鑄造されたかといふに、清朝時代既に二百億枚に達して居り、民國以後も天津、南

京、武昌、河南等で鑄造され、就中天津では鑄造原銀を材料として、當二十、當五十等の劣質銅元を鑄造し、民國時代の鑄造計約二百億枚、前後通計各種銅元の鑄造額四百億枚以上に及び、其の材料銅だけで五百萬噸に達して居る。

福州の銅片 現在福州に流通する銅片は随分種類が多いやうである、手許にあるものだけを分類しても次のやうになる。
光緒元寶 (イ) 每元當制錢十文 廣東省造、江蘇省造、山東省造、壬寅江蘇省造、甲辰江蘇省造、乙巳江蘇省造、(ロ) 當制錢十文 戶部、北洋、浙江、河南省造、安徽省造、(ハ) 每枚當制錢十文 福建官局造、四川官局造、閩南福建官局造、(ニ) 當十銅元 湖南省造、乙巳江蘇省造、(ホ) 當十 浙江省造、湖北省造、江西省造、湖北省造、四川省造、(光緒元寶の四字の中間に滿字、各種の花模様、幾何學的模様、何も無きもの等がある)

大清銅幣 (光緒年造) 丁巳戶部、丙午戶部、丁未戶部、(何れも當制錢十文で大清銅幣の四字の中間に壽、考、閩、鄂、蘇、浙、川、直、湘、皖、津、淮、東、鎮等の刻印がある)。
大清銅幣 (宣統年造) 戶部、巳酉、度支部、(何れも當制錢十文)。
十文 丁百枚換銀幣 一回宣統三年。
四川銅幣 軍政府造當制錢十文、江西銅幣 中華民國壬子當十。
十文 中華民國開國紀念幣、中華民國河南省造、(模様は唐草、穀物、花、民族等を配ひ種々である)。
中華民國當十銅元。
中華元寶 一枚當制錢十文。
中華民國當制錢十文。

現在極めて少額の取引には銅片何枚と稱するが、「文」ほど範圍は廣くなく、又「塊」ほど高額の時にも用ひない。

(三) 角

俗に銀四十分之一を以て角と爲すと辭書にあつて、夙くからあつたが、民國三年から貨幣を圓、角、分、釐に分ける事になつた。一般に何角何十角と角を單位に稱へて居る。角は銀圓に對する補助貨で、小銀貨であるので總稱して小洋と稱へられ小洋何角と算へる。現在流通して居る小洋は左の通りである。

貳角 每五枚當一回、中華民國、總理紀念幣、十六年造、

壹角 每十枚當一回、中華民國、總理紀念幣、十六年造、

黃花園紀念幣 貳角、中華民國十七年福建省造、每五枚當一回、

黃花園紀念幣 壹角、中華民國十七年福建省造、每十枚當一回、

右四種があり貳角及壹角を舊角、黃花園紀念幣の二種を新角といふ。貳角は大洋百五十文、壹角は大洋七十五文、黃花園紀念幣貳角は大洋二百文、同壹角は大洋一百文に通用して居るが、舊角も發行當初はなほ新角の如く表面の價格通に用ひられたのが、漸次値が降つて現在の價格になつて了つた。新角は大小合せて三十萬枚しか發行しないさうで、且つ降價の豫防をして居るので表面の價格通に用ひられては居るが、何時下落するかは分らない。而して兩者共に福州鑄造で國民政府の福建當局が鑄造發行したもので、大きさも重さも先づ同一、銀分も素人目にはさしたる相違が無いやうに思はれる。

舊角の一元、新角の十角は一元(圓、弗)に當るが、舊角の十角は一元にはならない。現在の相場では十三角六片二文二で大洋一元となるのである。舊角十角、新角十角、袁世凱首像一元、孫文首像一元、何れも略同量で新議秤約七錢二分(日本の七匁二分弱、日本の新五十錢銀貨五枚より少し重い)であるが、併し銀分が違ふのであらうし又千枚二千枚となると漸次差が出て来る。

過去十年間に流通して居た小洋の各種

光緒元寶—多くは福建官局造 (イ)庫平一錢四分(二角) (ロ)庫平七分二釐(二角) (ハ)庫平三分六釐(半角)

銀幣—廣東省造 (イ)貳毫 (ロ)壹毫

中華癸亥—福建銀幣廠造、庫平一錢四分四釐(二角) (癸亥は民國十二年)

民國甲子—福建銀幣廠造、庫平一錢四分四釐(二角) (甲子は民國十三年)

袁世凱首像—銘記なきも福州洪山橋造幣局造、民國五年造とあるも、實は民國十四五年造 (イ)貳角 (ロ)壹角

舊角—前出

新角—前出

小銀貨鑄造の備といふのは前代の小銀貨の値を極端に安くして回收し、之を改鑄して新小銀貨を高額に發行する所に在つて其の差額は回收額と銀分とに依つて大したものである。恰も外國弗を改鑄して新自國弗とする關係に似て居る。それで弗即ち銀元の多額は秤量に依つて取引するが、小銀貨は補助貨であるので秤量を用ふる事はない。故に時日が経つと値が廉くなつて了ふのである。

三十年前の小洋銅片の相場 福建銀(銅)元局で鑄造した頃の相場は一角百六文、銅片一枚十三文で制錢は本式及懸質のものであつた。

福建銀(銅)元局 光緒二十一年最初に出来た所が福州南臺蓋德洲、福州東嶺學校の向側閩江の河邊で、現在、復人醫院、協美茶行水合別業の一調である。此の地は元と英商沙孫洋行のあつた所、主として小洋を鑄造して居た。光緒二十八年改めて銅元局とし銅元を鑄造したが、宣統元年時の馬局長大損をしたので清朝は欽差大臣陳璧を密に差遣し、竟に鑄造を停止した。民國になつてから洪山橋造幣廠(造幣局)と馬尾造幣廠(造幣廠)とで小洋及び銅片を鑄造した(銅片、小洋の項参照)。

(四) 銀圓(銀元)

制錢の起原は頗る古く、前述の如く秦の半兩錢に其の端を發して居るが、此れとて其の以前の空首布(鑄幣)以降の布貨、刀貨に基いて居るのだから、制錢は開國當時から存在して居つたと見てもよい位である。而して其の素材は一貫して銅であつて貴金屬の金や銀を用ひた事は特殊の例を除いては殆ど無く、歴代銅を素材とし簡數制度の下に法貨として採用されて居た。銀を貨幣の素材に用ひたのは宋の寶錠に始まり、現在の銀圓の形は光緒十七年(一八九一年)外國弗銀の抵制策として之に模して廣東で鑄造されたのが始である。

外國弗の流通 多額の取引に貴金屬の制錢を本とする事の不便なるは言ふまでもなく、銀を素材とする寶銀は、秤量制度のものであつて成色も不定なら、用ふる程も區々であり、制錢との比價は始から別々で根據がない。故に第十六世紀に本洋(西班牙弗)が流入したのを始とし、外國との交易が盛となるに従ひ墨西哥其の他の外國弗が續々入り込んで、恰かも支那貨幣の如く用ひられて今日

に及んで居るが、漸次之等外國弗は鑄造されて自國鑄造の圓銀が殖あて行くやうである。

現時福州に流通して居る外國弗には左の種類がある。

墨西哥弗—Republica Mexicana 光洋、光廣、廣洋、英洋などと稱せられ尤も良質であり、上海では懸質貨になつて居るが福州では流通が多くない。

香港弗—One Dollar とあるだけで何處の貨幣とも書いてないが、西洋古代武士立像の持つて居る楯に英國旗の模様がある。即ち British Trade Dollar である。立人、站人、杖洋、杖銀などと稱され福州では杖番と稱される。「杖番」といふのは武士の持つて居る楯を杖と見て「杖の番銀」の意味から來て居る。

日本弗—往時の一圓銀貨であるが大正三年など、銘のあるものもある。龍銀、龍番、龍洋などと稱され、福建省、廣東省、東三省等に流通して居るが、漸次數が少なくなつて行くやうである。龍番は日本貿易銀の次に現はれた銀元である。

海峽殖民地弗—Edward VII 首像、此の前代のもは盛伏と關係ある弗である。

印度支那弗—Indo-Chine Francs, Piastre de Commerce 安南所鑄の銀元で始から其の數は多くなかつた。

以上五種の内墨西哥弗、香港弗及日本弗が多く、其の他に日本貿易銀、米國貿易銀—United States of America Trade Dollar 比律賓弗—One Peso, Philippine 等の如きは辛うじて採し得るに過ぎない。

自國鑄造の銀元 光緒十七年(一八九一年)廣東に於て清平七錢三分の光緒元寶が始めて鑄造され、次いで江南(南京)、湖北(武昌)等にも銀元局が出来、光緒三十一年には天津造幣廠が落成した。總廠を設立せんとして光緒二十九年には一即如各省所用銀錢式樣、各殊平色不一、最爲商民之累、自應明定統一銀式、於京師設立鑄造銀錢總廠、俟新式銀錢鑄成、足敷頒行後、所有完納錢糧關稅釐捐一切之公款、均專用此項銀錢、使補平申水等弊除淨盡」と上諭があつたが矢張各元各樣であつた。

民國政府は民國三年國幣條例を公布し、從來の秤量制度の銀兩を廢し、個數制度の銀元に依り之を本位貨幣とする銀

(五) 銀元の刻印被

小銀貨には無いやうだが主として外國弗には經二分位の刻印(Chop)を打ち込み、錢屋が其の銀質を保證する習慣がある。多數の錢屋を経て甚しくChopされたものは圓い皿のやうになつて居る。これでも少額の時には矢張一弗と勘定され、出入の商人など喜んで(?)貰つて行くから不思議である。近來 Chop を罷め紫色のスタンプを捺すやうになつた。民國十三年頃から小洋に捺したのが始で大洋小洋共に之があり、小洋の如き全て紫色の銀貨になつて居るのがある。Chop の損傷が大きく一枚が福州弗一弗として通用し難いのを棒番、棒銀又は雜銀と稱する。

二 軟 貨

土地の錢莊や銀行の發行する兌換券であるが、二二のものを除き最後の保證を爲す者がなく、唯自己の信用を基礎として發行するものであるから、先づ一覽拂手形と稱した方が穩當である。之等手形の中には寫眞銅版(大抵美國鈔票公司の銘がある)で立派な現代紙幣型のものもあれば、支那紙に金額を毛筆で書き込み往時の鈔の型を保存して居るものもある。萬一之等の手形を發行して居る錢莊なり銀行なりが破産したら、其の一覽拂手形は即刻それなりになつて了ふ。かゝる前例は二二にして止まらないのであるから、多額の取引には特に注意を要する。

(一) 票

元と錢票、番票、大洋票の三種があつて各錢莊から發行して居たが、十年前頃から錢票はなくなり、民國十七年八月一日から番票(票伏の票)も廢され、現時は大洋票だけである。錢票 二百文、四百文、五百文、六百元等あつて物價の安かつた當時は、之を以て祝儀、禮頭用に用ひ、流通高の少かつた小洋の代理をして居た。

番票 (One Book) 勘定の票を稱し、票伏票といへば頗る明瞭であるのに普通かくは稱へぬ。専ら此の番票が銀元の代用をして居たので、番票即票伏、票伏即番票としてもよい(次頁参照)。此の番票は票伏一員に當る現物があつた譯ではなく、全く名義上の單位を用ひて居る。票伏は福州弗の新儀平七四一六に對し七〇〇に當り、良質で傷の無い One の弗は七四一六以上であるから、七〇〇といふのは先づ皿になつた棒番が恰好所である。併し丁度七〇〇に當る皿銀が數多くあつて、それを單位にして居るのではないから、票伏なるものはつまり秤量制度の下に在るものである。番票(票伏)が紙であり名義上の單位であるのに、福州弗は秤量制度の下に在つても現物の銀を單位にして居るから、其の間絶えず相場の高低があり、時には票伏が銀元よりも高くなるやうな不自然な事が起り、福州特有のものではあるが、頗る煩はしい票であつた。

票伏の名稱 票伏に就いては種々説があるやうであるが、寧は南寧の寧であるに間違はない。伏は Chinese Economic Journal, February 1927 に據ると "Book" (伏) は "Fan Bao" (番票即外國紙幣) の轉訛である」と云つて居るが何だか怪しい。井村兼雄の「支那の貨幣と度量衡」には「伏は佛字の轉訛音に係はり番佛の義である」と云つて居るが、佛の意味が分らない。前述した如く支那に於て銀元が始めて鑄造されたのが光緒十七年(一八九一年)、銅元が鑄造されたのが同二十六年(一九〇〇年)であつて、無驗幣制の混帳を防ぐのが目的であつた。幣制混帳は咸豐年間(一八五一年—一八六一年)が甚しかつたといふのは、此の時代諸外國との交易が頻繁となつて來たが、支那には多額の商取引をするのに都合のよい貨幣が無かつた。そこで福州第一の主客たる英國は自國製の

同銀を輸入して之に充てたが、其の圓銀なるものは、今の海峽植民地銀圓(前代のもので表面に皇帝の首像があるものであった。其の王冠は支那芝居の僧侶の帽に似て居り、加ふるに當時の清朝は辦髮時代であつたので、此の首像を佛頭と呼び、其の銀圓を佛頭番又は略して佛番と稱した。當時の福州市場は呆錢(愚賢錢)が横行して居た爲め、之が使用を禁止し、良質の制錢は至つて少なかつた時であつたので、佛番は喜んで市中に通用された。乃て各錢莊は従来の一千文錢票の代りに、新たに佛番票を發行し、南來佛番票は略されて察伏となつたり、番票となつたりした。佛も伏も共に「F」で同音である。故に察伏は本來佛頭番を單位とし、番票は佛頭番の代貨であつたが、其の後續々と量目を異にする番錢が輸入され、何時とはなしに番票は之等外國邦の代貨にもなつた。人に依つては「番票は外國の紙幣に似て作つたのであるから番票と云ふのだ」といふ者もあるが、支那では元代よりも前から鈔があつたので、何も番票は外國紙幣の眞似をしたのではない。番票には「約支順路洋番票又は番銀票」の朱印があつた。洋番は即ち洋銀又は雜銀で損傷ある各種の銀元を云ふのである。或る學者は察伏の伏は貨幣の雅名である青蚨白銀の蚨が轉訛したのだといふが、蚨は「F」で伏又は佛と同音ではなく、且つ坊間に用ひられるもの、名稱がかゝる高尚な故事から出て居るとは思はれぬ。唯一説として附記して置く。

廣東兵士談つて番票を燒く、前掲の Chinese Economic Journal に據ると「一九二二年福州が廣東軍に占領されて居た時、之等侵入者の爲めに誤つて多額の番票 (Fai Fook notes) が燒かれた。彼等はそんな紙片が價格を有つて居るとは思はなかつた」と書いてある。私共は當時氣のつかなかつた事だつたが、確かにあつた事と思ふ。何しろお札のやうな紙片で誰でも初めで見ると紙幣だと思ふ者はない。銀の高かつた時代筆者は初めて之を見、かゝる紙片が金に換算すると、二圓、四圓、六圓、拾圓、貳拾圓と額面記數の倍の金票(日本紙幣)になるのを心外に思つた事があつた。

大洋票は察伏票があつた頃共にあつたが、其の數は少なかつた。察伏が廢されるに及び大洋票のみとなつて現在流通をして居る。矢張錢莊の發行するもので額面の記字には相違があるが、形式は元との察伏票(番票)と同一である。紙は

支那紙の大頁紙を用ひ、版(銅版だと云)で屋號、縁、年號等を刷つて居る。インキに蠟か何かを混ぜて居るものと見え、翳すと透いて見える。記入の毛筆字は一流の癖があり、發行の錢莊でなければ本當の眞實は分らぬ譯であるが、各錢莊共それが商買なのだから一目して鑑定する。素人仲間では眞票を本物と思つて轉々授受して居る中、錢莊に依つて始めて眞票だと分明する事がある位である。

大洋票には通用票と向票とある。通用(行)票は大錢莊(多くは市内)の發行するもので、必ず「約支順路洋番現」と朱印が捺してある。約支は支拂ふ事を約束する、順路は勢力圏内の各錢屋(各錢莊は夫々順路が定まつて居る)、歸程は市價に應じて、支現は現銀を支拂ふの意、故に此の通行票は流通の範圍が廣いが、向票になると頗る其の範圍が狭く且つ信用程度も低い。向票には「向〇〇(親錢莊の名)支通用大洋票」と朱印が捺してある。即ち親錢莊某店が通用票の大洋票を支拂つて呉れるの意で、向票發行の店でも親錢莊でも直ちに現銀を支拂ふとは書いてない。向票は大抵田舎の錢屋の發行するもので、之を受取つたら直様通用票又は現銀に交換して置く必要がある。便々として居る中に其の錢屋の潰れた例は相當にある。

銀錢行情 民國十八年五月一日閩報所載の四月三十日銀錢行情の欄に「金每兩五十八圓、銀每兩二圓七角、香港票每元二圓二角五分、上海票每元退二圓五角、廈門票每元退二圓、國幣(每千元)中三圓、贛票(每千元)中二圓五角、黃花崗記(每元)七十圓、銅片(每元)二百六十七枚」とある。これは純金新義平一兩は國幣(即ち實世銀)の五十八圓、純銀新義平一兩は國幣の二圓七角(この相場は殆ど變らない)、香港紙幣每元は大洋票(通行票)の二圓二角五分(即ち香港票が高い)、上海票每元は大洋票の九十七員五百文、廈門票每元は大洋票の九十九員、國幣千圓は大洋票の千員、銀行手形千圓五角は大洋票の千員、黃花

支那側、外國側及び兩者中間の銀行から發行する兌換券で、現代型を爲し前述の票よりも無論信用がある。併し兩者の關係には微妙なものがあつて現在兩者とも通用して居る。

中國銀行券 中國銀行發行の兌換券で壹圓、伍圓等の額がある。額面に福建と記入されて居ると無いのとあり、前者は大洋票並に通するが、後者は厦門票又は上海票並にしか通らぬから幾分廉いさうである。何れも額面に「憑票兌付通用銀圓」と記入してあり、支那紙幣としては最も安全なものである。元とから大洋標準であつたので番票全盛時代には壓され勝であつたが、番票が無くなつてから盛に動き出した。

支那銀行が兌換券を發行したのは光緒二十三年上海の中國通商銀行が始であるが、政府を背景とする特殊銀行が發行した兌換券は、光緒三十一年に創立された戶部銀行の鈔票が始まりである。戶部銀行は光緒三十四年に大清銀行となり、革命後中國銀行となつた。福州下杭街の中國銀行は即ち此の中國銀行の支店である。

美豐銀行券 美豐銀行(The American Oriental Bank of Fuhien)は南臺觀音井に在つて、民國十一年五月の創立、米支半々の株式組織の米國系銀行であるが、格別米國に親銀行のあるものではないやうだし、時々噂の立つ銀行である。此の銀行は元と番票を發行したが、今は大洋券ばかりである、細長い寫眞銅版の銀券である。

東南銀行券(大嶺下)

順遠商業銀行券 美豐銀行と相對して居る銀行の發行するもの、此の銀行は無盡會社の大きくなつたやうなものである。

中央銀行券 福新街(馬路)に在つて李厚基督軍の失脚に因り倒産した福建銀行の後身である中央銀行の發行するものである。

以上の外、中南銀行券も當地に流通し、外國銀行である臺灣銀行券も銀票、番票の二種を發行したが、現在は遺收未済の分が残つて居るのに過ぎぬ。香港(滙豐と渣打)銀行(The Hongkong & Shanghai Banking Corporation)は當地では紙幣を發行しない。

三 商取引と秤量制度

福州には銀錠が無い。往時は九八と稱する十兩の閩錠があつたさうであるが今は無い。皆個數制度の下に在るべき内外銀元を秤量制度の下に通貨として用ひて居り、少額の差の時には碎銀を以て補足する。秤には福州特有の新議平を用して居る。他地方との關係は北平の京公砵平一〇〇四・八五兩が臺新議平の一〇〇〇・〇〇兩、上海の申公砵平九九〇・〇〇兩が臺新議平の一〇〇〇・〇〇兩に當つて居る。銀元の質に就いては銀錠の無い關係から左程八釜しくないやうであるが、墨西哥弗、龍銀(日本圓銀)が喜ばれ、袁世凱弗、孫文幣は餘り喜ばれなかつた。近來は漸次袁世凱弗を標準にするやうになつて來た。

康平、臺新議平、日本平の比較 試に袁世凱弗(圓幣二枚)一枚の重さ(康平七錢二分)を上記の秤に掛けて見ると次のやうになる。

何れも概小き秤であるので、千枚二千枚と多量になれば無論相當の大相違を來す筈であるが、各秤大體の比較は出來得る。

- 庫平 一・四四兩 (二兩四錢四分)
- 新議平 一・四八兩位 (二兩四錢八分位)
- 日本平 一四・三〇匁位 (十四匁三分位)

(一) 庫平 (Ku-ping, Ko-bing)

庫平即ち國庫の秤の意で、前清時代から支那政府の標準衡になつて居る。此の衡も地方に依つて幾らか宛の誤差を生じて居たが、民國四年の權度法(即ち支那現行の權度法)に依つて

庫平一兩は「ギログラム」の百萬分の三萬七千三百一、即ち三七・三〇二「グラム」と制定された。故に日本の一貫は四分の一五「キログラム」であるから庫平一兩は日本の九・九四六九三三匁である。

(二) 新議平 (Shing-bing)

新に議定した福州准庫平の議で何時始まつたのか不明であるが、咸豐年間(一八五一年—一八六一年)又は同治の初期の事であらうと思ふ。福州特有の秤で各錢莊は皆此の秤を用意して居る。福州製と廣東製とあつて、廣東製の方が上等

だといふが、何れにしても微細な誤差は各錢莊に依つてある筈であると思はれる。併し更により重大なる事は此の新議平に南澳新議平と城内新議平の二種あつた事である。

- 南澳新議平 一〇二・四〇兩は庫平一〇〇・〇〇兩
- 城内新議平 一〇二・七〇兩は庫平一〇〇・〇〇兩

として居るから之を實際問題として見ると、Ozの袁世凱非(庫平七錢二分)一、〇〇五、八五八枚が南澳新議平の一〇〇〇弗となり、同國幣一、〇〇二、九二〇枚が城内新議平の一〇〇〇弗となる譯である。故に兩者の間には福州弗一千弗に付國幣二、八六九枚即ち約三枚の差がある譯である。現在では城内錢莊も南澳新議平を用ひて居るから、新議平は庫平一、〇二四〇に當る所の元との新議一種としてよろし。

(三) 關平 (Kuan-ping)

支那税關で用ふる秤で、閩海關報告書の中國權衡表に

- 一兩(Tael, Liang) 英平五八三・三格(Grain) 法平三七・七八三格蘭姆(Grammes)

と載せられて居るから、關平一兩は庫平一・〇二四に當り、我が一〇・〇七五四六匁に當り、新議平一・〇三七二〇兩に當る。

内外銀元秤量表

種類	グラム	匁	庫平兩	南臺新議平兩	城内新議平兩
庫平一兩	37.500	96.96匁	1.01200	1.01200	1.01200
南臺新議平一兩	37.500	97.376	0.973	1.00700	1.00700
城内新議平一兩	37.500	96.836	0.967	1.00700	1.00700
南臺新議平一匁	270.396匁	710.733匁	7.107	7.107	7.107
城内新議平一匁	270.396匁	710.733匁	7.107	7.107	7.107
關平一兩	37.500	96.836	1.011	1.01100	1.01100

第十五章 福州の度量衡

一度

即ち尺は度量衡總ての基礎となつて居るもので、現在支那各地に行はれて居る種々の尺も必ずや據る所がある筈であるから、先づ支那歴代の尺度を表示すれば左の通りである。

支那歴代尺度	日本曲尺との比較	支那歴代尺度	日本曲尺との比較
周 丈 尋 尺 一丈八尺	〇.七五五	隋 市 尺	〇.八〇三
漢 丈 尺 一丈十尺	七.五五〇	唐 小 尺	〇.八〇三
魏 一 尺	〇.七九〇	唐 大 尺	〇.九六四
晉 後 尺	〇.八〇三	宋 景 表 尺	〇.八〇三
趙 土 圭 尺	〇.七九三	宋 大 府 尺	〇.八〇三
宋 一 尺	〇.八〇三	明 裁 曲 尺	〇.八五四
		明 裁 衣 尺	〇.八五四
		清 裁 今 尺	〇.八五四
		清 裁 衣 尺	〇.八五四

(日本百科辭典)

1111

1110

我邦の尺 欽明天皇以後、賦役に用ふる布帛、田地の標準は常に周尺を基礎としたが、續日本紀文武天皇大寶三年三月の條には「乙亥朔領度量天下諸國」とあつて一定したが、其の尺度は大寶難令の「凡度十分爲寸、尺解に云、謂度者、分寸尺丈引也、所以度長短也、分者、以北方種黍中者一之廣爲分、種者黑黍也」寸爲尺、一尺二寸爲大尺、十尺爲丈」とあつて小尺大尺があつた。小尺及び大尺は唐の小大尺其の儘であつたといふ説と小尺は唐の大尺で大尺は大化以後の高麗尺であつたといふ説とある。延長以後からは漸次大尺小尺の名が廢れて来て大尺(今の九寸六分四厘に當ると同じ長さの曲尺(和調麻可利加爾)の名稱が行はれ、工作用には鐵製、布帛用には曲尺一尺二寸に當る吳服尺が出来た。カネ尺のカネは鐵カネでありクジラ尺のクジラは元と鯨の鬚で造つたからであらう。現在の曲尺の長さは享保尺(一尺二厘)と又四郎尺(九寸九分八厘)とを折衷して文化年間伊能忠敬が日本全土の測量に基本として用ひたのに起つて居る。

支那の尺度の根源となつて居るものは令義解にもある通り黍粒の幅であり現在福州で用ひて居る各種の尺は清代の尺度が基本になつて居る。嘗て臺灣總督に於て大清會典に板刻されてある古尺今尺を原器から寫したものとし適當の方法で我邦の尺に直したら

古尺(横黍尺又は律尺)一尺 〇、八五五
今尺(縦黍尺又は營造尺)一尺 一、〇六四

あつたといふ。

現時福州に行はるゝ尺度には次のやうなものがある。而して其の尺度は製造に依り又は製造の時期に依り幾分宛違ふので何れが本當のかは不明である。

(1) 平尺(ハシチヨ) 公較尺(コウカウチヨ)とも標準尺とも稱せらる。

製	造	所	材	料	日本曲尺との比較	備	考
振	興	和	竹	竹	〇、九七六		
群	成	積	竹	竹	一、〇〇九		
水	積	積	木	木	一、〇〇三	城内三成布店販賣用	
永	積	均	木	木	〇、九八二	南嶽久經布店販賣用	
永	均				〇、九七三		
平					〇、九八九		

此の平尺は清代の今尺即ち營造尺に當る譯で、支那現在の營造尺は民國三年三月の權度條例に依り其の一尺は三二〇〇B即ち我が一、〇五六尺に當り、一公尺(メートル)は營造尺庫平制の三、一二五尺に當る。海關の標準尺を決める爲め英清通商條約善後章程で廣本尺今尺一尺を英の十四吋一とした。我が一、一八一八三四尺に當り今以て支那海關の度の標準になつて居る。

(2) 裁縫尺(ツキシチヨ) 仕立屋尺で裁尺とも才尺ともいはれる。

設以攻宋、最爲弗取、墨子曰、令公輸若攻、臣請守之、於是公輸若、請攻宋之械、墨子設守宋之備、九攻而墨子九却之、弗能入、乃假兵不攻、公輸若般也。墨子にも前と同様な事が載つて居る。魯般雲梯の詞は太平記千鶴破城軍事の條にも見えて居る。關註に「魯班前弄刀斧」又は略して「班門弄斧」といふ事があり、日本の「釋迦に説法」或は相撲取の前で力自慢に當る。

魯班尺、福州特有のものではなく、幾分原尺と異つて居るのであらう。木尺、商尺、今尺、營造尺、曲尺など、稱へられ、元來平尺と同じものであつたのであらう。魯班より唐に傳はり、更に現代まで傳はつて居る間に各地一様でなくなつて了つた。

曲尺の裏目、曲尺の裏の方に文字によりて目盛りせるものは之を唐尺と稱し、其の起りを研究すると眞か虚か實に雲を柄な様にとで御幣様極まる滑稽な説で、自分ながら實に相腹絶倒の至りである。即ち大古支那の國に魯般といふ人あり、大工の業に極めて巧妙なる人で、或時自身に雲の梯子を造り、天に昇りて北斗七星内なる文曲といふ星に就いて、門を建つるに之を定むる其の寸法の良否を學び來り、之を多くの人に傳へたものが、今に残るといふ説で、即ち曲尺の裏面に文字に出つて表はせる目盛がこれである。

唐尺は日本尺度の一尺二寸を八分せしものに相當するもので、即ち唐尺の二寸は日本尺の一寸五分なり、此の寸法の使用法は即ち文字に由つて吉凶を表はすもので次説の如くである。曲尺の裏面にある文字は財、病、離、義、官、劫、害、吉である。文字に對する説明、(1)財は一寸にして此の寸法を用ゆる時は凡ての事皆幸福にして蓄財することを得るといふ。(2)病は二寸にして此の寸法を用ゆる時は萬事不幸にして殊に病者の絶え間なく不吉なりといふ。(3)離は三寸にして此の寸法を用ゆる時は凡ての物の結合を見る事能はずと云ふ意味にして大に不吉なること病に並ぐ。(4)義は四寸にして此の寸法を用ゆる時は萬事我意の如くして何事を爲すも結果宜しく良好なりと云ふ。(5)官は五寸にして此の寸法を用ゆる時は幸福にして凡ての事皆發達の見込あり。(6)劫は六寸にして之を用ゆれば、家園樂人に榮ゆるといふ説あれど又不意の災害に罹る憂ありと云ふ。(7)害は七寸にして此の寸法を用ゆる時は不意の災害に罹る事多く又不幸なる事絶間なしといふ説あり。(8)吉は八寸にして此の寸法を用ゆる時は萬事幸福にして字の如く大に吉なりと云ふ。

以上の如き説があり、俗者易者の如くである。讀者宜敷之れを見て絶倒する勿れ。去れど又我國の寸尺で工匠間に於て常に多く使用する三尺、六尺、九尺、十二尺等は凡て唐尺の目盛りの文字の良好なものに相當すると云ふ事も亦偶然ではない。今三尺なる寸法を定めたのは唐尺の如何なる文字に相當するかを見るに、三尺は唐尺を二度繰り返して残り六寸あり。六寸は唐尺の四寸で即ち義の字に相當するもので、此の寸法を用ゆるものは前説の通りである。六尺は唐尺を五回繰り返したもので、之を定めた最後の寸法は即ち唐尺の吉であり。前説の如く九尺は唐尺を七回繰り返し、残り六寸で三尺に同じ。御尋ねによりお答へする事は他に説はあるまいと思ふ、自分の知る丈を答ふ(大日本工業學會講義録)。

福州曲尺の裏目、前述したやうなものがあるものもあり、無いものもある事は日本と同様で、あれば長い方(大抵質は竹)に記されて居る。財、病、離、義、官、劫、害、本と吉が本になつて居り、一區は一、七七寸位である。老匠に聞いても此の譯を知つて居る者は少い。

門因尺、前述の裏目を本式の尺にしたものがある。製作年代不明の稍古い門因尺を見ると、一區間は矢張り一、七七寸位で、財の前編、天庫の二區があり、財と病の間に六合、迎福、退財、公事、病と離の間に年執、孤寡、長病、却財、離と義の間に官鬼、失脱、添丁、大吉、義と官の間に貴子、利益、順利、横財があり、官と劫の間に進登、富貴、死別、退口、却と害との間に離郷、失財、災至死絶、害と本の間に病臨、口舌、財至、登科があり、本の後に進登、生旺の二區がある。文句から見て財病、離、義、官、却、害、本の各を中心として前後の二區を包含して居るものらしい。尺の全長は一尺四寸一分餘ある。

(5)京尺、京の字を用ひたのは本地の尺でないといふ意味であらう。而して主に綢緞店で用ふる所を見ると本來外省の尺度であつたであらう。

製 造 所	材 料	日本曲尺との比較	備 考
振興	竹	八	田舎では之を使ふものが多い 北支那及び東渡邊で用ふる
和成	竹	八	
永成	竹	六	
永積	木	六	
平均		二六	

(6) 箔尺 金属の箔を度る尺である。

製 造 所	材 料	日本曲尺との比較	備 考
振興	竹	一四一八	考
永成	竹	一四一五	
和成	竹	一四一〇	
平均		一四〇六	
		一四二二	

二 里 程 (長度)

里程の標準は左の通りである。

- 一 尺 (營造尺、一〇三二公尺)
- 一 步 (五 尺)
- 一 丈 (十尺二步)
- 一 引 (十丈二百尺)
- 一 里 (十八引、一千八百尺)

三 地 積 (營造尺庫平制)

地積の標準は左の通りである。

- 一 畝 (十 應)
- 一 分 (十 畝)
- 一 畝 (十分六千方尺、六、一四四公畝)
- 一 頃 (二百畝)

右は營造尺を本にして計算したので、時代に依り尺度を異にして居る故どの時代へも當て符める事は出来ぬ。現在福州市街地は普通一方丈を地積の單位とし平尺を用ひて居る。平尺に種々ある事は既に上述した。

四 量

量即ち秤は田舎の農家の他主として米屋、豆屋等が用ひて居るが、大抵衡と併用し客の希望に應じて秤を用ふる場合もあり、衡を用ふる場合もある。普通少量の小賣の場合を除き衡を用ふるやうである。故に新しい米屋は大きな秤が無い

磅として居る。併し上述の如く衡量共に區々であり、同じ百斤でも用ふる秤に依つて大差を生ずる。數年前から白米の一擔は大抵紅花秤を用ひ、卸賣の場合には百四十斤、小賣の場合には百三十斤であるが、店に依つては大秤を用ふる所もあり、賣買の相談で秤を決める事もある。白米以外も相談で決めるのが普通である。

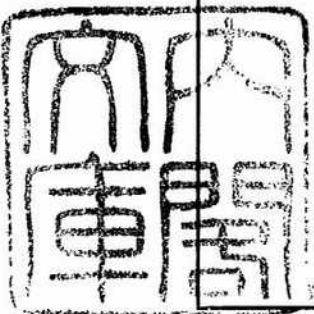
白米日本の一斗は紅花秤で二十三斤八兩、大秤で二十八斤十三兩であるから、日本の一升は紅花秤で二、三五斤大秤で二、八八斤に當る。而して白米の一擔百四十斤として日本の量に直すと紅花秤の方で五斗九升七合、大秤の方で四斗八升六合に當る。

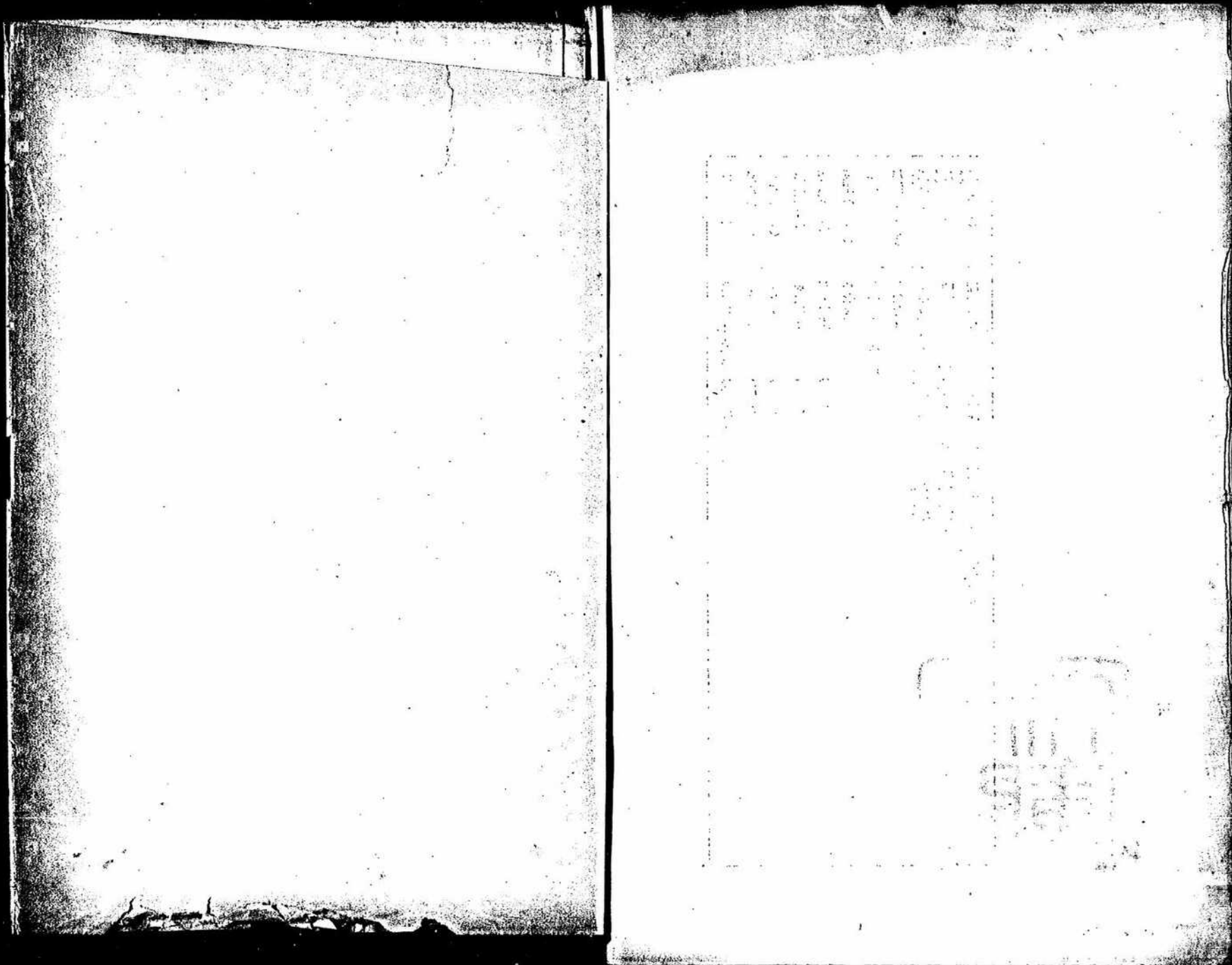
度量衡のうち量は多く出入の細木店之を作り、度と衡とは南門外に専門の製造店があるけれども、何等信すべき標準なきを以て其の製作は區々別々である。最も多く日用取引に用ふる秤の如き賣手買手共に同單位のものを用ひても差があるの、一般に福州人は他人の秤を信用しない。街上魚、貝、野菜の賣買に際して各自己の秤を主張して己まないので見受ける。目盛の違ふのは勿論、錘の紐の極めて短いのが逆も長く垂下して居るのもあり中々奇抜である。が其の中に自ら一兩一斤が定まつて居る。

六 支那税關の標準

支那税關に使用してゐる度及衡の標準は左表の如くである。

碼 (Yard)	華三尺五寸五三 (華尺は廣本尺)
英尺 (Foot)	華八寸五 (同右)
英寸 (Inch)	華七分〇九 (同右)
邁 (Meter)	華三尺七寸九二 (同右)
磅 (Pound)	華十二兩 (華秤は紅花秤に近い)
英兩 (Ounce)	華七錢五
噸 (Ton)	華一千六百八十斤
加倫 (Gallon)	華約七升五
兩 (Tael)	英第五百八十三格十分之三、法三十七格兩錢七八三
斤 (Catty)	即十六兩、英二磅三分之一、法六百四格兩錢五三
擔 (Ferd)	即一百斤、英一百三十三磅三分之一、法六千五百格兩錢四五三





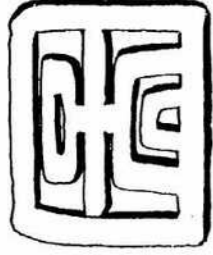
福州新街圖

號記請
圖一分萬一

路	公	路	界	界	界	界	山	池	木	沙	公	陸	郵	測
定	無	行	安	公	地	長	山	池	木	沙	公	陸	郵	測
路	路	路	路	路	路	路	路	路	路	路	路	路	路	路



時商在中物



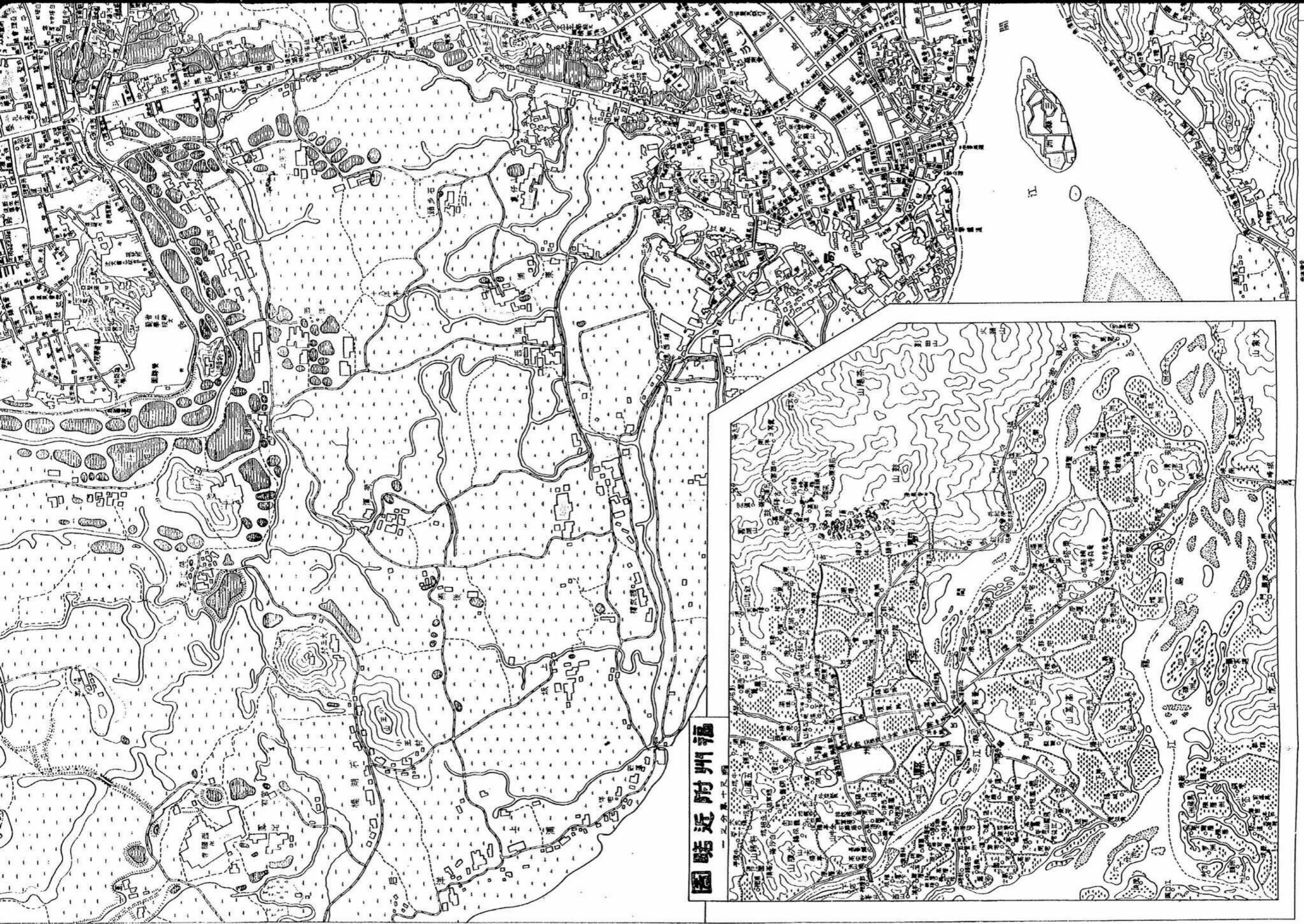
號記語
圖一分萬一

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 路 | 公 | 界 | 界 | 線 | 山 | 池 | 木 | 沙 | 公 | 陸 | 郵 | 無 | 消 | 銀 | 監 | 瞭 | 醫 | 西 | 廟 | 土 | 牌 | 井 | 亭 | 石 | 土 | 石 | 燕 | 采 | 荒 | 湖 | 渡 | 碼 | 軍 | 神 |
| 路 | 定 | 路 | 樹 | 界 | 界 | 線 | 線 | 洲 | 洲 | 所 | 局 | 隊 | 行 | 獄 | 台 | 院 | 堂 | 字 | 祠 | 坊 | 階 | 壇 | 堤 | 田 | 園 | 地 | 樹 | 口 | 頭 | 高 | 社 | 業 | 井 | |
| —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— |
| —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— |



1000尺
500尺
250尺
一分萬一尺縮





福州附近略圖

裏面白紙



1 : 25

昭和十二年八月十七日印刷
昭和十二年八月二十日發行

臺灣總督府熱帶產業調查會

臺北市上奎府町二ノ二六

印刷人 吉村清三郎

臺北市上奎府町二ノ二六

印刷所 吉村商會印刷所